

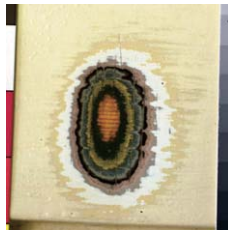
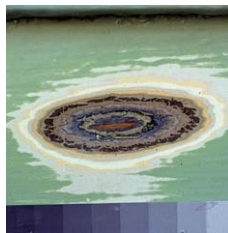


Title	「時層色環」分析を中心とした町並み色彩の変容と形成に関する研究
Author(s)	森下, 満
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(工学)
Dissertation Number	乙第6526号
Issue Date	2007-03-23
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.r6526
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39662
Type	doctoral thesis
File Information	morishita_thesis.pdf



「時層色環」分析を中心とした
町並み色彩の変容と形成に関する研究

**Study on Transition and Formation of Townscape Color
by Analyzing ‘Temporal Color Ring’**



2007 年 3 月

北海道大学 学位論文
博士（工学）

森 下 満

表紙の写真ー代表的な時層色環

上：函館市西部地区の伴田商店所有建物（1916(大正 5) 年頃）の
外壁下見板ペンキ層数 21 層

中：神戸市北野町山本通地区の門邸（1895(明治 28) 年）の
柱型ペンキ層数 20 層

下：アメリカ・ボストン周辺地区・ニュートンの Mr. & Mrs. Frank Aquilera
House（1884 年）の外壁下見板ペンキ層数 15 層

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

博士の専攻分野の名称 博士（工学） 氏名 森下 満

学 位 論 文 題 名

「時層色環」分析を中心とした町並み色彩の変容と形成に関する研究

(Study on Transition and Formation of Townscape Color by Analyzing ‘Temporal Color Ring’)

現代の町並み色彩をめぐる根本的な課題は、建築の素材色に規定されていた時代から自由な塗装色の時代へと変わった中で、個性的で魅力ある、すぐれた町並み色彩とは何か、また、そのような町並み色彩をどのようにすれば形成できるのかにある。この課題に対して、塗装色の時代になって以降現在までの100年余の間に、地域や人々の間で色彩が生活文化としてどのように培われてきたのかを掘り起こし、解き明かすことがなによりもまず求められている。

本研究の目的は、地域において人々が日常生活の中で建物の塗装色とどのようにかかわりあってきたのかをとらえ、町並みにおける人々と色彩との歴史的、文化的、生活的な関係を明らかにし、その中からこれからの町並み色彩のあり方を見出そうとすることにある。具体的には、塗装色の代表例であるペンキが、建物の維持管理上必要な数年単位の塗り替えという、住民の周期的な生活行為が直接的に町並みの形成、維持にむすびつく、生活景の一つの典型タイプであることに着目し、日本において洋風の木造下見板張り建築様式とともにペンキが導入された明治期から現在までの間に、どのように町並みの色彩として形成され、変容してきたのかを明らかにする。そして、その変容過程の中で、町並みの形成、維持にかかわる色彩選択、決定の原理を抽出し、特徴ある色彩形成のしくみをとらえようとするものである。

本論文は全9章で構成しており、各章の概要は以下のとおりである。

第1章では、課題の提示と研究の目的、動機と意義、方法、論文の構成について論述するとともに、主題に関する既往研究について概括し、本研究の位置づけをおこなった。

第2章では、ペンキ色彩の町並みの変容を実証する主要な、かつ簡便な方法として、「時層色環」という新しい概念を提示し、その調査、分析の手法について具体的に論述した。時層色環とは、木造下見板張り建物の外壁等のペンキ塗膜を紙やすりで円環状に削ることによって得られる、同心円状の模様をした古いペンキ層のことであるが、そこにはペンキ色彩にまつわる人々の生活や地域の歴史が蓄積されており、その分析によってペンキ色彩と時代、地域の環境やコミュニティ、人々の生活との関係をさぐることができる。

第3章から5章では、時層色環の調査・分析手法を用い、日本の代表的な木造下見板張り建物ペンキ色彩からなる町並みとして、一般庶民の住宅群で構成されている函館市西部地区と外国人の住宅群、いわゆる異人館で構成されている神戸市北野町山本通地区、これらの原型と考えられるアメリカ・ボストン周辺地区の3地区をとりあげ、19世紀半ば頃から現在までの町並み色彩の変容過程を分析し、比較考察をおこなった。その結果、3地区の下見板張り建築は歴史的なつながりがあり、形式が類似しているが、町並み色彩の特徴はそれぞれ異なり、そこには地域の歴史、文化や住民の生活、意識が反映されていること、また時代によって町並み色彩が変化するのは共通していることを明らかにした。

第3章では、函館市西部地区において、多くの建物が数年単位でペンキを塗り替える際に以前とは異なる色を使い、町並み全体としては20年から30年の周期で色彩が変化していること、大火や戦争による色の選択の不自由な時代を除き、平時には多様な色彩の町並みが形成されていたことが明らかになり、この変化と

多様さの中で一定の調和を保っているところに町並み色彩の特質があることをとらえた。また、多様な中でも、とくに戦後はパステル調のピンク系や緑系の特徴的な色の使用がみとめられ、それは地区の代表的な建物や船舶の色が住民に評価され、受容されて地域に広がるという、コミュニティによる地域環境価値評価型の町並み色彩形成がとらえられた。

第4章では、神戸市北野町山本通地区において、従来外壁のオフホワイト系やライトベージュ系の統一的な色彩が特徴とされてきたが、1960年代以前にはこれらとはまったく異なる多様な色彩が使われ、そこには様々な外国人の色彩文化の反映による外来文化主導型の町並み色彩が形成されていたこと、1960年代以降は、戦争による外国人の国外退去や異人館の取り壊しなどの急激な環境変貌に対する住民の結束の表現として、地域コミュニティ主導型の統一的な町並み色彩へと変化したことを明らかにした。

第5章では、アメリカ・ボストン周辺地区において、19世紀後半にはヴィクトリアン様式の時代の流行であった茶系、緑系の暗色の、様式建築文化主導型の町並み色彩が形成されていたが、20世紀半ば以降は灰系、白系の色への変化がみられ、これは戸建住宅地の豊かな緑の周辺自然環境調和型、あるいは住民が憧憬する組積造の石のイメージ表現型などへの町並み色彩変容であることをとらえた。

第6章では、函館市西部地区における色彩選択、決定のしかたを人々の暮らしとのかかわりから詳細に分析し、ペンキ塗装が住民の生活レベルで様々な意味や物語をもち、住民がその記憶を基盤として塗装業者、近隣と色彩選択時に対話、相談をし、建物や周辺環境の特質に対して価値評価をおこなうという構造をとらえ、それが特徴ある町並み色彩の形成、維持のしくみとして働いていることを明らかにした。

町並み色彩の特徴をたもつには、この構造的なしくみを維持することが必要であるが、函館市西部地区において近年、下見板張り建物の減少などの変化にともない、このしくみが弱体化する傾向にある。第7章では、こういう状況の中で、1990年代以降に新しく展開されてきた市民によるペンキ塗りボランティア活動と行政による町並み色彩コントロールが、従来のしくみの構造を補強、継承し、町並み色彩の特徴をたもつ役割を果たしていることを明らかにした。

第8章では、町並み色彩計画のあり方について論述している。前章までの成果から、町並み色彩は地域の歴史、文化が表現され、地域コミュニティ単位の固有性をもち、地域住民の社会的な生活意識が視覚的に表現され、現象的にも実体的にも変化し、生活の物語として地域住民の生活との濃密なかかわりをもつ、複合的、重層的なものであるととらえ、これを「生活環境色彩」と定義づけた。従来の町並み色彩計画論における「自然環境色彩」と「近代科学色彩」の2つの原理に、この「生活環境色彩」を加えて枠組みを広げることにより、地域住民が日常生活とのかかわりの中で色彩をより身近なものとしてとらえ、町並みへの関心を高める効果が期待でき、これら3軸の関係から町並み色彩計画のあり方を考える必要性、重要性を論じた。

第9章では、本研究の要約をおこない、結論として、(1)町並み色彩変容研究の方法論として、時層色環の調査・分析手法を開発した。(2)その手法を用いて、函館、神戸、アメリカの3地区における町並み色彩の歴史的変遷の事実を解明した。町並み色彩はそれぞれの地区によって異なる固有性をもっていると同時に、不変的なものではなく、時代によって変化するものであることがとらえられた。(3)町並み色彩の形成、変容には地域の歴史、文化や住民の生活、意識が反映されていることを実証的、具体的に明らかにした。とくに、住民の生活とのかかわりから、それぞれの色彩がもつ意味や物語をとらえた。(4)特徴ある町並み色彩を形成し、維持するしくみとして、住民らの多様な主体による協議と、地域の環境の特質やコミュニティとの関係の中で価値評価がおこなわれる色彩選択、決定のシステムをあきらかにした。(5)このような町並み色彩のあり方を生活環境色彩という新たな概念で示し、それを取り込んだ町並み色彩計画論を展開した。すぐれた町並み色彩の形成には、建物群の色彩の調和という物的環境の意匠的側面の整備にとどまるものではなく、生活環境色彩を地域の中に発見し、それを育成していくことが重要であることを論じた

目 次

第 1 章	研究の目的と方法	頁
1-1	課題の提示と研究の目的	1
1-2	研究の動機と意義	6
1-3	研究の方法	9
1-4	論文の構成	11
1-5	既往研究と本研究の位置づけ	13
第 2 章	時層色環の調査・分析	
	ーペンキのこすり出しとペンキ層の各色の塗装年の特定・推定ー	
2-1	はじめにー「時層色環」の定義	15
2-2	時層色環の調査	15
2-3	時層色環の分析ーペンキ層の各色の塗装年の特定・推定	18
2-4	時層色環分析から読める各時代の町並み色彩	24
2-5	日本および海外におけるペンキ層の調査、分析手法	27
2-6	まとめ	30
第 3 章	一般住宅地区におけるペンキ色彩からみた町並みの変容	
	ー函館市西部地区の場合ー	
3-1	はじめに	32
3-2	調査の概要	33
3-3	建物ごとの時層色環の分析	36
3-4	時層色環分析による各時代の町並み色彩	48
3-5	明治から現在までの町並み色彩の時代変遷とその特色	52
3-6	まとめ	57
第 4 章	外国人住宅地区におけるペンキ色彩からみた町並みの変容	
	ー神戸市北野町山本通地区の異人館の場合ー	
4-1	はじめに	59
4-2	調査の概要	60
4-3	従来の神戸・異人館の特色とされる色彩	64
4-4	時層色環の分析と各時代の町並み色彩の特徴	66
4-5	神戸・異人館の町並み色彩の時代変遷とその要因・背景	86
4-6	函館市西部地区の町並み色彩との比較考察	89
4-7	まとめ	90

第5章 日本の下見板張りペンキ塗り建物の原型としてのアメリカ・ボストン 周辺地区におけるペンキ色彩からみた町並みの変容

5-1	はじめに	9 1
5-2	調査の概要	9 2
5-3	時層色環の分析と各時代の町並み色彩の特徴	9 7
5-4	アメリカ・ボストン周辺地区の町並み色彩の時代変遷とその要因・背景	1 1 4
5-5	海外他地域の町並み色彩の変遷	1 1 6
5-6	函館、神戸の町並み色彩との比較考察	1 1 9
5-7	まとめ	1 2 0

第6章 変化と多様の町並み色彩形成のしくみ ー函館市西部地区のペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりからー

6-1	はじめに	1 2 1
6-2	本章の目的と方法	1 2 2
6-3	住民の記憶の中にある色彩	1 2 3
6-4	色彩選択における意志決定の主体と方法	1 3 4
6-5	色彩選択の決定要因	1 3 6
6-6	町並み色彩形成のしくみ	1 4 0
6-7	まとめ	1 4 2

第7章 函館市西部地区における町並み色彩形成のしくみの継承と展開

7-1	はじめに	1 4 3
7-2	市民によるペンキ塗りボランティア活動	1 4 4
7-3	行政による町並み色彩コントロール	1 6 2
7-4	町並み色彩形成のしくみの継承と展開	1 6 5
7-5	まとめ	1 6 7

第8章 町並み色彩計画のあり方

8-1	はじめに	1 6 9
8-2	「生活環境色彩」としての町並み色彩	1 6 9
8-3	従来の町並み色彩計画の考え方と方法	1 7 1
8-4	町並み色彩計画のあり方と生活環境色彩の意義	1 7 7
8-5	まとめ	1 7 9

第9章 結論

9-1 要約	181
9-2 結論	187
参考文献	189
既発表学術論文および論著	197
あとがき	199

第1章 研究の目的と方法

1-1 課題の提示と研究の目的

町並みの色彩の基調をなしているのは、いうまでもなく、町並みを構成している個々の建物の色である。邸宅や別荘が建ち並ぶ、広い敷地をもち、成長した庭木が建物を覆っているようなところでは、その庭木の緑が基調となる場合もあるが、一般の住宅地などでは建物群の色が町並み色彩を形成しているのである。

ヨーロッパでは元来、外壁の石、レンガ、漆喰や屋根の瓦といった地域の自然素材が町並み色彩を形成していた。14世紀ルネサンス期の近代科学の勃興にともなう顔料の製造や油の処理などの技術進歩を基盤として、18世紀の産業革命の工業化により、油性のペイントなどの大量生産が可能となり¹⁾、多様な色が使われるようになった。

日本でもヨーロッパと同様に元来、外壁の白木、焼き板、土、漆喰や屋根の瓦といった地域の自然素材が用いられ、それが町並み色彩を形成していた。ただし、奈良時代から神社仏閣では朱色と緑青色の極彩色が使われていたのは周知のことであるが、一般の住宅などの建物ではそういうことはなかったのである。幕末の開国のころに洋風の建築様式とともに洋式の塗料であるペンキも輸入され、素材色ではない、ペンキという新しい塗装色が日本に誕生した²⁾。その後1881（明治14）年に日本初の塗料会社、共同組合光明社（現在の日本ペイント株式会社）が創立され、以降、塗料の国内での工業化、生産が振興される³⁾。それが飛躍的に増大し、一般の建物に普及するようになるのは戦後の1950（昭和25）年以降のことである。また、20世紀以降の化学工業の発達にともない、塗料などの原料であり、プラスチックなどの着色に用いられる、人工的な顔料の多様化、建築材料の多様化が著しく進展した³⁾。現在われわれが目にする、町並みに人工的な、多様な色が使われるようになった所以である。

日本もヨーロッパも、建物の色彩が地域の自然素材に規定されていた時代には、色彩の選択の余地はなく、おそらく町並み色彩というものが人々に意識されることはほとんどなかったのではないかと考えられる。それがこの100年から200年ほどの間に、建物色彩が材料から解放され、自由に選択できるようになり、多様な色が使われるようになってはじめて、町並み色彩が人々に意識

1) 関西ペイント株式会社 社史編纂委員会 編『明日を彩る 関西ペイント六十年のあゆみ』、関西ペイント株式会社、1979年5月17日。

2) 日本ペイント株式会社 社史編纂室 編『日本ペイント百年史』、日本ペイント株式会社、1982年12月1日。

3) 社団法人日本建築学会 編・発行『建築の色彩設計法』、丸善、2005年4月25日。

され、その秩序や調和が問題になってきたといえよう。

このように、町並み色彩をめぐる状況が、建築の素材色に規定されていた時代から、材料から解放されて自由な色の使用が可能となった塗装色の時代へと大きく変わった中で、個性的で魅力ある、すぐれた町並み色彩とは何か、また、そのような町並み色彩をどのようにすれば形成できるのか、が現代的かつ根本的な課題となっているといえる。

この課題へのアプローチとして、個性的で魅力ある、すぐれた町並み色彩であると一般的に評価が定着しているものにはどのようなものがあるのかをみる。田村明は、「印象に残る色彩のある街は、たいてい一つの基調になる色で統一され、その地域の素材を基調にしている場合が多い。色彩には色相、明度、彩度と三つの要素があるが、都市の色彩で重要なのは素材の質感である。」と述べているが⁴⁾、このような建築の素材色からなる統一的な町並み色彩は、田村明だけでなく、多くの人がすぐれた事例の代表的なものであるとするであろう。その代表例として、日本では重要伝統的建造物群保存地区があげられる。写真 1-1 の岐阜県高山市の三町重要伝統的建造物群保存地区は外壁等の木と屋根の瓦の素材で、また写真 1-2 の岡山県倉敷市の倉敷河畔重要伝統的建造物群保存地区は外壁の漆喰と屋根の瓦の素材で、それぞれ町並みの色彩が形成されている典型的な事例である。素材色であるため色彩の幅がせまく、ペンキのようにいろいろな色が生成されることはなく、町並みとしては統一性が高く、落ち着いた色彩が形成されている。しかしこれは、建築の材料の色に規定されていた時代の町並み色彩のあり方にほかならず、塗装色の時代である現代においては一般的、普遍的にあてはまるものではない。

一方、現代の町並み色彩に対する評価として、多様な色が使用

4) 田村明「色彩景觀は市民の共同作品」(公共の色彩を考える会 編『まちの色彩作法「提言集」』、都市文化社、1994 年 3 月 20 日)。



写真 1-1 岐阜県高山市三町重要伝統的建造物群保存地区の町並み。外壁等の木と屋根の瓦の素材で町並みの色彩が形成されている。(1985 年 10 月撮影)



写真 1-2 岡山県倉敷市倉敷河畔重要伝統的建造物群保存地区の町並み。外壁の白い漆喰と屋根の瓦の素材で町並みの色彩が形成されている。(1999 年 9 月撮影)

5) いろいろな色彩調和論があり、人によって異なる点もあるが、共通する代表的な色彩調和のあり方として、同一、類似、対比の三つがあげられる。(社団法人日本建築学会 編・発行『建築の色彩設計法』、丸善、2005年4月25日、稲村耕雄『色彩論』、岩波書店、1955年3月20日、ほか。)

され、混沌とし、無秩序であり、なにがしかの秩序化が必要であるとする意見がみられる。これに対する計画の考え方として、ある一つの色で統一を図ろうとする傾向があるように思われる。この根拠には、①先にあげたように、かつての建築の素材色からなる統一的な町並み色彩がすぐれた事例としてあげられるという経験則によっていることと、②色彩調和論において代表的な配色の方法である、同じ色相や隣接する色相からの色の組み合わせからなる「同一」と「類似」が⁵⁾、人々にとって最もわかりやすく、経験的にも間違いがなく、いわば自明のこととしてとりあげられているのではないかと考えられる。すなわち、従来の建築の素材色に規定されていた時代の町並み色彩のあり方や、科学的ではあるが色の視覚的評価に限定された、美学的、観念的な色彩調和論に、現代の町並み色彩計画の根拠を求めているのではないかと考えられる。ただしこれらは、決して絶対的なものではなく、一つの解を示しているにすぎない。

では、別の解として、何があるのか。以下の2枚の写真(写真1-3、1-4)を手がかりに考えてみたい。いずれも建築の素材色ではなく、ペンキの色で町並み色彩が形成されているものであり、現代における一つの典型を示すものである。写真1-3はアルゼンチ



写真1-3 アルゼンチン・ブエノスアイレスの港町・ボカのカミニートという小路の、赤、青、黄などの原色がひしめく、鮮やかで多様な色彩からなる町並みー http://www.bue.gov.ar/recorridos/index.php?info=imperdibles&menu_id=18&id=1& より転載。



写真1-4 イタリア・ベネチアのブラノ島の、緑、ピンク、青などの鮮やかで多様な色彩からなる町並みー <http://sotto-voce.seesaa.net/article/24682342.html#comment/> より転載。

ン・ブエノスアイレスの港町・ボカのカミニートという小路の町並みであり、写真 1-4 はイタリア・ベネチアのブラノ島の町並みである。いずれも、赤、青、黄、緑の原色がひしめく、鮮やかで多様な色彩からなる町並みである。この視覚情報だけで評価するなら、多くの人が、自分の建物を目立たせるために周囲と際立って違う強い色が使われ、全体として混沌とした、無秩序な町並み色彩であり、日本のどこかにもありそうな、よくない事例の代表であるとするのではないだろうか。しかし、写真 1-3 については福田繁雄が⁶⁾、また写真 1-4 については田村明が⁷⁾、それぞれすぐれた町並み色彩の 1 例としてあげたものである。福田繁雄はその理由として、「・・・カミニートも、明日の生活のわからない漁師と移民たちの住処であった。牧場をもつ夢が破れた移民や漁師たちは、そんな毎日のなか、自分の船を塗ったペンキの残りで、家をペイントした。貧しい住まいに、せめて色でも……と思ったかどうかはわからないが、結局、住人が自分たちの手でいまのカミニートの基礎を築いたことになる。そこに、ただ絶望だけではない住民のパワーを感じる。・・・一見すると、こんなに原色ばかりがひしめきあい、色同士が反発しあってもおかしくないはずなのに、この路地の一角に腰をおろし、ビールでも飲んでみると、なぜかホッとしてくる。多分、この色合いをそのまま他の国の他の場所にもっていってもだめなのだ。このカミニートに流れる歴史、人々の心と調和してはじめて、この色合いが美しくなる。」と述べている。すなわち、色彩に込められた地域の歴史や人々の思いなど、地域の町並み色彩のもつ歴史的、文化的、生活的な価値が評価されているのである。ここに塗装色の時代における町並み色彩のあり方を考える重要な視点がある。

世界に広くみられるペンキ塗装による町並みには、ある一つの色で構成され、統一のある、落ち着いた色彩が形成されているものもあるが他方では、この 2 つの事例のように多様な色で構成されているものも数多くみられる。写真 1-5 はドイツのバイエルン州、ミュンヘン郊外の町、ランツフト Landshut の町並みである。建物の構造は石造で、ファサードにはおそらくは漆喰かモルタルが塗られ、その上にペンキが塗装されていると思われるが、その色彩は青、黄、緑、茶、灰など、非常に多様である。写真 1-6 はノルウェー・ベルゲンの世界遺産、ブリッゲン地区の町並みである。建物の構造は木造で、外壁には下見板が張られ、黄褐色、赤茶色、白色などの多様なペンキ色彩で町並みが形成されている。写真 1-7、1-8 はアメリカのマサチューセッツ州ケンブリッジとカ

6) 福田繁雄「色を遊ぶ・空間を楽しむ」(公共の色彩を考える会 編『まちの色彩作法「提言集」』、都市文化社、1994 年 3 月 20 日)。

7) 田村明「色彩景観は市民の共同作品」(公共の色彩を考える会 編『まちの色彩作法「提言集」』、都市文化社、1994 年 3 月 20 日)。

リフォルニア州サンフランシスコの町並みの事例で、19世紀後半のヴィクトリアン様式の木造下見板張りペンキ塗りの建物群からなる町並みである。これら4つの事例はいずれも、多様なペンキ色彩で町並みが形成されているところに特徴がある。

町並み色彩の計画が、この特徴を保持することにあるとするならば、日本の伝統的な町並みにおける統一的な素材の色と、それが変わることなく継承することで町並みの特徴を維持していく、というのとは異なる考え方や方法が求められるであろう。また、現代の町並みにおける色彩コントロールの有力な手法の一つである同系色による統一を適用することは、町並みの特徴を失わせることになり、通用しないことはあきらかである。そこに従来の町並み色彩とは異なる計画論の可能性が示唆されている。

個性的で魅力ある、すぐれた町並み色彩とは何か、また、その



写真1-5 ドイツ・ランツフォート Landshut の町並み。石造の建物だがファサードは漆喰かモルタルの上に塗装をし、青、黄、緑、茶、灰などの多様なペンキ色彩で町並みが形成されている。(1984年9月撮影)



写真1-6 ノルウェー・ベルゲンの世界遺産であるブリッゲン Bryggen 地区の町並み。下見板張りの外壁に塗装をし、黄褐色、赤茶色、白色などの多様なペンキ色彩で町並みが形成されている。(1998年9月撮影)



写真1-7 アメリカ・マサチューセッツ州のケンブリッジ Cambridge の町並み。19世紀後半のヴィクトリアン様式の下見板張り住宅のペンキ色彩の町並みが形成されている。(1990年9月撮影)



写真1-8 アメリカ・カリフォルニア州のサンフランシスコ San Francisco の町並み。Painted Ladies とよばれる、19世紀後半のヴィクトリアン様式の下見板張り住宅群の華やかなペンキ色彩の町並みが形成されている。(1990年9月撮影)

ような町並み色彩をどのようにすれば形成できるのか、という現代の町並み色彩をめぐる課題に対して、従来の建築の素材色に規定されていた時代の町並み色彩のあり方や視覚的評価に限定された色彩調和論だけでなく、建物色彩が材料から解放され、色彩を自由に選べるようになったこの 100 年から 200 年ほどの期間において、地域や人々の間で色彩が生活文化としてどのように培われてきたのかを掘り起こし、解き明かすことがなによりもまず求められているといえよう。

本研究の目的は、地域において人々が日常生活の中で建物の塗装色とどのようにかかわりあってきたのかをとらえ、町並みにおける人々と色彩との歴史的、文化的、生活的な関係をあきらかにし、その中からこれからの町並み色彩のあり方を見出そうとすることにある。具体的には、とくに塗装色の代表例であるペンキが、建物の維持管理上必要な数年単位の塗り替えという、住民の周期的な生活行為が直接的に町並みの形成、維持にむすびつく、生活景の一つの典型タイプであることに着目し、日本において洋風の建築様式とともにペンキが導入された明治期から現在までのこの 100 年余の間に、地域においてペンキが人々の日常生活の中でどのように取り扱われ、町並みの色彩として形成され、変容してきたのかをあきらかにする。そして、その変容過程の中で、町並みの形成、維持にかかわる色彩選択、決定の原理を抽出し、特徴ある色彩形成のしくみをとらえようとするものである。

1-2 研究の動機と意義

日本の近代における代表的な洋風の町並みとして、函館市西部地区、神戸市北野町・山本通地区、長崎市東山手・南山手地区があげられる。いずれも木造下見板張りペンキ塗りの洋風建物群からなる町並みである。そのうち、函館市西部地区の重要文化財・旧函館区公会堂は、1910（明治 43）年に建設された、わが国の代表的な木造洋風下見板張りペンキ塗りの建物である。1982（昭和 57）年に保存修理工事が竣工し、それまでの淡いピンク系の外壁下見板と白色の窓枠・柱型等の配色から、ブルージェーと黄色という創建当初のペンキ色彩に復原された（写真 1-9、1-10）。この復原されたペンキ色彩は、それ以前の色とはまったく異なり、日本の伝統的な町並みではあまりみることのない濃いめの鮮やかな色で、コントラストの強い配色であった。そのため、「復原した場合に、これまでとはあまりにもイメージが違ってしまうので、現

- 8) 財団法人文化財建造物保存技術協会
編『重要文化財旧函館区公会堂 保存
修理工事報告書』、函館市、1983 年 3 月。

- 9) 財団法人文化財建造物保存技術協会
編『重要文化財豊平館 保存修理工事
報告書』、札幌市、1986 年 7 月。

- 10) 日本建築学会 編『日本近代建築総
覧』、技報堂出版株式会社、1980 年 3
月 30 日。

状または中古（黄土色）にしたいという意向が教育委員会から出された」ほど、物議がかもされた⁸⁾。「外壁塗装は、復原した場合なじみの悪いことは明らかである」との評価もあったが、「同時にこの建物の性格上重要な意匠であり、復原の原則に従って当初の色調に復旧する」ことになったのである⁹⁾。

この 4 年後の 1986（昭和 61）年には、札幌市の代表的な木造洋風下見板張りペンキ塗りの建物である、重要文化財・豊平館（1880（明治 13）年建設）の保存修理工事がおこなわれ、それまでの概ね白一色の姿から、外壁下見板の白色と窓枠・柱型等のウルトラマリンブルーという、これもまた鮮やかなペンキ色彩で、コントラストの強い配色へと復原された（写真 1-11、1-12）⁹⁾。

わが国において明治期に建設された下見板張りペンキ塗りの建物は全国各地に分布しており¹⁰⁾、例えば、写真 1-13 の山形県鶴岡



写真 1-9 函館市の重要文化財・旧函館区公会堂（1910（明治 43）年建設）の保存修理工事前の色。外壁は淡いピンク、窓枠・柱型等は白色であった。1958（昭和 33）年頃に塗り替えられた配色と推定されている。（1978（昭和 53）年 7 月撮影、北海道大学建築計画学研究室所蔵）



写真 1-10 1982（昭和 57）年の保存修理工事により、創建当初の、外壁がブルーグレー、窓枠・柱型等が黄色の鮮やかな配色に復原された旧函館区公会堂。（1983（昭和 58）年、野口孝博氏撮影）



写真 1-11 札幌市の重要文化財・豊平館（1880（明治 13）年建設）の保存修理工事前の色。外壁、窓枠・柱型等とも白色であった。財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財豊平館 保存修理工事報告書』（札幌市、1986 年 7 月）より転載。

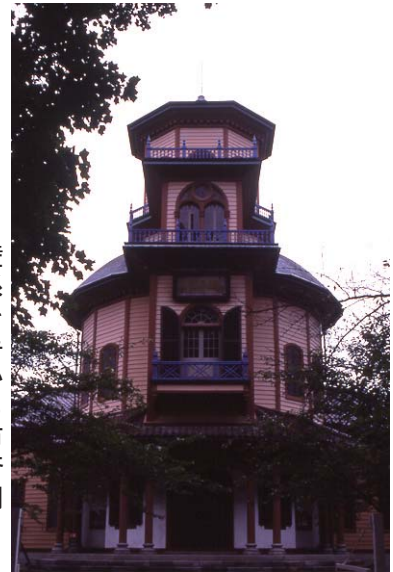


写真 1-12 1986（昭和 61）年の保存修理工事により、創建当初の、外壁が白色、窓枠・柱型等がウルトラマリンブルーの鮮やかな配色に復原された豊平館。財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財豊平館 保存修理工事報告書』（札幌市、1986 年 7 月）より転載。



写真 1－13 白一色の山形県鶴岡市の重要文化財・旧西田川郡谷役所（1880(明治13)年建設）。(1983年9月撮影)

写真 1－14 外壁をサーモンピンク系の色、窓枠・柱型を茶色、ベランダの手摺を青色の、鮮やかな3色で塗り分けられた、山形県山形市の重要文化財・旧済生館本館（1878(明治11)年建設）。(1991年9月撮影)



市の重要文化財・旧西田川郡谷役所（1880(明治13)年建設）のように、いわゆる西洋館の一般的なイメージである白一色のものが現状では多くみられる。しかし、一方では、写真 1-14 の山形県山形市の重要文化財・旧済生館本館（1878(明治11)年建設）のように、外壁をサーモンピンク系の色、窓枠・柱型を茶色、ベランダの手摺を青色の、鮮やかな3色のペンキ色彩で塗り分けられたものもみられる。旧函館区公会堂や豊平館と同様に、鮮やかな色で、コントラストの強い配色をもった建物であり、このタイプが決して特殊なものではないことがわかる。しかも、ペンキ色彩は不変ではなく、時代によって異なり、変化しているのである。

このような建物単体だけでなく、重要文化財だけでなく、一般の住宅や店舗なども含む町並み全体として、明治期や大正期、戦前には現状では想像もつかないようなペンキ色彩が形成されていたのではないかと。それはどのようなペンキ色彩の町並みであったのか。そして、時代とともにどのように変化してきたのか。また、なぜ変化したのか。これらを探ってみたい、というのが本研究の動機の一つである。

ペンキは、下見板などの外壁の表面を保護、維持することを主たる目的としている。そこでは建物の維持管理上必要な数年単位の塗り替えという、住民の日常的、周期的な生活行為が直接的に町並みの形成、維持にむすびつくという独特の関係性がある。したがって、塗り替えの際の色の選択を通じて、住み手の景観への働きかけや時代の色の流行が生じる可能性がある。ペンキ色彩の町並みの変化をさぐることは、このようなペンキ色彩と住民の営みの関係、その歴史の蓄積をさぐることにほかならない。ペンキ

色彩の町並みを形態的、美学的に評価するだけでなく、住民の生活文化、地域文化のあらわれとしてとらえ、日常的な生活風景の形成に寄与しようとしているところに本研究の意義がある。

1-3 研究の方法

木造下見板張りの建物からなるペンキ塗装の町並みが形成され、それが町並みの色彩を特徴づけている地域として、日本の一般住宅地区の函館市西部地区と、外国人住宅地区の神戸市北野町山本通地区、さらに日本の下見板張り建物の原型の一つとしてアメリカ・ボストン周辺地区の3つを選ぶものとする。その具体的な位置づけは以下のとおりである。

日本では幕末・明治初期から昭和の戦前期にかけて、全国各地にペンキ塗りの洋風下見板張り建物が建てられたが、それらが群をなして町並みを形成したのは幕末の開港場であった。1858年(安政5年)のアメリカ、オランダ、ロシア、イギリスとの間に締結された修好通商条約にともない、翌1859年(安政6年)に神奈川(横浜)、長崎、函館が、1868年(慶応3年)に兵庫(神戸)、新潟が開港された。これらの開港場において、外国人の居住や通商のための特別区として設置されたのが居留地であり、その周辺に日本人と外国人が混住する雑居地が形成された。

これらの開港場の中で、現在もペンキ塗りの洋風下見板張り建物が群として残るのは、函館市西部地区、神戸市北野町山本通地区、長崎市東山手地区および南山手地区である。いずれも重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、日本の代表的な下見板張り建物のペンキ色彩からなる町並みであるといえる。

このうち、函館の場合、海面を埋め立てる出島方式の居留地計画が1860年(万延元年)に竣工したが、面積2,000坪(6,600㎡)と土地が狭すぎて失敗し、その周辺の西部地区一帯に雑居地を形成することになる。1907年(明治40年)、未曾有の大火により地区のほとんど全域が焼失し、それ以後一戸建ての邸宅や町家のみならず、二戸一などの長屋においてもペンキ塗りの洋風下見板張り建物が建てられ¹¹⁾、主に一般庶民の住宅群がつくるペンキ色彩の町並みが形成され、現在に受け継がれている。

神戸市北野町山本通地区も居留地ではなく雑居地であった。神戸の居留地は、東は旧生田川(現フラワーロード)、西は鯉川筋(現メリケンロード)、北は旧西国街道(現地下鉄海岸線の一本南側の通り)、南は海岸線(現海岸通、国道2号線)に囲まれたエリ

11) 函館市教育委員会 編『函館市西部地区の町並 元町・末広町地区伝統的建造物群調査報告』、函館市、pp4-5、1983年。

アに形成されたが、開港直後の造成整備が間に合わなかったために、外国人の住宅はその周辺地域に求めざるを得ず、雑居地が形成された。その中で、居留地にもっとも近い山麓の恵まれた位置にあったのが北野町山本通地区である。この地区では多くの外国人が居館を建て、それらの外国人住宅が町並みを特徴づけ、第二次世界大戦や戦後の高度成長期にその多くが消失したものの、現在もその特徴を受け継いでいる¹²⁾。函館市西部地区と同様に雑居地としてスタートしたが、函館が一般庶民の住宅群がつくるペンキ色彩の町並みに特徴をもつとは異なる歴史と性格をもつものである。

この日本の下見板張り建物の原型の一つがアメリカにある。藤森照信によれば、函館市西部地区の洋風建物は下見板コロニアル様式と呼び、イギリスかスウェーデンを起源として大西洋、アメリカ大陸、太平洋を渡り、いわば地球を西向きに回って北海道へ伝播し、一方長崎の洋風建物はヴェランダコロニアル様式と呼び、ヨーロッパから大陸伝いに地球を東に回って伝播し、神戸のそれは北からの下見板と南からのヴェランダの出会いと融合によるものであったという¹³⁾。これは定説となっていないものの興味深い知見であり、この説にしたがうならば、一般住宅地区の函館市西部地区、外国人住宅地区の神戸市北野町山本通地区、日本の下見板張り建物の原型の一つとしてのアメリカ・ボストン周辺地区の3つは、歴史的なつながりをもっていることになり、この点でも調査研究対象として意味がある。

これらの3地区には、いずれも下見板張り建物が群として存在し、外壁下見板や窓枠・柱型等に塗装されたペンキ色彩が地区の町並みの色を特徴づけている。これらの下見板張り建物では、ペンキをきれいに塗り替えるために古いペンキ層を削り取ってしまうものもあるが、むしろ建物の表面のペンキ塗膜の下に塗り重ねられた古いペンキ層が残されている場合が多い。本研究ではこれらのペンキ層の発掘調査をおこない、各層の色彩とその塗装年をあきらかにし、それらの建物群が立地する地区全体として、町並みの色彩がどのように、またなぜ変化したのかを分析、考察するものである。また、ペンキ層の分析を補完するものとして、建物所有者へのヒアリング調査、関連文献・史料の収集調査もあわせておこなう。

12) 神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課 編集・発行『異人館のある町並み 北野・山本 神戸市北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区・20周年記念』、2000年3月。

13) 藤森照信『日本の近代建築(上)―幕末・明治篇―異』、岩波書店、1993年10月20日。

1-4 論文の構成

本論文の構成を図 1-1 に示す。

第 1 章は「研究の目的と方法」であり、課題の提示と研究の目的、研究の動機と意義、研究の方法、論文の構成、既往研究と本研究の位置づけについて論述している。

第 2 章は「時層色環の調査・分析ーペンキのこすり出しとペンキ層の各色の塗装年の特定・推定」であり、第 1 章を受け、本研究の中心的方法である「時層色環」という新しい概念について論述している。

第 3 章から第 5 章は、第 2 章の時層色環の調査・分析にもとづき、研究対象とする 3 地区について、町並み色彩の変容過程を分析したものである。それぞれ、第 3 章「一般住宅地区におけるペンキ色彩からみた町並みの変容ー函館市西部地区の場合ー」、第 4 章「外国人住宅地区におけるペンキ色彩からみた町並みの変容ー神戸市北野町山本通地区の異人館の場合ー」、第 5 章「日本の下見板張り建物の原型としてのアメリカ・ボストン周辺地区のペンキ色彩からみた町並みの変容」について論述し、3 地区の町並み色彩の特徴と共通性についても比較考察をおこなっている。

第 6 章は「変化と多様の町並み色彩形成のしくみー函館市西部地区のペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりからー」であり、第 3 章においてとらえられた函館市西部地区の町並み色彩の特質の基底にある、ペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりに着目し、色彩選択、決定の原理を抽出し、特徴ある町並み色彩形成のしくみを構造的に論述している。第 7 章は「函館市西部地区における町並み色彩形成のしくみの継承と展開」であり、前の第 6 章であきらかにされた、特徴ある町並み色彩形成のしくみが、近年、どのように継承され、展開されてきたのかを論述している。

第 8 章は「町並み色彩計画のあり方」であり、第 2 章から第 7 章までの知見を整理し、そこから「生活環境色彩」という新しい概念を提示し、従来の町並み色彩計画論にこの生活環境色彩を加え、枠組みを広げた、新たな計画論を展開している。

第 9 章は「結論」で、第 1 章から第 8 章の各章の要約をおこない、研究の目的に対応した結論を論述している。

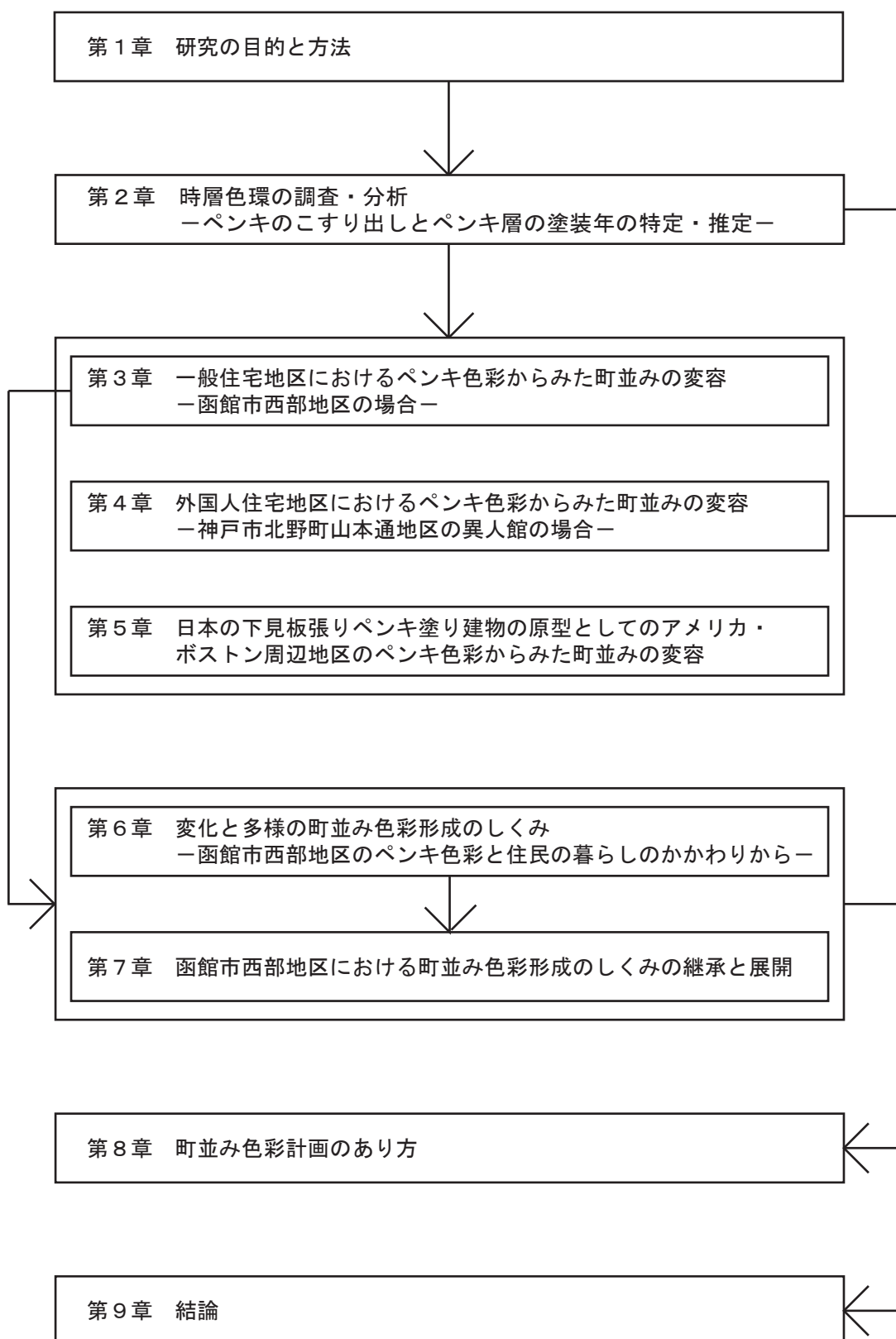


図1-1 本論文の構成

1-5 既往研究と本研究の位置づけ

- 14) 稲村耕雄『色彩論』、岩波書店、1955年3月20日。
- 15) 金子隆芳、①『色彩の科学』(岩波書店、1988年10月20日)、②『色彩の心理学』(岩波書店、1990年8月20日)。千々岩英彰、①『色彩学』(福村出版、1983年9月20日)、②『色を心で視る』(福村出版、1984年10月1日)。
- 16) 武井邦彦、①『色彩の再発見』(時事通信社、1975年11月20日)、②『色彩と人間』(時事通信社、1991年1月1日)。
- 17) 小町谷朝生、①『色彩のアルケオロジー』(勁草書房、1987年9月30日)、②『色彩と感性のポリフォニー』(勁草書房、1991年4月20日)。福田邦夫『色彩調和論』、朝倉書店、1996年2月15日。
- 18) 乾正雄『建築の色彩設計』、鹿島出版会、1976年8月5日。
- 19) 稲垣卓造、①「景観整備を目的とした都市の色彩評価に関する実験的研究」、日本建築学会計画系論文第451号、pp29-39、1993年9月、②「都市の構図と構成要素がその色彩評価に与える影響」、日本建築学会計画系論文第451号、pp9-19、1993年9月、③「実地における都市の色彩評価に関する研究」、日本建築学会計画系論文第467号、pp31-37、1995年1月、④「建築の外部色彩の評価が前景となる建築の色彩から受ける影響」、日本建築学会計画系論文第531号、pp9-15、2000年5月。
- 20) 木多道宏ほか3名、①「都市景観における色彩の評価構造に関する研究」、日本建築学会計画系論文第502号、pp147-154、1997年12月、②「建物壁面の色彩配列および修景操作と心理効果との関係」、日本建築学会計画系論文第516号、pp177-184、1999年2月、③「街路景観における色彩の心理効果」、日本建築学会計画系論文第522号、pp239-246、1999年8月。
- 21) 尾崎真理ほか2名、「風土に基づいた都市色彩計画に関する研究」、日本建築学会計画系論文第511号、pp147-152、1998年9月。
- 22) 亀谷義浩ほか3名、①「都市景観における色彩の様相に関する研究」、日本建築学会計画系論文第523号、pp195-202、1999年9月、②「都市景観における色彩現象の多様性に関する研究」、日本建築学会計画系論文第525号、pp183-190、1999年11月、③「建築外装材における色彩の様相」、日本建築学会計画系論文第533号、pp97-104、2000年7月。
- 23) 中山和美ほか4名、「街並の色彩構成に関する研究」、日本建築学会計画系論文第543号、pp17-24、2001年5月。
- 24) 吉田慎吾、①『環境色彩デザイン』(カラープランニングセンター編、美術出版社、1984年2月20日)、②『都市と色彩』(洋泉社、1994年2月1日)、③『まちの色をつくる』(建築資料研究社、1998年10月10日)、④『景観法を活用するための環境色彩計画』(丸善、2005年9月25日)。
- 25) 社団法人 日本建築学会 編『建築の色彩設計法』、丸善、2005年4月25日。

色彩に関する研究は、物理学¹⁴⁾、心理学¹⁵⁾、文学¹⁶⁾、美術学¹⁷⁾など、様々な分野でおこなわれており、それぞれに研究の蓄積がある。

本研究に直接関係する建築学分野の色彩研究では、古くは乾の著書『建築の色彩設計』¹⁸⁾がある。日本でのこの分野のまとまった文献としては、筆者の仄聞するところ、これを嚆矢とするのではないかと思われる。この書は、建築内部の色彩を中心としており、町並みにかかわる外部色彩に関する論述は多くはないが、自然環境の色彩との調和や周辺の近隣建物や歴史的建造物などとの関係の留意を一般的法則として提示しているのは、現在でも通用するものとして注目される。また、1972年、フランスのデザイナー、J.P. ランクロによる東京の色彩計画において、設計に使われる色彩を地域の調査から抽出するという方法がとられていたことを紹介し、このような考え方は当時の日本にはなかったことが述べられていることも興味深い。

伝統的建造物群保存地区が制度化された1975年以降、町並みや景観に関する研究がひろく展開されるようになり、それと並行して色彩研究も進展したといえる。その中で、近年の10年間ほどにしぼってみると、町並みにおける色彩に関する研究として、稲垣¹⁹⁾、木多ら²⁰⁾、尾崎ら²¹⁾、亀谷ら²²⁾、中山ら²³⁾のものがある。稲垣や木多らの一連の研究は、都市の色彩に関する種々の評価実験をおこない、都市の色彩構成と評価の関係をさぐり、景観コントロールのための色彩のあり方を検討している。尾崎らの研究は、一部歴史・文化に関わる色として歴史的建築物を調べており興味深いが、現況の色にとどまっている。亀谷らの一連の研究は、都市景観における色彩の現れ方を色彩の様相という概念で定義し、その特徴を分類整理している。中山らの研究は、日本とヨーロッパの新旧9つの事例について町並み色彩の現況をあきらかにしたものである。吉田による一連の著書²⁴⁾は、環境を構成する要素の色彩を相対的に捉え、その相互関係をコントロールし美的な景観を創造しようとするを「環境色彩」という概念で初めて示し、その計画、デザインの手法を紹介している。また、ごく最近の日本建築学会による『建築の色彩設計法』²⁵⁾は、これまでの色彩研究を網羅し、体系づけたものとして価値が高く、建築外観の色彩についてはもとより、色彩にかかわる景観条例、ガイドラインなどについても扱われている。しかしこれらは、いずれも色彩の評

価や現況把握、それにもとづく計画、設計の手法などが主で、時系列における一断面をとらえたものであり、町並み色彩の歴史的変遷やそこにみられる色彩形成のあり方を扱ってはいない。なお、伊藤ら²⁶⁾の研究において、スウェーデン・ストックホルムとフィンランド・ヘルシンキの町並み色彩の変遷を紹介しており、筆者の研究の参考になるものであるが、それは研究のほんの一部をなすものであり、主たる目的は環境色彩の現状分析にもとづく計画のあり方におかれている。

一方、町並み、景観の変容に関する最近の研究として、西山ら²⁷⁾、佐野ら²⁸⁾、内海ら²⁹⁾のものがある。西山らの研究は、伝統的建造物群保存地区における景観保存活動の発展過程と、その結果としての景観変容の実態と要因および維持条件を検討したものである。佐野らの研究は、歴史的市街地の町家を中心とした建築物の外観様式の変遷の過程をあきらかにしたものである。内海らの研究は、町並み保存に影響を及ぼす町家のファサードの変化を検証し、修復・新築の際の問題点をあきらかにしたものである。いずれも町並みの変容の対象は、町家のファサード、建築物の外観様式、家屋の増築パターンといった町並みを構成する建物の形態であり、色彩を扱ったものはない。

重要文化財建造物に関しては、その保存修理工事に際して必ずペンキ塗装の歴史的変遷の調査分析をおこなっているが³⁰⁾、建物単体に限られており、建物群としての町並みを扱うことはない。

海外では、とくにアメリカにおいて町並み色彩の変遷に関する研究蓄積がみられる。代表的なものとして、エリザベス・ポマーダらによるサンフランシスコのヴィクトリアン様式の住宅群からなる町並み色彩の研究があげられる³¹⁾。これは日本にはみられないタイプの研究で、筆者の研究にも参考になるものであるが、変容の分析は文献に依拠し、色彩の実態は建物の現況写真によっており、古いペンキ層を調査する方法で実証的に町並み色彩の変化をとらえてはいない。

本研究のように、建物の古いペンキ層の調査・分析にもとづき、維持管理行為としてのペンキの塗り替えにともなう建物色彩の変化から、地域全体の町並み色彩の変化と形成のあり方をとらえようとするのは、新しい視点と方法の研究として位置づけられるものである。

26) 伊藤隆一、小林英嗣、種村諄三、佐藤政昭、石原智也、他『北方圏における環境色彩とアイデンティティー個性あるまちづくりと環境色彩計画』、社団法人 北方圏センター、1985年3月。

27) 西山徳明ほか1名、「伝統的建造物群保存地区選定後の集落景観の変容と維持に関する研究」、日本建築学会計画系論文集第474号、pp151-160、1995年8月。

28) 佐野雄二ほか2名、「伝統的様式を継承した新たな町並み景観の形成過程と計画的課題」、日本建築学会計画系論文集第531号、pp179-185、2000年5月。

29) 内海佐和子ほか5名、「史跡保存地区における町家のファサードの変化」、日本建築学会計画系論文集第542号、pp129-135、2001年4月。

30) 財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財 旧函館区公会堂 保存修理工事報告書』、函館市、1983年3月、他多数。

31) Elizabeth Pomada and Michael Larsen, ①『PAINTED LADIES』(E.P.Dutton, NEW YORK, 1978年)、②『THE PAINTED LADIES REVISITED』(E.P.Dutton, NEW YORK, 1989年)。

第2章 時層色環の調査・分析

ーペンキのこすり出しとペンキ層の各色の塗装年の特定・推定ー

2-1 はじめにー「時層色環」の定義

函館市西部地区、神戸市北野町山本通地区、アメリカ・ボストン周辺地区の研究対象3地区は、いずれも木造下見板張り建物が群として存在し、外壁下見板や窓枠等に塗装されたペンキが地区の町並みの色彩を特徴づけている。これらの下見板張り建物では、ペンキをきれいに塗り替えるために古いペンキ層を削り取ってしまうものもあるが、むしろ建物の表面のペンキ塗膜の下に塗り重ねられた古いペンキ層が残されている場合が多い。

例えば、函館市西部地区の重要文化財旧函館区公会堂（1910（明治43）年）や重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂（1916（大正5）年）、神戸市北野町山本通地区の重要文化財小林家住宅（1903（明治36）年）において、明治、大正時代の創建当初から、保存修理工事がおこなわれた昭和、平成の時代までの、数回にわたって塗り替えられたペンキ層が残っていることがあきらかになっている^{1) 2) 3)}。

本研究ではこれらのペンキ層の発掘調査をおこない、各層の色彩とその塗装年をあきらかにし、それらの建物群が立地する地区全体として、町並みの色彩がどのように、またなぜ変化したのかを分析、考察するものである。

ペンキ層の発掘調査については、次節で詳述するが、調査の結果、同心円状の模様をしたペンキの色のレイヤーが得られた。これは樹木の年輪や考古学の地層のように、各層が示すそれぞれの時代、環境、個人の様相を意味するものであるとの仮説をたて、その形態と意味を考慮して、「時層色環」⁴⁾という新しい概念を提示し、定義づけるものである。

2-2 時層色環の調査

(1) 下見板張り建物のペンキ層の発掘・採集部位

下見板張り建物には、1、2階とも外壁を下見板張り、縦長窓とし、柱型、胴蛇腹、持送り等の洋風意匠をもつ「洋風タイプ」と、1階が横長の格子窓等の和風意匠、2階が外壁下見板張り、縦長窓、

- 1) 財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財旧函館区公会堂 保存修理工事報告書』、函館市、1983年3月。
- 2) 財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂 保存修理工事報告書』、宗教法人 函館ハリストス正教会、1989年1月。
- 3) 財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財小林家住宅 保存修理工事報告書』、重要文化財小林家住宅修理委員会、1989年9月。

- 4) 「時層色環」という言葉は、筆者も共同研究者の一員として加わった「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会」（代表者：村岡武司ほか24名）による、1988年4月から1990年10月の2年半にわたる共同研究の成果に基づくものである。具体的には、筆者と共同研究者の柳田良造、石塚雅明の3者による合議の中から生み出された。

柱型、胴蛇腹等の洋風意匠をもつ「和洋折衷タイプ」の2つのタイプがある(図2-1の①)。このうち、洋風タイプは函館市西部地区、神戸市北野町山本通地区、アメリカ・ボストン周辺地区の3地区に共通して見られるもので、外壁下見板をはじめとする木部すべてにペンキが塗装されている。神戸では屋根は瓦葺き、アメリカではスレート葺きであるが、函館ではトタン葺きで、屋根にもペンキ塗装が施されている。和洋折衷タイプは函館市西部地区にしかみられない独特のもので、和風意匠の1階部分はペンキ塗装をせずに白木のままで、洋風意匠の2階部分にだけペンキが塗装されている。

この下見板張り建物のファサードで最も塗装面積の大きい、したがって町並みに最も影響の大きい部位は外壁下見板で、そのペンキ層を主な発掘・採集部位とする。それ以外の窓枠、柱型、胴蛇腹、持送りなどの各部位については、装飾的効果を高めるために外壁下見板と異なる色彩を施す場合があるので、外壁下見板との比較対象としてとりあげる。

(2) 「こすり出し」によるペンキ層の発掘

下見板張り建物の屋外木部の各部位に塗り重ねられ、層をなしているペンキ塗膜を、水を含ませたスポンジで適宜濡らしながら、耐水性の紙やすりで円環状にこすり、木地が出るまで削る(図2-1の②)。これを「こすり出し」⁵⁾と名づけ、それによるペンキ層の発掘作業をおこなった。

こすり出しは、とくに専門的な技術を必要としない、紙やすりと水さえあれば簡便に、誰もが容易におこなうことのできる調査手法である。函館でも神戸でも、地元のまちづくり市民グループと協働して、こすり出しをおこなった。市民自らの手で建物のペンキ層を発掘し、歴史的な色を探り出すこの手法は、市民による地域の環境学習のツールとしても有効であろう。

(3) 時層色環の発見・採集・記録

こすり出しの結果、ペンキ各層の色が同心円状の模様をなす時層色環が得られた(図2-1の③)。中心部が木地で、その周辺の1層目が最も古い塗り始めのペンキ層、順々に年を経るごとにペンキが積層し、一番外側の最後の層が最も新しいペンキ層である。このペンキ各層の色を、色見本帳と照合し、色票番号を記録した(図2-1の④)。色見本帳は社団法人日本塗料工業会発行の塗料用標準色見本帳普及版の1987年度版(M版、231色)および1989年度版(P版、245色)を使用した。色数のさほど多くないこの色見本帳を用いたのは、建物一般に多く用いられる色がまとめら

5) 重要文化財の保存修理では「塗膜の研ぎ出し」と呼んでいる。財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂 保存修理工事報告書』(宗教法人 函館ハリストス正教会、1989年1月)p57を参照。なお、このこすり出しの調査手法は、1988年6月4日、函館で、当時ハリストス正教会の保存修理工事現場担当の麓和善(現名古屋工業大学大学院工学研究科教授)から直接教えを乞い、手ほどきを受けたものである。

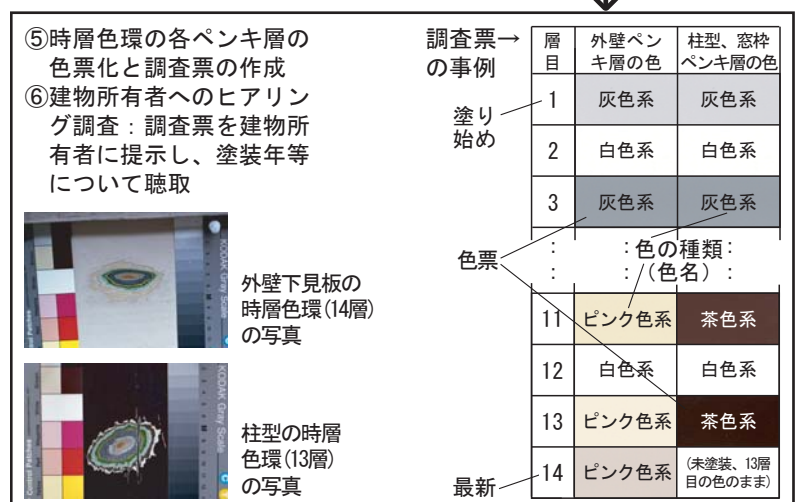
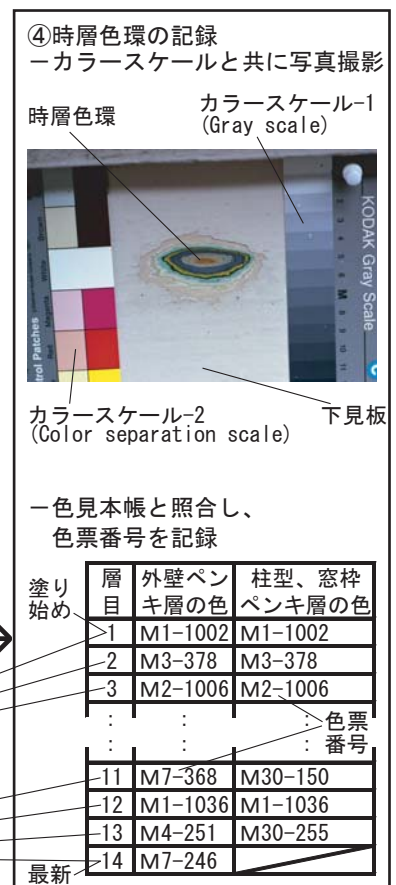
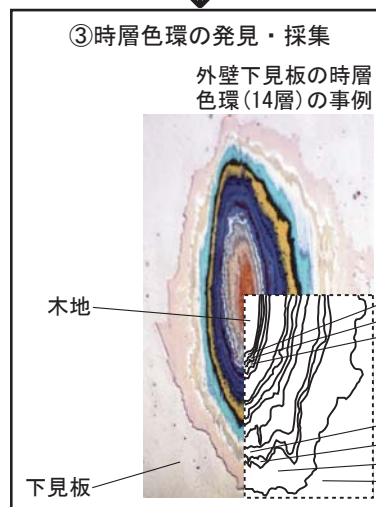
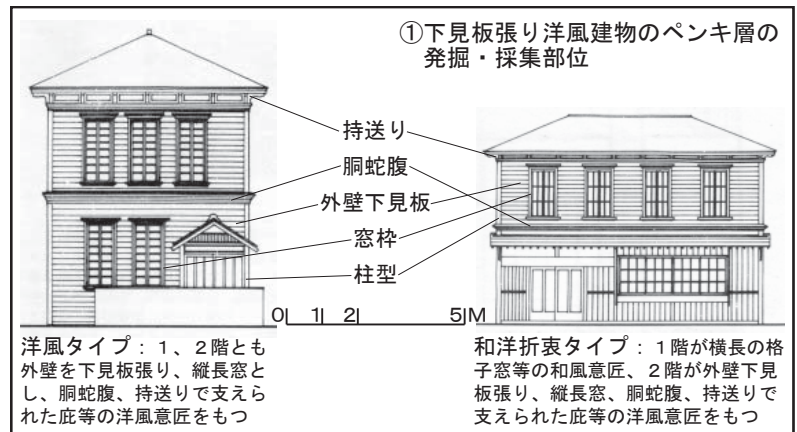


図2-1
時層色環の調査フロー
ー函館市西部地区の下見板張り洋風建物の場合

れたものであることに加え、本研究のねらいが文化財建造物のように個々の建物についての厳密に正確な色を把握することにあるのではなく、建物群としての町並み色彩の大まかな傾向を把握することにあり、そのためにはこの色見本帳による近似的な色の把握で十分であると判断したからである。

また、時層色環をカラースケールと一緒に写真撮影をおこない、後に時層色環の色彩を正確に再現できるデータとして記録した（図 2-1 の④）。カラースケールは、Kodak 社の Color separation scale and Gray scale (small) を使用した。

（4）時層色環の各ペンキ層の色票化と調査票の作成

時層色環の各ペンキ層を、社団法人日本塗料工業会発行の塗料用標準色見本帳のワイド版を用いて色票で示し、それを塗り始めから調査時点の最新層まで、時系列に並べた調査票を建物ごとに作成した（図 2-1 の⑤）。

（5）建物所有者へのヒアリング調査

こすり出しと併行して、建物所有者に対して、前述の各ペンキ層を色票化し時系列に並べた調査票を提示することにより、時層色環から得られたかつての色を具体的かつ視覚的に示し、昔の色の記憶や外壁塗装の改修方針と経緯などについてヒアリング調査をおこなった（図 2-1 の⑥）。

2-3 時層色環の分析

ーペンキ層の各色の塗装年の特定・推定

こすり出しによって得られた時層色環から直接読み取れることは、①建物ごとの、②ペンキ層の数と色、③その塗り始めから調査時点までの塗装順序、である。時代の色彩とその変容の分析には、ペンキ層の各色がいつ頃塗られたか、その塗装年をあきらかにする必要がある。文献や建物所有者ヒアリングからすべての色の塗装年を特定できるとよいのだが、そういう建物はなかった。本研究のねらいは、ある幅をもった時代の色をとらえようとするものなので、いくつかの仮定にもとづき、手順にのっとって塗装年の推定をおこなう。その基本的な考え方は、最も新しいペンキ層の塗装年（以下「最新塗装年」）と最も古い第 1 層のペンキ層の塗装年（以下「塗り始め年」）をおさえ、その間の層については、ペンキの塗り替えは一定の周期性をもつものであるから、塗装間隔を均等割りして塗装年を求めることとした。函館市西部地区の下見板張り建物 82 棟を事例とする、その具体的な手順は、①前

提の整理、②最新塗装年の特定・推定、③何年おきに塗り替えているのか、塗装間隔年の特定、④塗り始め年の特定・推定、⑤各ペンキ層の年代推定、である。

2-3-1 前提の整理

(1) 分析のベースとしての外壁のペンキ層

町並みに最も影響の大きいのは外壁の色彩であることから、外壁のペンキ層を分析のベースとした。ただし、下見板の張り替えにより、窓枠等の他の部位のペンキ層数が外壁よりも多い場合には、それを補完的に用いた。

(2) 外壁ペンキ層の下塗りの判断

下塗りのペンキ層の判断は重要な問題である。下塗りに用いられる色は、現在では一般的に白色であり、この白色が下塗りなのか上塗りなのか問題となる。塗装業者へのヒアリングによれば「昔は白ペンキの方が高かったので、下塗りに白を塗ることはまず考えられない」とのことであり、実際に表 2-1 のとおり、明治中期および昭和初期におけるペンキの価格をみると、錆色等にくらべて白色の方が高いことがわかる。したがって、白色は戦前では上塗りであったと推定した。

戦後になり、戦前の油性塗料から合成樹脂塗料への技術革新にともない、1965 年頃から 70 年頃、下塗り用の白色ペンキの開発と、下層の色を隠蔽し仕上げ効果を高めるために下塗りとして通常の白色ペンキを用いる工法が開発された⁶⁾。図 2-2 は西部地区外の遺愛女学校本館（1908（明治 41）年）の外壁および窓枠の時層色環とペンキ色彩の変遷を示したものであるが、この 1965 年

6) 日本ペイント株式会社 社史編纂室 編 「日本ペイント百年史」（日本ペイント株式会社、1982 年 12 月 1 日）および日本ペイント株式会社塗料相談室、米沢猛夫氏（日本ペイント販売北海道株式会社）へのヒアリングによる。

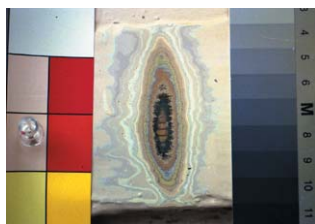
表 2-1 ペンキの価格の比較—明治中期、昭和初期、現在

年代 \ 色の種類	白色	錆色	黄色	緑色	黒色
1896(明治29)年	0.268(1.5)	0.178(1.0)	0.193(1.1)	0.260(1.5)	0.182(1.0)
1930(昭和5)年	0.324(1.2)	0.276(1.0)	0.360(1.3)	0.388(1.4)	0.388(1.4)
2003年	485 (0.9)	522 (1.0)	625 (1.2)	794 (1.5)	594 (1.1)

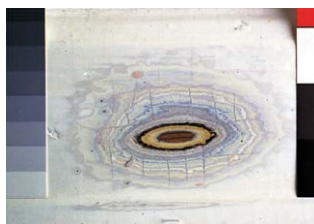
数値は円/kg、カッコ内は戦前最も安価な錆色を1とした場合の比を示す。

出典：1896(明治29)年のデータは日本ペイント株式会社社史編纂室編「日本ペイント百年史」（日本ペイント株式会社、1982）51頁の表—明治29年8月30日商品改定価より作成。1930(昭和5)年のデータは大阪塗料染具新報社「大阪塗料工業新報」に掲載されている同年4月の定価表から作成。データ入手可能な各年の最初と最後の月を選び、かつ各塗装業者の中から最も代表的な日本ペイントのデータを選んでいる。また、白については品質と値段の異なる3種類があるが、最も安価なものを1つ選んだ。2003年のデータは、日本ペイント販売北海道㈱へのヒアリングによる。なお、これら以外のデータ（戦後の1960年代頃など）については探索したが発見できず、結局収集できなかった。

外壁の時層色環のペンキ層の色票		外壁および窓枠ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定	窓枠の時層色環のペンキ層の色票	
層目	色 票		層目	色 票
1		1908年：創建当初より塗装されていたと推定。白黒の竣工写真を見ると外壁は濃く、窓枠等は薄い。	1	ワキワト
2		1913年頃：	2	
3		1918年頃：	3	
4		1923年頃：	4	白色
5	白色	1928年頃：	5	ワキワト
6		1933年頃：	6	白色
7		1938年頃：戦時中のペンキ事情を考慮し、統制経済発令前の1938年頃と推定。	7	灰色
8		(戦中、戦後の1939年から1950年頃までは、ペンキが塗られていなかったと推定)	8	白色
9		1953年頃：資料室担当教官の言「着任した昭和31年頃からピンクの建物だった」より推定。	9	白色
10		1958年頃：	10	白色
11		1963年頃：	11	白色
12	白色 (下塗り)	1968年頃：塗装間隔を5年として、各ペンキ層の塗装年を推定。	12	ワキワト (下塗り)
13		1973年頃：1965年頃から70年頃、下塗り用の白色ペンキの開発と、下層の色を隠蔽し仕上げ効果を高めるために下塗りとして通常の白色ペンキを用いる工法が開発された。したがってこれ以降の白色は、下塗りと推定。	13	ワキワト
14	白色 (下塗り)		14	ワキワト (下塗り)
15		1978年頃：	15	白色
16	ワキワト (下塗り)		16	ワキワト (下塗り)
17		1983年頃：	17	白色
18	白色 (下塗り)		18	白色 (下塗り)
19		1988年：建物所有者の言より特定。	19	白色



外壁の時層色環（19層）



窓枠の時層色環（19層）



建物外観

図 2 - 2 遺愛女学校本館（1908（明治 41）年）の外壁および窓枠の時層色環とペンキ色彩の変遷

頃から 70 年頃の下塗りの白色がよくわかる事例である。1988 年塗装の最新層をふくめて 4 回、白色とピンク系の色が繰り返されており、ピンク系の色が上塗りで白色が下塗りであると判断できる。他の建物の時層色環の事例でも、最新層を含む最近の数層で、白色と他の色の組合せが 2 ～ 3 回繰り返しあらわれ、白色が下塗りとして推定できるものがいくつか見られた（図 2-3 を参照）。このような戦後の白色は下塗りとして推定した。なお、遺愛女学校本館もそうであるが、戦前に白色がこのように使われ、下塗りとして判断できるものは見あたらなかった。

(3) 戦時中のペンキ事情

第二次世界大戦が勃発した 1939 年、塗料業界では輸入原料の鉛、亜鉛、樹脂、溶剤などの入手が困難になった。また、同年には価格等統制令が公布され、これが解除されるのは戦後まもなくの 1949 年および 50 年のことであったという⁷⁾。したがって、1939 年から 1950 年の 12 年間は、ほとんどの建物でペンキが塗られず、塗装の空白期間であったと推定した。

(4) 一般の住宅における塗装状況

建物所有者のヒアリングからは、一般の住宅は戦前にはペンキ塗装がなく、塗り始めたのは戦後の 1960 年頃から、特に弥生町の住宅では 1965 年頃からとするものが多かった。これは、一般住宅の所有者にとって戦前はペンキが高価なものであったことと、特に弥生町では比較的所得層の長屋や借家が多かったことによるものと考えられる。ペンキ層数の少ない一般住宅では、これにもとづいて塗り始め年を推定した。

7) 日本ペイント株式会社 社史編集室 編 「日本ペイント百年史」(日本ペイント株式会社、1982 年 12 月 1 日) を参照。

2-3-2 最新塗装年の特定・推定

最新塗装年は、①ペンキ塗装年が記録されている資料の建物台帳から 2 棟、②建物所有者のヒアリングから 55 棟の計 57 棟で特定できた（表 2-2）。その年代は、1980 年代が 39 棟、1970 年代が 15 棟とほとんどを占め、中央値は 1983 年であった。それ以外の 25 棟の建物については、③ 1977 年の町並み調査⁸⁾ による記録写

8) 北海道大学足達研究室によっておこなわれた。

表 2-2 最新塗装年の特定・推定

特定の 方法	①建物台帳から特定	2
	②建物所有者のヒアリングから特定	55
推定の 方法	③1977年の調査記録にもとづき1970年代前半と推定	5
	④特定できた建物57棟の中央値1983年を採用	19
分析不能		1
合 計		82

数値は該当する建物棟数を示す。

真と、1988、89 年調査とで変化の認められなかった 5 棟については 1970 年代前半に塗装されたと推定し、④残る 19 棟については、平均的なものと仮定し、最新塗装年を特定できた建物 57 棟の中央値である 1983 年を採用することとした。なお、時層色環では 2 層確認できたものの、目視ではペンキが剥落してほとんど塗られていないような状態にあった建物 1 棟は分析不能と判断した。

2-3-3 塗装間隔年の特定

最新塗装年を特定できた 57 棟のうち、建物所有者のヒアリングから、塗装間隔年そのものを特定できたもの、および隣り合うペンキ層の塗装年を特定できたことによって塗装間隔年を把握できたものが計 19 棟あった。それをまとめたのが表 2-3 であるが、塗装間隔年は最短で 3 年、最長で 15 年とばらつきがみられるものの、ほとんどが 5 ～ 10 年（86%）であった。

表 2-3 特定できた塗装間隔年の状況

塗装間隔年(年)	3～4	5～6	7～8	9～10	11～12	13～14	15	合計
該当回数(回)	1	20	11	5	1	2	2	42

該当回数は隣り合うペンキ層の塗装年の特定などにより、塗装間隔年を把握できた19棟において、該当するものすべてをカウントしている。例えば5層の各塗装年が特定できた建物では、4 回分の塗装間隔年をカウントすることになる。

2-3-4 塗り始め年の特定・推定

塗り始め年については、①建物所有者のヒアリングから 15 棟、②明治、大正期に創建された建物のうち、大正期の写真集⁹⁾に掲載され、塗装の有無が確認できた 5 棟については創建時からとし、計 20 棟で特定できた。また、③ペンキ層が 1 層しかなく、最新塗装年と同じと判断せざるをえないものが 1 棟あった。それ以外の 61 棟については、下塗り層を除くペンキ層数で判断し、その多いものは創建時から、少ないものは前提の整理で述べたように戦後の 1960 年または 1965 年からと推定することにした。なお、外壁よりも窓枠・柱型等の方がペンキ層数の多い建物があるが、これは下見板の張り替えによるもので、かつては外壁も窓枠等と同様の層数で塗装されていたとみなし、そのペンキ層数を用いた（最多 18 層、最少 1 層、平均 7.3 層）。

ペンキ層数で判断する具体的な手順として、前節で把握した塗装間隔を用いることとした。塗装間隔は、最新塗装年から塗り始め年を差し引き、その間のペンキ層で均等割りすることによって推定でき、その関係式は、推定塗装間隔年＝（最新塗装年－塗り

9) 圓山貞吉 著 「函館市制實施記念寫真帖」、1922 年、を参照。

始め年) / (ペンキ層数 - 1) となる。この推定塗装間隔年が 5 ～ 10 年とすると、 $5 \text{ 年} \leq (\text{最新塗装年} - \text{塗り始め年}) / (\text{ペンキ層数} - 1) \leq 10 \text{ 年}$ 、という関係式が成り立つ。最新塗装年を調査時の 1989 年、戦後の塗り始め年を 1960 年とすると、この関係式が成立するのはペンキ層数が 6 層以下で、7 層以上になると成立しない。したがって、④ペンキ層数 7 層以上のものは塗り始め年を創建時から (37 棟)、⑤ペンキ層数 6 層以下のものは塗り始め年を 1960 年から (16 棟)、⑥特に弥生町の建物でペンキ層数 5 層以下のものは塗り始め年を 1965 年から (3 棟) と推定した。なお、④' ペンキ層数が 6 層で塗り始め年を 1960 年からとしたもののうち、塗装間隔が 5 年未満で関係式が成立しなかった 3 棟は、塗り始め年を創建時からと推定した (表 2-4)。なお、最新塗装年の特定・推定で分析不能としたものと、外壁を張り替えたため 1 層しかなく、しかも他の部位からペンキ層を採集できなかったもの計 2 棟は分析不能とした。以上の結果、塗り始め年は、明治期が 21 棟、大正期が 21 棟、昭和戦前期が 6 棟、戦後 1950 年代が 6 棟、60 年代が 26 棟、分析不能が 2 棟であった。

このようにして塗り始め年を特定・推定したすべての建物 (分析不能の 2 棟とペンキ層 1 層の 1 棟を除く 79 棟) について、先の関係式にもとづき、特に戦前から塗り始めたものについては戦中の 12 年間の塗装空白期間を差し引き、 $(\text{最新塗装年} - \text{塗り始め年} - 12 \text{ 年}) / (\text{ペンキ層数} - 1)$ として推定塗装間隔年を確認すると、5 ～ 10 年のものが 56 棟 (71%) であった。他の 23 棟のうち、5 年未満と塗装間隔の短い 9 棟は大企業の事務所や医院などで、ペンキ層数が 10 層以上と多く、こまめに維持管理をしていたと

表 2 - 4 塗り始め年の特定・推定

特定の方法	①建物所有者のヒアリングから特定	15
	②大正期の写真集にもとづき創建時からと特定	5
	③ペンキ層が 1 層で最新塗装年と同じ	1
推定の方法：塗装間隔 $5 \text{ 年} \leq (\text{最新塗装年} - \text{塗り始め年}) / (\text{ペンキ層数} - 1) \leq \text{塗装間隔 } 10 \text{ 年}$ の関係式にもとづく	④ペンキ層数 7 層以上のものは創建時からと推定	37
	④' ペンキ層数 6 層で塗装間隔 5 年未満は創建時からと推定	3
	⑤ペンキ層数 6 層以下のものは 1960 年からと推定	16
	⑥弥生町でペンキ層数 5 層以下のものは 1965 年からと推定	3
分析不能		2
合 計		82

数値は該当する建物棟数を示す。

思われる。逆に 10 年以上と塗装間隔の長い 14 棟は一般の住宅などで、ペンキ層数が 2 ～ 4 層と少なく、現在でも手入れの行き届いていないものがみられた。なお、79 棟すべての推定塗装間隔年の平均は 7.23 年と、5 ～ 10 年のほぼ中央であった。

2-3-5 各ペンキ層の年代推定

塗り始めの第 1 層と最新層との間にある各ペンキ層の年代については、塗り始め年に推定塗装間隔年を加算することで求めた。また戦前から塗り始めているものについては、戦中の 12 年間の空白期間があるので、戦後のペンキ層については最新塗装年から推定塗装間隔年を減算して求めた。なお、最新塗装年、塗り始め年以外他層で塗装年代を特定できたものについては、同様の手順で塗装間隔年を算出、推定して求めた。

2-3-6 建物ごとの色彩変容データ票の作成

以上の手順を外壁上塗りペンキ層数の最も多かった建物の事例で示したのが図 2-3 の色彩変容データ票である。このような分析を建物ごとにおこない、最新塗装年も塗り始め年も不明で分析不能であった 1 棟を除く、81 棟の色彩変容データ票を作成した。

2-4 時層色環分析から読める各時代の町並み色彩

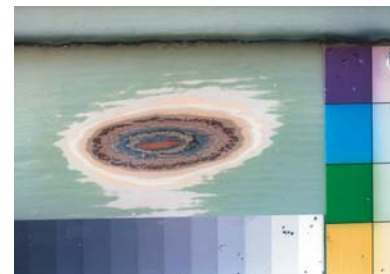
時層色環の分析によって得られた色彩変容データ票から、81 棟の建物ごとに、いつ、どのような色が塗られていたのかが把握できるようになった。そこから町並み色彩の変遷を分析するためには、時代区分を設定し、時代ごとに 81 棟全体の色の種類と数を把握することが必要となる。

その手順は（図 2-4）、①建物の塗装間隔が 5 ～ 10 年のものが多かったことと、一般的な時代の区切りを考慮して、おおむね 10 年ごとに、明治末期（1907-12）、大正期（1912-26）、昭和初期（1926-39）、戦中（1939-50）、1950 年代、1960 年代、1970 年代、1980 年代の 8 期に分類する、②外壁の色は全部で 151 種類、465 を数えた。それを主に色相から白系、灰系、濃緑系、薄緑系、青系、茶系、クリーム系、ピンク系、黄系、肌色系、ベージュ系、黒系、イカの油の 13 種類に分類する。なお、緑系を 2 タイプに細分化したのは、両者とも特徴的な色であると考えからである、③ 8 期の各時代の期間内で、外壁下見板にペンキが塗られ、色が確認できる建物すべてにおいて、その色のペンキが塗られた回数をカ

外壁の時層色環のペンキ層の色票		外壁ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定		窓枠の時層色環のペンキ層の色票	
層目	色 票			層目	色 票
1		1916年	所有者の言「新栄医院の頃(1916～1966年頃まで)、病院という性格上、よくペンキを塗り替えていたようだ」より、創建当初の1916年から塗装されていたものと特定。	1	白色
2		1918年頃		2	
3		1921年頃		3	白色
4		1923年頃		4	
5		1926年頃	2～9層目の8つの色の年代は、1層目の1916年と10層目の1938年までの22年間の塗装間隔を均等割りし(2.44年)、推定。	5	
6		1928年頃		6	
7		1931年頃		7	
8		1933年頃		8	
9		1936年頃	戦時中のペンキ事情を考慮し、統制経済発令前の1938年頃と推定。	9	
10		1938年頃	所有者の言「色彩の変遷に影響を受けた相馬株式会社が戦時中に茶を塗っていた記憶があるが、この建物では外壁第11層の茶がそれに合わせたものではないだろうか」より、11層目の茶色は戦時中のものと推定。	10	
11		戦時中 1939～ 1950年頃		11	
12		1951年頃	統制経済撤廃後の1951年頃と推定。	12	
13		1954年頃	13～15層目の3つの色の年代は、12層目の1951年と17層目の1964年までの13年間の塗装間隔を均等割りし(3.25年)推定。	13	白色
14		1958年頃		14	
15		1961年頃	16、18、20層の白色は戦後のもので下塗りと推定。	15	
16	白色 (下塗り)	1964年頃	所有者の言「池田家住宅の頃(1967～1974年頃)は肌色っぽい色を外壁に塗り、窓枠を濃い茶で塗り分けていた」より、この17層の配色は池田家住宅が入居した1967年頃以前から使用されていたものと推定。19層目の1971年から推定塗装間隔年の全体平均値7.23年を引いた1964年頃と推定。	16	白色
17				17	
18	白色 (下塗り)	1971年頃	所有者の言「1967～1974年頃は池田家住宅として使用。その池田家住宅は一度くらいしか塗り替えはしなかったと思う。」より、1967年と1974年の中間をとって1971年頃と推定。		
19					
20	白色 (下塗り)	1983年	所有者の言「伴田商店の所有になったのは1975年頃。現在の塗装は6、7年前におこなった(1990年にヒアリング調査実施)。色はグリーン系」より、1983年頃と特定。		
21					



建物外観



外壁の時層色環 (21層)



窓枠の時層色環 (17層)

図 2-3 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例
一函館市西部地区における外壁の上塗りペンキ層最多 18 層の
No. 14. 伴田商店所有建物 (1916 年頃創建) の場合

ウトする。1棟の建物で、ある時代の期間内に2回以上塗られたものも数多くみられるが、そのすべての回数をカウントする。

このようにして作成された集計表が表2-5である。この集計表によって8期ごとに最も多く塗装された色や2番目に多く塗装された色などが把握できるようになり、そこから時代による色の変化も読み取ることができるのである。

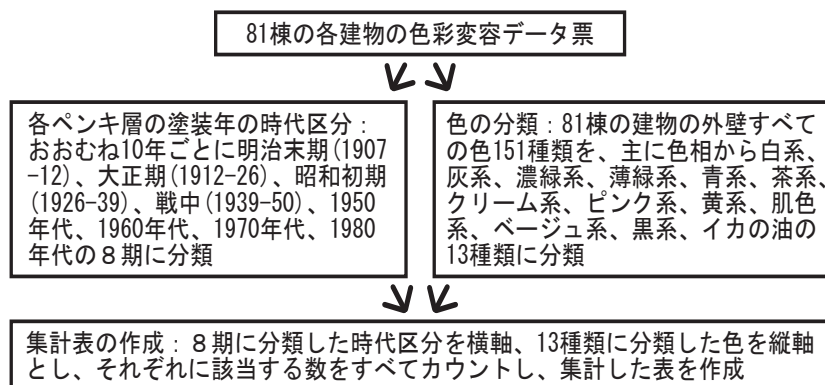


図2-4 函館市西部地区における81棟の色彩変容データ票の集計フロー

表2-5 函館市西部地区における81棟の色彩変容データ票の集計表－外壁下見板の場合

8期の 時代区分 13種類に 分類した色	明治 末期 (1907- 1912)	大正 期 (1912- 1926)	昭和 初期 (1926- 1939)	戦中 (1939- 1950)	1950 年代	1960 年代	1970 年代	1980 年代
白系	7(44)	19(30)	13(18)	-	2(3)	3(3)	11(11)	12(17)
灰系	5(31)	8(13)	8(11)	1(20)	4(7)	7(8)	5(5)	2(3)
濃緑系	2(13)	9(14)	7(10)	-	20(34)	14(16)	6(6)	3(4)
薄緑系	-	5(8)	7(10)	1(20)	9(15)	14(16)	17(17)	11(16)
青系	1(6)	11(17)	7(10)	-	5(8)	12(14)	9(9)	4(6)
茶系	1(6)	5(8)	12(16)	1(20)	5(8)	9(10)	10(10)	2(3)
クリーム系	-	5(8)	3(4)	-	4(7)	9(10)	7(7)	9(13)
ピンク系	-	1(2)	6(8)	1(20)	7(12)	15(17)	27(27)	24(34)
黄系	-	-	3(4)	1(20)	2(3)	2(2)	2(2)	-
肌色系	-	-	3(4)	-	-	3(3)	6(6)	2(3)
ベージュ系	-	-	3(4)	-	1(2)	-	1(1)	1(1)
黒系	-	-	1(1)	-	-	-	-	-
イカの油	-	-	-	1(20)	-	-	-	-
合 計	16(100)	63(100)	73(100)	5(100)	59(100)	88(100)	101(100)	70(100)

数値は各時代の期間内に存在し、外壁下見板にペンキが塗られ、色が確認できる建物において、その色のペンキが塗られた回数を示す。1棟の建物である時代の期間内に2回以上塗られたものも数多くみられるが、そのすべての回数をカウントしている。カッコ内は時代区分ごとの建物にペンキが塗られた回数の合計値を100とした時の割合%を示す。
なお、各時代区分において最も多い色に濃い網かけを、2番目に多い色に薄い網かけをおこなっている。

2-5 日本および海外におけるペンキ層の調査、分析手法

下見板張り建物のペンキ層の調査、分析は、日本および海外の、主として文化財建造物でおこなわれている。そのいくつかの手法を紹介し、本研究で提示した時層色環の調査、分析手法が、それらと比べることで、どのように位置づけられるのかをあきらかにする。

わが国における重要文化財建造物で、木造下見板張りペンキ塗りの建物については、その保存修理工事に際して、サンドペーパーによる塗膜の研ぎ出しをおこない、創建当初の塗装から修理前の塗装までの塗剥サンプルを採集し、目視による観察、記録調査がおこなわれている。写真2-1、2-2はこの手法を用いておこなわれた、函館市西部地区内の重要文化財、旧函館区公会堂(1910(明治43)年)の外壁下見板と函館ハリストス正教会復活聖堂(1916(大正5)年)の窓の塗膜のペンキ層である。時層色環調査に比べるとペンキ層の面積が大きく、より正確に色彩を把握できるようになっている。これに加えて、光学顕微鏡による塗り回数の確認とフーリエ赤外分光光度計による各層の成分分析をおこない、仕様や後世の塗り直しの有無等をあきらかにし、創建当初の色やその後の推移を把握している¹⁰⁾。ただし、修理の目標は復原にあるので、創建当初のペンキの分析に主眼が置かれている。

10) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財旧函館区公会堂 保存修理工事報告書』、函館市、1983年3月、および財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂 保存修理工事報告書』、宗教法人 函館ハリストス正教会、1989年1月。

海外の場合、アメリカではクレーターリング (cratering) という手法がとられている。図2-5、2-6はその手法を示したものである。従来のペンキ層の調査手法は、ペンキ塗膜の表面をナイフで直径1/2インチ(1.27cm)程度カットし、ペンキ層の断面が観察できるように、月のクレーターのようなくぼみをつくり、それを虫眼鏡で観察し、層数をかぞえるというものであった。モーガン・フィリップス氏は、これに加えて、カット後に砂でみがいて、なめらかな断面をもつ直径1インチ(2.54cm)程度の円環に広げることを提唱している。このようにしてあらわれた図2-6は、何層にも同心円状にひろがるペンキ層をあらわし、時層色環と酷似している。ただし、大きさは時層色環が5cm程度と約2倍ほどある。文化財建造物の調査、分析では、これに加えて、光学顕微鏡によるペンキ層サンプルの顔料分析をおこない、それを膨大な顔料のデータベースと照合し、いつ頃の、どのようなペンキなのかを特定している。

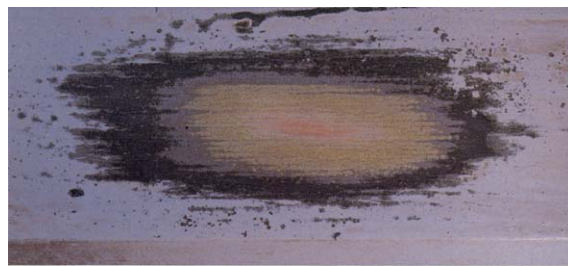
ノルウェーではこれらとはまた少し異なる手法が用いられてい



2. 当初塗装から修理前塗装までの塗剥サンプル

写真 2-1 旧函館区公会堂（1910（明治 43）年）の外壁下見板の塗膜の研ぎ出しによる「当初塗装から修理前塗装までの塗剥サンプル」¹¹⁾

11) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財旧函館区公会堂 保存修理工事報告書』（函館市、1983 年 3 月）の口絵 p7 より転載。



73 窓塗膜

写真 2-2
函館ハリストス正教会復活聖堂（1916（大正 5）年）の窓の塗膜の研ぎ出しによる「窓塗膜」¹²⁾

12) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂 保存修理工事報告書』（宗教法人 函館ハリストス正教会、1989 年 1 月）のカラー図版 p36 より転載。

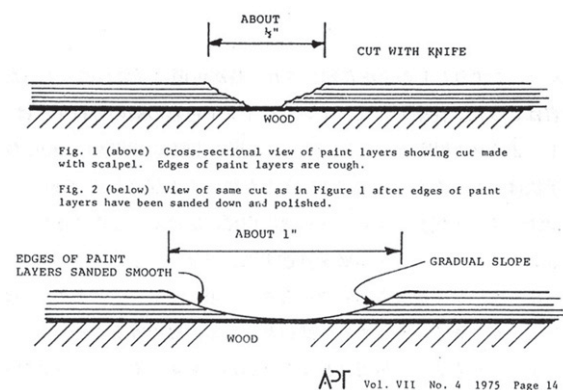


図 2-5 アメリカにおける「クレーターリング」によるペンキ層の発掘手法—断面図¹³⁾

13) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩文化の研究—下見板のペンキ色彩の復元的考察を通して—』（トヨタ財団助成研究報告書、C-020、1991 年 12 月）の p75 より転載。出典：Morgan Philips『Some Notes on Paint Research and Reproduction』（APT, Vol. VII, No.4, 1975 年）の p14(上図)と p16(右図)。所蔵：Gregory K. Clancey(1990 年 8 月調査時は、SPNEA(Society for the Preservation of New England Antiquities)の Architectural Conservator、現在シンガポール国立大学助教授)。

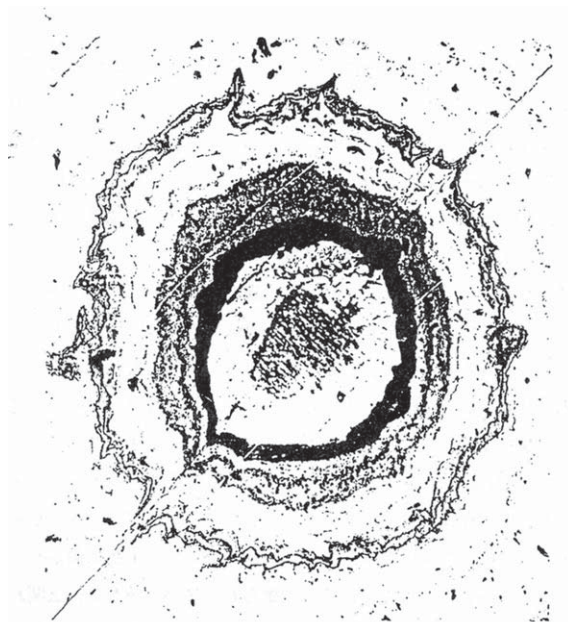


Fig. 3 Photograph showing front view of polished cut as in Figure 2. The wood appears at the center surrounded by successively larger concentric rings representing later and later paint layers.

APT Vol. VII No. 4 1975 Page 16

図 2-6 アメリカにおける「クレーターリング」によるペンキ層の発掘手法—正面からの写真¹³⁾

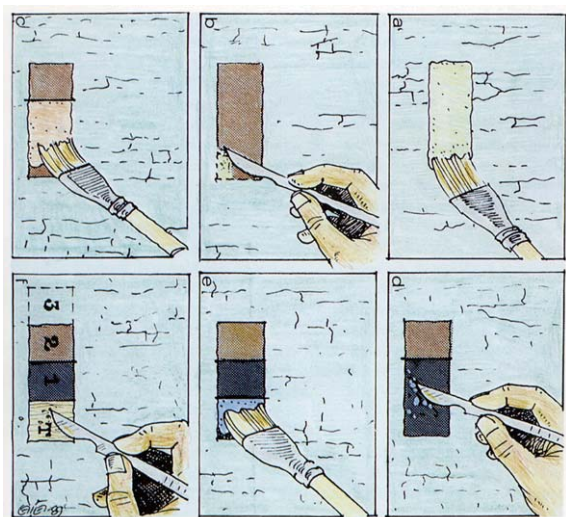


図 2-7 ノルウェーにおけるペンキ層の発掘手法¹⁴⁾

14) 『RIKSANTIKVARENS INFORMASJON OM KULTURMINNER』(Riksantikvaren(ノルウェー・オスロ市)発行、1994年9月)の9.3.1のp3より転載。



写真 2-3 ノルウェー・ベルゲン市における文化財建造物 Damsgard の室内扉のペンキ層ーペンキ層の発掘手法による¹⁵⁾(1998年9月撮影)

15) ノルウェー・ベルゲン市の文化財建造物 Damsgard は、資産家の邸宅として1770年代に創建され、18世紀の木造ロココ様式の建物としての価値が高く評価され、1983-93年にかけて復原修理がおこなわれ、現在博物館として再利用されている。(Trond Indabl『DAMSGARD』,the West Norway Museum, 1994年、より)。なお、これらの写真は1998年9月調査時のものである。



写真 2-4 ノルウェー・ベルゲン市における文化財建造物 Damsgard の外観ファサード¹⁵⁾(1998年9月撮影)



写真 2-5 ノルウェー・ベルゲン市における文化財建造物 Damsgard の外壁下見板のペンキ層ーペンキ層の発掘手法による¹⁵⁾(1998年9月撮影)

る。図 2-7 のように、まず始めに、a. 約 3×30 cm の長方形の印をつけ、そのペンキ塗膜に溶剤を塗る、b. ペンキ塗膜が柔らかくなったらナイフで塗膜を削り、下層のペンキ塗膜を出す、c. それを 1 cm 幅で残し、あとのペンキ塗膜に再度溶剤を塗る、d,e,f はこれらの繰り返しで、木地が出るまでおこなう、その結果、ステップ状のペンキ層があらわれ(写真 2-3 ～ 5)、ペンキ層の数と各層の色が把握できる、というものである。この帯状のペンキ層はカラー・ステップと呼ばれている。

このように、日本および海外の文化財建造物におけるペンキ層の調査、分析手法は、時層色環のそれと類似しているところもあるが、とくに、ペンキ層の発掘調査だけでなく、化学的な調査分析を併用しているところが大きく異なる。文化財建造物では1棟の建物に対して、ペンキ層の把握の厳密性や正確性が求められ、そのための時間と労力と費用が保証されているが、たくさんの建物を同時に調査、分析するには対応できないと思われる。これに対して、町並み全体の色彩変遷の把握を目的として、函館市西部地区のように82棟もの大量の建物の調査をおこなうには、厳密性や正確性を確保しながら、より簡便な手法が求められる。時層色環の調査、分析手法は、この目的に適うものであると考える。

2-6 まとめ

町並み色彩の変容に関して、「時層色環」という新しい概念を提示、定義づけ、この時層色環の調査、分析にもとづく、それぞれの時代における町並み色彩をあきらかにする実証的な方法を開発した。それは具体的には、①下見板張り建物の屋外木部の各部位に塗り重ねられ、層をなしているペンキ塗膜を紙やすりで円環状にこすり、木地が出るまで削る、こすり出しという簡便な手法によるペンキ層の発掘調査をおこない、②その結果、ペンキ各層の色が同心円状の模様をなしてあらわれるが、これを、ペンキ各層が示すそれぞれの時代、環境、個人の様相を意味する「時層色環」という新しい概念で提示し、定義づけ、③建物ごとに、時層色環のペンキ層の各色の塗装年の特定・推定をおこない、いつ、どのような色が塗られていたのかを把握し、④時代区分を設定し、時代ごとに対象建物すべての色の種類と数を集計することによって、町並み色彩の変容過程を分析する、というものである。この中で、建物ごとのペンキ層の各色の、とくに古い層の塗装年を特定することが難しいため、ある幅をもった時代の色をとらえることをねらいとし、そのための方法をあきらかにした。

また、日本および海外の文化財建造物でおこなわれているペンキ層の調査、分析手法を紹介し、そこでは化学的な方法が併用され、1棟の建物に対するペンキ層の年代特定の厳密性や正確性が求められているが、一方、多くの建物を対象とする町並み色彩においては目的が異なり、より簡便な手法が求められており、時層色環の調査、分析手法に妥当性のあることを論じた。とくに、こすり出しという専門的な技術を必要としない、誰もが容易におこ

なうことのできる簡便な調査手法は、学術研究の方法としてだけでなく、色彩をとおして住民の地域への関心を高め、住民による地域の環境学習のツールとして、住民参加の地域まちづくりの方法として有効であると思われる。

第3章 一般住宅地区におけるペンキ色彩からみた町並みの変容

—函館市西部地区の場合—

3-1 はじめに

本章は、一般住宅地区の函館市西部地区における木造下見板張り洋風建築物の、維持管理行為としてのペンキの塗り替えにともなう建物色彩の変化を通じて、時代の町並みの色彩とその変容過程をあきらかにすることを目的としている。

函館は幕末の1859（安政6）年に横浜、長崎とともに貿易港として開かれた。函館山と函館港に囲まれたエリアの西部地区は開港場の中心であり、以降戦前まで都市全体の中心市街地として発展した。1907（明治40）年の大火後に、木造下見板張りの洋風建物が大量に建設され、これ以降町並みを構成する主要な建築形式となった¹⁾。この明治末から戦前に建てられた洋風建物が今も数多く残り、ペンキ塗装の特色ある町並みが形成されている。また、このペンキ塗り洋風建物は、多くが庶民の住宅や店舗として建てられたものである。第1章の研究の動機で記述したように、西部地区内にある重要文化財・旧函館区公会堂（1910（明治43）年）が、1982（昭和57）年の保存修理工事によって、それまでの淡いピンク色と白色の配色から鮮やかなブルージェー色と黄色という創建当初の色に復原された。公会堂自身も周辺の景観も一変させるほどあまりにも色が異なり、しかもあざやかな色であったために、現状または中古（黄土色）にしたいという意向が教育委員会から出されるほど、物議がかもされた²⁾。このような建物単体だけではなく、西部地区の町並み全体として、かつての明治から戦前の色彩はどのようなものであったのか。現状の町並みは、一般の住宅地などではあまり使われることのない淡く、明るいピンク系や緑系の色彩（写真3-1、3-2）を中心に、様々の色で構成されているが、かつて同じ色彩であったのか、それとも公会堂のように全く異なる色彩であったのか。また、なぜその色彩が使われていたのか。

研究の方法は、下見板張りペンキ塗り建物の外壁、窓枠等木部のペンキ塗膜の下に残された古いペンキ層のこすり出しにもとづく時層色環の調査、分析を中心とし、建物所有者へのヒアリング調査、文献・史料の収集調査、さらには時層色環調査から12年を経過した後に同じ建物すべてについておこなった追跡調査を補

1) 越野武 著『北海道における初期洋風建築の研究』、北海道大学図書刊行会、1993年2月25日。

2) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財 旧函館区公会堂 保存修理工事報告書』、函館市、1983年3月。



写真3-1 ピンク系の色彩の建物



写真3-2 緑系の色彩の建物

足的に用いて分析した。

3-2 調査の概要

3-2-1 調査対象

- 3) 歴史的景観地域とは、函館市西部地区歴史的景観条例(1988年4月)により指定された、函館特有の坂道街路や建築物等の歴史的文化的環境が残る、函館山麓一帯の約120ヘクタールのエリアをいう。

西部地区の歴史的景観地域³⁾を調査対象区域とした。この区域内の通りに面する下見板張り洋風建物で、現在ペンキが塗られ、その色が確認できるものを対象に、ペンキこすり出しの悉皆調査をおこなった。対象数は82棟である。また、西部地区外の東部地区にあるが、西部地区の調査対象建物である遺愛幼稚園とゆかりのある遺愛女学校の建物2棟を含む、比較的資料のそろっている公共的な建物3棟を、参考事例として調査対象に加えた。表3-1にこの調査対象全建物85棟の一覧を、図3-1に西部地区の対象建物82棟の分布図を示す。

82棟の概要は(表3-2)、港に近く店舗、事務所等の商業施設の多い弁天町、大町、末広町で60棟を占め、山の手の住宅を主とする元町、船見町、弥生町では22棟であった。建築年代では1901(明治34)年のもの1棟を除いてすべて大火のあった1907(明治40)年以降のもので、明治時代と大正時代が各33棟を占めるが、昭和の戦後のものも5棟あり、下見板張り建物が比較的最近まで建てられていたことがわかる。

3-2-2 時層色環調査およびヒアリング調査

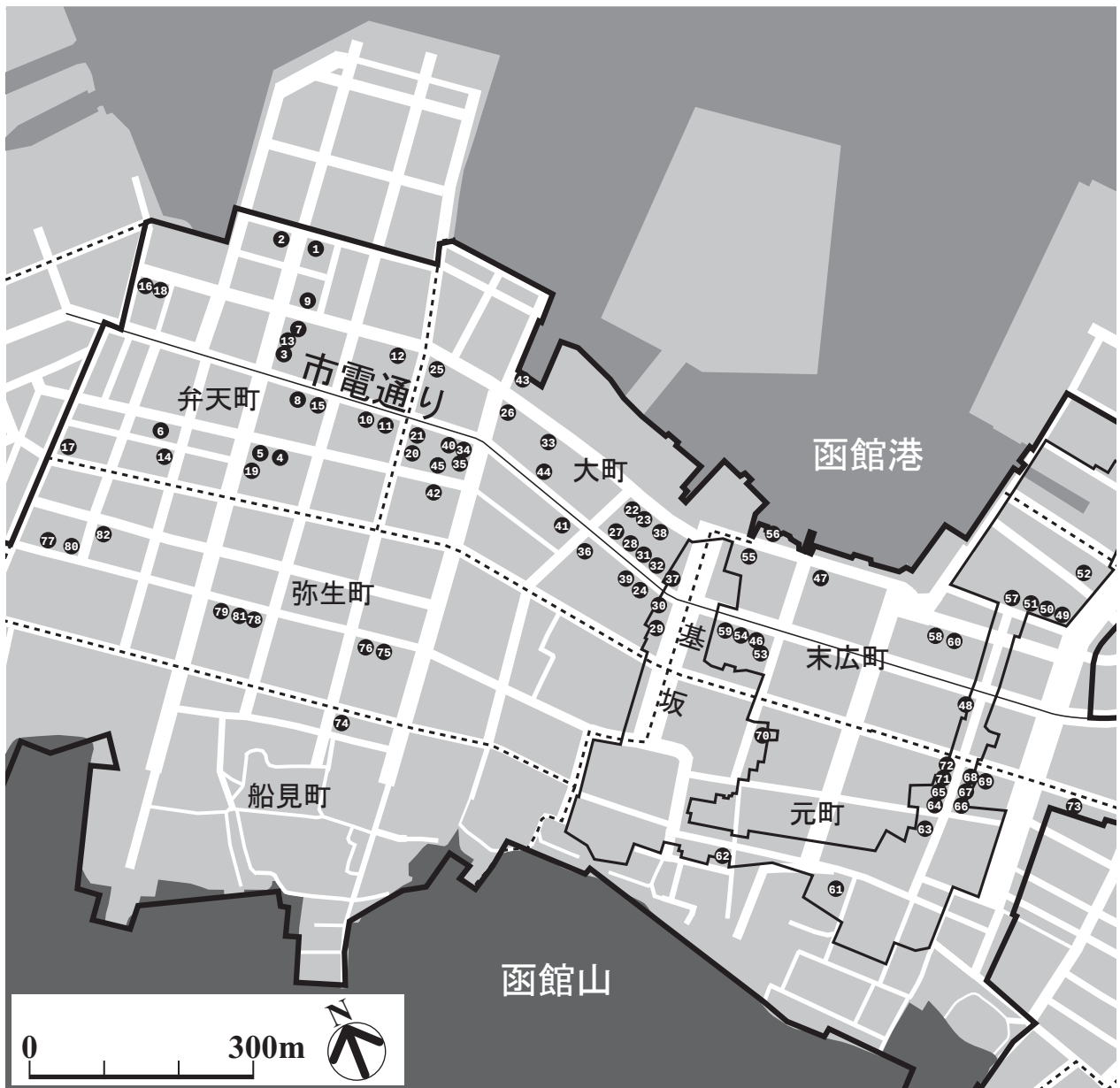
西部地区の調査対象建物82棟すべてに対して、第2章で記述したように、こすり出しによるペンキ層の発掘、時層色環の発見・採集・記録、時層色環の各ペンキ層の色票化と調査票の作成、建物所有者または使用者へのヒアリング調査をおこなった。ヒアリングの内容は、時層色環から得られた色についての記憶、色の塗り替え時期とその契機、塗り替え回数、色彩選択のポイント、周辺の建物・町並み・船舶の色とそれらとのかかわり、塗装を依頼した業者について、などである。ヒアリングは18棟が調査不可で、西部地区の建物の有効回答は64棟であった。調査は1988年5～6月、1989年6～8月の2ヶ年にかけておこなった。調査の主体は、筆者も共同研究者の一員として加わった、地元函館のまちづくり市民グループ・元町倶楽部との共同研究組織「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会」⁴⁾である。なお、本研究調査は財団法人トヨタ財団の“身近な環境をみつめよう”第5回研究コンクールの研究助成を受けて実施した(1988年4月から1990年10月)。

- 4) この研究組織の代表者は村岡武司(地元函館のまちづくり市民グループ・元町倶楽部の代表)、共同研究者として太田誠一、米田哲平、河内昌子、青柳憲次、加藤寛治、樫木博史、岡田梯輔、清水憲朔、小野政司、白鳥節子、犬石道正、渡辺譲治、陳有崎、鈴木一博、上貞幸丕、永田史明、山本真也(以上、元町倶楽部のメンバー)、麓和善(財団法人文化財建造物保存技術協会)、柳田良造(柳田石塚建築計画事務所)、石塚雅明(同)、松下重雄(北海道大学建築工学科住居地計画学講座大学院生)、本間俊弘(同学生)、巽裕樹(同学生)、筆者で、総勢25名(カッコ内の所属はいずれも当時のもの)。また、この共同研究は、「港町・函館における色彩文化の研究」をテーマにおこなわれたものである。元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩文化の研究ー下見板のペンキ色彩の復元的考察を通してー』(トヨタ財団助成研究報告書、C-020、1991年12月)を参照。

No.	建物名称	所在地 (町名)	建築年	現用途	ヒアリン グの有無
1	小森商店	弁天町	1901(明治34)年	店舗	有
2	西浜旅館	〃	1907(明治40)年	宿泊施設	有
3	浜岡家住宅	〃	1907(明治40)年	住宅	有
4	中山商店	〃	1907(明治40)年	店舗	有
5	山崎商店	〃	1908(明治41)年	店舗	有
6	佐々木自転車店	〃	1908(明治41)年	店舗	有
7	宮坂金商株式会社	〃	1909(明治42)年	事務所	一
8	柳栄堂	〃	1909(明治42)年	店舗	有
9	野口梅吉商店	〃	1913(大正2)年	事務所	有
10	民宿共真	〃	1914(大正3)年	宿泊施設	有
11	函館ドック生産協力会	〃	1914(大正3)年	事務所	一
12	太刀川家住宅・洋館	〃	1915(大正4)年	住宅	有
13	和島家住宅	〃	1915(大正4)年頃	住宅	一
14	伴田商店所有建物	〃	1916(大正5)年頃	店舗	有
15	千代盛商会	〃	1918(大正7)年	店舗	有
16	星野水産株式会社	〃	1926(昭和1)年	事務所	一
17	奥谷畳店	〃	1927(昭和2)年	店舗	有
18	星野家住宅	〃	1928(昭和3)年	住宅	有
19	小野家住宅	〃	1930(昭和5)年	住宅	有
20	山崎商店	大町	1907(明治40)年	店舗	有
21	橋谷家住宅	〃	1907(明治40)年	住宅	一
22	三洋無線電機商会	〃	1907(明治40)年	事務所	有
23	PEACEFUL PLACE	〃	1907(明治40)年	店舗	有
24	カミムラスボーツ	〃	1907(明治40)年	店舗	有
25	村中船具店	〃	1909(明治42)年	店舗	有
26	うめた理容院	〃	1909(明治42)年	店舗	一
27	木島家住宅	〃	1909(明治42)年	住宅	有
28	長谷川理容院	〃	1909(明治42)年	店舗	有
29	植木家住宅	〃	1909(明治42)年	住宅	有*
30	大町郵便局	〃	1911(明治44)年	郵便局	有*
31	三上家住宅	〃	1912(大正1)年	住宅	有
32	向井家住宅	〃	1913(大正2)年	住宅	有
33	加藤家住宅	〃	1913(大正2)年	住宅	有
34	清田商店	〃	1913(大正2)年	店舗	有
35	久保田家所有建物	〃	1914(大正3)年	住宅	有
36	函館精工通信工業所	〃	1914(大正3)年	事務所	有
37	相馬株式会社	〃	1914(大正3)年	事務所	有
38	照井家住宅	〃	1915(大正4)年	住宅	有
39	斎藤家住宅	〃	1918(大正7)年	住宅	有
40	岡部家住宅	〃	1919(大正8)年	住宅	一
41	白翁堂医院	〃	1924(大正13)年	医院	一
42	外城商店	〃	1930(昭和5)年	店舗	有
43	田中家住宅	〃	1932(昭和7)年	住宅	有
44	藤田家住宅	〃	1947(昭和22)年	住宅	有
45	たんぼぼ	〃	1969(昭和44)年	店舗	一
46	中村呉服店	末広町	1907(明治40)年	店舗	有
47	平和石油事務所	〃	1907(明治40)年	事務所	有
48	川越電化センター	〃	1907(明治40)年	店舗	有
49	今井家住宅	〃	1908(明治41)年	住宅	一
50	守屋家住宅	〃	1909(明治42)年	住宅	一
51	市水商会	〃	1909(明治42)年	事務所	一
52	ペンション古稀庵	〃	1909(明治42)年	宿泊施設	有
53	藤井家住宅	〃	1909(明治42)年	住宅	一
54	本間合名会社	〃	1909(明治42)年	事務所	有
55	北村船具店倉庫	〃	1910(明治43)年	店舗	有
56	忠さん食堂	〃	1914(大正3)年	店舗	有*
57	深谷米穀店	〃	1917(大正6)年	店舗	有
58	ラッキービエロ	〃	1946(昭和21)年	店舗	有
59	エンパイアクリーニング	〃	1946(昭和21)年	店舗	有
60	興和商事車庫	〃	1952(昭和27)年	事務所	有
61	遺愛幼稚園	元町	1913(大正2)年	教育施設	有
62	日和館	〃	1921(大正10)年	店舗	有
63	金子家住宅	〃	1921(大正10)年	住宅	有
64	大野家住宅	〃	1921(大正10)年	住宅	一
65	大野アパート	〃	1921(大正10)年	住宅(共同住宅)	一
66	葛西家住宅	〃	1921(大正10)年	住宅	有*
67	函館文化服装学院	〃	1921(大正10)年	教育施設	有
68	佐藤理容院	〃	1921(大正10)年	店舗	有
69	藤山家住宅	〃	1921(大正10)年	住宅	一
70	高橋病院天使寮	〃	1928(昭和3)年	住宅(寮)	一
71	たこ焼き店	〃	1931(昭和6)年	店舗	一
72	新緑湯	〃	1931(昭和6)年	店舗	有
73	函館元町港ヶ丘教会	〃	1934(昭和9)年	結婚式場	有
74	山内家住宅	船見町	1922(大正11)年	住宅	有
75	おぐら理容院	弥生町	1907(明治40)年	店舗	有*
76	たこやきみっちゃん	〃	1907(明治40)年	店舗	有*
77	菅原家住宅	〃	1907(明治40)年	住宅	有
78	洪田家住宅	〃	1909(明治42)年	住宅	有
79	高田木材店	〃	1917(大正6)年	店舗	有
80	桐田家住宅	〃	1921(大正10)年	住宅	有
81	岩崎家住宅店舗	〃	1924(大正13)年頃	店舗	有
82	大正湯	〃	1928(昭和3)年	店舗	有
83	遺愛女学校本館	西部地区外	1908(明治41)年	教育施設	有
84	遺愛女学校教師館	〃	1908(明治41)年	教育施設	有
85	北海道教育大学函館	〃	1914(大正3)年	教育施設	有

ヒアリングの有無の欄の「有」は1990年6月～9月にかけて、建物所有者に対して時層色環の写真と時層色環から得られたペンキ各層の色彩を、色見本を用いて古い方から新しい方へと順番に並べたものを見せておこなったヒアリングの有効回答建物（58棟）であり、「有*」はこすり出し調査時における建物所有者へのヒアリングの有効回答建物（6棟）である。一の欄はヒアリングの回答の得られなかった建物である。

表 3－1
調査対象建物 85 棟の一覧
－函館市西部地区 82 棟と
西部地区外 3 棟



黒丸・白抜き数字が調査対象建物82棟（No.1～82）を示す。太線で囲まれた区域が調査対象の歴史的景観地域、細線で囲まれた区域は元町末広町伝統的建造物群保存地区、破線は町界を示す。

図 3－1 調査対象の函館市西部地区歴史的景観地域と建物 82 棟の分布状況

表 3－2 西部地区の調査対象建物 82 棟の概要

所在地（棟数）

弁天町	大 町	末広町	元 町	船見町	弥生町	合計
19	26	15	13	1	8	74

建築年代（棟数）

明治時代	大正時代	昭和戦前	昭和戦後	合計
33	33	11	5	82

建物用途（棟数）

住宅	店舗等の 商業施設	学校等の 教育施設	郵便局	医院	合計
30	48	2	1	1	82

3-2-3 文献・史料の収集調査

大火のあった1907（明治40）年以前については、遺構がNo.1.小森商店（1901（明治34）年）の1棟しかないため、文献、史料にもとづいて分析せざるをえない。明治初期の町並み色彩については、文献『北海道における初期洋風建築の研究』⁵⁾を参考にした。明治中期については、その頃の対象地区の町並みを撮影した「横浜写真」と呼ばれる彩色写真を2002年に新たに発掘したので、その史料を中心に分析をおこなった。

5) 越野武 著『北海道における初期洋風建築の研究』、北海道大学図書刊行会、1993年2月25日。

時層色環の分析からとらえることのできる、大火後の1907（明治40）年から1989年までについては、①1922（大正11）年発行の文献『函館市制実施記念寫真帖』⁶⁾に掲載されている建物の写真のうち調査対象に該当するものについては、白黒写真ではあるが、外壁と窓枠・柱型等ではあきらかに濃淡が異なるものは1922（大正11）年当時ペンキが塗装されており、その15年前にあたる1907（明治40）年にも塗装されていたと判断した、②建物の改築やペンキの塗り替えの時期、内容を記録した「保全台帳」等の文書を収集し、③1977年の北海道大学足達研究室による西部地区町並み調査記録写真を収集し、ペンキ層の塗装年の特定・推定の資料とした。

6) 圓山貞吉 著『函館市制実施記念寫真帖』、1922年12月15日。

3-2-4 82棟の追跡調査一時層色環以後の1989年以降2001年までの町並み色彩について

時層色環の調査をおこなった1989年以降については、2001年11月に西部地区の対象建物82棟すべてについて現地踏査し、ペンキ色彩の状況の記録調査、現況の写真撮影をおこない、その結果をそれ以前と比較分析した。

3-3 建物ごとの時層色環の分析

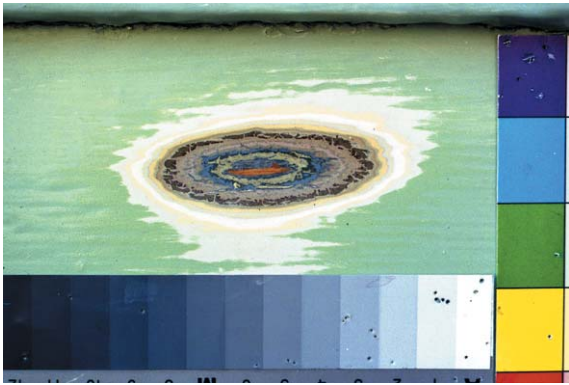
時層色環の調査結果から、82棟の建物ごとの各部位のペンキ層の数と色、その塗り始めから調査時点までの塗装順序がわかった。その概要を表3-3に示す。外壁下見板では、ペンキ層数5層以下が33棟(42%)、6～10層が30棟(38%)、11～15層が13棟(17%)、16層以上が2棟(3%)、最多21層、平均6.7層、中位値6層であった。外壁以外の部位では、窓枠が最多20層、平均8.2層、中位値7および8層、柱型が最多18層、平均7.6層、中位値7層であった。典型的な時層色環の事例として、各部位においてペンキ層数が最も多かったもの、すなわち外壁21層、窓枠20層、柱型18層、

表3-3

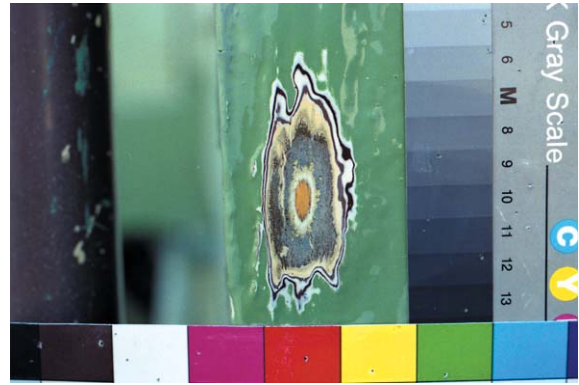
函館市西部地区における下見板
張り洋風建物のペンキこすり出
し調査結果の概要

No.	建物名称	建築年	外壁の ペンキ 層数	外壁以外の部位のペンキ層数					
				窓枠	柱	胴蛇腹	軒蛇腹	軒持 送り	軒飾り パネル
1	小森商店	1901(明治34)年	8	8	8	9	—	—	—
2	西浜旅館	1907(明治40)年	11	13	12	14	—	—	—
3	浜岡家住宅	1907(明治40)年	6	—	4	5	—	—	—
4	中山商店	1907(明治40)年	6	4	—	3	—	—	—
5	山崎商店	1908(明治41)年	5	—	7	—	7	—	—
6	佐々木自転車店	1908(明治41)年	3	—	6	—	—	—	—
7	宮坂金商株式会社	1909(明治42)年	13	12	11	—	—	—	—
8	柳栄堂	1909(明治42)年	2	—	3	—	—	—	—
9	野口梅吉商店	1913(大正2)年	7	—	—	—	—	—	—
10	民宿共真	1914(大正3)年	9	14	—	—	—	—	—
11	函館ドック生産協力会	1914(大正3)年	6	6	5	5	—	—	—
12	太刀川家住宅・洋館	1915(大正4)年	11	9	—	—	—	—	—
13	和島家住宅	1915(大正4)年頃	4	5	5	—	—	—	—
14	伴田商店所有建物	1916(大正5)年頃	21	17	18	—	—	—	—
15	千代盛商会	1918(大正7)年	1	17	12	18	—	—	—
16	星野水産株式会社	1926(昭和1)年	2	—	—	2	—	—	—
17	奥谷畳店	1927(昭和2)年	9	—	5	9	—	—	—
18	星野家住宅	1928(昭和3)年	—	—	2	5	—	—	—
19	小野家住宅	1930(昭和5)年	7	—	6	—	—	—	—
20	山崎商店	1907(明治40)年	12	—	16	—	14	—	—
21	橋谷家住宅	1907(明治40)年	2	—	4	—	—	—	—
22	三洋無線電機商会	1907(明治40)年	4	—	6	—	—	—	—
23	PEACEFUL PLACE	1907(明治40)年	6	7	—	—	—	4	5
24	カミムラススポーツ	1907(明治40)年	5	—	10	—	—	—	—
25	村中船具店	1909(明治42)年	3	—	15	8	—	—	—
26	うめた理容院	1909(明治42)年	3	—	—	—	—	8	8
27	木島家住宅	1909(明治42)年	14	—	10	—	—	—	16
28	長谷川理容院	1909(明治42)年	4	9	5	—	—	—	—
29	植木家住宅	1909(明治42)年	6	6	12	11	—	—	—
30	大町郵便局	1911(明治44)年	14	13	13	13	—	—	—
31	三上家住宅	1912(大正1)年	1	—	—	—	—	—	—
32	向井家住宅	1913(大正2)年	12	—	9	—	—	—	—
33	加藤家住宅	1913(大正2)年	14	7	10	—	—	—	—
34	清田商店	1913(大正2)年	9	4	9	—	11	—	—
35	久保田家所有建物	1914(大正3)年	5	7	10	5	—	—	—
36	函館神工通信工業所	1914(大正3)年	11	—	13	—	12	—	—
37	相馬株式会社	1914(大正3)年	14	14	14	—	14	14	14
38	照井家住宅	1915(大正4)年	6	6	12	—	—	—	—
39	斎藤家住宅	1918(大正7)年	4	—	4	—	8	—	—
40	岡部家住宅	1919(大正8)年	4	3	1	3	—	—	—
41	白翁堂医院	1924(大正13)年	10	10	10	—	—	—	—
42	外城商店	1930(昭和5)年	4	—	—	—	—	—	—
43	田中家住宅	1932(昭和7)年	8	7	3	—	—	—	—
44	藤田家住宅	1947(昭和22)年	6	—	7	6	—	—	—
45	たんぼぼ	1969(昭和44)年	2	—	—	—	—	—	5
46	中村呉服店	1907(明治40)年	12	10	14	11	—	—	—
47	平和石油事務所	1907(明治40)年	7	—	9	2	—	—	—
48	川越電化センター	1907(明治40)年	4	8	4	8	—	—	—
49	今井家住宅	1908(明治41)年	3	12	3	—	—	—	—
50	守屋家住宅	1909(明治42)年	7	—	—	7	—	—	—
51	市水商会	1909(明治42)年	6	—	—	7	—	7	7
52	ペンション古稀庵	1909(明治42)年	7	6	7	6	—	—	—
53	藤井家住宅	1909(明治42)年	8	8	—	—	—	—	—
54	本間合名会社	1909(明治42)年	5	—	7	—	—	—	—
55	北村船具店倉庫	1910(明治43)年	18	20	18	—	—	—	—
56	忠さん食堂	1914(大正3)年	10	9	12	9	—	—	12
57	深谷米穀店	1917(大正6)年	10	10	8	8	—	—	—
58	ラッキービエロ	1946(昭和21)年	2	—	3	—	—	—	—
59	エンバイアクリーニング	1946(昭和21)年	3	—	5	—	—	—	—
60	興和商事車庫	1952(昭和27)年	2	3	4	3	—	—	4
61	遺愛幼稚園	1913(大正2)年	12	10	10	—	—	—	—
62	日和館	1921(大正10)年	7	5	7	—	—	—	—
63	金子家住宅	1921(大正10)年	6	—	7	—	—	10	6
64	大野家住宅	1921(大正10)年	—	3	—	—	—	5	11
65	大野アパート	1921(大正10)年	—	—	3	—	3	3	—
66	葛西家住宅	1921(大正10)年	6	5	5	—	—	—	—
67	函館文化服装学院	1921(大正10)年	10	—	—	—	—	—	—
68	佐藤理容院	1921(大正10)年	1	6	8	—	—	9	9
69	藤山家住宅	1921(大正10)年	5	—	—	—	—	—	—
70	高橋病院天使寮	1928(昭和3)年	3	—	—	—	—	9	—
71	たこ焼き店	1931(昭和6)年	7	—	8	7	—	—	15
72	新緑湯	1931(昭和6)年	6	—	—	—	—	—	—
73	函館元町港ヶ丘教会	1934(昭和9)年	12	9	—	—	—	—	—
74	山内家住宅	1922(大正11)年	9	9	—	9	—	—	—
75	おぐら理容院	1907(明治40)年	1	1	1	—	—	—	—
76	たこやきみっちゃん	1907(明治40)年	4	4	4	—	—	—	—
77	菅原家住宅	1907(明治40)年	6	—	7	—	—	—	—
78	洪田家住宅	1909(明治42)年	3	—	4	—	—	—	—
79	高田木材店	1917(大正6)年	1	—	3	—	—	—	—
80	桐田家住宅	1921(大正10)年	4	—	—	—	—	—	—
81	岩崎家住宅店舗	1924(大正13)年頃	—	4	4	—	—	—	—
82	大正湯	1928(昭和3)年	5	5	1	1	—	—	—
以下は、西部地区外		最大層数	21	20	18	18	14	14	16
		平均層数	6.7	8.2	7.6	7.2	9.9	7.7	9.3
		中位値	6	7と8	7	7	11	8	8と9
83	遺愛女学校本館	1908(明治41)年	19	—	19	—	—	—	—
84	遺愛女学校教師館	1908(明治41)年	15	—	16	—	—	—	—
85	北海道教育大学函館 分校北方教育資料館	1914(大正3)年	12	—	15	—	—	—	—

網かけは、西部地区の建物において、外壁、それ以外の各部位のペンキ層数で最も多いものを示す。



外壁ペンキ層数最多 21 層の時層色環



柱型ペンキ層数最多 18 層の時層色環



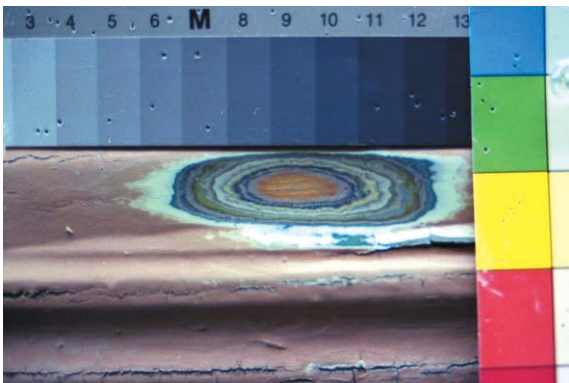
建物の外観

写真 3-3
外壁および柱型ペンキ層数最多の時層色環の事例
— No. 14. 伴田商店所有建物 (1916 (大正 5) 年頃)

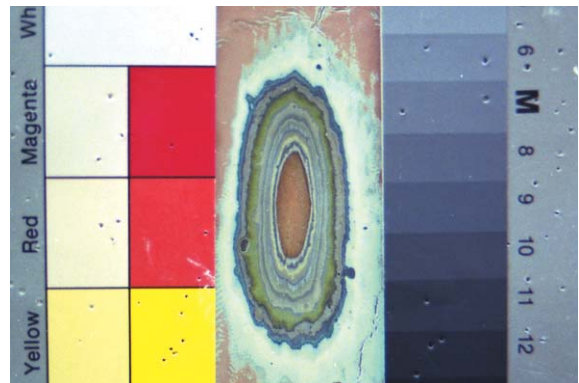
写真 3-4
窓枠および柱型ペンキ層数最多の時層色環の事例
— No. 55. 北村船具店倉庫 (1910 (明治 43) 年)



建物の外観 - 正面はモルタル塗りに改修されているが、両側面に下見板他の木部が残っている



窓枠ペンキ層数最多 20 層の時層色環



柱型ペンキ層数最多 18 層の時層色環

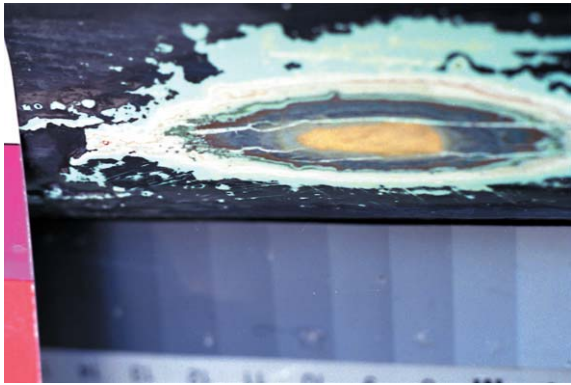


写真3-5 胴蛇腹ペンキ層数最多の時層色環の事例ー No. 15. 千代盛商会 (1918(大正7)年)
左: 胴蛇腹ペンキ層数最多18層の時層色環、右: 建物の外観

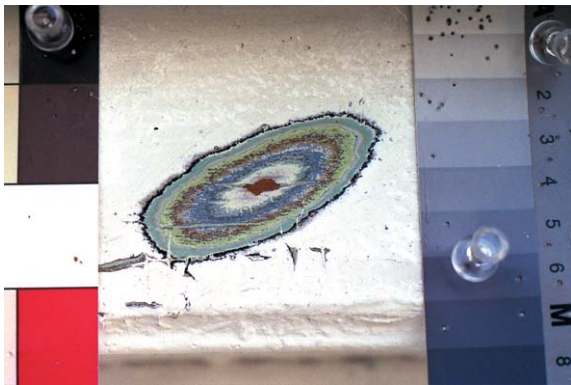


写真3-6 軒蛇腹ペンキ層数最多の時層色環の事例ー No. 20. 山崎商店 (1907(明治40)年)
左: 軒蛇腹ペンキ層数最多14層の時層色環、右: 建物の外観



写真3-7 軒持送りペンキ層数最多の時層色環の事例ー No. 37. 相馬株式会社 (1914(大正3)年)
左: 軒持送りペンキ層数最多14層の時層色環、右: 建物の外観



写真3-8 軒飾りパネルペンキ層数最多の時層色環の事例ー No. 27. 木島家住宅 (1909(明治42)年)
左: 軒飾りパネルペンキ層数最多16層の時層色環、右: 建物の外観ー左側面に下見板等

表3-4 西部地区の82棟の時層色環の分析

- 外壁ペンキ層の最新塗装年、塗り始め年、塗装間隔の特定・推定および現在の状況

建物 No.	建物名称	所在地	建築年	外壁の 上塗り ペンキ 層数 ¹⁾ (層)	ペンキ層の塗装年の特定・推定				平均塗 装間隔 ⁶⁾ 年 ^(年)	現在の状況 ⁷⁾	
					最新 塗装年 ²⁾ (年)	特定できた 他層の塗装年 ³⁾ (年)	特定できたペン キ層間の塗 装間隔年 ⁴⁾ (年)	塗り始め年 (第1層の 塗装年) ⁵⁾ (年)			
30	大町郵便局	大町	1911(明治44)年	13	◎1987	◎1981,◎53.47.39	6.8	▲創建時1911	5.33	×取り壊し、マンション	
82	大正湯	弥生町	1928(昭和3)年	5	◎1988	◎1980,◎73.◎57	7.8.15	▲創建時1928	12.00	景観形成指定建築物・塗り替え	
47	平和石油事務所	末広町	1907(明治40)年	7	○1980	1960頃	(10)	◎創建時1907	10.17	塗り替え	
54	本間合名会社	末広町	1909(明治42)年	5	○1979	1950	(14.5)	◎創建時1909	14.50	△改築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
12	太刀川家住宅・洋館	弁天町	1915(大正4)年	11	○1981			◎創建時1915	5.40	景観形成指定建築物・変化したなし	
15	千代盛商会	弁天町	1918(大正7)年	1(15)	○1988	1978.65.55.50.42	5.8,10.13	◎創建時1918	(4.14)	×取り壊し、駐車場	
46	中村呉服店	末広町	1907(明治40)年	12	○1983	1955.23		○創建時1907	5.82	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
37	相馬株式会社	大町	1914(大正3)年	12	○1988	1983.78.73.68.63.58	5	○創建時1913	5.73	伝統的建築物・塗り替え	
14	伴田商店所有建物	弁天町	1916(大正5)年頃	18	○1983			○創建時1916	3.24	景観形成指定建築物・塗り替え	
4	中山商店	弁天町	1907(明治40)年	5	○1975			○1931頃	8.00	×取り壊し、駐車場	
43	田中家住宅	大町	1932(昭和7)年	5	○1974	1962	(6)	○戦後1951	5.75	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
44	藤田家住宅	大町	1947(昭和22)年	5	○1975	1965	10	○戦後1951	6.00	塗り替え	
42	外城商店	大町	1930(昭和5)年	3	○1962			○戦後1952	5.00	△改築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
19	小野家住宅	弁天町	1930(昭和5)年	7	○1987	1977	10	○戦後1952	5.83	△改築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
3	浜岡家住宅	弁天町	1907(明治40)年	6	○1985	1979.72.66.59	6.7	○戦後1953	6.40	塗り替え	
63	金子家住宅	元町	1921(大正10)年	3(7)	○1987	1982.77	5	○戦後1960	(4.50)	伝統的建築物・塗り替え	
79	高田木材店	弥生町	1917(大正6)年	1(2)	○1971			○戦後1965	(6.00)	(変化なし)	
78	浜田家住宅	弥生町	1909(明治42)年	3	○1975			○戦後1965	5.00	市民ホﾗﾝﾃﾞｰによる塗り替え	
76	たこやきみつちゃん	弥生町	1907(明治40)年	3	○1974			△戦後1965	7.00	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
6	佐々木自転車店	弁天町	1908(明治41)年	3	○1974頃			△戦後1960	7.00	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
8	柳栄堂	弁天町	1909(明治42)年	2(3)	○1980			△戦後1960	(10.00)	△改築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
59	エンパイアクリーニング	末広町	1946(昭和21)年	3(5)	○1982	1970	(6)	△戦後1960	(5.50)	(変化なし)	
18	星野家住宅	弁天町	1928(昭和3)年	0(5)	○1984			△戦後1960	(6.00)	△改築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
52	ペンション古稀庵	末広町	1909(明治42)年	4	○1984	1974	10	△戦後1960	8.00	伝統的建築物・塗り替え	
22	三洋無線電機商会	大町	1907(明治40)年	4	○1985	1975	(5)	△戦後1960	8.33	市民ホﾗﾝﾃﾞｰによる塗り替え	
62	日和館	元町	1921(大正10)年	6	○1985			△戦後1960	5.00	伝統的建築物・塗り替え	
23	PEACEFUL PLACE	大町	1907(明治40)年	5	○1986	1974頃	12	△戦後1960	6.50	市民ホﾗﾝﾃﾞｰによる塗り替え	
66	葛西家住宅	元町	1921(大正10)年	3	○1988			△戦後1960	14.00	伝統的建築物・塗り替え	
80	桐田家住宅	弥生町	1921(大正10)年	2	○1970			△戦後1965	5.00	×取り壊し、空地	
81	岩崎家住宅店舗	弥生町	1924(大正13)年頃	1(3)	○1975			△戦後1965	(5.00)	景観形成指定建築物・塗り替え	
1	小森商店	弁天町	1901(明治34)年	8	○1938頃			▲創建時1901	5.29	景観形成指定建築物・塗り替え	
24	カミラススポーツ	大町	1907(明治40)年	5(10)	○1975	1961	14	▲創建時1907	(6.22)	△改築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
48	川越電化センター	末広町	1907(明治40)年	4(8)	○1984			▲創建時1907	(9.29)	伝統的建築物・塗り替え	
20	山崎商店	大町	1907(明治40)年	11	○1989	1986	3	▲創建時1907	7.00	×取り壊し、駐車場	
29	植木家住宅	大町	1909(明治42)年	6(12)	○1979			▲創建時1909	(5.27)	伝統的建築物・塗り替え	
28	長谷川理容院	大町	1909(明治42)年	4(9)	○1980			▲創建時1909	(7.38)	市民ホﾗﾝﾃﾞｰによる塗り替え	
27	木島家住宅	大町	1909(明治42)年	14	○1984			▲創建時1909	4.85	△改築(ｷｬﾝ)	
25	村中船具店	大町	1909(明治42)年	3(14)	○1988			▲創建時1909	(5.15)	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
55	北村船具店倉庫	末広町	1910(明治43)年	18	○1946	1938	(4)	▲創建時1910	1.41	×取り壊し、駐車場	
9	野口梅吉商店	弁天町	1913(大正2)年	7	○1977頃			▲創建時1913	8.67	塗り替え	
33	加藤家住宅	大町	1913(大正2)年	13	○1980	1965	15	▲創建時1913	4.58	市民ホﾗﾝﾃﾞｰによる塗り替え	
34	清田商店	大町	1913(大正2)年	8	○1985	1979.73.67.31	6	▲創建時1913	8.57	△改築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
32	向井家住宅	大町	1913(大正2)年	9	○1985			▲創建時1913	7.50	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
61	遠愛幼稚園	元町	1913(大正2)年	9	○1986			▲創建時1913	7.63	伝統的建築物・塗り替え	
36	函館神工通信工業所	大町	1914(大正3)年	11	○1983	1975	8	▲創建時1914	5.70	×取り壊し、駐車場	
35	久保田家所有建物	大町	1914(大正3)年	4(9)	○1985	1980.75.70	5	▲創建時1914	(7.38)	(変化なし)	
10	民信共興	弁天町	1914(大正3)年	8(13)	○1987	1980	7	▲創建時1914	(5.08)	塗り替え	
56	忠さん食堂	末広町	1914(大正3)年	9	○1987			▲創建時1914	7.63	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
38	熊井家住宅	大町	1915(大正4)年	5(12)	○1985			▲創建時1915	(5.27)	×取り壊し、駐車場	
57	深谷米穀店	末広町	1917(大正6)年	8	○1988			▲創建時1917	8.43	伝統的建築物・塗り替え	
39	斎藤家住宅	大町	1918(大正7)年	3(8)	○1980	1963	(8.5)	▲創建時1918	(7.14)	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
68	佐藤理容院	元町	1921(大正10)年	0(8)	○1970			▲創建時1921	(5.29)	伝統的建築物・塗り替え	
74	山内家住宅	船見町	1922(大正11)年	8	○1984			▲創建時1922	7.14	景観形成指定建築物・塗り替え	
17	奥谷畳店	弁天町	1927(昭和2)年	8	○1987	1979.71.63	8	▲創建時1927	6.86	(変化なし)	
72	新緑湯	元町	1931(昭和6)年	5	○1978			▲創建時1931	8.75	×取り壊し、駐車場	
73	函館元町港ヶ丘教会	大町	1934(昭和9)年	9	○1988	1980.74頃	6,(4)	▲創建時1934	5.25	景観形成指定建築物・塗り替え	
31	上家住宅	大町	1912(大正1)年	1	○1980			×不明	-	×取り壊し、マンション	
最新塗装年を特定できた57層の平均： 6.2(7.8) (中央値は1983)										8.03 (中央値は7)	6.93(6.69)
75	おぐら理容院	弥生町	1907(明治40)年	1	△1974頃			○1974頃	-	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
65	大野アパート	元町	1921(大正10)年	0(3)	△1974頃			△戦後1960	(7.00)	伝統的建築物(改築(サｲﾅﾝｸﾞ))	
26	うめた理容院	大町	1909(明治42)年	2(7)	△1974頃			▲創建時1909	(8.83)	×新築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
64	大野家住宅	元町	1921(大正10)年	0(10)	△1974頃			▲創建時1921	(4.56)	伝統的建築物(改築(サｲﾅﾝｸﾞ))	
71	たこ焼き店	元町	1931(昭和6)年	6(14)	△1974頃			▲創建時1931	(2.38)	×取り壊し、駐車場	
7	宮坂金商株式会社	弁天町	1909(明治42)年	12	▲1983			◎創建時1909	5.64	×取り壊し、マンション	
67	函館文化服装学院	元町	1921(大正10)年	7	▲1983			◎戦前1938	5.50	×取り壊し、マンション	
60	興和商事車庫	末広町	1952(昭和27)年	2(4)	▲1983			◎創建時1952	(10.33)	×取り壊し、駐車場	
77	藤原家住宅	弥生町	1907(明治40)年	4	▲1983			○戦後1965	6.00	(変化なし)	
21	橋谷家住宅	大町	1907(明治40)年	2(3)	▲1983			△戦後1960	(11.50)	(変化なし)	
13	和島家住宅	弁天町	1915(大正4)年頃	4	▲1983			△戦後1960	7.67	景観形成指定建築物・塗り替え	
40	岡部家住宅	大町	1919(大正8)年	5	▲1983			△戦後1960	5.75	(変化なし)	
69	藤山家住宅	元町	1921(大正10)年	3	▲1983			△戦後1960	11.50	伝統的建築物・塗り替え	
70	高橋病院天使寮	元町	1928(昭和3)年	3	▲1983			△戦後1960	11.50	伝統的建築物・塗り替え	
58	ラッキービエロ	末広町	1946(昭和21)年	2	▲1983			△戦後1965	18.00	△改築(ｷｬﾝ)	
2	西浜旅館	弁天町	1907(明治40)年	11	▲1983			▲創建時1907	6.40	景観形成指定建築物・塗り替え	
5	山崎商店	弁天町	1908(明治41)年	5(7)	▲1983	1963		▲創建時1908	(10.50)	×取り壊し、駐車場	
49	今井家住宅	末広町	1908(明治41)年	2(11)	▲1983			▲創建時1908	(6.30)	伝統的建築物・塗り替え	
53	藤井家住宅	末広町	1909(明治42)年	7	▲1983			▲創建時1909	10.33	×取り壊し、マンション	
50	守屋家住宅	末広町	1909(明治42)年	6	▲1983			▲創建時1909	12.40	塗り替え	
51	市水商会	末広町	1909(明治42)年	6	▲1983			▲創建時1909	12.40	伝統的建築物・塗り替え	
11	函館ドック生産協力会	弁天町	1914(大正3)年	6	▲1983			▲創建時1914	11.40	(変化なし)	
41	白鷺堂医院	大町	1924(大正13)年	9	▲1983			▲創建時1924	5.88	×取り壊し、駐車場	
45	たんぽぽ	大町	1969(昭和44)年	1(4)	▲1983			▲創建時1969	(4.67)	×取り壊し、駐車場	
16	星野水産株式会社	弁天町	1926(昭和1)年	2	×不明			×不明	-	△改築(サｲﾅﾝｸﾞ)	
全82棟の平均： 5.7(7.3)										7.56(7.23)	
塗り始め年が戦前の平均： 7.5(9.8)										7.44(7.05)	
塗り始め年が戦後の平均： 3.2(3.9)										7.76(7.52)	

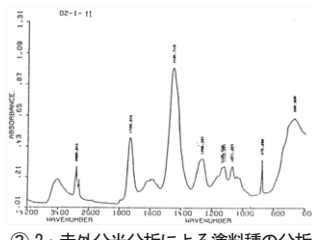
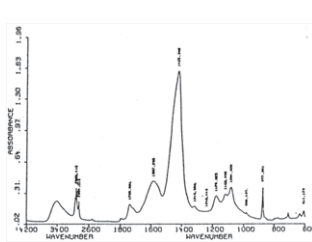
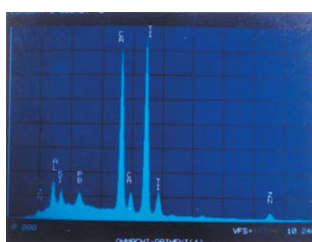
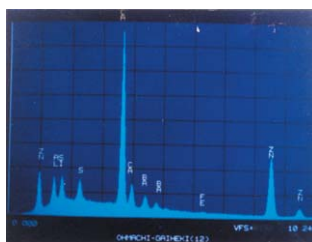
- 1) 白色の下塗り層を除いた上塗りの層数で、カッコ内の数値は、外壁よりも多かった窓枠等の他の部位のペンキ層数を示す。これは、外壁の下見板を張り替えたことによる。平均値はまず外壁のものだけを示し、次のカッコ内は外壁よりも多かった他の部位の数値を用いている。
- 2) ◎は記録文書により特定、○は建物所有者ヒアリングにより特定、△は1977年の北海道大学足達研究室による町並み調査記録より推定、▽は1層のみで第1層と同年と推定、▲は特定できた57棟の中央値である1983年を採用。不明は、目視ではペンキが剥落してほとんど塗られていないような状態のものので分析不能とした。
- 3) ◎は記録文書により特定、△は建物所有者ヒアリングにより特定。
- 4) カッコ内の数値は、塗装年を特定できたペンキ層間にもう1層あるもので、それを含めて塗装間隔を均等割りした値を示す。
- 5) ◎は文獻、圓山貞吉 著『函館市制實施記念寫真帖』(1922年)により塗装の有無を確認し、特定、○は建物所有者ヒアリングにより特定、△はヒアリングとペンキ層5層 以下のものを戦後の1960年から、とくに弥生町のものは1965年からと推定、これら以外の△は創建時からと推定。
- 6) 塗り始めが戦前からのものについては、平均塗装間隔年＝(最新塗装年－塗り始め年)－戦中12年)／(ペンキ層－1)、戦後からのものについては、平均塗装間隔年＝(最新塗装年－塗り始め年)／(ペンキ層－1)とする。なお、ペンキ層は外壁のものを基本とするが、外壁よりも他の部位のほうがペンキ層数の多い場合にはそちらを用いることとし、カッコ内の数値で示している。平均値はまず外壁のものだけを示し、次のカッコ内は外壁よりも多かった他の部位の数値を用いている。
- 7) 2001年11月の追跡調査時点の状況を示している。なお、伝統的建造物および景観形成指定建築物とは、函館市都市景観条例に基づき、景観的に価値の高いものと認められ、指定されたもので、前者は伝統的建造物群保存地区内のもので後者はその地区外のものである。なお、この表の行における並べ方は、(1)2)の最新塗装年の特定・推定で◎により特定、○により特定、△により推定、▲により推定、不明の6つの順、②先の①の6つごとに、5)の塗り始め年の特定・推定で◎により特定、○により特定、△により推定、▲により推定、不明の6つの順で、かつ年代の古い順となっている。

胴蛇腹 18 層、軒蛇腹 14 層、軒持送り 14 層、軒飾りパネル 16 層のものを選り、その建物の外観とあわせて、写真 3-3 ～ 8 に示す。これらの時層色環をみると、すべての色を同じもので塗り替えている建物はなく、全体の印象として最近の新しい色は淡いものが、古い色は強く、濃い目のものが使われているようである。このように異なる色で塗り替えられていた建物は 77 棟 (94%) で、すべてのペンキ層が同じ色で塗装されていた建物は 5 棟 (6%) であった。

82 棟の建物ごとの外壁の時層色環について、第 2 章で記述した時層色環の分析手法である 1) 前提の整理、2) 最新塗装年の特定・推定、3) 塗装間隔年の特定、4) 塗り始め年の特定・推定、5) 各ペンキ層の年代推定、6) 建物ごとの色彩変容データ票の作成、をおこなった。これを 82 棟の建物すべてについてまとめたものが表 3-4 である。特定できたペンキ層間の塗装間隔年は最短で 3 年、最長で 15 年とばらつきがみられるものの、ほとんどが 5 ～ 10 年であった。また、ペンキ層の塗装年の推定によって得られた塗装間隔年の平均は 7 層前後であった。なお、No.16. 星野水産株式会社については、最新塗装年も塗り始め年も不明で、分析不能であるため、時層色環分析は 81 棟の建物についておこなうものとする。またこの表には、2001 年の追跡調査時点での現在の状況についても示してある。この表 3-4 にもとづき、建物ごとの色彩変容データ票の典型事例として、①ペンキ層の最新塗装年はもとより他層のいくつかも記録文書により特定でき、したがっていくつかのペンキ層間の塗装間隔年が特定でき、塗り始め年が創建時からと推定できるもの、②建物所有者ヒアリングより最新塗装年が特定でき、文献より塗り始め年が特定できるもの、③最新塗装年、塗り始め年ともに建物所有者ヒアリングより特定できるもの、④最新塗装年は建物所有者ヒアリングより特定でき、塗り始め年は戦後の 1965(昭和 40)年頃からと推定できるもの、の 4 つをとりあげる。

図 3-2 は、①ペンキ層の最新塗装年はもとより他層のいくつかも記録文書により特定でき、したがっていくつかのペンキ層間の塗装間隔年が特定でき、塗り始め年が創建時からと推定できる、No.30. 大町郵便局 (1911(明治 44)年)の色彩変容データ票である。1988 年の時層色環調査時点では外壁をピンク系、窓枠・柱型等を茶系の 2 色で塗り分けがされていた。時層色環調査の結果、外壁から 14 層、柱型から 13 層のペンキ層があらわれたが、かつての色は、これとは異なるものがほとんどであり、また全体が 1 色で、塗り分けをしないケースが多かった。大町郵便局の保全台帳の記

外壁の時層色環のペンキ層の色票		外壁および柱型ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定	柱型の時層色環のペンキ層の色票	
層目	色 票		層目	色 票
1		1911年：創建当初より塗装されていたと推定。	1	
2	白色	1918年頃：2～5層目の4つの色の年代は、1層目の1911年と6層目の1947年までの36年間の塗装間隔を均等割りして(7.2年)推定。	2	白色
3		1925年頃：とくに5層目の灰色は、黒河ふく氏(第3代局長・故黒川徳三郎夫人)の言「昭和20年の赴任時は灰色」より推定。	3	
4		1933年頃：1940年頃：1947年：黒河ふく氏の言「赴任して2年後の昭和22年には黄色」より特定。	4	
5		1953年：保全台帳の記録及び郵便局主任の言「昭和28年当時は緑色」より特定。	5	
6		1959年頃：8～11層目の4つの色の年代は、7層目の1953年と13層目の1981年までの28年間の塗装間隔を均等割りして(5.6年)推定。	6	
7		1964年頃：1970年頃：1975年頃：1981年：保全台帳の記録「昭和56年11月8日と昭和62年11月27日に塗り替え」及び現局長・西谷武司氏の言「昭和53年以降、同系色で2回塗り替え」より特定。	7	
8		1987年：同上。	8	
9			9	
10			10	白色
11			11	
12	白色(下塗り)		12	白色(下塗り)
13			13	
14			14	



▲上記4枚の図は、コンピューターグラフィックによる色彩シミュレーションをおこなったものである。

◀時層色環の化学分析の写真①、②-1、②-2、③-1、③-2の5枚は、日本ペイント㈱中央研究所分析グループ(1989年調査時の山田孝子氏をチーフとする)が所蔵している。

図3-2 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例1

：記録文書によりペンキ層の最新塗装年と他層のいくつかの塗装年、さらにはいくつかのペンキ層間の塗装間隔年が特定でき、塗り始め年が創建時からと推定できる事例
→ No. 30. 大町郵便局(1911(明治44)年)→

録によると、「昭和 56 年 11 月 8 日と昭和 62 年 11 月 27 日に塗り替え」とある。1988 年当時の局長・西谷武司へのヒアリングより「昭和 53 年以降、同系色で 2 回塗り替えた」という。したがって、外壁 13 層目のピンク系と柱型 13 層目の茶系の配色は 1981（昭和 56）年塗装と、また最新の外壁 14 層目は柱型 13 層目との配色で 1987（昭和 62）年塗装と特定した。この塗装間隔年は 6 年であった。なお、外壁、柱型とも 12 層目の白色は下塗りと推定した。さらに、保全台帳によると、昭和 28 年に「土台替、基礎布コンクリート、事務室床板及天井取替」、外壁下見板などの改修をおこなっていることと、郵便局主任へのヒアリングより「昭和 28 年当時は緑色」であったことから、外壁、柱型とも 7 層目の濃緑系は 1953（昭和 28）年塗装と特定した。また、第三代局長・故黒河徳三郎夫人の黒河ふくへのヒアリングより「赴任時の昭和 20 年は灰色、赴任して 2 年後の昭和 22 年には黄色」であったことから、外壁、柱型とも 6 層目の黄系は 1947（昭和 22）年塗装と特定した。この塗装間隔年も先と同様 6 年であった。第 1 層目は創建時の 1911（明治 44）年塗装と推定した。以上、塗装年を特定、推定できた 5 つのペンキ層以外の 2 層目から 5 層目と、8 層目から 11 層目については、その前後の特定、推定できた塗装年の間隔を、各 4 層あるペンキ層数で均等割りし、各塗装間隔年を 8.2 年、5.6 年として塗装年を推定した。これらは特定できた塗装間隔年の 6 年に近く、妥当性が高いと考えられる。

7) この化学分析の資料（5 枚の写真）はすべて日本ペイント㈱中央研究所分析グループ所蔵による。

8) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩文化の研究—下見板のペンキ色彩の復元的考察を通して—』（トヨタ財団助成研究報告書、C-020、1991 年 12 月）の pp65-72 を参照。

なお、参考として、日本ペイント㈱中央研究所分析グループ（山田孝子氏をチーフとし、1989 年 6 月にサンプリング調査、同年 10 月に分析結果報告がおこなわれた）による時層色環の化学分析の資料⁷⁾も示した。外壁の時層色環断面の顕微鏡写真（①）を見ると、14 層の色票と概ね合致している。また、X 線マイクロアナライザーによる元素分析（② -1、2）と赤外分光分析による塗料種の分析（③ -1、2）によると、「塗膜層の成分は大別して二つの種類に分けられる。古い塗膜層は、亜鉛華、白亜、バリタなどを使用した油性塗料で、ある年代から白色顔料としてチタン白を使用した合成樹脂塗料（アルキド樹脂塗料）となっている。大町郵便局でみると 10 層目当りから区別される。（チタン白の汎用度合からみて戦後数年から 10 層年を経た頃が境目となっているように推定される）」、「全体的にみて使用されている塗料は、その時代時代のごく普通の汎用的な種類のものであり、特別種類の違ったものは使用されていない。」⁸⁾ ことがあきらかにされており、色彩変容データ票において特定・推定をおこなったペンキ層の塗装年と

概ね合致しているといえる。

さらに、代表的な4つのペンキ層、1940（昭和15）年頃の5層目の灰系、1947（昭和22）年の6層目の黄系、1964（昭和39）年頃の9層目の薄緑系、1987（昭和62）年の外壁14層目のピンク系と柱型13層目の茶系、について、コンピューターグラフィックスによる色彩シミュレーションをおこなった。戦時中の暗い灰色から、戦後は一転して明るく、濃い目の黄土色へ、戦後まもなくの1960年代には淡いパステル調の薄緑色へ、1980年代後期には淡いピンク色と濃茶色というメリハリのきいた塗り分けへと、めまぐるしく色彩が変化してきたことがわかる。

なお、この大町郵便局の建物は、1988年4月1日施行の函館市西部地区歴史的景観条例、同年12月19日指定の元町末広町伝統

外壁の時層色環のペンキ層の色票		外壁および柱型ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定		柱型の時層色環のペンキ層の色票	
層目	色 票			層目	色 票
1	白色	1907年	圓山貞吉著『函館市制實施記念寫真帖』より、1922年頃は宮本回漕店とよばれ、窓枠や柱型などが濃い目の色で塗り分けられていたことを確認。創建当初より塗装されていたと特定。 2、3層目の2つの色の年代は、1層目の1907年と4層目の1938年までの31年間の塗装間隔を均等割りして（10.33年）推定。	1	白色
2		1917年頃		2	
3		1928年頃		3	
4	白色	1938年頃	戦時中のペンキ事情を考慮し、統制経済発令前の1938年頃と推定。	4	
5		1960年頃	所有者の言「昭和37年から平和石油事務所として使用を始めたが、その当時は緑であった」より、昭和37年以前の1960年頃と特定。	5	白色
6		1970年頃	この層の前後、5層目、7層目との塗装間隔を均等割りして推定。	6	
7		1980年頃	所有者の言「10年ほど前に塗装面が傷んできたのでクリーム色の塗装をした」より特定。		



外壁の時層色環（7層）



柱型の時層色環（6層）



建物外観



2001年の状況－建物所有者による自主的なペンキ塗り替え

図3-3 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例2
：建物所有者ヒアリングより最新塗装年が特定でき、
文献より塗り始め年が特定できる事例
－ No. 47. 平和石油事務所（1907（明治40）年）－

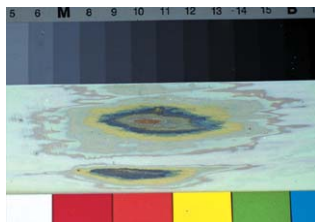
的建造物群保存地区にもとづく伝統的建造物として指定されていたにもかかわらず、約1年後の1989年12月、建物所有者により無許可で撤去された。跡地には高層マンションが建設されている。

図3-3は、②建物所有者ヒアリングより最新塗装年が特定でき、文献より塗り始め年が特定できる、No.47. 平和石油事務所(1907(明治40)年)の色彩変容データ票である。1989年の時層色環調査時点では外壁をクリーム系、窓枠・柱型等を肌色系の2色で塗り分けがされていた。時層色環調査の結果、外壁から7層、柱型から6層のペンキ層があらわれたが、かつての色は、これとは異なるものばかりであった。建物所有者へのヒアリングより、「10年ほど前に塗装面が傷んできたのでクリーム色の塗装をした」ことから、最新の外壁7層目のクリーム色は1980(昭和55)年頃塗装と特定した。また、「昭和37年から平和石油事務所とし使用を始めたが、その当時は緑であった」ことから、外壁5層目の薄緑系は1962(昭和37)年以前の1960(昭和35)年頃塗装と特定した。塗り始めの外壁1層目の白系については、文献『函館市制實施記念寫真帖』より、1922(大正11)年頃は宮本回漕店とよばれ、白黒写真ではあるが、外壁にくらべて窓枠や柱型などが濃い目の色で塗り分けられていたことが確認でき⁹⁾、その15年前の創建時1907(明治40)年にもペンキが塗装されていたと判断した。外壁4層目の白系については、戦時中のペンキ事情を考慮して、統制経済発令前の1938(昭和13)年頃と推定した。これら以外の2-3層目と6層目については、その前後の層との塗装間隔を均等割りし(10.33年と10年)、推定した。戦時中のペンキ未塗装の期間を除くと、ペンキ塗装の間隔はいずれも10年ほどであった。2001年の追跡調査時点では、建物所有者による自主的なペンキの塗り替えがおこなわれており、外壁を青系、柱型等を灰系、窓枠を黄系の3色の塗り分けがされており、同時に、1階部分を改造してほぼ全面ガラス張りとし、2階の看板を撤去するなど、景観への配慮がうかがえる。

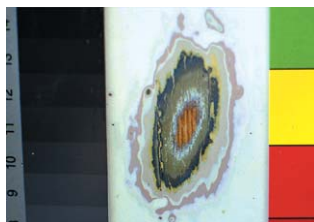
図3-4は、③最新塗装年、塗り始め年ともに建物所有者ヒアリングより特定できる、No.46. 中村呉服店(1907(明治40)年)の色彩変容データ票である。1989年の時層色環調査時点では外壁、柱型等ともに白系の1色であった。時層色環調査の結果、外壁から13層、柱型から14層のペンキ層があらわれ、最近の3層ほどはほぼ同じ色が使われているが、それ以前は異なり、とくに古い層では濃く、暗い色が多く見られる。建物所有者へのヒアリングより、「現在の塗装は6、7年前のもの」であることから、最新の外

9) 圓山貞吉 著『函館市制實施記念寫真帖』、1922年12月15日)。

外壁の時層色環のペンキ層の色票		外壁および柱型ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定		柱型の時層色環のペンキ層の色票	
層目	色 票			層目	色 票
1		1907年	所有者の言「明治40年に片岡洋服店として建てられ、大正8年から中村呉服店の所有となったが、その当時からペンキは塗られていた」より創建当初より塗装されていたと推定。 2～4層目の3つの色の年代は、1層目の1907年と5層目の1923年までの16年間の塗装間隔を均等割りして(4年)推定。	1	
2		1911年頃		2	白色
3		1915年頃		3	
4		1919年頃		4	
5		1923年	所有者の言「大正12年の大火により前面外壁のペンキ塗装が熱で膨れあがったために塗り替えた」より特定。	5	
6		1931年頃		6	
7	白色	1938年頃	戦時中のペンキ事情を考慮し、統制経済発令前の1938年頃と推定。	7	
8		1955年	所有者の言「昭和30年から営業を再開し、以来3、4回塗り替えた」より特定。	8	
9		1962年頃		9	
10		1969年頃	所有者の言「7、8年をめどに汚れてきたのをみはからって塗り替えている」と、8層目の1955年と12層目の1983年までの28年間の塗装間隔を均等割りして(7年)推定。	10	
11		1976年頃		11	
12	白色	1983年	所有者の言「現在の塗装は6、7年前のもの」より特定。	12	
				13	
				14	白色



外壁の時層色環（12層）



柱型の時層色環（14層）



建物外観



2001年の状況－建物取り壊し、建替新築（サイディング貼り）

図3-4 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例3
：建物所有者ヒアリングより最新塗装年、塗り始め年
ともに特定できる事例
－ No. 46. 中村呉服店（1907（明治40）年）－

壁 13 層目、柱型 14 層目の白系は 1983（昭和 58）年塗装と特定した。また、塗り始めの外壁 1 層目の灰系については、「明治 40 年に片岡洋服店として建てられ、大正 8 年から中村呉服店の所有となったが、その当時からペンキは塗られていた」ことから、1919（大正 8）年の 12 年前にあたる創建時 1907（明治 40）年にもペンキが塗装されていたと判断した。「昭和 30 年から営業を再開し、以来 3、4 回塗り替えた」より、外壁 8 層目のピンク系は 1955（昭和 30）年塗装と特定した。この前の外壁 7 層目の白系は戦前にあたり、統制経済発令前の 1938（昭和 13）年頃と推定した。外壁 9 層目のクリーム系、10-11 層目のピンク系は、その前後の層との塗装間隔を均等割りし（7 年）、推定した。さらに、「大正 12 年の大火により前面外壁のペンキ塗装が熱で膨れあがったために塗り替えた」より、外壁 5 層目の薄緑系は 1923（大正 12）年塗装と特定した。残る 2-4 層目の濃緑系、茶系、青系の 3 色は、その前後の層との塗装間隔を均等割りし（4 年）、推定した。2001 年の追跡調査時点



図 3－5 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例 4
：最新塗装年は建物所有者ヒアリングより特定でき、塗り始め年は戦後の 1960 年頃からと推定できる事例
－ No. 76. たこやきみっちゃん（1907（明治 40）年）－

では、建替、新築がされ、外壁はサイディング貼りへと変わった。

図 3-5 は、④最新塗装年は建物所有者ヒアリングより特定でき、塗り始め年は戦後の 1965（昭和 40）年頃からと推定できる、No.76. たこやきみっちゃん（1907（明治 40）年、弥生町）の色彩変容データ票である。1989 年の時層色環調査時点では外壁、柱型等ともにピンク系の 1 色であった。時層色環調査の結果、外壁、柱型ともに 4 層のペンキ層があらわれ、似通った色が使われている。建物所有者へのヒアリングより、「12 ～ 15 年ほど前に塗り替えた」より、最新の外壁 4 層目、柱型 4 層目のピンク系は 1974（昭和 49）年頃塗装と特定した。第 2 章において、塗り始め年の特定・推定の方法として、一般の住宅では戦前にはペンキが塗装されておらず、弥生町でペンキ層数 5 層以下のものは 1965（昭和 40）年頃からと推定する、としたが、これにより、塗り始めの外壁 1 層目の茶系は 1965（昭和 40）年頃塗装と推定した。2 層目の白系は下塗りと判断し、3 層目の肌色系は、その前後の層との塗装間隔を均等割りし（4.5 年）、推定した。2001 年の追跡調査時点では、先の中村呉服店と同様に建替、新築がされ、外壁はサイディング貼りへと変わった。

3-4 時層色環分析による各時代の町並み色彩

時層色環の分析によって得られた色彩変容データ票から、81 棟の建物ごとに、いつ、どのような色が塗られていたのかが把握できるようになった。そこから町並み色彩の変遷を分析するためには、時代区分を設定し、時代ごとに 81 棟全体の色の種類と数を把握することが必要となる。その手順は第 2 章に示したとおり、①おおむね 10 年ごとに、明治末期（1907-12）、大正期（1912-26）、昭和初期（1926-39）、戦中（1939-50）、1950 年代、1960 年代、1970 年代、1980 年代、1990 年代～現在の 9 期に分類する、②外壁の色を白系、灰系、濃緑系、薄緑系、青系、茶系、クリーム系、ピンク系、黄系、肌色系、ベージュ系、黒系、イカの油の 13 種類に分類する、③9 期の各時代の期間内で、色が確認できる建物すべてにおいて、外壁下見板にペンキが塗られた色を 13 種類の中から把握する。それを 81 棟の建物すべてについて一覧表にまとめたものが表 3-5 の 1 および 2 である。

この表で、時代区分ごとに 13 種類の色のペンキが塗られた回数をカウントする。それをまとめたものが表 3-6 である。これによると、明治末期から昭和初期にかけて白系が最も多い。明治末

表3-5の1 81棟の建物ごとの、9期の各時代の期間内で塗装された外壁ペンキの色
ーその1. 明治末期(1907年)から1950年代までー

81棟の各建物			時代区分(その1)と各ペンキ層の色の塗装年代				
No.	建物名称	建築年代	明治末期 1907-1912年	大正期 1912-1926年	昭和初期 1926-1939年	戦中 1939-1950年	1950年代
30	大町郵便局	1911(明治44)年	灰	白、灰	茶	灰、黄	濃緑、濃緑
82	大正湯	1928(昭和3)年	—	—	薄緑	(この期間未塗装)	ビツク
47	平和石油事務所	1907(明治40)年	白	灰	灰、白	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)
54	本間合名会社	1909(明治42)年	白	(この期間未塗装)	白	(この期間未塗装)	灰
12	太刀川家住宅・洋館	1915(大正4)年	—	濃緑、白	茶、白、灰	(この期間未塗装)	濃緑、濃緑
15	千代盛商会	1918(大正7)年	—	(色の確認不可)	濃緑、茶	茶	薄緑、濃緑
46	中村呉服店	1907(明治40)年	灰、濃緑	茶、青、薄緑	黄、白	(この期間未塗装)	ビツク
37	相馬株式会社	1914(大正3)年	—	白、クリーム、薄緑	茶	(この期間未塗装)	濃緑、濃緑
14	伴田商店所有建物	1916(大正5)年頃	—	灰、クリーム、濃緑、灰	肌色、黄、白、ビツク	(この期間未塗装)	茶、濃緑、ベ-
4	中山商店	1907(明治40)年	未塗装	(未塗装、木の地)	ビツク、灰	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)
43	田中家住宅	1932(昭和7)年	—	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	茶、濃緑
44	蔵田家住宅	1947(昭和22)年	—	—	—	—	クリーム、濃緑、白
42	外城商店	1930(昭和5)年	—	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	青、青
19	小野家住宅	1930(昭和5)年	—	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	濃緑、濃緑
3	浜岡家住宅	1907(明治40)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	薄緑、灰
63	金子家住宅	1921(大正10)年	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
79	高田木材店	1917(大正6)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(色の確認不可)	(不明)	(色の確認不可)
78	浜田家住宅	1909(明治42)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
76	たこやきみっちゃん	1907(明治40)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
6	佐々木自転車店	1908(明治41)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
8	柳栄堂	1909(明治42)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
59	エンバイアクリーニング	1946(昭和21)年	—	—	—	—	(未塗装、木の地)
18	星野家住宅	1928(昭和3)年	—	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
52	ベンジーン市橋庵	1909(明治42)年	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
22	三洋無線電機商会	1907(明治40)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
62	日和館	1921(大正10)年	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
23	PEACEFUL PLACE	1907(明治40)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
66	葛西家住宅	1921(大正10)年	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
80	桐田家住宅	1921(大正10)年	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
81	岩崎家住宅店舗	1924(大正13)年頃	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
1	小森商店	1901(明治34)年	濃緑、青	青、青	黄、青、ビツク	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)
24	カミラスボーツ	1907(明治40)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	茶、青	(この期間未塗装)	濃緑
48	川越電化センター	1907(明治40)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	白
20	山崎商店	1907(明治40)年	白	白、青	白、白	(この期間未塗装)	茶
29	植木家住宅	1909(明治42)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	青、濃緑
28	長谷川埋容院	1909(明治42)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	ビツク
27	木島家住宅	1909(明治42)年	灰	青、濃緑、薄緑	濃緑、ベージュ、茶	(この期間未塗装)	ビツク、薄緑
25	村中船具店	1909(明治42)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	(色の確認不可)
55	北村船具店倉庫	1910(明治43)年	白、白	白、クリーム、白、白、 灰、白、青、濃緑	濃緑、茶、薄緑、 灰、灰、濃緑	薄緑	ビツク
9	野口梅吉商店	1913(大正2)年	—	白、灰	青、白	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)
33	加藤家住宅	1913(大正2)年	—	白、茶、灰、青	白、白、薄緑	(この期間未塗装)	濃緑、クリーム、濃緑
34	清田商店	1913(大正2)年	—	茶、白、ビツク	クリーム	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)
32	向井家住宅	1913(大正2)年	—	茶、濃緑	青、肌色	(この期間未塗装)	薄緑
61	遺愛幼稚園	1913(大正2)年	—	青、濃緑	茶、肌色	(この期間未塗装)	黄
36	函館神工通信工業所	1914(大正3)年	—	灰、白、白	灰、ベージュ	(この期間未塗装)	黄、青
35	久保田家所有建物	1914(大正3)年	—	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	(色の確認不可)
10	民信共興	1914(大正3)年	—	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	茶、青
56	忠さん食堂	1914(大正3)年	—	クリーム、濃緑	青、青	(この期間未塗装)	灰
38	熊井家住宅	1915(大正4)年	—	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	(色の確認不可)
57	深谷米穀店	1917(大正6)年	—	濃緑、茶	茶	灰の油	濃緑
39	斎藤家住宅	1918(大正7)年	—	(色の確認不可)	茶	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)
68	佐藤理容院	1921(大正10)年	—	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	(色の確認不可)
74	山内家住宅	1922(大正11)年	—	白	薄緑、白	(この期間未塗装)	濃緑
17	奥谷書店	1927(昭和2)年	—	—	ビツク、灰、濃緑、	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)
72	新緑湯	1931(昭和6)年	—	—	薄緑	(未塗装、木の地)	薄緑
73	函館元町港ヶ丘教会	1934(昭和9)年	—	—	ビツク	(この期間未塗装)	クリーム、濃緑
31	三上家住宅	1912(大正1)年	—	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
75	おくら埋容院	1907(明治40)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
65	大野アパート	1921(大正10)年	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
26	うめた埋容院	1909(明治42)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	(色の確認不可)
64	大野家住宅	1921(大正10)年	—	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	(色の確認不可)
71	たこ焼き店	1931(昭和6)年	—	—	(色の確認不可)	(不明)	(色の確認不可)
7	宮坂金商株式会社	1909(明治42)年	白	白、白、白	白、茶	(この期間未塗装)	ビツク
67	函館文化服装学院	1921(大正10)年	—	(未塗装、木の地)	ルオートの黒	(この期間未塗装)	薄緑
60	興和商事車庫	1952(昭和27)年	—	—	—	—	(色の確認不可)
77	菅原家住宅	1907(明治40)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
21	橋谷家住宅	1907(明治40)年	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
13	和島家住宅	1915(大正4)年頃	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
40	岡部家住宅	1919(大正8)年	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
69	藤山家住宅	1921(大正10)年	—	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)	(未塗装、木の地)
70	高橋病院大使寮	1928(昭和3)年	—	—	(不明)	(不明)	(不明)
58	ラッキービエロ	1946(昭和21)年	—	—	—	—	(未塗装、木の地)
2	西浜旅館	1907(明治40)年	灰	白、青、青	青、茶	(この期間未塗装)	濃緑
5	山崎商店	1908(明治41)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	灰	(この期間未塗装)	灰
49	今井家住宅	1908(明治41)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(不明)	(色の確認不可)
53	藤井家住宅	1909(明治42)年	灰	薄緑	濃緑	(この期間未塗装)	濃緑
50	守屋家住宅	1909(明治42)年	茶	青	クリーム	(この期間未塗装)	ビツク
51	市水商会	1909(明治42)年	白	クリーム	薄緑	(この期間未塗装)	クリーム
11	函館ドック生産協力会	1914(大正3)年	—	濃緑、濃緑	ビツク	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)
41	白鷺堂医院	1924(大正13)年	—	白	灰、薄緑	(この期間未塗装)	薄緑、茶
45	たんぽぽ	1969(昭和44)年	—	—	—	—	—

この表は、西部地区における82棟の建物ごとの色彩変容データ票と、表3-4の各ペンキ層の塗装年の特定・推定にもとづき、①明治末期(1907-1912)、大正期(1912-1926)、昭和初期(1926-1939)、戦中(1939-1950)、1950年代、1960年代、1970年代、1980年代、1990年代～現在、の9期の時代区分を設定し、②各建物の外壁ペンキ層の色を主に色相から白系、灰系、濃緑系、薄緑系、青系、茶系、クリーム系、ピンク系、黄系、肌色系、ベージュ系、黒系、イカの油の13種類に分類し、③9期の各時代の期間内に塗装されたと特定、推定できたすべての色を示したものである。

・ペンキ層の最新塗装年も塗り始め年も不明で分析不能であったNo.16 星野水産株式会社は除外した。したがって、全81棟を対象としている。

- ・色の表示は、白系を白のように、系を省略している。
- ・(未塗装、木の地)は、ペンキが塗装されておらず、外壁下見板の木の地のままの状態であったことを示す。
- ・(色の確認不可)は、ペンキは塗装されていたが、その色を確認することができなかったことを示す。
- ・(不明)は、ペンキが塗装されていたのか、いなかったのかを確認することができなかったことを示す。
- ・(この期間未塗装)は、区分設定した時代の期間内にペンキの塗り替えは起こなれず、その前の時代に塗装されたペンキのままであったことを示す。
- ・(改築)は外壁の下見板をサイディング貼り等に改築したものを示す。
- ・(改築のまゝ)は、その前の時代に改築され、そのままの状態であったことを示す。
- ・(取り壊し、マンション)は、外壁下見板張りの建物を取り壊され、その跡地に高層のマンションが建設されたものを示す。
- ・(取り壊し、駐車場)は、外壁下見板張りの建物を取り壊され、その跡地に駐車場に利用されているものを示す。
- ・(新築)は、外壁下見板張りの建物を取り壊され、そこにサイディング貼りの住宅へと建替、新築されたものを示す。
- ・1988、89年の調査時と2001年の追跡調査時に、外壁と窓枠・柱型等で異なる色に塗り分けられていたものについては、「〇〇と××に塗り分け」と示す。
- ・〇〇は外壁の色を、××は窓枠・柱型等の色をあらわす。

表3-5の2 81棟の建物ごとの、9期の各時代の期間内で塗装された外壁ペンキの色
ーその2. 1960年代から現在までー

81棟の各建物			時代区分(その2)と各ペンキ層の色の塗装年代			
No.	建物名称	建築年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代～現在
30	大町郵便局	1911(明治44)年	薄緑	ピンク、ピンク	ピンクと濃茶の塗り分け・2回	(取り壊し、マツヨ)
82	大正湯	1928(昭和3)年	(この期間未塗装)	ピンク	ピンクと白の塗り分け・2回	ピンクと白の塗り分け
47	平和石油事務所	1907(明治40)年	薄緑	ピンク	クリームと肌色の塗り分け	青と灰・黄の塗り分け
54	本間合名会社	1909(明治42)年	灰	青、(改築)	(改築のまま)	(改築)
12	太刀川家住宅・洋館	1915(大正4)年	灰	茶、濃緑	濃緑	(この期間未塗装)
15	千代盛商会	1918(大正7)年	濃緑、ピンク	ピンク	薄緑と茶の塗り分け	(取り壊し、駐車場)
46	中村呉服店	1907(明治40)年	クリーム、ピンク	ピンク	白	(新築)
37	相馬株式会社	1914(大正3)年	濃緑、濃緑	茶、濃緑	濃緑、濃緑	濃緑
14	伴田商店所有建物	1916(大正5)年頃	黄、クリーム	クリーム	濃緑と緑の塗り分け	ピンクと灰の塗り分け
4	中山商店	1907(明治40)年	クリーム、クリーム	クリームと濃緑の塗り分け	(この期間未塗装)	(取り壊し、駐車場)
43	田中家住宅	1932(昭和7)年	薄緑、黄	濃緑と茶の塗り分け	(この期間未塗装)	(新築)
44	藤田家住宅	1947(昭和22)年	薄緑	クリームと茶の塗り分け	(この期間未塗装)	クリームと茶の塗り分け
42	外城商店	1930(昭和5)年	青	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)	(改築)
19	小野家住宅	1930(昭和5)年	ピンク、濃緑	薄緑、青	白と茶の塗り分け	(改築)
3	浜岡家住宅	1907(明治40)年	灰	白、薄緑	白	白
63	金子家住宅	1921(大正10)年	(色の確認不可)	ピンク	ピンクと白の塗り分け・2回	ピンクと白の塗り分け
79	高田木材店	1917(大正6)年	(色の確認不可)	濃緑と茶の塗り分け	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)
78	沢田家住宅	1909(明治42)年	青	青、青と濃緑の塗り分け	(この期間未塗装)	黄と白・茶の塗り分け
76	たこやきみっちゃん	1907(明治40)年	茶、肌色	ピンク	(この期間未塗装)	(新築)
6	佐々木自転車店	1908(明治41)年	灰、青	白	(改築)	(新築)
8	柳栄堂	1909(明治42)年	(色の確認不可)	白	クリームと茶の塗り分け、(改築)	(改築のまま)
59	エンバイアクリーニング	1946(昭和21)年	(色の確認不可)	肌色、灰	灰	(この期間未塗装)
18	星野家住宅	1928(昭和3)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	(改築)	(改築のまま)
52	ペンション古稀庵	1909(明治42)年	茶、青	薄緑	濃青と青の塗り分け	白と青の塗り分け
22	三洋無線電機商会	1907(明治40)年	茶	肌色	クリーム、ピンクと茶の塗り分け	濃緑と黄の塗り分け
62	日和館	1921(大正10)年	薄緑、薄緑	茶、青	青、青と白の塗り分け	青と白の塗り分け
23	PEACEFUL PLACE	1907(明治40)年	薄緑、濃緑、白	肌色	薄緑	薄緑と濃緑の塗り分け
66	葛西家住宅	1921(大正10)年	(未塗装、木の地)	ピンク	ピンク、ピンクと茶の塗り分け	ピンクと茶の塗り分け
80	桐田家住宅	1921(大正10)年	灰	濃緑	(この期間未塗装)	(取り壊し、空地)
81	岩崎家住宅店舗	1924(大正13)年頃	濃緑	茶、茶	(この期間未塗装)	濃緑と黄の塗り分け
1	小森商店	1901(明治34)年	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)	(この期間未塗装)	薄緑と黄緑の塗り分け
24	カミラススポーツ	1907(明治40)年	青	ベージュ、(改築)	(改築のまま)	(改築)
48	川越電化センター	1907(明治40)年	濃緑	薄緑	白	白
20	山崎商店	1907(明治40)年	薄緑	白、ピンク	白、白	(取り壊し、駐車場)
29	楠木家住宅	1909(明治42)年	肌色、ピンク	ピンク、ピンク	(この期間未塗装)	青と黄の塗り分け
28	長谷川理容院	1909(明治42)年	茶	灰	薄緑とピンクの塗り分け	茶と白の塗り分け
27	木島家住宅	1909(明治42)年	ピンク、青	薄緑、白	薄緑と茶の塗り分け、(改築)	(改築のまま)
25	村中船具店	1909(明治42)年	(色の確認不可)	ピンク	肌色、白	(新築)
55	北村船具店倉庫	1910(明治43)年	(改築)	(改築のまま)	(改築のまま)	(取り壊し、駐車場)
9	野口梅吉商店	1913(大正2)年	青、濃緑	青	(この期間未塗装)	青
33	加藤家住宅	1913(大正2)年	青、青	(この期間未塗装)	薄青と青の塗り分け	白と濃緑の塗り分け
34	清田商店	1913(大正2)年	ピンク	ピンク、ピンク	肌色、(改築)	(改築のまま)
32	向井家住宅	1913(大正2)年	茶	濃緑、クリーム	薄緑	(新築)
61	遺愛幼稚園	1913(大正2)年	ピンク	ピンク、ピンク	ピンクと白の塗り分け	ピンクと白の塗り分け
36	函館神工通信工業所	1914(大正3)年	茶	茶、肌色	白	(取り壊し、駐車場)
35	久保田家所有建物	1914(大正3)年	茶	ピンク、黄	クリームと茶の塗り分け・2回	(この期間未塗装)
10	民権共興	1914(大正3)年	薄緑、薄緑	茶、薄緑	ピンク、薄緑	灰と白の塗り分け
56	忠さん食堂	1914(大正3)年	青	薄緑、ピンク	ピンクと茶の塗り分け	(新築)
38	熊井家住宅	1915(大正4)年	白、濃緑	灰、薄緑	ピンクと茶の塗り分け	(取り壊し、駐車場)
57	深谷米穀店	1917(大正6)年	濃緑	茶、白	クリームと青の塗り分け	茶と白の塗り分け
39	斎藤家住宅	1918(大正7)年	青	青	ベージュ	(新築)
68	佐藤理容院	1921(大正10)年	(色の確認不可)	ピンク、(改築)	(改築のまま)	ピンク
74	山内家住宅	1922(大正11)年	青	黄、肌色	クリームと茶の塗り分け	白と茶の塗り分け
17	奥谷書店	1927(昭和2)年	肌色	薄緑、薄緑	濃緑	(この期間未塗装)
72	新緑湯	1931(昭和6)年	ピンク、クリーム	薄緑とピンクの塗り分け	(この期間未塗装)	(取り壊し、駐車場)
73	函館元町港ヶ丘教会	1934(昭和9)年	薄緑、クリーム	薄緑	ピンク、ピンクと白の塗り分け・2回	ピンクと白の塗り分け
31	三上家住宅	1912(大正1)年	(不明)	(不明)	茶	(取り壊し、マツヨ)
75	おぐら理容院	1907(明治40)年	(未塗装、木の地)	ピンクと茶の塗り分け	(この期間未塗装)	(新築)
65	大野アパート	1921(大正10)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)、(改築)	(改築のまま)	(改築のまま)
26	うめた理容院	1909(明治42)年	薄緑	薄緑	(この期間未塗装)	(新築)
64	大野家住宅	1921(大正10)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)、(改築)	(改築のまま)	(改築のまま)
71	たこ焼き店	1931(昭和6)年	濃緑、薄緑、灰、ピンク	クリーム、ピンクと白の塗り分け	(この期間未塗装)	(取り壊し、駐車場)
7	宮坂金商株式会社	1909(明治42)年	灰、茶	青、薄緑	薄緑	(取り壊し、マツヨ)
67	函館文化服装学院	1921(大正10)年	ピンク、薄緑	ピンク、ピンク	ピンクと白の塗り分け	(取り壊し、マツヨ)
60	興和商事車庫	1952(昭和27)年	(色の確認不可)	クリーム	薄灰と灰の塗り分け	(取り壊し、駐車場)
77	菅原家住宅	1907(明治40)年	ピンク	ピンク、ピンク	ピンク	(この期間未塗装)
21	橋谷家住宅	1907(明治40)年	(色の確認不可)	白	白	(この期間未塗装)
13	和島家住宅	1915(大正4)年頃	ピンク、ピンク	茶	薄緑と茶の塗り分け	青と茶の塗り分け
40	岡部家住宅	1919(大正8)年	濃緑、濃緑	灰、薄緑	クリーム	(この期間未塗装)
69	藤山家住宅	1921(大正10)年	クリーム	灰	ピンク	ピンク
70	高橋病院大使寮	1928(昭和3)年	茶	茶	茶と白の塗り分け	茶と白の塗り分け
58	ラッキービエロ	1946(昭和21)年	ピンク	(この期間未塗装)	ピンク、(改築)	(改築)
2	西浜旅館	1907(明治40)年	ピンク	白、白	白	白
5	山崎商店	1908(明治41)年	クリーム	肌色	ピンクと茶の塗り分け	(取り壊し、駐車場)
49	今井家住宅	1908(明治41)年	(色の確認不可)	ピンク	白と茶の塗り分け	薄緑と濃緑の塗り分け
53	藤井家住宅	1909(明治42)年	濃緑	薄緑	ピンクと茶の塗り分け	(取り壊し、マツヨ)
50	守屋家住宅	1909(明治42)年	(この期間未塗装)	クリーム	ピンク	ピンクと白の塗り分け
51	市水商会	1909(明治42)年	(この期間未塗装)	青	薄緑	薄緑
11	函館ドック生産協力会	1914(大正3)年	クリーム	白	クリームと茶の塗り分け	(この期間未塗装)
41	白翁堂医院	1924(大正13)年	白	濃緑、白	白	(取り壊し、駐車場)
45	たんぽほ	1969(昭和44)年	(色の確認不可)	(色の確認不可)	ピンク	(取り壊し、駐車場)

この表は、西部地区における82棟の建物ごとの色彩変容データ票と、表3-4の各ペンキ層の塗装年の特定・推定にもとづき、①明治末期(1907-1912)、大正期(1912-1926)、昭和初期(1926-1939)、戦中(1939-1950)、1950年代、1960年代、1970年代、1980年代、1990年代～現在、の9期の時代区分を設定し、②各建物の外壁ペンキ層の色を主に色相から白系、灰系、濃緑系、薄緑系、青系、茶系、クリーム系、ピンク系、黄系、肌色系、ベージュ系、黒系、イカの油の13種類に分類し、③9期の各時代の期間内に塗装されたと特定、推定できたすべての色を示したものである。

・ペンキ層の最新塗装年も塗り始め年も不明で分析不能であったNo.16 星野水産株式会社は除外した。したがって、全81棟を対象としている。

- ・色の表示は、白系を白のように、系を省略している。
- ・(未塗装、木の地)は、ペンキが塗装されておらず、外壁下見板の木の地のままの状態であったことを示す。
- ・(色の確認不可)は、ペンキは塗装されていたが、その色を確認することができなかったことを示す。
- ・(不明)は、ペンキが塗装されていたのか、いなかったのかを確認することができなかったことを示す。
- ・(この期間未塗装)は、区分設定した時代の期間内にペンキの塗り替えはおこなわれず、その前の時代に塗装されたペンキのままであったことを示す。
- ・(改築)は外壁の下見板をサイディング貼り等に改築したものを示す。
- ・(改築のまま)は、その前の時代に改築され、そのままの状態であったことを示す。
- ・(取り壊し、マンション)は、外壁下見板張りの建物が取り壊され、その跡地に高層のマンションが建設されたものを示す。
- ・(取り壊し、駐車場)は、外壁下見板張りの建物が取り壊され、その跡地に駐車場に利用されているものを示す。
- ・(新築)は、外壁下見板張りの建物が取り壊され、そこにサイディング貼り等の住宅へと建替、新築されたものを示す。
- ・1988、89年の調査時と2001年の追跡調査時に、外壁と窓枠・柱型等で異なる色に塗り分けられていたものについては、「〇〇と××に塗り分け」と示す。
- ・〇〇は外壁の色、××は窓枠・柱型等の色をあらわす。

期では灰系も多く、白系とあわせて無彩色系で75%を占める。大正期から有彩色の種類も数も増え、全体の半分以上を占めるようになり、この傾向は昭和初期にかけて顕著になる。戦中はほとんどの建物が塗っていないと推定したが、5回の塗装が確認でき、そのうちの1回はペンキではなくイカの油であった。戦後の1950年代は濃緑系が最も多い。次いで薄緑系とピンク系が多く、それが60年代まで続くが、この頃からピンク系が増え、70年代以降はピンク系が最も多くなり、次いで薄緑系で、濃緑系は減少する。1990年代から現在にかけてもこの傾向は続くが、ペンキの塗る回

表3-6 時層色環分析による各時代の町並み色彩
- 81棟の色彩変容データ票の集計結果 -

時代区分 外壁の色	明治 末期 (1907- 1912)	大正 期 (1912- 1926)	昭和 初期 (1926- 1939)	戦中 (1939- 1950)	1950 年代	1960 年代	1970 年代	1980 年代	1990 年代 ～現在
白系	7(44)	19(30)	13(18)	-	2(3)	3(3)	11(11)	12(17)	6(18)
灰系	5(31)	8(13)	8(11)	1(20)	4(7)	7(8)	5(5)	2(3)	1(3)
濃緑系	2(13)	9(14)	7(10)	-	20(34)	14(16)	6(6)	3(4)	1(3)
薄緑系	-	5(8)	7(10)	1(20)	9(15)	14(16)	17(17)	11(16)	6(18)
青系	1(6)	11(17)	7(10)	-	5(8)	12(14)	9(9)	4(6)	5(15)
茶系	1(6)	5(8)	12(16)	1(20)	5(8)	9(10)	10(10)	2(3)	3(9)
クリーム系	-	5(8)	3(4)	-	4(7)	9(10)	7(7)	9(13)	1(3)
ピンク系	-	1(2)	6(8)	1(20)	7(12)	15(17)	27(27)	24(34)	9(27)
黄系	-	-	3(4)	1(20)	2(3)	2(2)	2(2)	-	1(3)
肌色系	-	-	3(4)	-	-	3(3)	6(6)	2(3)	-
ベージュ系	-	-	3(4)	-	1(2)	-	1(1)	1(1)	-
黒系	-	-	1(1)	-	-	-	-	-	-
イカの油	-	-	-	1(20)	-	-	-	-	-
合 計	16(100)	63(100)	73(100)	5(100)	59(100)	88(100)	101(100)	70(100)	33(100)

数値は各時代の期間内に存在し、外壁下見板にペンキが塗られ、色が確認できる建物において、その色のペンキが塗られた回数を示す。1棟の建物である時代の期間内に2回以上塗られたものも数多くみられるが、そのすべての回数をカウントしている。カッコ内は時代区分ごとの建物にペンキが塗られた回数の合計値を100とした時の割合%を示す。なお、各時代区分において最も多い色に濃い網かけを、2番目に多い色に薄い網かけをおこなっている。

表3-7 各時代の建物へのペンキ塗装と色の確認状況

時代区分 塗装状況	明治 末期	大正 期	昭和 初期	戦中	1950 年代	1960 年代	1970 年代	1980 年代	1990 年代 ～現在
ペンキ塗装、 色の確認可	13(39)	26(39)	37(49)	4(5)	38(48)	60(74)	71(88)	57(70)	33(41)
ペンキ塗装、 色の確認不可	8(24)	15(23)	13(17)	-	10(13)	13(16)	4(5)	-	-
ペンキ未塗装 木地のまま	11(33)	22(33)	23(30)	24(32)	21(26)	2(2)	-	-	-
この期間は ペンキ未塗装	-	1(2)	-	32(42)	8(10)	4(5)	4(5)	16(20)	9(11)
その他	1(3)	2(3)	3(4)	16(21)	3(4)	2(2)	2(2)	8(10)	39(48)
合 計	33(100)	66(100)	76(100)	76(100)	80(100)	81(100)	81(100)	81(100)	81(100)

その他の内容は、ペンキ塗装の有無不明、改築による下見板の消失、建物取り壊しである。数値は各時代の期間内で該当する建物棟数を示し、カッコ内は時代区分ごとの建物棟数の合計値を100とした時の割合%を示す。

数が前の 1980 年代の半分以下、ピーク時の 30%以下へと大きく減少した。これは建物の改築や新築などにより、下見板が失われ、サイディング貼り等へと変わったことによるところが大きい。

なお、ペンキ塗装の状況について、明治末期から戦前までは、建物にペンキが塗装され、その色の確認ができるものは全体の半分以下で、塗装はされているが色の確認ができないもの¹⁰⁾が 20%前後、ペンキ未塗装で木地のままのものが約 1/3 あった(表 3-7)。この木地のままの建物は、主に山の手の住宅地の元町と弥生町、港に近い住商混合地域の弁天町でみられた。戦後も 1960 年代以降になると、木地のままの建物はほとんどなくなった。1990 年代から現在において、その他が約半分あるが、これは先述の建物の改築や新築などを示している。

10) 外壁材の張り替えで外壁のペンキ層は抽出できなかったが、他の窓枠等からペンキ層を確認でき、かつては外壁も塗装されていたと推定されるもの。

3-5 明治から現在までの町並み色彩の時代変遷とその特色

表 3-6 の時代の色の共通する傾向から大正期と昭和初期、1950 年代と 60 年代、1970 年代と 80 年代がひとつにまとめられ、5 つの時代区分に再編成できる。これに、文献・史料による明治期前半と中期、82 棟の追跡調査による 1989 年以降の現在の状況を加え、8 つの時代区分で町並み色彩の変化とその要因、背景を分析、考察する(表 3-8)。

(1) 第 1 期：明治初期から明治中期頃までの点在する「白色」の時代(1868～1890、1900 年頃)

この時代は、ペンキを塗らない伝統的な和風の木造建物がほとんどであったと思われるが、その中で、主な公共施設が開拓使によって建設され、それらの多くは洋風の意匠をもち、ペンキが塗られていた。対象地区内の基坂西側に立地していた官立函館病院(1871 年)、会堂(1879 年)はいずれも白一色のペンキ塗装であったことが仕様書から確認されている。これは、ひとつには開拓使の洋風建築がアメリカの木造下見板張り建築のコロニアル様式の系譜をひき、シンプルな形態に白色のペンキ塗装という素朴な意匠が一般的であったこと¹¹⁾による。写真 3-9 は 1884(明治 17)年創建の旧函館県立博物館であるが、このような白一色のペンキ塗装であったと想像される。もうひとつはペンキの材料が輸入品で、しかも白ペンキであったこと¹²⁾によるところが大きい。



写真 3-9
旧函館県立博物館(第二館、1884(明治 17)年)における白一色のペンキ塗装

11) 越野武 著『北海道における初期洋風建築の研究』、北海道大学図書刊行会、1993 年 2 月 25 日。

12) 日本ペイント株式会社 社史編纂室 編「日本ペイント百年史」、日本ペイント株式会社、1982 年 12 月 1 日。

(2) 第 2 期：明治中期頃から後期頃までの「多色」の時代(1890、1900～1907 年頃)

表 3－8 函館市西部地区の町並み色彩の時代変遷とその要因・背景

【期】	【時代区分】	【町並みの基調をなすペンキ色彩】	【ペンキ色彩の具体的内容】	【色を決める要因・背景】
1	明治初期から中期 (1868～1890、 1900年頃)	多数の和風木造建物の中に点在する、基坂周辺の一部の洋風木造建物の白色－ペンキによる町並み色彩は未成立	白一色あるいは外壁に白、窓枠・柱等に濃い色の組合わせ	洋風木造建物の萌芽 開拓使による公共建築－アメリカのコロニアル様式 ペンキの材料限定(白ペンキ、輸入品)
2	明治中期から後期 (1890、1900～ 1907年頃)	多色	色相は赤茶系、黄系、緑系、白系等多様	洋風木造建物の普及 安価なペンキ－錆色、黄色などの使用
3	明治末期 (1907～1912年頃)	白系または灰系 －これ以降、洋風木造建物が町並みの基調となる 木の地のままで未塗装が全体の1/3	白一色または灰一色	明治40年(1907)大火後の一挙的な洋風木造建物の建設 塗料生産の8割以上が白色塗料
4	大正期から昭和 初期 (1912～1939年頃)	多色 濃い目の色 木の地のままで未塗装が全体の1/3	建物全体に濃い色を使用 色相は白系、緑系、クリーム系、灰系、茶系等多様	ペンキの供給増大－国産化発展 都市としての最盛期 色の自由な選択
5	戦中 (1939～1950年頃)	暗色 多くの民家ではペンキが塗られずに放置	ペンキの代替としてイカの油を使用 公共建築等におけるグレー系、黒系、茶系の暗い色による迷彩	統制経済によるペンキの材料入手困難 戦時の色彩規制(防空法)
6	戦後1950年代から 1960年代頃	多色 特徴的な色－緑系とピンク系 これ以降、ほとんどが塗装	濃緑系 淡く、明るく、柔らかなパステル調の薄緑系とピンク系 他に青系、茶系、クリーム系、黄系、肌色系、ベージュ系等多様	米国進駐軍の影響－新しい価値観 ペンキ材料技術の発展にともなう中間色、淡色の使用－油性塗料から合成樹脂塗料への変化 港の船舶の色の影響 色の自由な選択
7	1970年代頃から 1980年代頃	多色の継続 淡く、明るく、柔らかな色調のパステルカラー 塗り分けの一般化 外壁と窓枠・柱型等を異なる色で塗装する塗り分け	ピンク系と薄緑系 建物の装飾性を強調する塗り分け－ピンクに茶または白、クリームに茶など 地域の特徴的な色－山の手の住宅地のピンク色と港湾地区の薄緑色	ピンク色：公会堂(1958年にピンクに白へ塗り替え)と遺愛幼稚園(1950年代以降ピンクに白)の色の民家への波及、薄緑色：港の船舶の色の影響 装飾的効果を高める 色の自由な選択 外壁改修による下見板消失のゆるやかな進行
8	1990年代頃から 現在	多色の継続 パステルカラー 塗り分けの一般化 下見板・ペンキ色彩の消失の動向	建物の装飾性を強調する塗り分け－ピンクに白、茶に白、青に黄と、同系色の緑に濃緑 地域の特徴的な色の明確化－山の手のピンク色と港湾地区の薄緑色 下見板から防火サイディング等への変化	装飾性、華やかさの強調 色の自由な選択 景観条例による規制・誘導、景観保全 市民ボランティアによるペンキ塗り替え・景観改善活動 建物老朽化、地区衰退の進行にともなう木造下見板張り建物の取り壊し(建替、高層マンション建設または駐車場・空地)と改築(防火サイディングへの張り替え)

写真 3－10 明治中期頃の西部地区の町並み写真¹³⁾(所蔵：石黒コレクション)

13) この写真は俗に「横浜写真」と称され、横浜で売られた、外国人向けのお土産用の着色写真の一つである。石黒コレクション保存会が所蔵している。具体的な撮影地は、写真上方の港に向かって左手前からのびる道路が現在の八幡坂の通りで、それに直交する道路が当時大通り筋と呼ばれた、現在の電車通りである。このあたりは 1907(明治 40)年の大火で焼失しており、この横浜写真がそれ以前に撮影されたものであることは間違いない。また、1889(明治 22)年頃の大通り筋の町並復原立面図(函館市教育委員会 編『函館市西部地区の町並－弁天町・弥生町地区伝統的建造物群調査報告』(函館市、1984 年 3 月)の pp5-6)と照らし合わせると、この写真で正面をみせて並んでいる建物 4 棟すべてが記載されている。したがって、この写真の撮影時期として伝えられている明治中期頃というのは妥当なところであると考えられる。

函館の洋風木造建物の多くは、一階を在来の和風様式とし、二階正面を洋風様式とするものである。この形式の洋風木造建物が西部地区にはじめてあらわれるのは1873（明治6）年頃であるが、1878、79（明治11、12）年の大火後、1890年代頃に「安定したスタイルとして定着を始めた」¹⁴⁾。写真3-10は、明治中期頃に函館の写真家・田本研三が写真館の屋上から撮影したとされる、西部地区の「横浜写真」である。横浜写真はカラー写真ではなく白黒写真に彩色されたものなので、建物の実際の色を忠実に表現したものであるかは不明であるが、少なくとも地区全体の町並みの色を反映しているのではないかと考えられる。この写真では、建物の色は赤茶色、茶色、暗緑色などの濃いめの色、クリーム色、薄緑色、薄灰色などの淡めの色に加えて漆喰の白色など、多様である。明治初期の開拓使の建物にみられた白色ペンキがなく、多様な有彩色である理由として考えられる一つはペンキの価格で、白色にくらべて値段の安い錆色、黄色などのペンキを使用していたと推察される（第2章を参照）。

（3）第3期：明治末期の「白系または灰系」の時代

（1907～1912年頃）

1907（明治40）年、西部地区は大火にみまわれ、ほとんどの建物を焼失するが、「大火後は、特にこの下階和風、上階洋風形式の町屋が増加し、遺構も多い。大火復興にあたって、各部の仕様をやや簡略化ないしは標準化しながら、大量に建設」¹⁵⁾されたようで、これ以降町並みを構成する主要な建築形式となった。この頃のペンキ色彩は白系と灰系が多い。これは、当時塗料生産の8割以上が白色塗料であったという¹⁶⁾ペンキ供給事情によるものと思われる。

（4）第4期：大正期から昭和初期の「多色」の時代

（1912～1939年頃）

大正期では白系、灰系の無彩色系が前の明治末期より減り、有彩色の緑系、青系、茶系、クリーム系、ピンク系など、多様な色があらわれてきた。この傾向は昭和初期になるとさらに助長され、有彩色系の種類も増え、より一層の多色化が進んだといえる。その背景として、塗料産業が国産化の発展をとげペンキの供給が増大し¹⁶⁾¹⁷⁾、また函館が港湾都市として最盛期を迎えていた時代の中で、建物所有者の好みによる色の自由な選択がおこなわれていたことが考えられる。第3期の無彩色のどちらかといえば単色の町並みにく比べると、多色の華やかな町並みが形成されていたといえる。

14) 越野武 著『北海道における初期洋風建築の研究』（北海道大学図書刊行会、1993年2月25日）のpp251-252を参照。

15) 越野武 著『北海道における初期洋風建築の研究』（北海道大学図書刊行会、1993年2月25日）のp254を参照。

16) 日本ペイント株式会社 社史編纂委員会 編『日本ペイント百年史』、日本ペイント株式会社、1982年12月1日。

17) 関西ペイント株式会社 社史編纂委員会 編『明日を彩る 関西ペイント六十年のあゆみ』、関西ペイント株式会社、1979年5月17日。

(5) 第5期：戦時中の「暗色」の時代（1939～1950年頃）

1939年の戦時統制経済によりペンキ入手が困難になり、多くの建物では長い間ペンキが塗られずに放置されていたものと推察される。建物所有者へのヒアリングで「戦時中から戦後20年代までは屋根、外壁に（ペンキの代用として）イカの油を塗っていた」という事例は、このことを裏付けるものである。一方、重要な建物や公共的な建物では偽装のためにグレー、黒、茶などの暗色で迷彩が施されていた。これは1937年に公布された防空法にもとづくものである（表3-9）。こういう状況は1950年の塗料の統制解除の頃まで続いたと思われる。

(6) 第6期：戦後1950年代頃から60年代頃までの「多色の
中の緑系とピンク系」の時代

全体的には昭和初期の多色が回復したといえるが、その中で特徴的なのは薄緑系、ピンク系の淡く、明るく、柔らかなパステル調の色が主流になったことである。緑系は特に港湾地区の大

18) 落合治彦所蔵の『改訂防護団員必携（津軽要塞指令部監修）』（函館市防空本部発行、1938年）。これによれば、偽装の方法として「迷彩」があげられ、また偽装を必要とする物件として「軍用建築物、公共用建築物、他の誘導目標となる建築物又は各種構築物」があげられている。

表3-9 戦時中の建物迷彩に関する史料¹⁸⁾

（一九三七（昭和十二）年四月一日）

防空法 公布

本事務ハ国防上極メテ重要ナル基礎ヲ形造スルモノニシテ：（以下略）

（一九三八（昭和十三）年五月二十五日）

函館市防空本部発行

『改訂防護団員必携（津軽要塞指令部監修）』より

工作部業務細則

第一章 通則

第一條 本書ハ主トシテ空襲時發生スル都市ノ被害ニ對シ工作部ノ實施スル業務ニ關シ基準ヲ與フルヲ目的トス

平時ノ變災時ニ於ケル動作モ亦概ネ本書ヲ準用スルモノトス

第二條 工作ノ目的ハ敵ノ空襲ニ對シ平時偽裝遮蔽セザル地區地物ニ對シ其地區又ハ其地物ヲ偽裝遮蔽シテ敵機ノ精密爆撃ヲ困難ナラシメ又ハ空襲ニ依ル破壊ニ對シ都市建設物ノ抵抗カヲ補強シ其損害ヲ局限スルト共ニ破壊又ハ火災ニ依ル損害ヲ復舊シ以テ都市ノ活動ヲ維持スルニ在リ

第三條 工作部ハ地區内ノ災害甚大ナル時ハ先ツ公共的作業ヲ行ヒ爾後逐次個人的損害復舊ニ協力スルモノトス
（途中略）

第四章 參考

第十七條 偽裝遮蔽

一、偽裝ノ方法トシテハ次ノ如キ種類アリ

偽裝網、幕布、假工事、植樹等ニ依ル遮蔽、迷彩

二、偽裝ノ基本條件

イ、偽裝ヲ必要トスル物件

軍事用建築物、公共用建築物、停車場、水源地、河川、重要工場、其他誘導目標トナル建築物又ハ各種構築物

ロ、敵機襲來ノ時刻

夜明、夕暮、時ニハ日中勇敢ニ襲來スル場合モ考ヘラルヽ故ニ偽裝ハ最モ見易イ日中ヲ考慮シテ取設クヘキナリ

ハ、視角

即チ如何ナル方向ヨリ見ルカヲ考慮スヘキテ飛行機テ投彈スルニハ先ツ豫備操作ノ必要アリ次テ目標ノ可ナリ前方ニ於テ投彈セサル可カラサルヲ以テ目標ハ餘程斜メ上方ヨリ見ル事トナリ此事實ヨリ工作物ハ屋根面ノミテナク寧ロ壁面ニ偽裝力必要トナル
但シ家屋密集地帯ニシテ餘リ高カラサルモノハ壁面ノ考慮ハ必要ナランモ建築面積ノ非常ニ大ナルモノハ適當ナル偽裝遮蔽ノ必要アリ又窓ハ視角ノ關係ヨリ縦ヲ良トス

町、弁天町の建物で多く使われ、濃緑系の色もみられた。戦前にくらべて緑系が非常に多くなった理由として、一つは函館に進駐した米軍の影響があげられる。彼らの好んで使った色、パステルカラー、それも特に薄緑系が流行したと考えられるのである¹⁹⁾²⁰⁾。二つ目は、ペンキの材料がそれまでの油性から合成樹脂へとかわり、淡い中間色の定着性が高まったことがあげられる²¹⁾。技術の発展がパステルカラーの使用を促したのである。三つ目は、薄緑色が日常生活の中で馴染み深い色であったことがあげられる（写真3-11）。漁船の多くはデッキペイントのほとんどが薄緑色である。さらには埠頭周辺にころがっている船舶附属の備品にも同じ色が使われるなど（写真3-12）、薄緑色は港、船舶に深く関連する色である。

（7）第7期：1970年代頃から80年代頃までの「多色の継続、パステル調のピンク系と薄緑系、塗り分け」の時代

1970～80年代になると、前期からの多様な色彩は継続されるものの、濃緑系が減り、これに代わってパステル調のピンク系が最も多く、次いで薄緑系がよく使われる色となった。このピンク系の色は地域的には山の手の住宅地の元町、弥生町で多く使われた。この背景として、元町に位置する地域の代表的な公共建築である旧函館区公会堂と遺愛幼稚園の色の影響があげられる（写真3-13）。1958年頃、旧函館区公会堂はそれまでの黄土色から、外壁下見板をピンク色に、窓枠、柱等を白色に塗り替えている²²⁾。同じ元町の建物所有者の「1970年頃、アメリカン・スタイルを意識して下見板部分をピンクと柱等を白く塗った。ピンクについては旧函館区公会堂と遺愛幼稚園の色彩をまねた。ピンクを塗った当時、周囲にはペンキを塗っていない建物がほとんどで自分の建物がピンクになってから次々と真似られていった」というヒアリング結果から、この地域を代表する2つの建物の色が、周辺住民に好まれて、広まっていったのではないかと考えられる。また、窓枠、柱等を外壁とは異なる色に塗り分けることは、建物の装飾性を強調する効果がある。1988、89年の時層色環調査時点では37棟で塗り分けが確認され、そのうち28棟は1980年代のペンキ塗り替え時に塗り分けがおこなわれたものであった。

（8）第8期：1990年代頃から現在までの「ピンク系と薄緑系のパステルカラー・多色の継続と塗り分けの一般化、および下見板張り・ペンキ色彩の衰退」の時代

ピンク系と薄緑系で約半分を占め、かつ他の色もみられ、前期からのパステルカラーと多色は継続されている。塗り分けはペン



写真3-11 西部地区における漁船の緑系のデッキペイント

19) 前掲書16)を参照。

20) 前掲書17)を参照。

21) 児島修二 著「建築塗装の手引き」、学芸出版社、1988年。



写真3-12 西部地区における埠頭周辺の船舶附属備品の緑系の色



写真3-13 遺愛幼稚園のピンク系と白系の塗り分け

22) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財 旧函館区公会堂 保存修理工事報告書』、函館市、1983年3月。



写真 3-14 薄緑系の外壁に濃緑系の窓枠等の同系色の塗り分け

キの塗られている建物全体の 76%にのぼり、一般化したといえる。その配色はピンクに白、茶に白、公会堂をモデルとする青に黄といった異なる系列のものに加え、薄緑に濃緑という同系色の塗り分けも見られるようになった（写真 3-14）。ピンクは山の手の住宅地の元町に、緑は港湾地区の大明、末広町に多く見られ、地域による特徴的な色が明確になってきた。1988 年制定の歴史的景観条例にもとづく保全建物への指定（25 棟）、1990 年からは市民ボランティアによるペンキ塗り替え（5 棟）、建物所有者による自主的なペンキ塗り替え（6 棟）など、行政、民間双方で町並み色彩形成の体制も整いつつある。しかし一方では、28 棟の建物が取り壊され、改築のもの 10 棟とあわせると、全体の約半分に当たる 38 棟の建物が下見板張り洋風建物の形式を失い、ペンキ色彩の町並み特性が失われる傾向にあるといえる（表 3-9）。

表 3-9 調査対象建物 82 棟の現在の状況
- 2001 年の追跡調査による

特徴的な変化	該当建物棟数 (%)
市の条例にもとづく保全建物への指定	25(30)
市民ボランティアによるペンキ塗り替え	5(6)
建物所有者による自主的なペンキ塗り替え	6(7)
建物取り壊し（建替、高層マンション、駐車場・空地へ）	28(34)
改築（外壁を下見板から防火サイディングやトタンへ）	10(12)
変化なし	8(10)
合 計	82(100)

3-5 まとめ

函館市西部地区の明治初期から現在までの 1 世紀以上にわたるペンキ色彩からみた町並みの変容について、木造下見板張り洋風建物の時層色環の調査にもとづき、その分析を中心とし、建物所有者へのヒアリングや文献・史料等を補足的に用いてペンキ層の年代特定・推定をおこない、さらに時層色環ではとらえられない時代の色については文献、横浜写真、追跡調査の分析を加えてあきらかにした。

その結果、現状の町並みは淡く、明るいピンク系や緑系の色彩を中心に様々の色で構成されているが、かつてはこれとは異なる町並み色彩が形成されていたことがとらえられた。その具体的な内容は、以下の 5 点にまとめることができる。①同じ色のペンキを塗り続ける建物は非常に少なく、ほとんどが異なる色で塗り替えており、したがってその集積としての町並み色彩も変化してい

る。②色彩変化の実態として、個々の建物ではおおむね5年から10年ごと、平均7年前後でペンキの塗り替えがおこなわれているが、町並み全体としては20年から30年の周期をもつ7回の変化が確認できた。③明治初期から中期、明治末期、戦中の白色や暗色の単色の時代は、ペンキの材料限定、大火、戦争といった大きな社会要因が影響し、色の選択の不自由さのあったことが共通する要因としてとらえられた。④一方、明治中期から後期、大正期から昭和初期、戦後の1950年代以降はいずれも多色の時代で、その背景には、ペンキの価格・供給状況・技術発展、海外からの新しい価値観の移入、建物所有者の好みによる色の自由な選択行為など、さまざまな要因があげられた。⑤特に戦後は、多色の中にも薄緑色とピンク色という特徴的な色が認められた。それらは船舶のペンキ色彩や地区の公共性の高い代表的な建物の色などの、日常生活で馴染み深い色で、それが住民に好まれ、地域に伝播し、広がっていったと考えられ、コミュニティによる地域環境価値評価型の町並み色彩が形成されていたといえる。

このように歴史的に形成されてきた西部地区の町並み色彩の特質は、同じ色のペンキを塗り続けるのではなく異なる色を用いる周期的な「変化」と、地区全体として同系色で統一されるのではなく、異なる様々の色で構成され、それが一定の調和をたもっている「多様」さにあるといえる。この町並み色彩の変化と多様の背景、要因は、ペンキの価格・供給状況・技術発展を含む、複合的なものであるが、その中には地域の歴史や地域コミュニティにおける住民の社会化された意識の反映もみられ、注目される。

近年の1990年代以降、西部地区において約半分の建物で取り壊し、改築、建替新築がおこなわれ、それらの建物では下見板張り洋風の形式を失い、ペンキ色彩の町並み特性が失われる傾向にあるが、今後それをどのように維持していくかが大きな課題となっている。

第4章 外国人住宅地区におけるペンキ色彩からみた町並みの変容

－神戸市北野町山本通地区の異人館の場合－

4-1 はじめに

- 1) 神戸市教育委員会 編『異人館復興－神戸市伝統的建造物修復記録』（住まいの図書館出版局、1998年1月20日）によれば、「『異人館』とは、神戸市北野・山本地区周辺の伝統的建造物群のなかでも、とりわけ一般の人々に親しまれている、明治から昭和初期にかけてつくられた一連の洋風住宅を指す。」とある。

- 2) 神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課 編集・発行『異人館のある町並み 北野・山本 神戸市北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区・20周年記念』、2000年3月。



写真4-1 白一色から萌黄色に復原された重要文化財・小林家住宅（現萌黄の館、旧シャープ住宅、1903（明治36）年）

- 3) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財小林家住宅保存修理工事報告書』（重要文化財小林家住宅修理委員会、1989年9月）のp96を参照。
- 4) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩文化の研究－下見板のペンキ色彩の復原的考察を通して－』（トヨタ財団助成研究報告書、C-020、1991年12月）のp118を参照。1990年当時の神戸市教育委員会文化財係・浜田有司氏の言。

本章は、外国人住宅地区の神戸市北野町山本通地区における洋風建築物、いわゆる神戸の異人館¹⁾のペンキ色彩からみた町並みの変容とその背景をあきらかにすることを目的としている。

神戸は函館に遅れること9年、1868年1月1日（慶応3年12月7日）に開港された。北野町山本通地区は外国人居留地に近い山麓の恵まれた位置にあり、日本人住宅地と共存の形態がとられた。明治20年代の初め、1890年代頃から明治後期、大正期にかけて、下見板張りペンキ塗りの異人館が数多く建てられた。大正後半から昭和初期にはモルタル塗りの洋館が建てられるようになった。第二次世界大戦にともない、異人館の居住者である外国人は国外退去を余儀なくされ、その後、多くは日本人が居住することとなった。また、この戦争の空襲によって、多くの異人館が失われた。山本通から北野町1～4丁目にいたるベルト状の一角が、かろうじて戦災をまぬかれ、いまに残されているのである²⁾。

重要文化財・小林家住宅は1903（明治36）年にアメリカ領事館勤務のシャープ氏邸として創建された、地区の代表的な異人館である。昭和20年代以降、ずっと白一色で塗り替えられ、「白い異人館」と呼ばれ、市民に親しまれてきた。1989（平成元）年の修理工事にともない、外壁や窓枠がグリーン、鋳戸がナビアグリーンへと創建当初の姿に復原され、萌黄の館と呼ばれるようになった（写真4-1）。外壁や窓枠のグリーンは「当初よりやや淡いグリーン」³⁾にしたのであるが、「復原した萌黄の館の色は、観光客や市民に非常に評判が悪い。市教委としても、なぜもとの色でなければいけないのかと文化庁とやりあったが、国の方針として復元を基調においている」⁴⁾ため、やむなくしたがったようである。ここには、函館の旧函館区公会堂の復原修理の際と同様の、建物自身も周辺の景観も一変させるほどあまりにも色が異なることへの驚きや戸惑いがうかがえる。

神戸の異人館の色彩に関しては、後に詳述するが、1979（昭和54）年に実態調査がおこなわれ、オフホワイト系とライトベージュ系の外壁に、茶系と緑系の窓枠等の配色（写真4-2、4-3）に特徴の

あることがあきらかにされ、それを根拠として行政による色彩コントロールの基準の設定、指導がおこなわれている。しかし、果たしてその色彩が過去の明治期や戦前期においても特徴的だったのかどうか。小林家住宅のように、まったく異なる色が使われていたのではないか。またなぜそのような色彩が使われるようになったのか、さらにその後の1980年代以降も同じ色彩が使われているのかどうかはあきらかにされていない。本章ではさらに、前章であきらかにした函館市西部地区の町並み色彩変容との比較分析をおこない、神戸・異人館の町並み色彩の特性をより明確にする。

研究の方法は前章と同様、下見板張りペンキ塗りの異人館の外壁、窓枠等木部のペンキ塗膜の下に残された古いペンキ層のこすり出しにもとづく時層色環の調査、分析を中心とし、建物所有者へのヒアリング調査、文献の収集調査をおこない、各ペンキ層の色彩とその塗装年をあきらかにし、異人館のペンキ色彩の変容過程を分析するものである。

4-2 調査の概要

4-2-1 調査対象

北野町山本通地区の下見板張りペンキ塗の異人館を対象とするペンキこすり出しの悉皆調査をおこなった。対象数は19棟である。表4-1にこの調査対象建物19棟の概要を、図4-1にその分布図を示す。19棟の内訳は、①北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区（以下、「伝建地区」）内において、伝統的建造物に指定されている28棟の洋風建築物のうち下見板張りペンキ塗のものが16棟あるが、そのうちの13棟（No.1～13）、②重要伝建地区周辺の都市景観形成地域内の重要な伝統的洋風建築物2棟（No.14、15）⁵⁾、③都市景観形成地域に隣接・近接する2棟（No.16、17）⁶⁾、④1963年まで北野町に立地し、その後別の場所に移築された重要文化財2棟（No.18、19）である。

現在、神戸市北野町山本通地区の重要伝建地区を含む都市景観形成地域内の建物総数は600棟弱、そのうち異人館（モルタル外壁を含む）は55棟で約10%、下見板張りペンキ塗の今回の調査対象異人館は19棟で約3%と、地区の町並みの中で異人館の占める割合は数量的には小さく、異人館以外の建物が90%を占めているのが実態である。がしかし、これらの異人館が、歴史的にも現在においても、地区の町並みの形態や色彩を特色づけているので



写真4-2 外壁をオフホワイト系、窓枠等を緑系の配色とする異人館の典型事例



写真4-3 外壁をライトベージュ系、窓枠等を茶系の配色とする異人館の典型事例

5) 神戸市都市計画局・神戸市教育委員会発行『北野・山本地区景観ガイドライン 神戸らしい都市景観をめざして』（1989年度）および前掲書『異人館のある町並み 北野・山本 神戸市北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区・20周年記念』によれば、伝統的建造物指定28棟の洋風建築物の外壁仕上げの内訳は、下見板張りペンキ塗16棟、モルタル10棟（そのうち旧下見板張り6棟）、煉瓦と人造石各1棟であり、その後モルタル4棟、人造石とその他各1棟の計6棟が追加指定されている。調査ができなかった下見板張りペンキ塗洋風建築物3棟はバジャー邸、神戸華僑総会、シュウエケ邸である。また、都市景観形成地域内の重要な伝統的洋風建築物として6棟あげられているが、そのうち下見板張りペンキ塗は調査対象の2棟であり、他の4棟はモルタル2棟、スレート+モルタル1棟、スレート1棟である。なお、No.14のフロイドリーブ邸とNo.17のプレスビテリアンミッションの2棟は1995年の阪神・淡路大震災の影響により消失した。

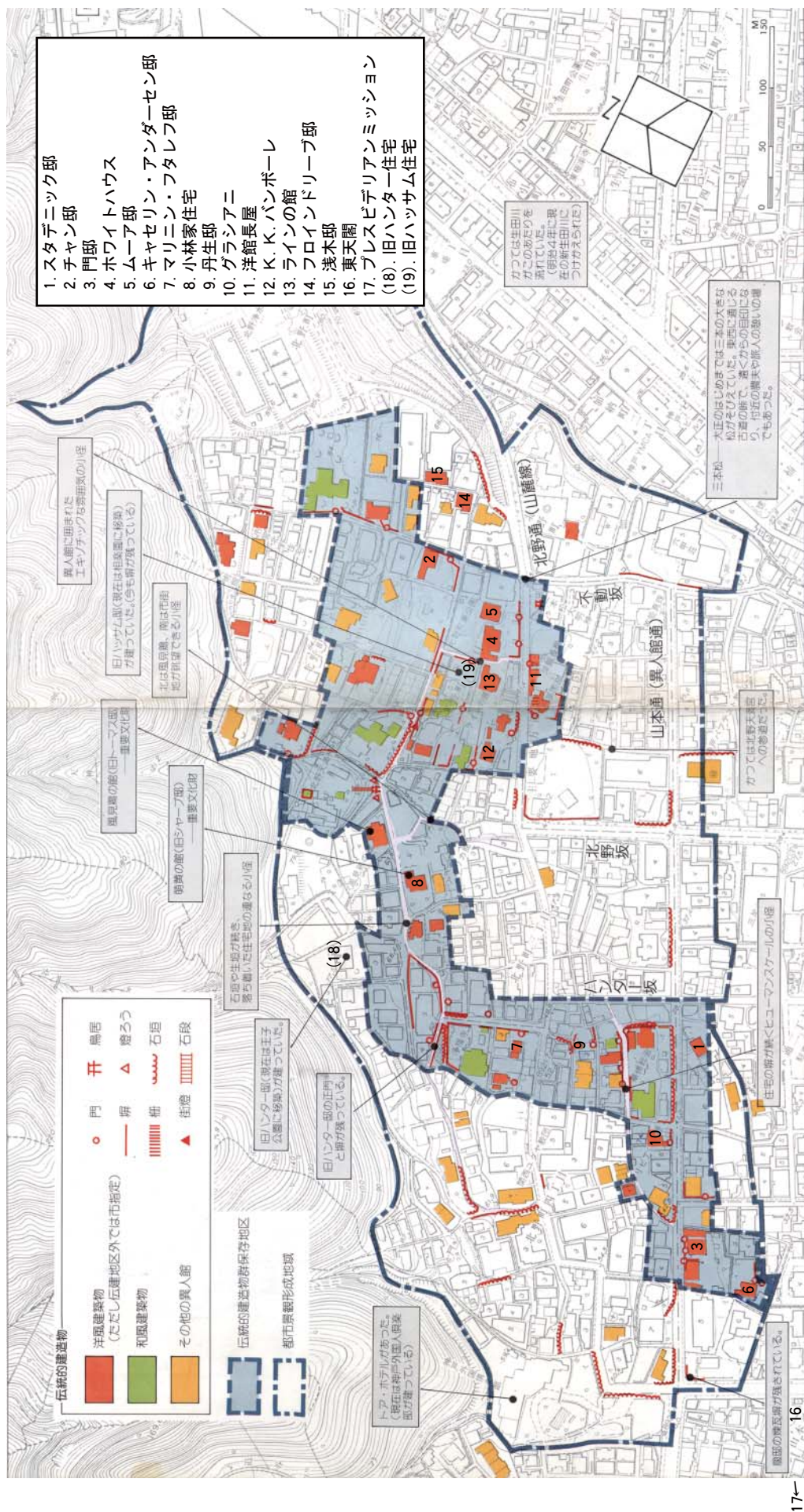
6) 奈良国立文化財研究所・神戸市教育委員会 編『異人館のあるまち神戸 北野・山本地区伝統的建造物群調査報告』（神戸市、1982年4月）および日本建築学会 編『日本近代建築総覧』（技報堂出版、1980年3月30日）にリストアップされた洋風建築物である。

表 4-1 神戸・異人館のペンキこすり出し調査対象建物の概要

No	建物名称 (旧名称)	建築年	指定の有無 ・内容など	構 造 階 数	現用途	建物所有者・ 使用者の所有 年・入居年	ヒアリン グの有無
1	スタデニック邸	1887-96年 (明治20代)	重要伝統的建造 物群保存地区内 の伝統的建造物	木造 2階建	住宅	1887-96年 (明治20代)	無
2	チャン邸 (前サッスーン邸)	1892年 (明治25)	同 上	同上	観光施設 (公開異人 館・民間)	1982年頃	有
3	門邸 (旧ディスレフセン邸)	1895年 (明治28)	同 上	同上	住宅	1956-57年	有
4	ホワイトハウス (旧アメリカ領事館官舎)	1898年 (明治31)	同 上	木造 平屋建	観光施設 (公開異人 館・民間)	不明	無
5	ムーア邸 (旧ドレウエル邸)	1898年 (明治31)	同 上	木造 2階建	住宅	不明	無
6	キャセリン・ アンダーセン邸	1899年 (明治32)	同 上	同上	観光施設 (公開異人 館・民間)	1992年	有
7	マリニン・フタレフ邸	1901年 (明治34)	同 上	同上	住宅	1952年	有
8	小林家住宅(萌黄の館、 旧シャープ住宅)	1903年 (明治36)	同 上、 重要文化財	同上	観光施設 (公開異人 館・市)	1978年	有 (神戸市)
9	丹生邸	1906年 (明治39)	同 上	同上	住宅	1959年	有
10	グラシアニ (旧グラシアニ邸)	1908年 (明治41)	同 上	同上	レストラン	1985年	有
11	洋館長屋 (旧榎田・橋邸)	1908年 (明治41)	同 上	同上	観光施設 (公開異人 館・民間)	1981年	有
12	K.K.バンボーレ (旧パラスチン邸)	1914年 (大正3)	同 上	同上	ファッション ギャラリー	1985年	有
13	ラインの館 (旧ドレウエル邸)	1915年 (大正4)	同 上	同上	観光施設 (公開異人 館・市)	1978年	有 (神戸市)
14	フロインドリープ邸	1907年 (明治40)	都市景観形成地 域内の重要な伝 統的洋風建築物	同上	住宅	1960年頃入 居、1968年所 有	有
15	浅木邸	1918年 (大正7)	同 上	同上	住宅	1949年	有
16	東天閣 (旧ビショッフ邸)	1894年 (明治27)	都市景観形成地 域に隣接(山本 通3丁目14-18)*1	同上	レストラン	1945年	有
17	プレスビテリアン ミッション (旧マカルピン邸)	1894年 (明治27)	都市景観形成地 域に近接(山本通 4丁目20-2)*2	同上	教会の施設	不明	無
18	旧ハンター住宅	1889年頃 (明治22頃)	重要文化財。 1963年、北野町 より移築	木骨煉瓦造 2階建	観光施設 (公開異人 館・市)	1961年 (兵庫県)	有 (神戸市)
19	旧ハッサム住宅	1902年 (明治35)	重要文化財。 1963年、北野町 より移築	木造 2階建	観光施設 (公開異人 館・市)	1961年	有 (神戸市)

*1) ①奈良国立文化財研究所・神戸市教育委員会 編『異人館のあるまち神戸北野・山本地区伝統的建造物
群調査報告』、神戸市、1982年4月、および②日本建築学会 編『日本近代建築総覧』、技報堂出版、
1980年3月30日、にリストアップされている。

*2) 上記②にリストアップされている。



※この図は、神戸市都市計画局・神戸市教育委員会 発行『北野・山本地区景観ガイドライン 神戸らしい都市景観をめざして』、1989年度、の24-25頁より転載し、加工したものである。

図4-1 神戸・異人館のペンキこすり出し調査対象建物の分布

7) 神戸市都市計画局・神戸市教育委員会発行『北野・山本地区景観ガイドライン 神戸らしい都市景観をめざして』(1989年度)および神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課 編集・発行『異人館のある町並み 北野・山本 神戸市北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区・20周年記念』(2000年3月)を参照。

8) 神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課 編集・発行『異人館のある町並み 北野・山本 神戸市北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区・20周年記念』(2000年3月)を参照。

9) 天川佳美、上山卓(以上、まちづくり株式会社コープラン)、山本俊貞(㈱地域問題研究所)、天川雅晴(㈱アップルプラン)、辰巳都志(武庫川女子大学教授)、コープラン主催自主ゼミの大阪大学の学生、である(所属は当時のもの)。

10) ヒアリング対象者は元神戸市文化財課・浜田有司氏、数多くの異人館の修理工事を施工している二和工務店、元北野・山本地区をまもり育てる会会長・矢木裕氏、画家・小松益喜氏の娘さん、の4名である。

11) 小松益喜 著『小松益喜画集 神戸の異人館』、神戸新聞出版センター、1976年11月6日。

12) 小松益喜 著『小松益喜素描集 戦前後の神戸異人館』、神戸新聞出版センター、1979年12月20日。

ある⁷⁾。

調査対象建物19棟の概要について、建築年代は明治期のものが16棟、大正期のものが3棟である(表4-1)。創建当初の旧用途はすべて住宅であるが、調査時点の現用途をみると、公開異人館と称する観光施設が最も多く8棟、住宅7棟、レストラン2棟、その他2棟であり、6割以上が住宅以外の用途へと転用されている。用途転用がなく、住宅として使われ続けているものでも、創建当初から同じ家が所有しているのは1棟しかなく、戦後すぐの1940年代、50年代に建物所有者・使用者が入れ替わっているケースが4棟と多くみられる。観光施設は神戸市所有のもの4棟が1960年代初頭と1970年代末に、民間のもの3棟は1980年代から90年代初頭の比較的最近に転用されたものである。これらの建物所有者・使用者の入れ替わりと観光施設への用途転用は、第2次世界大戦中の在留外国人の国外退去と戦後の日本人による異人館の所有、1970年代以降の地区の観光地化の進行という、この地区の歩んできた歴史がそのままあらわされている⁸⁾。

なお、調査は神戸市教育委員会社会教育部文化財課の佐藤定義が窓口となり、建物所有者の協力を取りつけ、筆者と前田芳伸(北海道大学建築工学科住居地計画学講座学生)を中心とし、小林郁雄(まちづくり株式会社コープラン)ほか神戸市民有志⁹⁾の協力を得て、1994年9月におこなった(所属は当時のもの)。また、本研究調査は平成5・6年度文部省科学研究費一般研究C(課題番号05650569)の助成を受けて実施した。

4-2-2 時層色環調査およびヒアリング調査

前章と同様に、こすり出しによるペンキ層の発掘、時層色環の発見・採集・記録、時層色環の各ペンキ層の色票化と調査票の作成、建物所有者または使用者へのヒアリング調査(19棟中15棟で実施、うち3棟は神戸市が所有・管理、1棟は神戸市が借上げ・管理)をおこなった。また異人館に関係の深い方々へのヒアリング調査も実施した¹⁰⁾。

4-2-3 神戸・異人館の色彩を描写した文献の収集調査

時層色環の分析結果を補足するものとして、異人館の色彩を描写した写実的な絵画や随筆等の芸術作品があげられる。その文献として、①神戸に在住し、異人館を描き続けた画家・故小松益喜氏の代表的作品集の一つである油絵の画集¹¹⁾(以下「小松画集」)、②もう一つの代表的作品集である素描集¹²⁾(以下「小松素描集」)、

③全国各地の明治の西洋館を描いた、画家・近岡善次郎氏の彩色スケッチ¹³⁾(以下「近岡スケッチ」)、④作家・堀辰雄が1934(昭和7)年12月に神戸を訪問した時の滞在記で、北野の町並みを描写した「旅の絵」¹⁴⁾、の4点を収集した。

13) 中村敏子 編『近岡善次郎描く 懐かしき 明治の西洋館』、東日本旅客鉄道株式会社、1990年2月20日。

14) 堀辰雄 著 「旅の絵」(河野仁昭 編『ふるさと文学館 第34巻【兵庫】』、pp35-47所収、株式会社ぎょうせい、1994年4月)。

4-3 従来の神戸・異人館の特色とされる色彩

異人館と地区景観に関して、1978(昭和53)年10月20日の神戸市都市景観条例制定、翌1979(昭和54)年10月30日の都市景観形成地域指定及び同年12月27日の伝建地区指定、1980(昭和55)年4月10日の重要伝建地区選定という過程を経て、景観の現状変更に対して基準にもとづき、神戸市行政による規制・誘導がおこなわれている。1989年度には地区景観ガイドラインがまとめられ、その中に地区情報として坂、緑、伝統的建造物と並び、異人館の色も取り上げられている。それによれば、異人館の特色ある色彩が図4-2のようなカラーパレットとして示され、次のように記述されている。

「異人館の色(外壁等) 北野・山本地区における異人館の特色の一つに、意匠とともに色彩もそれぞれが個性的で異なることがあげられる。これらは大きく基調色と強調色に分かれ、それぞれが一定の枠内に納まることで全体的な調和をみせている」、「〈基調色〉外壁の大部分を占める色で、建物全体のイメージを決めるものである。異人館では多くが暖かみのあるオフホワイト系もしくはライトベージュ系に納まっている」、「〈強調色〉扉や窓枠など場所や面積を限定して使われる色である。異人館では茶か緑という2つの傾向にはっきりと分けることができる」¹⁵⁾。すなわち、異人館は、外壁と扉や窓枠が異なる2つの色に塗り分けられ、外壁ではオフホワイト系とライトベージュ系の2色が、扉や窓枠では茶色と緑色の2色が主に使われ、それぞれの組み合わせによる4つのパターンの配色に分類でき、この一定の配色が個性的で調和ある町並みを特徴づけている、としている。

資料がカラープランニングセンターからの提供であることが明記されていることから、この異人館の特色ある色彩の根拠となったのは、同社がおこなった神戸の環境色彩調査結果であり、その調査が実施された1979(昭和54)年時点でのデータに基づくものであることがわかる¹⁶⁾。

15) 神戸市都市計画局・神戸市教育委員会発行『北野・山本地区景観ガイドライン 神戸らしい都市景観をめざして』(1989年度)のp26を参照。

16) このカラーパレットは、「資料提供：カラープランニングセンター」とあるように、カラープランニングセンター編『環境色彩デザイン—調査から設計まで』(美術出版社、1984年2月20日)のp42に掲載された、1979年調査の“神戸のカラーパレット”のうち、北野・山本地区の異人館に該当する色を抽出したものと思われる。また、特色ある色彩として表現された文章も、この参考文献とほぼ同じである。

異人館の色（外壁等）

北野・山本地区における異人館の特色の一つに、意匠とともに色彩もそれぞれが個性的で異なることがあげられる。

これらは大きく基調色と強調色に分かれ、それぞれが一定の枠内に納まることで全体的な調和をみせている。

《基 調 色》 外壁の大部分を占める色で、建物全体のイメージを決めるものである。異人館では多くがやや暖かみのあるオフホワイト系もしくはライトベージュ系に納まっている。



《強 調 色》 扉や窓枠など場所や面積を限定して使われる色である。異人館では茶が緑という2つの傾向にはつきりと分けることができる。



資料提供：カラープランニングセンター

— 26 —

※神戸市都市計画局・神戸市教育委員会 発行『北野・山本地区景観ガイドライン 神戸らしい都市景観をめざして』、1989年度、の26頁より転載したもの。

このカラーパレットは、カラープランニングセンター 編『環境色彩デザイン—調査から設計まで』、美術出版社、1984年2月、42頁に掲載された、1979年調査の“神戸のカラーパレット”のうち、北野・山本地区の異人館に該当する色を抽出したものである。

図4-2 従来の神戸・異人館の特色とされる色彩—1979年時点でのデータに基づく

4-4 時層色環の分析と各時代の町並み色彩の特徴

4-4-1 異人館の時層色環の分析

異人館のペンキこすり出しによる時層色環調査の結果、19 棟の建物ごとの各部位のペンキ層の数と色、その塗り始めから調査時点までの塗装順序がわかった。その概要を示したものが表 4-2 である。外壁の場合、ペンキ層数 5 層以下が 4 棟 (21.1%)、6 ~ 10 層が 7 棟 (36.8%)、11 ~ 15 層が 4 棟 (21.1%)、16 層以上が 4 棟 (21.1%)、平均 10.4 層、中位値 10 層、最多 20 層であった。函館の平均 6.7 層、最多 21 層とくらべて、平均で 3.7 層多いのが目立つ。これは、ペンキ層数 5 層以下が少なく、16 層以上が多い（函館ではそれぞれ 42%、3%）ことによるもので、神戸の異人館は函館とくらべてペンキ層が多く、すべての異人館が創建当初から塗装されていたと推定されることの裏付けになるものと思われる。なお、外壁以外の部位では、窓枠（10 棟が該当）のペンキ層数は平均 8.3 層、中位値 9 層、最多 16 層、柱型（6 棟が該当）のペンキ層数は平均 11.0 層、中位値 9 層、最多 20 層であった。典型的な時層色環の事例として、各部位においてペンキ層数が最も多かったもの、すなわち外壁 20 層、窓枠 16 層、柱型 20 層、扉枠 20 層のものを選び、その建物の外観とあわせて、写真 4-4 ~ 7 に示す。これらの時層色環をみると、近年は現状と同じ色を数回繰り返して用いているが、創建当初などの古いペンキ層では現状とは異なる色が使われていたようである。函館と同様に、すべてのペンキ層が同じ色で塗装されていた建物はなく、異なる色で塗り替えられていることがわかった。

この 19 棟の異人館ごとの外壁の時層色環について、第 2 章で記述した時層色環の分析手法を用い、建物ごとにペンキ層の各色の塗装年の特定・推定をおこない、その上で、各時代の町並み色彩の分析手法を援用した。すなわち、1) 前提の整理、2) 最新塗装年の特定・推定、3) 塗装間隔年の特定、4) 塗り始め年の特定・推定、5) 各ペンキ層の年代推定、6) 建物ごとの色彩変容データ票の作成をおこなった。ただし、神戸では窓枠や扉も重要な要素なので、分析のベースとして外壁のペンキ層に窓枠、柱型、扉等のペンキ層も加えたこと、また、すべての異人館が創建当初から塗装されていたと推定されること、の 2 つを函館とは異なる点として考慮した。この時層色環分析を 19 棟の異人館すべてについてまとめたものが表 4-3 である。最新塗装年については、神戸市の記録や文献¹⁷⁾、古い写真、建物所有者へのヒアリングから、1 棟を除

17) 伝統的建造物については、ペンキ塗装などの修理に対して神戸市等からの補助金が交付され、その交付年の記録が残されている。重要文化財については修理工事報告書に塗装年が明記されている。

表4-2 神戸・異人館のペンキこすり出しによる時層色環調査結果の概要

No	建物名称 (旧名称)	建築年	外壁の ペンキ層数	外壁以外の部位のペンキ層数			
				窓枠	柱型	扉枠	錠戸
1	スタデニック邸	1887-96年 (明治20代)	9	4	—	—	—
2	チャン邸 (前サッスーン邸)	1892年 (明治25)	10	—	—	20	—
3	門邸 (旧ディスレフセン邸)	1895年 (明治28)	17	—	20	—	—
4	ホワイトハウス (旧アメリカ領事館官舎)	1898年 (明治31)	13	16	—	—	—
5	ムーア邸 (旧ドレウエル邸)	1898年 (明治31)	3	—	9	—	—
6	キャセリン・アンダーセン邸	1899年 (明治32)	5	—	—	15	—
7	マリニン・フタレフ邸	1901年 (明治34)	6	5	—	—	—
8	小林家住宅(萌黄の館、 旧シャープ住宅)	1903年 (明治36)	16	3	—	—	—
9	丹生邸	1906年 (明治39)	7	—	7	—	—
10	グラシアニ (旧グラシアニ邸)	1908年 (明治41)	5	—	6	—	—
11	洋館長屋 (旧榊田・橘邸)	1908年 (明治41)	3	3	—	—	—
12	K.K.バンボーレ (旧パラスチン邸)	1914年 (大正3)	6	11	—	—	—
13	ラインの館 (旧ドレウエル邸)	1915年 (大正4)	20	—	9	—	—
14	フロイドリーブ邸	1907年 (明治40)	9	9	—	—	—
15	浅木邸	1918年 (大正7)	10	—	—	—	9
16	東天閣 (旧ビショッフ邸)	1894年 (明治27)	15	—	15	—	—
17	プレスビテリアンミッション (旧マカルピン邸)	1894年 (明治27)	19	13	—	—	—
18	旧ハンター住宅	1889年頃 (明治22頃)	12	9	—	—	—
19	旧ハッサム住宅	1902年 (明治35)	12	10	—	—	—
		最大層数	20	16	20	20	9
		平均層数	10.4	8.3	11.0	17.5	9.0
		中位値	10	9	9	—	—

網かけは、異人館において、外壁、それ以外の各部位のペンキ層数で最も多いものを示す。

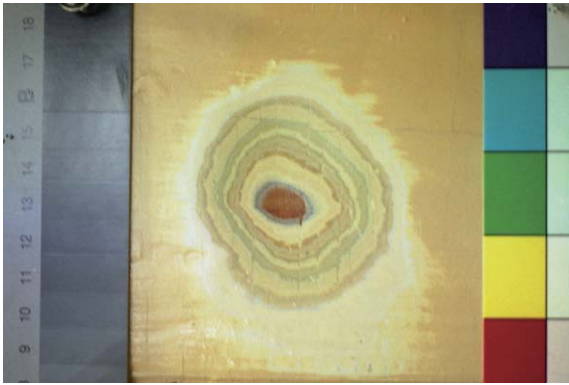


写真 4－4 外壁ペンキ層数最多の時層色環の事例－ No. 13. ラインの館 (1915 (大正 4) 年)
左：外壁ペンキ層数最多 20 層の時層色環、右：建物の外観



写真 4－5 窓枠ペンキ層数最多の時層色環の事例－ No. 4. ホワイトハウス (1898 (明治 31) 年)
左：窓枠ペンキ層数最多 16 層の時層色環、右：建物の外観

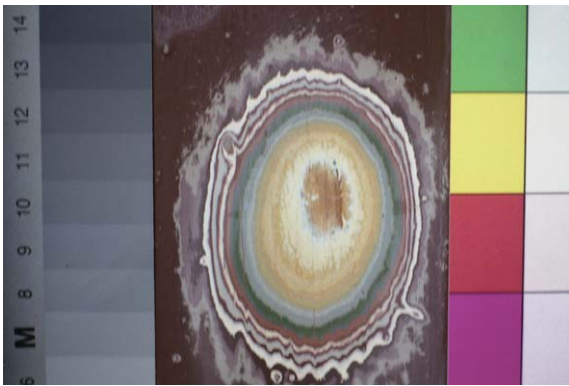


写真 4－6 柱型ペンキ層数最多の時層色環の事例－ No. 3. 門邸 (1895 (明治 28) 年)
左：柱型ペンキ層数最多 20 層の時層色環、右：建物の外観

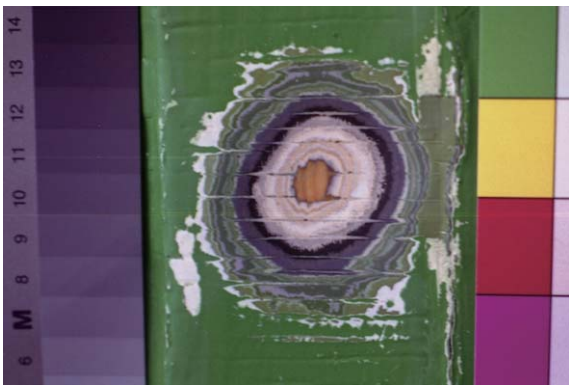


写真 4－7 扉枠ペンキ層数最多の時層色環の事例－ No. 2. チャン邸 (1892 (明治 25) 年)
左：扉枠ペンキ層数最多 20 層の時層色環、右：建物の外観

表4-3 異人館の時層色環の分析
ーペンキ層の最新塗装年、塗り始め年、塗装間隔の特定・推定

No.	建物名称	上塗ペンキ層数(総数)*1		最新塗装年の特定・推定	最新塗装年の特定・推定の方法*2	塗り始め年の特定・推定*3		特定できた塗装間隔年*4	推定塗装間隔年*5
		外壁	窓枠等			外壁	窓枠等		
1	スタデニック邸	8 (9)	2 (4)	1981年と特定	市の記録	1層目が創建当初の1892年頃と推定	1975年以前のペンキ層は消失と推定	6年	(11.8年)
2	チャン邸	9 (10)	17 (20)	1993年と特定	市の記録と建物使用者の言	1層目が創建当初の1892年と推定	同 左	11年	(7.7年)
3	門邸	17 (17)	16 (20)	1987年と特定	市の記録	1層目が創建当初の1895年と推定	同 左	5-6年	(5.4年)
4	ホワイトハウス	13 (13)	13 (16)	1994年と特定	市の記録	1層目が創建当初の1898年と推定	同 左	—	7年
5	ムーア邸	3 (3)	9 (9)	1980年と特定	市の記録	1962年以前のペンキ層は消失と推定	1層目が創建当初の1898年と推定	—	8.8年
6	キャセリン・アンダーセン邸	5 (5)	13 (15)	1993年と特定	市の記録と建物所有者の言	1966年以前のペンキ層は消失と推定	1層目が創建当初の1899年と推定	—	6.8年
7	マリニン・フタレフ邸	3 (6)	2 (5)	1988年と特定	市の記録と建物使用者の言	1970年代以前のペンキ層は消失と推定	1980年以前のペンキ層は消失と推定	8年	—
8	小林家住宅	14 (16)	1 (3)	1989年と特定	報告書	1層目が創建当初の1903年と推定	1989年以前のペンキ層は消失と推定	—	3.5年
9	丹生邸	7 (7)	6 (7)	1965年と特定	建物所有者の言	1層目が創建当初の1906年と推定	同 左	—	7.8年
10	グラシアニ	5 (5)	6 (6)	1984年と特定	市の記録と建物使用者の言	1層目が創建当初の1908年と推定	同 左	—	13.3年
11	洋館長屋	2 (3)	2 (3)	1992年と特定	市の記録と建物使用者の言	1981年の修理以前のペンキ層は消失と推定	同 左	11年	—
12	K.K.バンボーレ	5 (6)	10 (11)	1985年と特定	市の記録と建物所有者の言	1959年以前のペンキ層は消失と推定	1層目が創建当初の1914年と推定	—	6.6年
13	ラインの館	14 (20)	3 (9)	1993年と特定	市の記録と建物所有者の言	1層目が創建当初の1915年と推定	1977年の修理以前のペンキ層は消失と推定	8年	(4.6年)
14	フロインドリープ邸	6 (9)	6 (9)	1990-91年と特定	建物所有者の言	1層目が創建当初の1907年と推定	同 左	7-8年	—
15	浅木邸	8 (10)	6 (9)	1984年と特定	建物所有者の言	1層目が創建当初の1918年と推定	同 左	10年	(6年)
16	東天閣	15 (15)	12 (15)	1989年と特定	写真と建物使用者の言	戦前のペンキ層は消失と推定	戦前のペンキ層は消失と推定	4年	—
17	プレスビテリアンミッション	17 (19)	10 (13)	1989年頃と推定	ペンキ層数を推定塗装間隔年で均等割り	1層目が創建当初の1894年と推定	同 左	—	5.2年
18	旧ハンター住宅	10 (12)	8 (9)	1993年と特定	建物所有者の言	1層目が創建当初の1889年と推定	同 左	—	7.8年
19	旧ハッサム住宅	6 (12)	5 (10)	1993年と特定	建物所有者の言	3層目が創建当初の1902年と推定	同 左	—	12.3年
		中位値8 (10) 平均値8.8 (10.4)	中位値6 (9) 平均値8.1 (9.8)					中位値8年 平均値6.5年	中位値7.4年 平均値7.9年

*1) ペンキ層の下塗の判断の方法と重要文化財建物の修理工事報告書等の資料にもとづき、下塗層、中塗層を判断し、それらを除いた上塗層を特定・推定したものである。

*2) ①伝統的建造物については、ペンキ塗装などの修理に対して神戸市等からの補助金が交付され、その交付年の記録が残されており塗装年の特定ができる（神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課 編集・発行『異人館のある町並み 北野・山本 神戸市北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区・20周年記念』、2000年3月を参照）。

②建物所有者または使用者のヒアリングから塗装年を特定（「建物所有者の言」、「建物使用者の言」）。

③重要文化財建物の修理工事報告書から塗装年を特定（「報告書」、財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財小林家住宅保存修理工事報告書』、重要文化財小林家住宅修理委員会、1989年9月を参照）。

④建物使用者所蔵の日付入りの写真から塗装年を特定（「写真」）。

*3) 基本的には創建当初からペンキが塗装されていたと推定した。ただし、ペンキ層数が著しく少なく、1層目が創建当初から塗装されていたものとする、塗装間隔が特定・推定された最大13.33年をこえて20年以上になってしまうものについては、ある時点からのペンキ層は消失したもの（その原因は、修理にともなう下見板等の建築材料の張り替え、ペンキの塗り替え時における古いペンキ塗膜の徹底した掻き落とし、などが考えられる）と判断した。消失時点は、建物所有者または使用者のヒアリングや、外壁と窓枠等のペンキ色彩の組合せにもとづいて判断した。また、建物所有者または使用者のヒアリングにもとづき、ペンキ層が消失したと思われるものもみられた。

*4) 最新塗装年を特定できた18棟のうち、建物所有者または使用者のヒアリングから塗装間隔そのものを特定できたものと、隣り合うペンキ層の塗装年を特定できたことによって塗装間隔年を把握できたものがある。

*5) 塗装間隔は、最新塗装年から塗り始め年と戦中の12年間の塗装空白期間を差し引き、その間のペンキ層で均等割りする（関係式：推定塗装間隔年＝（最新塗装年－塗り始め年（建築年）－12年）／（上塗ペンキ層数－1））ことによって推定した。なお、建物所有者・使用者の所有年・入居年はすべて戦後の1945年以降のため、戦前のペンキ層の塗装年については特定が不可能であった。

く 18 棟で特定できた。また、9 棟でペンキ層間の塗装間隔年が特定でき、その最短は 4 年、最長は 11 年、平均 6.5 年、中位値 8 年であった。また、ペンキ層の塗装年の推定によって得られた塗装間隔年の平均は 7.9 年、中位値 7.4 年で、函館の平均 7 層前後と大きな違いはみられなかった。

図 4-3 ～ 5 は、現状で典型的な配色をもつ、異人館 3 事例の時層色環分析による色彩変容データ票を示したものである。図 4-3 は、現状の外壁がライトベージュ系、窓枠や柱型が茶色の典型的な配色をもち、外壁のペンキ層数が最多の 20 層の事例、No.13. ラインの館である。時層色環調査の結果、外壁から 20 層、柱型から 9 層のペンキ層があらわれた。この異人館は、重要伝統的建造物群保存地区内の伝統的建造物に指定されており、保存修理に際して行政から補助金が支出されるが、その神戸市の補助金交付記録¹⁸⁾から 1993 年と 1985 年に塗り替えられていることがわかっている。調査協力者の神戸市教育委員会文化財課・佐藤氏へのヒアリングからも同様のことがあきらかにされている。したがって、現状の色彩である外壁 20 層目のライトベージュ系と柱型 9 層目の茶色は、1993 年に塗装されたものと特定できる。1985 年塗装時の配色も現状と同じなので、外壁 17 層目のライトベージュ系と柱型 5 層目の茶色が 1985 年に塗装されたものと特定した。外壁 18 層目の白色と 19 層目のライトベージュ系、柱型 6 層目の白色と 8 層目のオフホワイト系は、それぞれ 1993 年塗装時の下塗りと中塗り、さらに柱型 7 層目の濃い灰色は表面の凹凸を補修し平坦にするパテと判断した。また同様に、前神戸市教育委員会文化財課・浜田氏へのヒアリングから、「神戸市がこの建物を取得した 1977 年にペンキ改修をおこなっている」ので、外壁 14 層目のライトベージュ系と柱型 2 層目の茶色が 1977 年に塗装されたものと特定し、外壁 15 層目の白色と 16 層目のライトベージュ系、柱型 3、4 層目の白色は、それぞれ 1985 年塗装時の下塗りと中塗りと判断した。残るペンキ層については、外壁 13 層目のライトベージュ系と柱型 1 層目の白色は、1977 年塗装時の下塗りと判断した。外壁 1 層目から 12 層目については、1 層目の灰色は 1915 年の創建時に塗装されたものと推定し、他の色の年代は、下塗りと判断した 11 層目を除き、1 層目の 1915 年と 13、14 層目の 1977 年までの 62 年間から戦時中の 12 年間（1939 ～ 50 年頃）を差し引いた 50 年間の塗装間隔を均等割りして（4.55 年）推定した。「小松画集」にこの建物を描いた作品「オーバーライン氏邸」1960 年頃制作、があり、現状とほぼ同様の、外壁がライトベージュ系、窓

18) 神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課 編集・発行『異人館のある町 並み 北野・山本 神戸市北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区・20 周年記念』(2000 年 3 月)の pp67-70 を参照。

外壁の時層色環のペンキ層の色票	外壁および柱型ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定	柱型の時層色環のペンキ層の色票
-----------------	--------------------------	-----------------

層目	色 票
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	
10	
11	(下塗り)
12	
13	(下塗り)
14	
15	白色 (下塗り)
16	(中塗り)
17	
18	白色 (下塗り)
19	(中塗り)
20	

1915年：創建当初より塗装されていたと推定。

1920年頃：

1924年頃：

1929年頃：

1933年頃：

1938年頃：外壁2～12層目の(下塗りを除く)10の色の年代は、1層目の1915年と13、14層目の1977年までの62年間から戦時中の12年を差し引いた50年間の塗装間隔を均等割りして(4.55年)推定。また、下記の絵画を参考。

1954年頃：

1959年頃：

1963年頃：

1968年頃：

1972年頃：

1977年：神戸市前文化財課・浜田氏の言「神戸市がこの建物を取得した1977年にペンキ改修をおこなっている」より特定。

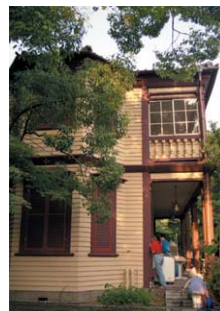
1985年：神戸市の補助金交付記録と神戸市文化財課・佐藤氏の言より特定。

1993年：神戸市の補助金交付記録と神戸市文化財課・佐藤氏の言より特定。

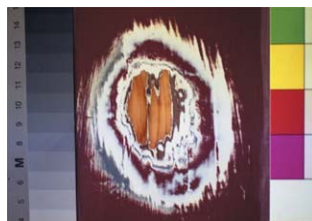
層目	色 票
1	白色 (下塗り)
2	
3	白色 (下塗り)
4	白色 (中塗り)
5	
6	白色 (下塗り)
7	(パテ)
8	(中塗り)
9	



「オーバーライン邸」1960年頃制作。上記の外壁8層目に該当する。小松益喜著「小松益喜画集」、神戸新聞出版センター、1976. 11、より転載。



外壁の時層色環 (20層)



柱型の時層色環 (9層)

建物外観

図4-3 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例1
：現状の外壁がライトベージュ系、窓枠や柱型が茶色の典型的な配色をもち、外壁のペンキ層数が最多の20層の事例
ー調査対象 No. 13. ラインの館ー

枠や柱型が茶色の配色で描かれている。これは外壁 8 層目に該当すると推定される。なお、柱型では、1977 年の補修時にペンキ層を完全に取り除いたか、もしくは柱型そのものを新しいものへ取り替えたことにより、1977 年以前のペンキ層が除去されたものと推定される。

図 4-4 は、現状の外壁がオフホワイト系、窓枠や柱型が茶色の典型的な配色をもち、外壁以外の部位で柱型のペンキ層数が最多の 20 層の事例、No.3. 門邸である。時層色環調査の結果、外壁から 17 層、柱型から 20 層のペンキ層があらわれた。この異人館も重要伝統的建造物群保存地区内の伝統的建造物に指定されており、神戸市の補助金交付記録から、現状の外壁 17 層目と柱型 20 層目は 1987 年塗装と特定した。また、建物所有者へのヒアリングから、「37、8 年前に所有と同時に居住。ペンキの塗り替えは 5、6 年に一度、6、7 回塗り替えているが、その間ずっと現在（1994 年）と同じ色でしてきている」ことがわかった。これに基づき、外壁では 11 ～ 16 層目のオフホワイト系が、柱型では 10、11、13、15、17、18 層目の茶色がそれらのペンキ層に該当するもの（柱型 12、14、16、19 層目のライトベージュ系やオフホワイト系は下塗り）と判断し、外壁 11 層目のオフホワイト系と柱型 10 層目の茶色が、所有と同時に居住した 37、8 年前の 1956 年頃に塗装されたものと特定した。残る外壁 12 ～ 16 層目と柱型の 5 つのペンキ層は、1956 年と 1987 年までの 31 年間の塗装間隔を均等割りして（5.17 年）、それぞれの塗装年代を特定した。この門邸が描かれた絵画や写真は、1962 年制作のものと思われる「近岡スケッチ」、「小松画集」の中の 1970 年から 74 年にかけて制作された 3 点の作品－「渡り廊下のある異人館」、「山本通りの異人館」、「最後の異人館」－ほか多数見られるが、上述のペンキ層の色の年代特定は、これらの作品に描かれた色からも裏付けられる。

図 4-5 は、現状の外壁がオフホワイト系、窓枠や柱型が緑色の典型的な配色をもち、外壁とそれ以外の部位のペンキ層数がそれぞれ 15 層と比較的多い事例、No.16. 東天閣である。この異人館は、重要伝統的建造物群保存地区からも都市景観形成地域からみはずれたエリアにあり、したがって、神戸市の指定を受けていない。1945 年にレストランへ転用され、以降現在まで続いており、その経営者である建物使用者からのヒアリングと、使用者が撮影した写真から、いくつかのペンキ層の色の年代を特定、推定することができた。まず最初に、「現在のペンキ層は 1989 年に塗った」とする使用者の言と 1989 年撮影の写真から、現状の外壁 15 層目

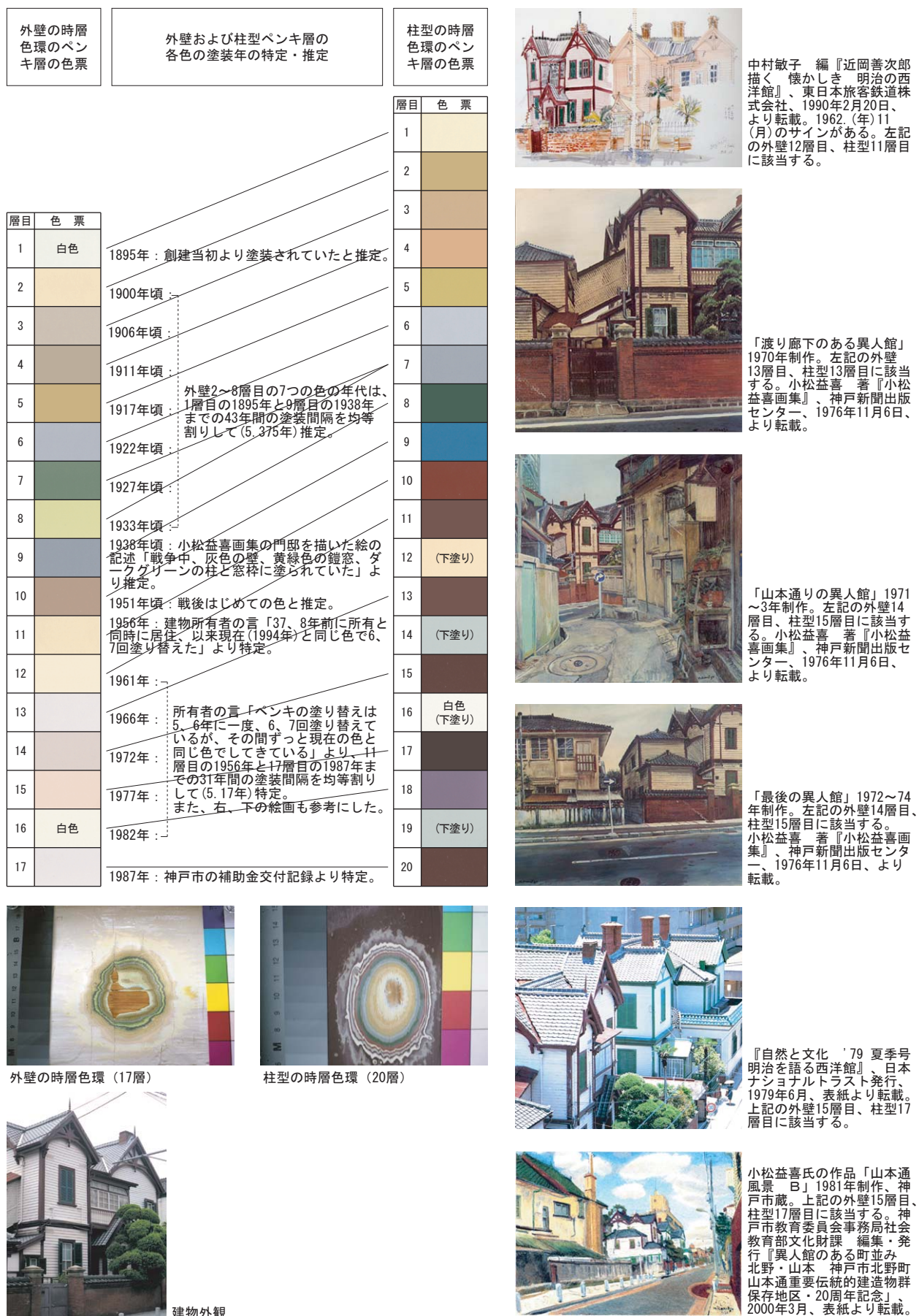
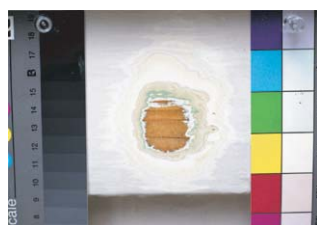


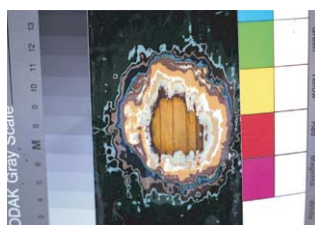
図 4-4 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例 2

：現状の外壁がオフホワイト系、窓枠や柱型が茶色の典型的な配色をもち、外壁以外の部位で柱型のペンキ層数が最多の 20 層の事例ー調査対象 No. 3. 門邸ー

外壁の時層色環のペンキ層の色票	外壁および柱型ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定	柱型の時層色環のペンキ層の色票
層目 色 票		層目 色 票
1 白色	塗装年不明	1 白色
2	1951年頃：建物使用者の言「昭和20年代に薄いグリーンを塗ったことがある」より推定。	2
3	1954年頃：1956年頃：1956年撮影の写真より推定。	3
4	1957年頃：1958年～1960年	4 白色
5	1958年頃：5～8層目の4つの色の年代は、4層目の1956年と9層目の1961年までの5年間の塗装間隔を均等割りして(1年)推定。	5
6	1959年頃：1960年頃：1961年頃：下の絵画と使用者の言「昭和30年代に茶色を2回続けて塗ったことがある」より推定。	6
7	1960年代中・後期：使用者の言「昭和30年代に茶色を2回続けて塗ったことがある」より推定。	7
8 白色	1975年頃：1975年撮影の写真で外壁10層・柱型7層の配色のものがあつたことと、使用者の言「緑、青、茶をローテーション」より推定。	8 (下塗り?)
9	1977年頃：1977年撮影の写真より推定。	9
10	1981年：使用者の言「柱型第13層の4年前に塗り替えた」より特定。	10
11 白色	1985年・1986年撮影の写真と使用者の言「柱型第15層の4年前に塗り替えた」より特定。	11
12	1989年：1989年撮影の写真と使用者の言「現在のペンキ層は1989年に塗った」より特定。	12 (下塗り)
13 白色		13
14		14 (下塗り)
15		15



外壁の時層色環 (15層)



柱型の時層色環 (15層)



建物外観



中村敏子 編『近岡善次郎描く 懐かしき 明治の西洋館』、東日本旅客鉄道株式会社、1980年2月、より転載。この本に載せられた神戸の他の西洋館の多くに1962.(年)11.(月)のサインがあり、これも同じ1962年に描かれたものと推定され、上記の外壁9層目、柱型6層目に該当する。

図4-5 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例3
：現状の外壁がオフホワイト系、窓枠や柱型が緑色の典型的な配色をもち、外壁とそれ以外の部位のペンキ層数がそれぞれ15層と比較的多い事例
—調査対象 No.16. 東天閣—

のオフホワイト系と柱型 15 層目の緑色は 1989 年塗装と特定した。次に、外壁 14 層目のライトベージュ系と柱型 13 層目の茶色は「柱型 15 層目の 4 年前に塗り替えた」とする使用者の言と 1986 年撮影の写真がほぼ同じ配色であったことから 1985 年塗装と、また、外壁 13 層目のオフホワイト系と柱型 11 層目の濃青色は「柱型 13 層目の 4 年前に塗り替えた」とする使用者の言から 1981 年塗装と、それぞれ特定した。柱型 12 層目と 14 層目のペンキはそれぞれ下塗りと判断した。外壁 12 層目のライトベージュ系と柱型 10 層目の青色は 1977 年撮影の写真から、同じ塗装間隔 4 年前の 1977 年塗装と推定した。「昭和 30 年代に茶色を 2 回続けて塗ったことがある」、「緑、青、茶をローテーション」とする使用者の言と、ライトベージュ系の外壁と茶色の柱型に描かれた 1962 年制作と推定される「近岡スケッチ」と、さらには外壁 10 層目のライトベージュ系と柱型 7 層目の茶色の配色の 1975 年撮影の写真から、外壁 9 層目のライトベージュ系と柱型 6 層目の茶色は 1961 年塗装、外壁 10 層目のライトベージュ系と柱型 7 層目の茶色は 1960 年代中・後期塗装、外壁 11 層目のオフホワイト系と柱型 9 層目の緑色は 1975 年塗装とそれぞれ推定した。さらに、外壁 4 層目と柱型 2 層目の薄緑色は、1956 年撮影の写真がほぼ同じ配色であったことから、1956 年塗装と推定した。「昭和 20 年代に薄いグリーンを塗ったことがある」とする使用者の言から、外壁 2 層目は戦後まもなくの 1951 年と推定し、外壁 3 層目の黄緑色は、外壁 2 層目と 4 層目の塗装間隔を均等割りして 1954 年塗装と推定した。残る外壁 5～8 層目の 4 つのペンキ層は、その前後の外壁 4 層目と 9 層目の間の塗装間隔を均等割りして (1 年)、それぞれの塗装年代を推定した。柱型 3～5 層目の 3 つのペンキ層も同様に推定した。以上のようにペンキ層各層の年代を特定・推定した結果、最後に外壁 1 層目の白色と柱型 1 層目の茶色が残ったが、これを創建時の 1894 年塗装とすると、外壁 2 層目の 1951 年推定塗装との間隔が 57 年と空き過ぎており、不自然である。むしろ何らかの事情により (例えば、戦後すぐに大規模の改修がおこなわれ、ペンキ層がきれいに剥がされたか、もしくは下見板が張り替えられたかするなど)、創建当初から戦前までのペンキ層は失われたとみる方が妥当であろうと判断し、外壁と柱型の 1 層目は塗装年を特定、推定するものがなく、不明とした。

4-4-2 時層色環分析による各時代の町並み色彩

前節までの 1)～6) の手順に加えて、7) 時代区分を設定した上で、

全建物の色彩変容データ票の集計をおこない、各時代における色の種類と数を把握した。

表 4-4、4-5 と図 4-6 は、この 1) ～ 7) の手順で作成した、外壁および窓枠・柱型等のペンキ色彩変遷の一覧表とカラーパレットである。これは、19 棟の異人館において、外壁では全部で 75 種類、160、窓枠等では 79 種類、141 を数えたすべての上塗りペンキ色彩を対象として、①建物の塗装間隔が特定できた 9 棟では 4 ～ 11 年の範囲で中位値 8 年、平均値 6.5 年、推定できた 10 棟では 3.5 ～ 13.33 年の範囲で中位値 7.4 年、平均値 7.9 年であったことと、一般的な時代の区切りを考慮して、おおむね 10 年ごとに、明治中期（1887-1897）、明治後期（1898-1912）、大正期（1912-1926）、昭和初期（1926-1939）、戦中（1939-1950）、1950 年代、1960 年代、1970 年代、1980 年代、1990 年代（1994 年まで）の 10 期に分類し、② 10 期の各時代の期間内に該当する外壁と窓枠等の色彩を抽出し、③それを色相によって、外壁ではオフホワイト系、ライトベージュ系、緑系、灰系、ピンク系、ダークベージュ系、黒系、青系、黄系の 9 種類に、窓枠等では茶系、緑系、オフホワイト系、ダークベージュ系、灰系、ライトベージュ系、ピンク系、黄土系、青系、黒系の 10 種類にまとめ、その順に並べたものである。

また、表 4-6、表 4-7 は表 4-4、表 4-5、図 4-6 にもとづき、各時代ごとに各種類の色彩の数をカウントしたものである。

これらによると、異人館の特徴的な色彩とされている外壁のオフホワイト系、ライトベージュ系は、戦前も使われてはいるが、両者あわせて全体の 40%未満とそれほど多くない。1960 年代になって 74%と全体の 3/4 を占めるようになる。それ以前の 1950 年代まではこれらの色のほかにも緑系、灰系、ピンク系、ダークベージュ系、黒系、青系の様々な色が使われ、濃いめの色が目立つ。その中でもとくに緑系、灰系の色が多くみられる。また、1980 年代以降になるとライトベージュ系は減り、オフホワイト系が全体の 68 ～ 83%と特化する傾向にある。一方、窓枠等の特徴的な色彩とされている茶系、緑系についても、戦前までは両者あわせて全体の 40%以下であり、とくに茶系は少ない。1950 年代まではこれらの色のほかにもオフホワイト系、ダークベージュ系、灰系、ライトベージュ系、ピンク系、黄土系、青系、黒系の様々な色が使われていた。その中でもとくにオフホワイト系と灰系の色が多くみられる。1960 年代になって茶系、緑系あわせて 82%と急激に増え、以降 1990 年代まで 80%前後を占めている。1980 年代にはオフホワイト系が茶系と並び全体の 23%を占め、1990 年代に

表4－4 19 棟の建物ごとの、10 期の各時代の期間内で塗装された外壁の色

19棟の各建物			時代区分と外壁のペンキ層の色の塗装年代									
No.	建物名称	建築年	明治中期 1887-97年	明治後期 1898-1912年	大正期 1912-1926年	昭和初期 1926-1939年	戦中 1939-1950年	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代 (～1994年)
1	スタデニック邸	1887-96(明治20代)年	緑	緑	緑	緑	(未塗装)	ピンク	ライトベージュ	ライトベージュ	ホワイト	(未塗装)
2	チャン邸	1892(明治25)年	ピンク	(未塗装)	灰	黒	(未塗装)	ライトベージュ ×2	ライトベージュ	ライトベージュ	黄	ホワイト
3	門邸	1895(明治28)年	ホワイト	ライトベージュ、 ターカーベージュ×2	ライトベージュ、 灰	緑×2、 灰	(未塗装)	ターカーベージュ、 ライトベージュ	ライトベージュ、 ホワイト	ホワイト、 ピンク	ホワイト ×2	(未塗装)
4	ホワイトハウス	1898(明治31)年	－	ライトベージュ ×2、灰	ホワイト、 灰	ホワイト	(未塗装)	ホワイト ×2	ホワイト	ホワイト	ホワイト ×2	ホワイト
5	ムーア邸	1898(明治31)年	－	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	(剥離?)	ホワイト	ライトベージュ	ホワイト	(未塗装)
6	キャセリン・ アンダーセン邸	1899(明治32)年	－	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	(剥離?)	ホワイト	ホワイト ×2	ライトベージュ	ホワイト
7	マリニン・ フタレフ邸	1901(明治34)年	－	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	(剥離?)	(剥離?)	ホワイト	ライトベージュ ×2	(未塗装)
8	小林家住宅	1903(明治36)年	－	緑×3	緑×3、 ホワイト	ターカーベージュ、 灰×2、ホワイト	(未塗装)	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	緑(萌黄)	(未塗装)
9	丹生邸	1906(明治39)年	－	ホワイト	灰、 ホワイト	緑、 ライトベージュ	(未塗装)	ピンク	ホワイト	(未塗装)	(未塗装)	(未塗装)
10	グラシアニ	1908(明治41)年	－	ホワイト	ライトベージュ	ホワイト	(未塗装)	(未塗装)	ピンク	(未塗装)	ホワイト	(未塗装)
11	洋館長屋	1908(明治41)年	－	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	ホワイト	ホワイト
12	K.K.バンボーレ	1914(大正3)年	－	－	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	ホワイト	緑	灰、緑	ホワイト	(未塗装)
13	ラインの館	1915(大正4)年	－	－	灰×2、 ライトベージュ	ライトベージュ× 2、ターカーベ- ージュ	(未塗装)	緑、 ライトベージュ	緑、 ライトベージュ	ライトベージュ ×2	ライトベージュ	ライトベ- ージュ
14	フロインドリープ邸	1907(明治40)年	－	灰	(未塗装)	緑	(未塗装)	(未塗装)	ホワイト	ホワイト	ホワイト	ホワイト
15	浅木邸	1918(大正7)年	－	－	緑、 ピンク	ライトベージュ、 緑	(未塗装)	緑	緑	緑	ホワイト	(未塗装)
16	東天閣	1894(明治27)年	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	緑×3、ターカーベ- ージュ、オ	ホワイト、黄、 ライトベージュ	ホワイト、 ライトベージュ	ホワイト×2、 ライトベージュ	(未塗装)
17	プレスビテリアン ミッション	1894(明治27)年	灰	緑、ライトベ- ージュ×2	ターカーベージュ、ラ- イトベージュ、ラ- イト	ホワイト×2	(未塗装)	ライトベージュ ×2	ライトベージュ、 ホワイト	ライトベ- ージュ、 ホワイト	ホワイト ×2	(未塗装)
18	旧ハンター住宅	1889(明治22)年頃	ライトベ- ージュ、緑	灰、 緑	ホワイト	緑、 ピンク	(未塗装)	青	(緑)	(未塗装)	(未塗装)	緑
19	旧ハッサム住宅	1902(明治35)年	－	緑	灰	緑	(未塗装)	緑	(緑)	(未塗装)	(未塗装)	緑

この表は、北野町山本通地区における19棟の建物ごとの色彩変容データ票と、表4-3の各ペンキ層の塗装年の特定・推定にもとづき、①明治中期(1887-1897年)、明治後期(1898-1912年)、大正期(1912-1926年)、昭和初期(1926-1939年)、戦中(1939-1950年)、1950年代、1960年代、1970年代、1980年代、1990年代(～1994年)、の10期の時代区分を設定し、②各建物の外壁ペンキ層の色を主に色相からオフホワイト系、ライトベージュ系、緑系、灰系、ピンク系、ダークベージュ系、黒系、青系、黄系の9種類に分類し、③10期の各時代の期間内に塗装されたと特定、推定できたすべての色を示したものである。

- ・色の表示は、オフホワイト系をオフホワイトのように、系を省略している。
- ・同じ時代区分内に、例えば同じライトベージュ系の色を2回塗装しているものについては、ライトベージュ×2のようにあらわしている。
- ・No.18,旧ハンター住宅とNo.19,旧ハッサム住宅は、いずれも1963年に北野町から他の場所へと移築されており、1960年代に塗装された色は、この移築後のものと考えられ、カッコで示してある。
- ・(未塗装)は、区分設定した時代の期間内にペンキの塗り替えはおこなわれず、その前の時代に塗装されたペンキのままであったことを示す。
- ・(剥離?)は、ペンキ層が剥がされたか、もしくは下見板等が張り替えられた可能性が高く、古いペンキ層を確認することができなかったことを示す。

表 4－5 19 棟の建物ごとの、10 期の各時代の期間内で塗装された窓枠・柱型等の色

19 棟の各建物			時代区分と窓枠等のペンキ層の色の塗装年代									
No.	建物名称	建築年	明治中期 1887-97年	明治後期 1898-1912年	大正期 1912-1926年	昭和初期 1926-1939年	戦中 1939-1950年	1950年代 (剥離?)	1960年代 (剥離?)	1970年代	1980年代	1990年代 (～1994年)
1	スタデニツク邸	1887-96(明治20代)年	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	(剥離?)	(剥離?)	茶	茶	(未塗装)
2	チャン邸	1892(明治25)年	オホワイト	オホワイト、 ダークページュ	ライトページュ、 オホワイト	灰、黒	灰、オホワイト	緑×3	緑×2	緑	緑	緑
3	門邸	1895(明治28)年	オホワイト	黄土、ダーク ページュ、ピソク	緑、灰	灰、緑	(未塗装)	青、茶	茶×2	茶×2	茶×2	(未塗装)
4	ホワイトハウス	1898(明治31)年	－	ライトページュ、 緑×2	ライトページュ ×2	灰	(未塗装)	灰、 オホワイト	灰	緑	オホワイト ×2	オホワイト
5	ムーア邸	1898(明治31)年	－	緑、 ダークページュ	灰、 ダークページュ	オホワイト	(未塗装)	灰	ライトページュ	オホワイト	オホワイト	(未塗装)
6	キャセリン・ アンダーセン邸	1899(明治32)年	－	緑×2	緑×2、 ダークページュ	ライトページュ	(未塗装)	茶×2	茶	茶、 緑	緑	緑
7	マリニン・ フタレフ邸	1901(明治34)年	－	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	緑×2	(未塗装)
8	小林家住宅	1903(明治36)年	－	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	緑	(未塗装)
9	丹生邸	1906(明治39)年	－	灰	灰、 緑	ライトページュ	(未塗装)	オホワイト	緑	(未塗装)	(未塗装)	(未塗装)
10	グラシアニ	1908(明治41)年	－	茶	灰	オホワイト	(未塗装)	(未塗装)	茶	(未塗装)	オホワイト	(未塗装)
11	洋館長屋	1908(明治41)年	－	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	緑	緑
12	K.K.バンボーレ	1914(大正3)年	－	－	茶×2	緑、 オホワイト	(未塗装)	オホワイト、 緑	緑	緑×2	緑	(未塗装)
13	ラインの館	1915(大正4)年	－	－	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	(剥離?)	(剥離?)	茶	茶	茶
14	フロインドリープ邸	1907(明治40)年	－	灰	(未塗装)	緑	(未塗装)	(未塗装)	緑	緑	緑	緑
15	浅木邸	1918(大正7)年	－	－	茶	緑	(未塗装)	緑	緑	緑	オホワイト	(未塗装)
16	東天閣	1894(明治27)年	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(未塗装)	緑、ダークペー ージュ、オホワイト	ライトペー ージュ、茶×2	緑、青	青、茶、 緑	(未塗装)
17	プレスビテリアン ミッション	1894(明治27)年	緑	ライトページュ	緑、 灰	緑	(未塗装)	灰	緑	緑	緑×2	(未塗装)
18	旧ハンター住宅	1889(明治22)年頃	オホワイト	オホワイト	青	オホワイト、 ダークページュ	(未塗装)	ピソク	オホワイト	(未塗装)	(未塗装)	(未塗装)
19	旧ハッサム住宅	1902(明治35)年	－	緑	(未塗装)	緑	(未塗装)	緑	(緑)	(未塗装)	(未塗装)	(未塗装)

この表は、北野町山本通地区における19棟の建物ごとの色彩変容データ票と、表4-3の各ペンキ層の塗装年の特定・推定にもとづき、①明治中期(1887-1897年)、明治後期(1898-1912年)、大正期(1912-1926年)、昭和初期(1926-1939年)、戦中(1939-1950年)、1950年代、1960年代、1970年代、1980年代、1990年代(～1994年)、の10期の時代区分を設定し、②各建物の窓枠等ペンキ層の色を主に色相から茶系、緑系、オフホワイト系、ダークページュ系、灰系、ライトページュ系、、ピンク系、黄土系、青系、黒系の10種類にそれぞれ分類し、③10期の各時代の期間内に塗装された特定・推定できたすべての色を示したものである。

- ・色の表示は、茶系を茶のように、系を省略している。
- ・同じ時代区分内に、例えば同じ緑系の色を2回塗装しているものについては、緑×2のようにあらわしている。
- ・No.18.旧ハンター住宅とNo.19.旧ハッサム住宅は、いずれも1963年に北野町から他の場所へと移築されており、1960年代に塗装された色は、この移築後のものと考えられ、カッコで示してある。
- ・(未塗装)は、区分設定した時代の期間内にペンキの塗り替えはおこなわれず、その前の時代に塗装されたペンキのままであったことを示す。
- ・(剥離?)は、ペンキ層が剥がされたか、もしくは下見板等が張り替えられた可能性が高く、古いペンキ層を確認することができなかったことを示す。

【外壁下見板のペンキ色彩】	時代	【窓枠・柱型等のペンキ色彩】
	明治 中期	
	明治 後期	
	大正 期	
	昭和 初期	
	戦中	
	1950 年代	
	1960 年代	
	1970 年代	
	1980 年代	
	1990 年代	

注) 四角の線で囲まれているのは白色を示す。

図4-6 神戸・異人館19棟の外壁下見板と窓枠・柱型等のペンキ色彩時代変遷カラーパレット
ーペンキ層の年代特定・推定手法による

表４－６ 外壁下見板のペンキ色彩の変遷ーペンキ層の年代特定・推定手法による

時代区分 色彩	明治中期 (1887- 1897)	明治後期 (1898- 1912)	大正期 (1912- 1926)	昭和初期 (1926- 1939)	戦中 (1939- 1950)	1950 年代	1960 年代	1970 年代	1980 年代	1990 年代 (~1995)
オフホワイト系	1 (17)	2 (11)	5 (22)	5 (21)	-	4 (18)	8 (42)	8 (42)	15 (68)	5 (83)
ライトベージュ系	1 (17)	5 (26)	4 (17)	4 (17)	-	7 (32)	6 (32)	7 (37)	5 (23)	1 (17)
緑系	2 (33)	7 (37)	5 (22)	8 (33)	-	6 (27)	3 (16)	2 (11)	1 (5)	-
灰系	1 (17)	3 (16)	7 (30)	3 (13)	-	-	-	1 (5)	-	-
ピンク系	1 (17)	-	1 (4)	1 (4)	-	2 (9)	1 (5)	1 (5)	-	-
ダークベージュ系	-	2 (11)	1 (4)	2 (9)	-	2 (9)	-	-	-	-
黒系	-	-	-	1 (4)	-	-	-	-	-	-
青系	-	-	-	-	-	1 (5)	-	-	-	-
黄系	-	-	-	-	-	-	1 (5)	-	1 (5)	-
合 計	6 (100)	19 (100)	23 (100)	24 (100)	0 (100)	22 (100)	19 (100)	19 (100)	22 (100)	6 (100)

数値は各時代の期間内に存在し、ペンキが塗られ、色が確認できる建物において、その色のペンキが塗られた回数を示す。1棟の建物である時代の期間内に2回以上塗られたものも数多くみられるが、そのすべての回数をカウントしている。カッコ内は、時代区分ごとの建物にペンキが塗られた回数の合計値を100とした時の割合%を示す。なお、各時代区分において最も多い色に濃い網かけを、2番目に多い色に薄い網かけをおこなっている。

表４－７ 窓枠・柱型等のペンキ色彩の変遷ーペンキ層の年代特定・推定手法による

時代区分 色彩	明治中期 (1887- 1897)	明治後期 (1898- 1912)	大正期 (1912- 1926)	昭和初期 (1926- 1939)	戦中 (1939- 1950)	1950 年代	1960 年代	1970 年代	1980 年代	1990 年代 (~1995)
茶系	-	1 (6)	3 (15)	-	-	3 (15)	6 (38)	5 (31)	5 (23)	1 (17)
緑系	1 (25)	6 (33)	5 (25)	6 (35)	-	7 (35)	7 (44)	9 (56)	11 (50)	4 (67)
オフホワイト系	3 (75)	2 (11)	1 (5)	4 (24)	1 (50)	4 (20)	-	1 (6)	5 (23)	1 (17)
ダークベージュ系	-	3 (17)	2 (10)	1 (6)	-	1 (5)	-	-	-	-
灰系	-	2 (11)	5 (25)	3 (18)	1 (50)	3 (15)	1 (6)	-	-	-
ライトベージュ系	-	2 (11)	3 (15)	2 (10)	-	-	2 (13)	-	-	-
ピンク系	-	1 (6)	-	-	-	1 (5)	-	-	-	-
黄土系	-	1 (6)	-	-	-	-	-	-	-	-
青系	-	-	1 (5)	-	-	1 (5)	-	1 (6)	1 (5)	-
黒系	-	-	-	1 (6)	-	-	-	-	-	-
合 計	4 (100)	18 (100)	20 (100)	17 (100)	2 (100)	20 (100)	16 (100)	16 (100)	22 (100)	6 (100)

数値は各時代の期間内に存在し、ペンキが塗られ、色が確認できる建物において、その色のペンキが塗られた回数を示す。1棟の建物である時代の期間内に2回以上塗られたものも数多くみられるが、そのすべての回数をカウントしている。カッコ内は、時代区分ごとの建物にペンキが塗られた回数の合計値を100とした時の割合%を示す。なお、各時代区分において最も多い色に濃い網かけを、2番目に多い色に薄い網かけをおこなっている。

は茶系が17%と減り、緑系が67%と特化する傾向にある。

4-4-3 小松益喜氏の絵画の分析による各時代の町並み色彩

小松益喜氏は1934年から95年まで神戸に住み続け、「異人館の画家」と呼ばれるほど数多くの異人館を描き、その作品数は3,000点にのぼるといわれている。小松氏の代表的な作品集である小松画集と小松素描集を分析対象とするのは、①両方あわせても掲載された作品数は100点に満たないが、代表的な異人館風景の作品が厳選されていると考えられること、②小松氏の画風は写実主義であり、異人館の色彩がデフォルメされることなく、リアルに描かれていること、③戦災で消失したり、戦後に取り壊されたりして現存しない異人館が多く描かれており、戦前などの古い時代の地区の町並み色彩の把握に有効であることなど、時層色環の調査・

表 4-8 小松益喜氏の絵画にみられる建物のペンキ色彩
－外壁の場合

制作年代 外壁の色	戦前 (1934- 1941頃)	戦後 1940 年代	1950 年代	1960 年代	1970 年代	合計
オフホワイト系	- (4)	-	-	3 (4)	3 (3)	6 (11)
ライトベージュ系	2 (4)	1 (2)	-	2 (2)	6 (7)	11 (15)
緑系	2 (2)	-	2 (2)	1 (1)	1 (1)	6 (6)
灰系	1 (5)	-	- (2)	- (3)	- (1)	1 (11)
ピンク系	-	-	-	1 (1)	-	1 (1)
ダークベージュ系	-	- (1)	-	-	-	0 (1)
黄系	-	-	-	2 (2)	-	2 (2)
黄土系	1 (1)	-	- (3)	1 (1)	-	2 (5)
水系	-	-	2 (2)	1 (1)	-	3 (3)
合 計	6 (16)	1 (3)	4 (9)	11 (15)	10 (12)	32 (55)

数値は外壁下見板に塗られたペンキ色彩の建物の件数を示し、カッコ内はモルタルや石の外装の建物も含めた件数である。各年代ごとに、濃い網かけは最も多いものを、薄い網かけは2番目に多いものを示す

表 4-9 小松益喜氏の絵画にみられる建物のペンキ色彩
－窓枠、柱型等の場合

制作年代 窓枠等の色	戦前 (1934- 1941頃)	戦後 1940 年代	1950 年代	1960 年代	1970 年代	合計
茶系	2 (3)	- (1)	- (1)	3 (6)	5 (6)	10 (17)
緑系	2 (5)	-	1 (4)	1 (1)	4 (4)	8 (14)
オフホワイト系	- (2)	1 (1)	-	2 (2)	1 (1)	4 (6)
灰系	1 (2)	-	-	1 (1)	- (1)	2 (4)
ライトベージュ系	- (1)					0 (1)
ピンク系	-	-	-	2 (2)	-	2 (2)
水系	-	-	1 (1)	1 (2)	-	2 (3)
黄土系	1 (2)		- (1)			1 (3)
青系	- (1)					0 (1)
黄系	-	-	-	1 (1)	-	1 (1)
合 計	6 (16)	1 (2)	2 (7)	11 (15)	10 (12)	30 (52)

数値は窓枠等に塗られたペンキ色彩の建物の件数を示し、カッコ内はモルタルや石の外装の建物も含めた件数である。各年代ごとに、濃い網かけは最も多いものを、薄い網かけは2番目に多いものを示す。

分析を補う貴重な資料として位置づけられるからである。

表 4-8、表 4-9 は、小松画集と小松素描集に掲載された絵画作品の中で、北野町山本通地区の異人館が描かれ、色彩と制作年代が確認できるものをすべて抽出し、外壁と窓枠等の2つに分類してその色彩をカウントしたものである。小松画集では43点の彩色画（全50点）のうち下見板張りのものが26点、小松素描集では彩色画16点（全32点）のうち下見板張りのものが4点、それぞれ該当した¹⁹⁾。この表 4-8、表 4-9 によれば、外壁のオフホワイト系、ライトベージュ系、窓枠等の茶系、緑系の色が半数以上の多くを占めるのは1970年代制作の作品であり、それ以前では様々

19) 時層色環調査対象建物は、小松画集では8点、小松素描集では1点が該当したが、他の多くは現存しない異人館であった。



写真 4－8
小松益喜氏の絵画にみられる外壁緑系のペンキ色彩(1)－「小松素描集」の作品「山本通1丁目の緑の家」。説明文に戦災焼失とあるので、戦前に描かれたものと思われる。



写真 4－9
小松益喜氏の絵画にみられる外壁緑系のペンキ色彩(2)－「小松画集」の作品「14. 柳のある山本通風景」1950 年頃制作。



写真 4－10
小松益喜氏の絵画にみられる窓枠等オフホワイト系のペンキ色彩－「小松画集」の作品「23. 赤レンガ塀の家」1967 年制作。扉は緑色だが、柱型、窓枠はオフホワイト系である。

の色がみられ、その中で比較的多いのが外壁では緑系（写真 4-8、4-9）、窓枠等ではオフホワイト系（写真 4-10）であり、時層色環分析の結果と概ね合致しているといえる。

4-4-4 戦前の特徴的な外壁の色彩－緑系と灰系について

時層色環及び小松益喜氏の絵画の分析により、1950 年代までの異人館の外壁の色彩は多様であり、その中でもとくに戦前の特徴的な色彩として緑系と灰系が抽出された。

このうち緑系の色については、調査対象 No.15 浅木邸で使われていたことがとらえられた。浅木邸の現状は 1980 年頃に塗装された白色であるが、時層色環分析による色彩変容データ票では、外壁 1 層目と 4 層目に緑色のペンキ層が認められ、それぞれ創建当

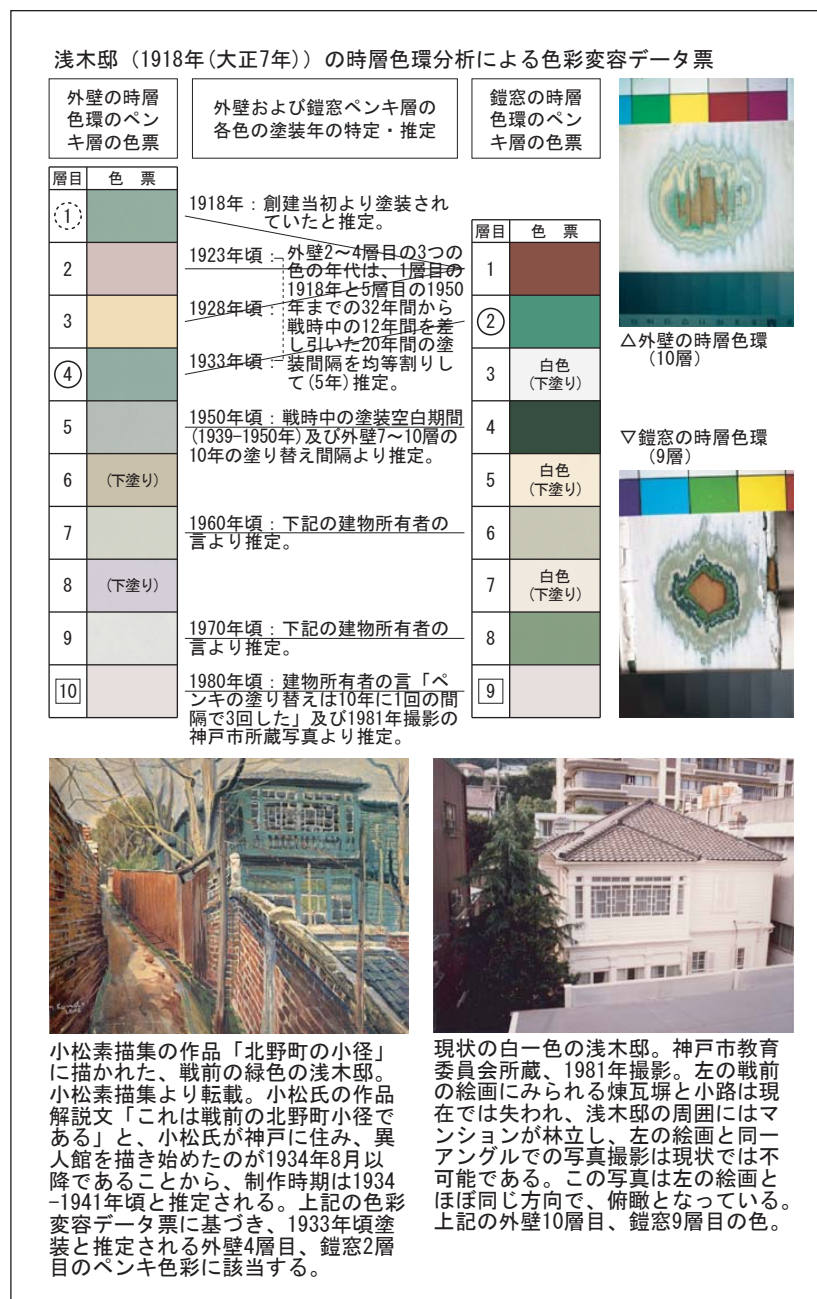


図4-7 戦前の外壁緑系の色の事例－調査対象 No. 15 浅木邸

初の1918年と1933年頃の塗装と推定される（図4-7）。この浅木邸が小松素描集の作品「北野町の小径」に描かれており、そこでも緑色が使われている^{20) 21)}。小松益喜氏の作品解説文「これは戦前の北野町小径である」と、小松氏が神戸に住み、異人館を描き始めたのが1934年8月以降であることから、制作時期は1934～1941年頃と推定され、この緑色は時層色環の外壁4層目に該当すると考えられる。

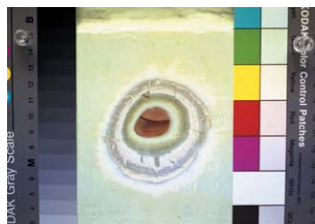
また、調査対象 No.8 小林家住宅は、昭和20年代に所有者の小林氏が全体を白一色に塗り替え、1978年に神戸市が借用し、「白

20) 小松素描集の巻末にある作品の場所位置図と、建物ファサードの意匠から、浅木邸と確認できる。所有者の浅木氏と神戸市役所にも確認した。

21) 小松素描集の作品「北野町の小径」にみられる煉瓦塀と小路は現在では失われ、浅木邸の周囲にはマンションが林立し、作品と同一のアングルでの写真撮影は現状では不可能である。

小林家住宅（1903年(明治36年)）の時層色環分析による色彩変容データ票

外壁の時層色環のペンキ層の色票		外壁および窓枠ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定	窓枠の時層色環のペンキ層の色票	
層目	色 票	1903年：創建当初より塗装されていたと推定。 1907年頃： 外壁3～14層目の（下塗りと思われる層を除く）10の色の年代は、1層目の1903年と14層目の1938年までの35年間の塗装間隔を均等割りして（3.5年）推定。 1910年頃： 1914年頃： 1917年頃： 1921年頃： 報告書*より創建当初は外壁と柱と軒回りがグリーン、窓枠が濃いグリーンであり、その後同じような色で4、5回の塗り替えがあったこと、さらに1944年に小林秀雄氏が購入した後、白く塗り変えられたことがわかっている。 1924年頃： 1928年頃： 1931年頃： 1935年頃： 1938年頃： 小松益喜氏の娘さんの言「1940年頃の絵に外壁が濃いグレーで柱が濃いグレーのこの建物が描かれている」と、1944年に小林秀雄氏が購入して以降、白色に塗られていたことから推定。 報告書*の「下塗、中塗、上塗」より特定。 1989年：報告書*の「1989年6月、修理工事竣工」より特定。	層目	色 票
①			1	白色 （下塗り）
2	白色 （下塗り）		2	（中塗り）
③			3	
4	白色 （下塗り）			
⑤				
⑥				
⑦				
⑧				
9	白色 （下塗り）			
10				
11				
⑫				
13				
⑭				
15	白色 （下塗り）			
16				



外壁の時層色環（16層）



窓枠の時層色環（3層）



建物外観

* 財団法人文化財建造物保存技術協会
編 「重要文化財小林家住宅修理工
事報告書」、重要文化財小林家住宅
修理委員会、1989

図4-8 戦前の外壁緑系と灰系の色の事例
—調査対象 No. 8 小林家住宅

22) 財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財小林家住宅保存修理工事報告書』（重要文化財小林家住宅修理委員会、1989年9月）のp96を参照。

い異人館」として一般公開され、市民に親しまれていたが、1980年に重要文化財指定、1989年の修理工事にともなう調査の結果、創建当初とその後4、5回は緑色に塗られていたことが判明しており²²⁾、これも時層色環分析で確認されている。図4-8によると、小林家住宅の外壁ペンキ1、3、5、6、7、8層目の各層が緑系の色であり、それらは創建当初の1903年から1921年の間に塗装されたものと推定される。

さらに、作家・堀辰雄が須磨在住の友人の詩人・竹中郁を頼り、



図4-9 戦前の外壁灰系の色の事例—調査対象 No. 3 門邸

1932（昭和7）年12月、神戸を最初に訪れ、その時の滞在記「旅の絵」の中に「・・・私たちの歩いている山手のこのへんの異人屋敷はどれもこれも古色を帯びていて、なかなか情緒がある。大概の家の壁が草色に塗られ、それがほとんど一様に褪めかかっている。・・・中略・・・それらが曇った空と、草色の鎧扉と、不思議によく調和していて、言いようもなく美しいのだ。」²³⁾ という草色、すなわち緑色の記述があり、戦前の昭和初期には緑色の外壁の異人館が多かったことがうかがえる。

23) 堀辰雄 著 「旅の絵」(河野仁昭 編 『ふるさと文学館 第34巻【兵庫】』、pp35-47 所収、株式会社ぎょうせい、1994年4月)のp42を参照。

もう一つの灰系の色については、調査対象 No.3 門邸で使われていたことがとらえられた。門邸の現状は1987年に塗装されたオフホワイト系であるが、時層色環分析による色彩変容データ票では、外壁6層目（1922年頃塗装と推定）と9層目（1938年頃塗装と推定）に灰色のペンキ層が認められた（図4-9）。この門邸が描かれた小松画集の作品「渡り廊下のある異人館」（1970年制作）の解説文の「戦争中に、灰色の壁、黄緑色の鎧窓、ダークグリーンの柱と窓わくに塗られた」という記述にある灰色の壁は、時層色環の外壁9層目に該当すると考えられる。

さらに、小松益喜氏の娘さんへのヒアリングで、調査対象 No.8 小林家住宅について、「実際に父が書いた1940年頃の絵に柱が濃いグレーで、外壁が薄いグレーのものがある。小松は、写実主義なので、実際にグレーはある時期に塗られていたものだと思う」という証言が得られている。これも時層色環分析で確認されており、図4-8の小林家住宅時層色環の外壁14層目の灰色に該当すると推定される。

4-5 神戸・異人館の町並み色彩の時代変遷とその要因・背景

これまでの分析にもとづき、時代の色の共通する傾向から、明治中期から1950年代頃、1960年代頃から70年代頃、1980年代頃から現在までの、3つの時代区分にまとめることができ、それによる町並み色彩の変化とその要因、背景を分析、考察する（表4-10）。

(1) 第1期：明治中期から1950年代頃までの「多色」の時代（1887～1950年代頃）

この時代は外壁も窓枠等も様々な色が使われ、多色の町並みの時代であったといえる。外壁には濃いめの色が使われ、とくに緑系、灰系が特徴的であった。異人館は、欧米各国の外国人によっ

表 4－10 神戸・異人館の町並み色彩の時代変遷とその要因・背景

【期】	【時代区分】	【町並みの基調をなすペンキ色彩】	【ペンキ色彩の具体的内容】	【色を決める要因・背景】
1	明治中期から1950年代頃 (1887～1950年代頃)	多色。	外壁は緑系、ライトベージュ系、オフホワイト系、灰系、ダークベージュ系、ピンク系等。 窓枠・柱型等は緑系、オフホワイト系、灰系、ダークベージュ系、ライトベージュ系、茶系等、多様。 中でも外壁は濃いめの色で緑系、灰系が特徴的。	欧米各国の外国人が異人館を創建・所有・居住。 在留外国人による色彩の自由な選択、各国の色彩文化の反映
2	1960年代から1970年代頃	オフホワイト系とライトベージュ系を主とし、緑系も少し。	外壁はオフホワイト系、ライトベージュ系の薄めの色。 窓枠等は緑系、茶系の濃いめの色の統一的な色彩で、メリハリのきいた塗り分け。	戦中の在留外国人の国外退去と戦後の日本人による異人館の所有一建物所有者の入れ替わりにもなう色彩文化の変化。 屋敷型の建築タイプからなる町並みに調和する色彩選択。 地区の町並みの急激な変化一地域コミュニティの結束、町並み保全の意志の表現。 ペンキ材料技術の発展にもなう中間色、淡色の使用一油性塗料から合成樹脂塗料への変化。 進駐軍の影響一新しい価値観、中間色の使用。
3	1980年代頃から1994年	オフホワイト系を主とし、ライトベージュ系も少し。	外壁、窓枠等ともオフホワイト系の単色と、外壁のオフホワイト系に窓枠等の緑系または茶系の塗り分けの継続。	地区の観光地化と異人館の商業利用。 建物所有者の入れ替わり。 伝統的建造物群保存地区の指定一行政による指導・助言。

24) 小松益喜 著『小松益喜画集 神戸の異人館』（神戸新聞出版センター、1976年11月6日）の作品「9. 大きなガス灯のある異人館」（1939）の解説文より。

25) 小松益喜 著『小松益喜画集 神戸の異人館』（神戸新聞出版センター、1976年11月6日）の作品「22. グラッシヤニ氏邸」（1965頃）の解説文より。

て創建され、戦前まではすべて彼らが所有し、居住していた建物である。したがって、この多色の時代は、居住者の外国人が自由に色彩を選択していた時代と考えられる。また、小松益喜氏が「黄色とライトレッドの色の組合せは異人さん好みである」²⁴⁾、「持主のグラッシヤニ氏夫妻はフランス人で、窓の外におく植木鉢をトリコロール（フランス国旗の赤白青の三色）にぬりわけて楽しんでいた」²⁵⁾と記述しているように、日本人とは異なる色彩感覚をもつ外国人がそれぞれの国の色彩文化を反映していたものと考えられる。

(2) 第2期：1960年代頃から70年代頃までの「オフホワイト系とライトベージュ系の外壁、緑系と茶系の窓枠等」の時代

前期の濃いめの多色から、外壁をオフホワイト系とライトベージュ系の薄めの明るく淡い、パステル調の色とし、窓枠等を緑系と茶系の濃いめの色とする、統一的な色彩で、メリハリのきいた塗り分けが主となった。この色彩変化の背景には、第二次世界大戦にともない、異人館の所有者・居住者である在留外国人が国外に退去し、その後、日本人によって建物が所有・使用されるという、建物所有者の入れ替わりがあげられる。小松益喜氏が「建物の灰色、窓が黄緑色で実に美しく調和していた。が、後に日本人が住んでからは、壁は白に、よろい窓はセピアとインディアン・レッドとの中間色と、常識的な色にぬりつぶしてしまった。色の神経

のつかい方が、やはり違う」²⁶⁾と記述しているように、外国人の色彩文化と日本人のその違いが、町並み色彩変化の大きな要因になったと考えられる。

統一的な色彩への変化の方向の要因として、①この地区は昭和30年代に異人館を壊して新しい外国人向け住宅や事務所などへの建設、旧ハッサム住宅、旧ハンター住宅の移築、風俗向けホテルの建設など、町並みが急激に変化し、それに対する環境改善の住民運動が展開された。こういう町並みの激変に対する地域コミュニティの結束の表現、町並み保全の意志の表現として統一的な色彩を選んだと考えられること、さらに、②函館と同様に、戦後の1950年頃からの油性塗料から合成樹脂塗料へのペンキ材料の変化にともない淡い色の定着性が高まったこと、また、進駐軍の影響により淡い中間色が使用されるようになったこと²⁷⁾も考えられる。

(3) 第3期：1980年代頃から現在までの「オフホワイト系」の時代

1970年代以降、地区は観光地化が進み、異人館は商業利用へと機能転換がおこると共に、建物所有者の入れ替わりがおこる(8棟)。これらを要因として、1980年代頃からオフホワイト系一色の建物が増えてきている(4棟、写真4-11)。同時に、1980年の重要伝建地区の選定、1989年の景観ガイドラインの設定にともない、行政による色彩の指導・助言がおこなわれ、それまでの外壁のオフホワイト系と窓枠等の緑系の現状を維持する方向もみられ、全体としてオフホワイト系の町並み色彩へと画一化する傾向にある。

26) 小松益喜 著『小松益喜画集 神戸の異人館』(神戸新聞出版センター、1976年11月6日)の作品「6. 古い門・古い家」(1936～37)の解説文より。

27) 日本ペイント株式会社 社史編纂室 編「日本ペイント百年史」(日本ペイント株式会社、1982年12月1日)および関西ペイント株式会社 社史編纂委員会 編「明日を彩る 関西ペイント六十年のあゆみ」(関西ペイント株式会社、1979年5月17日)を参照。



写真4-11 オフホワイト系一色の異人館の事例

—左は「小松画集」の作品「22. グラッシャニ氏邸」(1965年頃制作)である。時層色環分析でも1960年代頃は外壁がピンク系、窓枠・柱型が茶系であったことが確かめられている(表4-4、4-5)。右は同じ異人館で、1994年調査時の「No. 10. グラシアニ」である。外壁、窓枠、柱型とも白一色で、1984年に塗り替えられた。なお錠戸のみ濃緑色としている。

4-6 函館市西部地区の町並み色彩との比較考察

神戸市北野町山本通地区の町並み色彩は、前章であきらかにした函館市西部地区のそれとくらべて、異なる特徴をもっていることがとらえられた。神戸では、従来特徴とされてきた色彩とはまったく異なる多様な色が1960年代以前には使われていたことがあきらかになったが、そこには幕末の開港以降、神戸に異人館を建設し、居住した様々な外国人の色彩文化が反映されており、外来文化主導型ともいべき町並み色彩が形成されていた。しかし、第二次世界大戦による外国人の国外退去や異人館の取り壊しなどの急激な環境変貌に対し、外国人に替わり異人館に居住した日本人の地域住民によるコミュニティの結束の表現として、1960年代以降、オフホワイト系やライトベージュ系の色彩への統一化がはかられたと考えられる。いわばそれまでの外来文化主導型から地域のコミュニティ主導型の町並み色彩へと変容したといえる。これらは函館市西部地区にはみられない、神戸市北野町・山本通地区固有のものである。そこには地域の歴史、文化やコミュニティにおける住民の社会化された意識が反映している。第二に、町並み色彩が時代によって変化することは共通しているが、その変化のタイプが異なる。神戸では明治中期の1880年代末から1950年代頃までの約60年間は変化がなく、安定していたことがあげられる。町並み色彩変化のあり方として、20年から30年の周期で時代とともに変わる短期変化型の函館に対して、神戸は長期安定型といえ、異なるタイプであることがわかった。この理由の一つとして、建築形態や建物の維持管理、所有・居住状況の安定度があげられる。神戸の異人館は庭付き一戸建ての邸宅で、明治期の創建時から戦前までは、在留外国人が所有・居住し続け、また町並みにかかわる建物の改造がほとんどなく、現在でも原形をとどめるものがほとんどで、維持管理状態もよく、全体として建物の安定度が高く、函館に比べて色彩変化の要素が少なかったといえる。第三に、最近の傾向として、函館では多色の町並みを維持しているのに対して、神戸では外壁がオフホワイト系の単色へと向かいつつあること、とくに1980年代頃からその画一化の傾向が著しいことがあげられる。これは、地区の観光地化や、重要伝建地区の選定にともなう行政の色彩に関する現状維持への指導といった大きな社会変動、環境変化を背景とするものであり、函館でも大火や戦争の影響による単色の時代があったことと共通している。第四に、函館と共通して、戦前には多色の町並みが形成され、とくに

濃いめの色が使われていたことがあげられる。この戦前の濃いめの色については、日本人とは異なる色彩感覚をもつ外国人の好みと、函館の場合と同様に時代の色との両方の要因が考えられる。

4-7 まとめ

神戸市北野町山本通地区の異人館の町並みにおける明治中期から現在までの色彩変遷を、時層色環等の分析からあきらかにした。その要点として、①神戸・異人館の町並みの特徴的色彩とされる外壁のオフホワイト系、ライトベージュ系と窓枠等の緑系、茶系は、戦後の1960年代頃からのものであり、それ以前と1980年代以降からは違う色が使われており、町並み色彩が2回変化したことがあきらかになった、②1960年代以前の明治中期から1950年代頃までは、外壁でも窓枠等でも多様な色が、それも濃い目の色が使われていた。これは、様々な外国人の色彩文化が反映されたもので、外来文化主導型の町並み色彩形成としてとらえられた。その中でも外壁の緑系、灰系の色が特徴的であったが、これは戦前の異人館の情景を描いた絵画や随筆の作品からも確かめられた、③戦後の1960年代頃から1970年代頃までの、外壁のオフホワイト系、ライトベージュ系と窓枠等の緑系、茶系は、戦争や地区の町並みの激変に対するコミュニティ主導型の町並み色彩の変容としてとらえられた、④1980年代頃からは外壁のオフホワイト系への単色化、窓枠等の緑系とオフホワイト系の増加傾向がみられるようになったが、その要因として、地区の観光地化の進展にともなう建物所有者の入れ替わりと異人館の商業利用や、行政による指導等がとらえられた。

また、前章の函館市西部地区の町並み色彩との比較考察により、神戸の特性を明確にした。それは、色彩そのものの違いであり、同時にまた地域の歴史、文化やコミュニティにおける住民の社会化された意識の反映にもとづく、町並み色彩形成のタイプの違いとしてもとらえられた。また、時代によって町並み色彩が変化することは両地区とも共通しているが、その中での変化のタイプの違い、すなわち変化の周期の長短と最近の特徴的な色彩の違いもとらえられ、その理由として建築形態や建物の維持管理、所有・居住状況の安定度の違い、観光地化等の地区の社会変動があげられた。

第5章 日本の下見板張りペンキ塗り建物の原型としてのアメリカ・ボストン周辺地区におけるペンキ色彩からみた町並みの変容

5-1 はじめに

本章は、函館や神戸の下見板張りペンキ塗りの建物の原型として、アメリカのボストン周辺地区のそれを取りあげ、この地区のペンキ色彩からみた町並みの変容とその背景をあきらかにすることを目的としている。

下見板張り建物の起源は、ヨーロッパのイギリスの南東部かスウェーデンかどちらかと言われている。それがイギリスの開拓民の手によって大西洋を渡り、アメリカ北部のマサチューセッツ州（州都はボストン）などのニューイングランド地方へと運ばれた。その後、開拓民によってさらに西へと進み、19世紀半ばのゴールドラッシュの時に、西海岸のカリフォルニア州へと行き着いた。この下見板張り建物は、やがて太平洋を渡り、ちょうど世界に門戸を開いた明治初期の日本に渡ってきた¹⁾。このように、日本の函館や神戸における下見板張りペンキ塗り建物の原型の一つが、アメリカのニューイングランド地方、ボストン周辺地区にあると考えられる。

1) 藤森照信 著『日本の近代建築（上）—幕末・明治篇—』（岩波書店、1993年10月20日）。

また、既往研究によって町並み色彩の大まかな変遷があきらかにされている海外の他地域として、アメリカ・サンフランシスコ、スウェーデン・ストックホルムとフィンランド・ヘルシンキを取りあげ、ボストン周辺地区における町並み色彩変容のあり方が世界の中でどのように位置づけられるのかについて検討を加える。さらに、本章では前々章、前章であきらかにした函館市西部地区、神戸市北野町山本通地区の町並み色彩変容との比較分析をおこない、各地区の町並み色彩の特性をより明確にしようとするものである。

研究の方法は前々章、前章と同様、下見板張りペンキ塗り建物の外壁、窓枠・柱型等木部のペンキ塗膜の下に残された古いペンキ層のこすり出しによる発掘にもとづく時層色環の調査、分析を中心とし、居住者へのヒアリング調査、文献の収集調査をおこない、各ペンキ層の色彩とその塗装年をあきらかにし、下見板張り建物のペンキ色彩の変容過程を分析するものである。

5-2 調査の概要

5-2-1 調査対象

アメリカのニューイングランド地方、マサチューセッツ州のボストンの周辺の住宅地区を対象とし、ボストン西方に隣接するケンブリッジ、ブルックラインと、さらにブルックラインの西方に隣接するニュートンの3地区を調査対象とした（図5-1）。この3地区の下見板張りペンキ塗り建物を対象とするペンキこすり出しの典型事例調査をおこなった。函館や神戸の建物と建築年の近い、19世紀後期のものを主な対象とし、その建物数は、ケンブリッジ18棟、ブルックライン11棟、ニュートン13棟の総計42棟である。表5-1にこの調査対象建物42棟の一覧を、図5-2～4に3地区

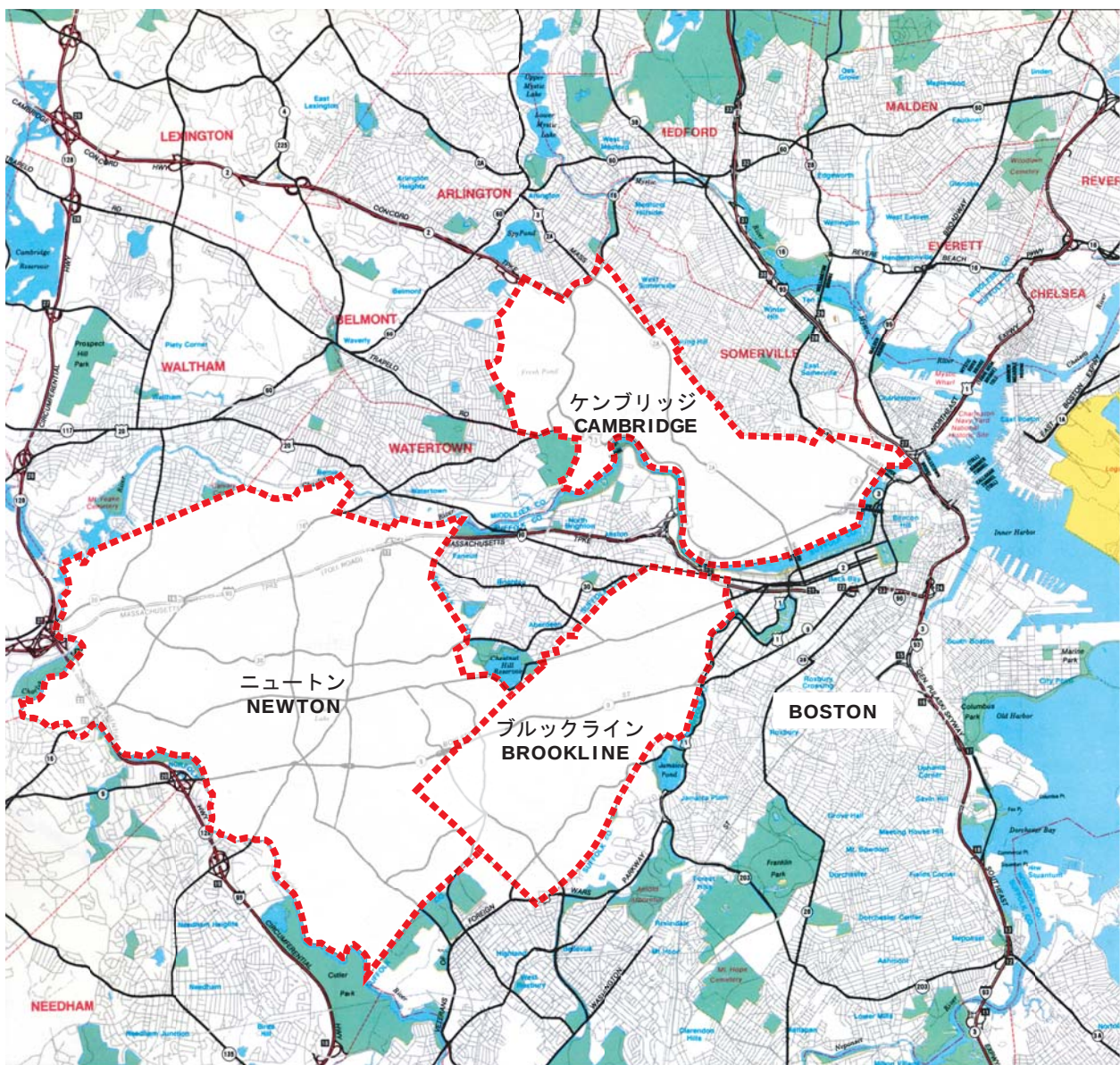


図5-1 調査対象のケンブリッジ、ブルックライン、ニュートンの3地区の位置

表５－１ アメリカ・ボストン周辺地区ーケンブリッジ、ブルックライン、ニュートンの３地区ーの
ペンキこすり出し調査対象建物の一覧

地区	No.	建物名称	建築年	建築様式	構造・階数	現用途	ヒアリング
ケンブリッジ Cambridge (18棟)	1	Lesley College, Graduate Center	1862-63	Second Empire	木造・2階建	大学の施設	
	2	Lesley College, Office of Student Affairs	c.1868-73	"	"	"	
	3	Cheryl Foti & Robert Straus House	1878	"	"	住宅	
	4	Joseph & Cornelia Tierney House	1879	Stick	"	"	
	5	Judy & M. Wyllis Bibbins House	1881	Queen Anne	"	"	
	6	Lesley College, Counseling Psychology Division	c.1883	Stick	"	大学の施設	
	7	Catherine & John Henn House	1884-86	Queen Anne	"	住宅	
	8	Dennis Carlone House	1886	"	"	"	
	9	Sheila & William King House	1887	"	"	"	
	10	James Kiggen House	1887	"	"	"	
	11	Charlotte & Gordon Moore House	1892	"	"	"	
	12	Arthur & Geneva Malenfant House	1892	Colonial Revival	"	"	
	13	Gay & Dick Harter House	1873	Second Empire	"	"	有
	14	Jean Oi & Andrew Walder House	1883	Queen Anne	"	"	
	15	Mr. & Mrs. Charles Ferraro House	1887	"	"	"	有
	16	Building owend by Francis Burns	1888	"	"	店舗、住宅	
	17	Joanne Turnbull House	1883	"	"	住宅	
	18	Susan E. Maycock House	1854	Italianate	"	"	
ブルックライン Brookline (11棟)	19	Lynn & William Osborn House	不明	Italianate	木造・2階建	住宅	
	20	George & Nancy Peabody House	1878	Stick	"	"	有
	21	Jim & Janet Fitzgibbons House	不明	不明	"	"	
	22	Corliss & Ralph Engle House	1881	Queen Anne	木造(シングル)・2階建	"	有
	23	Betsy Shure & Gary Gross House	1881	Queen Anne	木造・2階建	"	
	24	Baker House	1880代	"	"	"	有
	25	Susan Porter & Myron Miller House	1811	Federal	"	"	有
	26	Chobee Hoy House	不明	不明	"	"	
	27	Superintendent House, Larg Anderson Park	不明	Italianate	"	"	
	28	Brookline Historical Museum	1700代	Colonial	"	博物館	
ニュートン Newton (13棟)	29	Walnut Hills Cemetery Superintendent's Cottage	1900代初期	Shingle/ Colonial Revival	木造(シングル)・2階建	管理事務所	
	30	Katherine Straus House	1874前	High Victorian Gothic	木造・2階建	住宅	
	31	Mr. & Mrs. Pobst House	1889	Colonial Revival	"	"	有
	32	John & Karen Arthur House	1896	Shingle	木造(シングル)・2階建	"	
	33	Mr. & Mrs. Catherine House	1871-73	Italianate	木造・2階建	"	
	34	Mr. & Mrs. John Holz House	1886-88	Transitional	"	"	
	35	Mr. & Mrs. Gove House	1886-88	Queen Anne	"	"	有
	36	Mr. & Mrs. Frank Aquilera House	1884	Stick	"	"	
	37	Lavinia Abel House	1876	Victorian Gothic	"	"	有
	38	Mr. & Mrs. Robert Smith House	1892	Queen Anne	"	"	有
	39	Don Tellalian House	c.1874	Italianate	"	"	
	40	Claire Saulnier, Steven Howard House	c.1886	Queen Anne	"	"	有
	41	Mr. James Pike House	c.1893	"	"	"	
	42	June & Eugene Sisco House	1896	Queen Anne/ Colonial Revival	"	"	

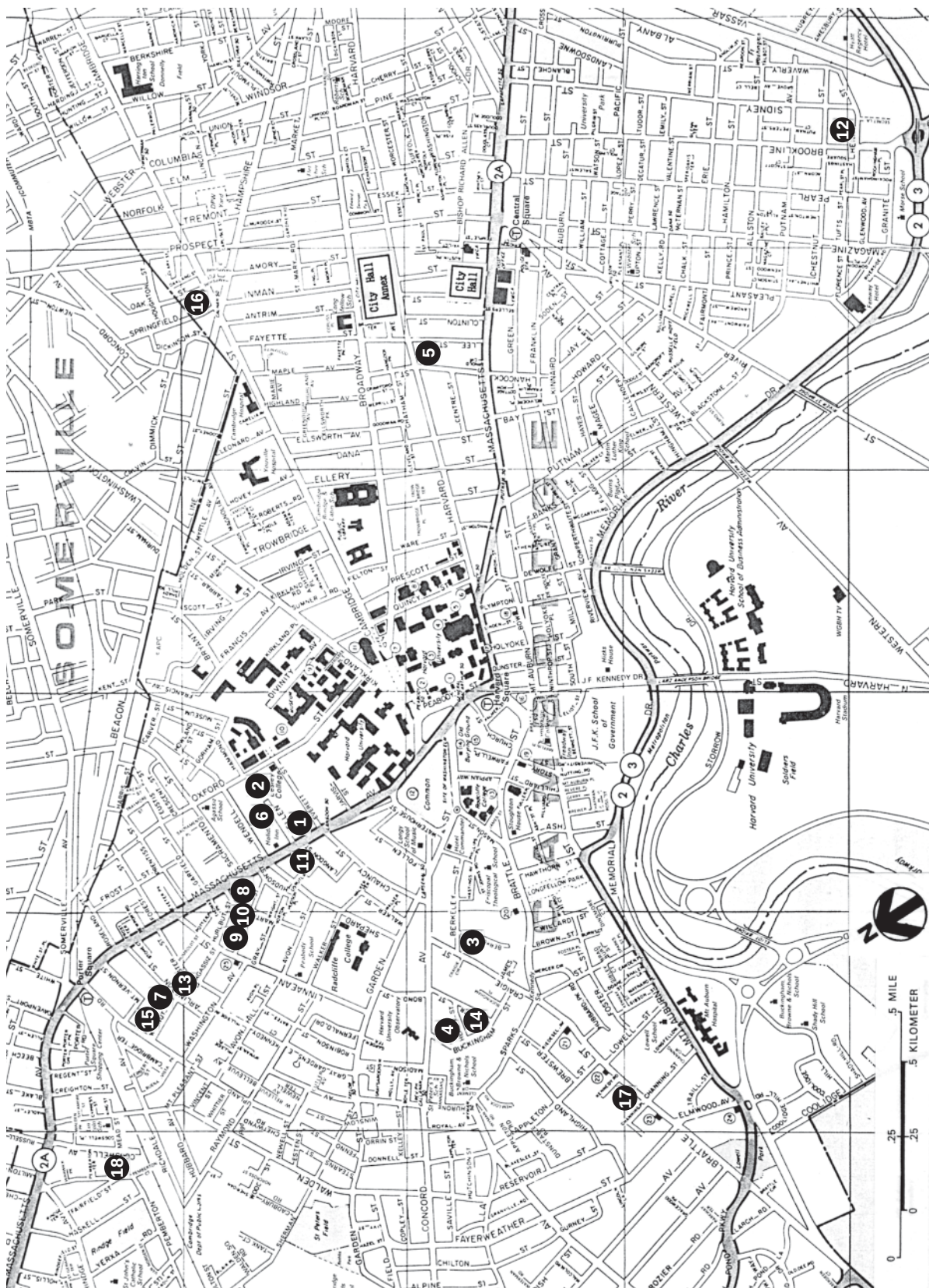


図5-2 ケンブリッジ地区のペンキこすり出し調査対象建物の分布



図 5-3 ブルックライン地区のペンキこすり出し調査対象建物の分布

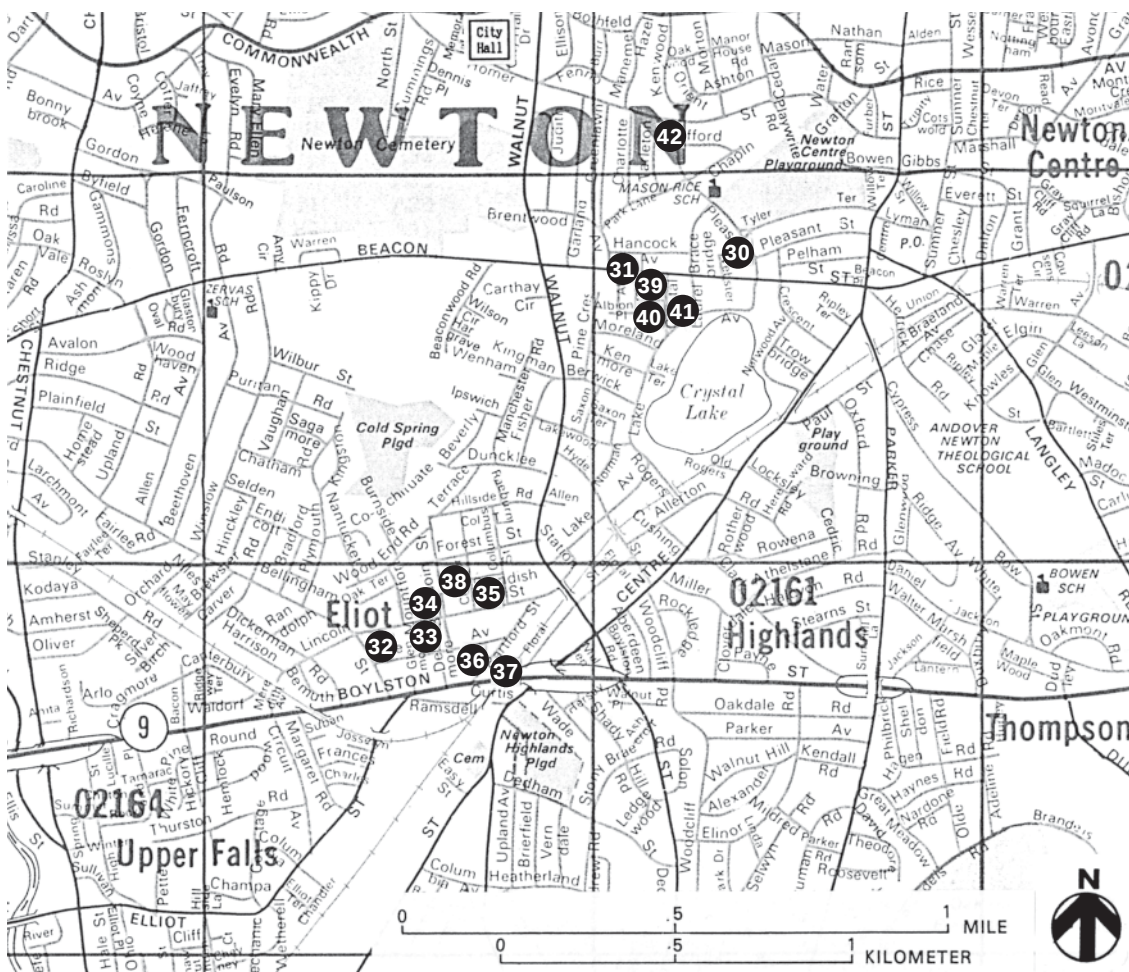


図5-4 ニュートン地区のペンキこすり出し調査対象建物の分布

表5-2 ケンブリッジ、ブルックライン、ニュートン3地区のペンキこすり出し調査対象建物の概要

建築年（棟数）									
建築年 地 区	～1840年代	1850年代	1860年代	1870年代	1880年代	1890年代	1900年代～	不明	合計
ケンブリッジ	—	1	1	4	10	2	—	—	18
ブルックライン	2	—	—	1	3	—	1	4	11
ニュートン	—	—	—	4	5	4	—	—	13
合 計	2	1	1	9	18	6	1	4	42

建築様式（棟数）									
建築様式 地 区	Italianate	Second Empire	Stick	Queen Anne	Shingle	Colonial Revival	その他	不明	合計
ケンブリッジ	1	4	2	10	—	1	—	—	18
ブルックライン	2	—	1	3	1	—	2	2	11
ニュートン	2	—	1	5	1	1	3	—	13
合 計	5	4	4	18	2	2	5	2	42

建物用途（棟数）					
建物用途 地 区	住 宅	店舗、住宅	大学の施設	公共施設	合計
ケンブリッジ	14	1	3	—	18
ブルックライン	9	—	—	2	11
ニュートン	13	—	—	—	13
合 計	36	1	3	2	42

ごとにその分布図を示す。

調査対象建物 42 棟の概要について、建築年代は 1880 年代のものが 18 棟、1870 年代のものが 9 棟、1890 年代のものが 6 棟と、19 世紀後半のヴィクトリア期のものがほとんどを占める（表 5-2）。最も古いのは 1700 年代のもので、逆に最も新しいのは 1900 年代初期のものであった。建築様式は、ヴィクトリア期の時代を反映したもので、クイーン・アン Queen Anne 様式が 18 棟と最も多く、イタリアネイト Italianate 様式が 5 棟、セカンド・エンパイア Second Empire 様式とスティック Stick 様式が各 4 棟、シングル Shingle 様式とコロニアル・リバイバル Colonial Revival 様式が各 2 棟であった。現在の建物用途は住宅が 36 棟とほとんどを占めるが、店舗、大学の施設、公共施設も 1～3 棟あった。

なお、調査はグレゴリー・克蘭シー Mr. Gregory Clancey(ニューイングランド歴史遺産保存協会 SPNEA(Society for the Preservation of New England Antiquities) の Architectural Conservator) が窓口となり、ケンブリッジ市歴史委員会 Cambridge Historical Commission のスーザン・メイコック Ms. Susan Maycock(Survey Director)、ブルックライン市保存委員会 Brookline Preservation Commission のカーラ・ベンカ Ms. Carla Benka(Director)、ニュートン市歴史委員会 Newton Historical Commission のジョン・アーサー Mr. John Arthur(Member) に協力を依頼し、この 3 氏が各地区の建物所有者の協力を取り付け、筆者と柳田良造（柳田石塚建築計画事務所）、巽裕樹（北海道大学建築工学科住居地計画学講座大学院生）の 3 名が現地で 1991 年 8 月から 9 月にかけておこなった（所属はいずれも当時のもの）。

5-2-2 時層色環調査およびヒアリング調査

前々章、前章と同様に、42 棟に対して、こすり出しによるペンキ層の発掘、時層色環の発見・採集・記録調査をおこなった。また同時に、居住者へのヒアリング調査もおこない、42 棟中、11 棟で有効回答を得た²⁾。

2) 残る 29 棟の居住者は調査時留守のため、調査不可能であった。

5-3 時層色環の分析と各時代の町並み色彩の特徴

5-3-1 時層色環の分析

下見板張り建物のペンキこすり出しによる時層色環調査の結果、42 棟の建物ごとの各部位のペンキ層の数と色、その塗り始めから調査時点までの塗装順序がわかった。その概要を示したもの

が表 5-3 である。外壁の場合、ペンキ層数 5 層以下が 1 棟 (2.4%)、6 ～ 10 層が 11 棟 (26.2%)、11 ～ 15 層が 15 棟 (35.7%)、16 層以上が 15 棟 (35.7%) であった。ケンブリッジ、ブルックライン、ニュートン 3 地区ごとの平均はそれぞれ 14.6 層、12.5 層、13.4 層、中位値は 14.5 層、13 層、14 層、最多は 21 層、20 層、20 層であった。函館よりもペンキ層の多かった神戸の平均 10.4 層、最多 20 層とくらべて、平均で約 2 ～ 4 層多いのが目立つ。なお、外壁以外の窓枠・柱型等では、3 地区ごとの平均はそれぞれ 13.3 層、14.4 層、

表 5-3 ケンブリッジ、ブルックライン、ニュートン 3 地区のペンキこすり出しによる時層色環調査結果の概要

地区	No.	建物名称	建築年	外壁のペンキ層数	窓枠・柱型等のペンキ層数
ケンブリッジ Cambridge (18棟)	1	Lesley College, Graduate Center	1862-63	12	13
	2	Lesley College, Office of Student Affairs	c.1868-73	20	18
	3	Cheryl Foti & Robert Straus House	1878	8	6
	4	Joseph & Cornelia Tierney House	1879	10	16
	5	Judy & M. Wyllis Bibbins House	1881	18	18
	6	Lesley College, Counseling Psychology Division	c.1883	17	22
	7	Catherine & John Henn House	1884-86	12	10
	8	Dennis Carlone House	1886	8	6
	9	Sheila & William King House	1887	16	4
	10	James Kiggen House	1887	15	15
	11	Charlotte & Gordon Moore House	1892	19	18
	12	Arthur & Geneva Malenfant House	1892	21	18
	13	Gay & Dick Harter House	1873	12	17
	14	Jean Oi & Andrew Walder House	1883	17	13
	15	Mr. & Mrs. Charles Ferraro House	1887	10	11
	16	Building owned by Francis Burns	1888	13	8
	17	Joanne Turnbull House	1883	21	11
	18	Susan E. Maycock House	1854	14	15
ブルックライン Brookline (11棟)	19	Lynn & William Osborn House	不明	7	15
	20	George & Nancy Peabody House	1878	9	11
	21	Jim & Janet Fitzgibbons House	不明	19	21
	22	Corliss & Ralph Engle House	1881	13	9
	23	Betsy Shure & Gary Gross House	1881	18	14
	24	Baker House	1880代	12	8
	25	Susan Porter & Myron Miller House	1811	20	19
	26	Chobee Hoy House	不明	14	10
	27	Superintendent House, Larg Anderson Park	不明	9	11
	28	Brookline Historical Museum	1700代	15	26
	29	Walnut Hills Cemetery Superintendent's Cottage	1900代初期	2	14
ニュートン Newton (13棟)	30	Katherine Straus House	1874前	14	6
	31	Mr. & Mrs. Pobst House	1889	11	16
	32	John & Karen Arthur House	1896	9	9
	33	Mr. & Mrs. Catherine House	1871-73	15	9
	34	Mr. & Mrs. John Holz House	1886-88	20	7
	35	Mr. & Mrs. Gove House	1886-88	17	10
	36	Mr. & Mrs. Frank Aquilera House	1884	15	13
	37	Lavinia Abel House	1876	6	5
	38	Mr. & Mrs. Robert Smith House	1892	14	17
	39	Don Tellalian House	c.1874	7	5
	40	Claire Saulnier, Steven Howard House	c.1886	10	10
	41	Mr. James Pike House	c.1893	20	14
	42	June & Eugene Sisco House	1896	16	10

網かけは、3 地区ごとに外壁、窓枠・柱型等のペンキ層数で最も多いものを示す。

10.1 層、中位値は 14 層、14 層、10 層、最多は 22 層、26 層、17 層であった。

典型的な時層色環の事例として、外壁と窓枠・柱型等においてペンキ層数が最も多かったものを 3 地区ごとに選び、その建物の外観とあわせて、写真 5-1 ～ 6 に示す。これらの時層色環をみると、函館、神戸と同様に、すべてのペンキ層が同じ色で塗装されていた建物はなく、異なる色で塗り替えられていることがわかる。

この 42 棟の建物ごとの外壁および窓枠・柱型等の時層色環について、第 2 章で記述した時層色環の分析手法を用い、建物ごとにペンキ層の各色の塗装年の特定・推定をおこない、その上で、各時代の町並み色彩の分析手法を援用した。すなわち、1) 前提の整理、2) 最新塗装年の特定・推定、3) 塗装間隔年の特定、4) 塗り始め年の特定・推定、5) 各ペンキ層の年代推定、6) 建物ごとの色彩変容データ票の作成をおこなった。アメリカではすべての建物が創建当初から塗装されていたと推定した。これは、ペンキ層数が多かったことから裏付けられる。ただし、居住者へのヒアリングができなかったために、最新塗装年が不明の建物が多い。そこで、塗り始め年を創建年と推定し、塗装間隔は一定として、以

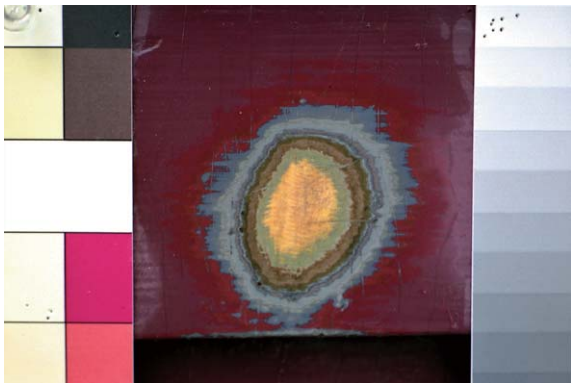


写真 5－1 ケンブリッジ地区における外壁ペンキ層数最多の時層色環の事例－No. 17 : Joanne Turnbull House (1883 年、Queen Anne) 左 : 外壁 21 層の時層色環、右 : 建物の外観



写真 5－2 ケンブリッジ地区における窓枠等ペンキ層数最多の時層色環の事例－No. 6 : Lesley College, Counseling Psychology Division (c. 1883、Stick) 左 : 土台上部雨押さえ 22 層の時層色環、右 : 建物の外観

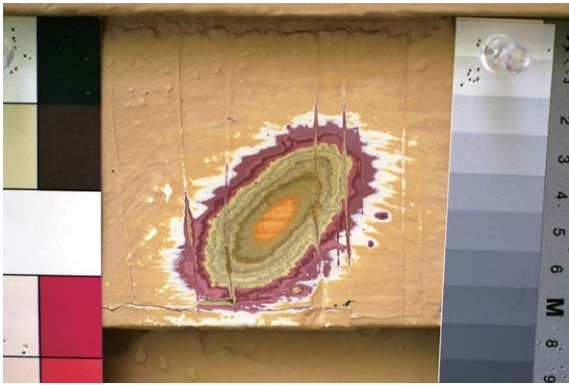


写真５－３ ブルックライン地区における外壁ペンキ層数最多の時層色環の事例－ No. 25 : Susan Porter & Myron Miller House(1811 年、Federal) 左：外壁 20 層の時層色環、右：建物の外観



写真５－４ ブルックライン地区における窓枠等ペンキ層数最多の時層色環の事例－ No. 28 : Brookline Historical Museum(1700 年代、Colonial) 左：窓枠 26 層の時層色環、右：建物の外観



写真５－５ ニュートン地区における外壁ペンキ層数最多の時層色環の事例－ No. 34 : Mr. & Mrs. John Holz House(1886-88 年、Transitional) 左：外壁 20 層の時層色環、右：建物の外観



写真５－６ ニュートン地区における窓枠等ペンキ層数最多の時層色環の事例－ No. 38 : Mr. & Mrs. Robert Smith House(1892 年、Queen Anne) 左：窓枠 17 層の時層色環、右：建物の外観

下のような式にもとづき、推定塗装間隔年を算出し、最新塗装年をはじめとする各ペンキ層の塗装年を推定した。

推定塗装間隔年の算出式：最新塗装年＝塗り始め年（創建年と推定）＋推定塗装間隔年×（上塗りペンキ層の総数－1）、（調査年の1991年－推定塗装間隔年）≤最新塗装年＜調査年の1991年、ただし、推定塗装間隔年は原則整数とするが、上の式にあてはまらない場合、小数点以下の値を0.5または0.25のいずれかとする。

このようにして時層色環分析を42棟の建物すべてについてまとめたものが表5-4の1と2である。最新塗装年については、建物居住者へのヒアリングから10棟で特定できた。また、8棟でペンキ層間の塗装間隔年が特定でき、その最短は1年、最長は15年、平均7～9.6年、中位値6～8.8年であり、神戸の平均7.9年、中位値7.4年とくらべて大きな違いはみられなかった。また、ペンキ層の塗装年の推定によって得られた塗装間隔年の平均は9.2～10.3年、中位値7.8～10.3年で、特定できたものよりもやや塗装間隔年が大きいといえる。

図5-5～7は、ケンブリッジ、ブルックライン、ニュートンの各地区において、外壁のペンキ層数が最も多かった、代表的な建物について、また図5-8は、建物居住者へのヒアリングにより、多くのペンキ層の塗装年が特定できた典型事例について、時層色環分析による色彩変容データ票を示したものである。

図5-5は、ケンブリッジ地区で外壁のペンキ層数が最多の21層、窓枠のペンキ層数18層の代表的事例、No.12.Arthur & Geneva Malenfant House(1892年、Colonial Revival様式)である。現状の配色は外壁がクリーム系、窓枠が白系である。最新塗装年が不明であったため、塗り始め年を創建年の1892年とし、前述の算出式を用いて推定塗装間隔年を5.25年とし、各ペンキ層の塗装年を推定した。外壁では、12層目と15層目の白色の下塗りを除く、19層の上塗り層があり、現状のクリーム系とは異なる白系、ベージュ系、緑系、青系、灰系、ピンク系の色があらわれた。

図5-6は、ブルックライン地区で外壁のペンキ層数が最多の20層、柱型のペンキ層数19層の代表的事例、No.25.Susan Porter & Myron Miller House(1811年、Federal様式)である。居住者へのヒアリングから、現状の色彩である外壁20層目の黄系と柱型19層目の白系は、1986年に塗装されたものと特定できた。この色を選択した理由は、「オリジナルの色を選ぶようにしている」とのことで、原型の価値を評価する姿勢がうかがえた。また、1888年に改築し、下見板を張り替えたとのことで、外壁、柱型1層目のと

もに白系は、この 1888 年に塗装されたものと推定した。外壁 19 層目の白色の下塗りを除く、残る 17 層については、1 層目と 20 層目の 98 年間で均等割りし、塗装間隔を 5.44 年とし、各ペンキ層の塗装年を推定した。この図によれば、外壁では 1890 年代頃から 1910 年代頃までの暗くて濃い目の緑系、茶系がめだつ。その後、明るく、淡い黄系、ピンク系、青系、クリーム系、ベージュ系のさまざまな色が使われ、1960 年代頃から濃い目のピンク系が 3 回続き、1986 年から現状の黄系となった。一方、柱型は、概ね

表 5－4 の 1 時層色環の分析ーペンキ層の最新塗装年、塗り始め年、塗装間隔の特定・推定
：ケンブリッジ地区

地区	No.	建物名称	上塗ペンキ層数(総数)*1		最新塗装年の特定・推定	最新塗装年の特定・推定の方法*2	塗り始め年の特定・推定*3		特定できた塗装間隔年*4	推定塗装間隔年*5
			外壁	窓枠等			外壁	窓枠等		
ケンブリッジ	1	Lesley College, Graduate Center	12 (12)	13 (13)	1984年頃	推定方法の式に基づく	1863年頃	同 左	—	11年
	2	Lesley College, Office of Student Affairs	20 (20)	18 (18)	1985年頃	同 上	1871年頃	同 左	—	6年
	3	Cheryl Foti & Robert Straus House	8 (8)	6 (6)	1983年頃	同 上	1878年	同 左	—	15年
	4	Joseph & Cornelia Tierney House	9 (10)	15 (16)	1983年頃	同 上	1879年	同 左	—	13年
	5	Judy & M. Wyllis Bibbins House	17 (18)	17 (18)	1985年頃	同 上	1881年	同 左	—	6.5年
	6	Lesley College, Counseling Psychology Division	16 (17)	19 (22)	1988年頃	同 上	1883年頃	同 左	—	7年
	7	Catherine & John Henn House	11 (12)	9 (10)	1985年頃	同 上	1885年頃	同 左	—	10年
	8	Dennis Carlone House	8 (8)	6 (6)	1984年頃	同 上	1886年	同 左	—	14年
	9	Sheila & William King House	16 (16)	4 (4)	1985年頃	同 上	1887年	1965年頃以前のペンキ層は消失と推定	—	6.5年
	10	James Kiggen House	14 (15)	14 (15)	1985年頃	同 上	1887年	同 左	—	7.5年
	11	Charlotte & Gordon Moore House	18 (19)	18 (18)	1986年頃	同 上	1892年	同 左	—	5.5年
	12	Arthur & Geneva Malenfant House	19 (21)	18 (18)	1987年頃	同 上	1892年	同 左	—	5.25年
	13	Gay & Dick Harter House	11 (12)	17 (17)	1982、3年	居住者の言	1873年	同 左	7～8年	11.3年
	14	Jean Oi & Andrew Walder House	17 (17)	13 (13)	1987年頃	推定方法の式に基づく	1883年	同 左	—	6.5年
	15	Mr. & Mrs. Charles Ferraro House	8 (10)	9 (11)	1984年	居住者の言	1887年	同 左	6、10、15年	16.25年
	16	Building owend by Francis Burns	13 (13)	8 (8)	1987年頃	推定方法の式に基づく	1888年	同 左	—	8年
	17	Joanne Turnbull House	21 (21)	11 (11)	1988年頃	同 上	1883年	同 左	—	5.25年
	18	Susan E. Maycock House	13 (14)	14 (15)	1986年頃	同 上	1854年	同 左	—	11年
			中位値13.5 (14.5) 平均値13.9 (14.6)	中位値13.5 (14) 平均値12.7 (13.3)					中位値 8.8年 平均値 9.6年	中位値 7.8年 平均値 9.2年

*1) ペンキ層の下塗の判断の方法にもとづき、下塗層、中塗層を判断し、それらを除いた上塗層を特定・推定したものである。

*2) ①居住者のヒアリングから塗装年を特定（「居住者の言」）。

②推定方法の式は、最新塗装年＝塗り始め年（創建年と推定）＋推定塗装間隔年×（上塗ペンキ層の総数－1）、（調査年の1991年－推定塗装間隔年）≤最新塗装年＜調査年の1991年。なお、推定塗装間隔年は原則整数とするが、左の式にあてはまらない場合、小数点以下の値を0.5または0.25のいずれかとする。

*3) 基本的には創建当初からペンキが塗装されていたと推定した。

*4) 居住者のヒアリングによる。

*5) 上記*2) の②の式による。

表５－４の２ 時層色環の分析ーペンキ層の最新塗装年、塗り始め年、塗装間隔の特定・推定
：ブルックライン、ニュートン地区

地区	No.	建物名称	上塗ペンキ層数(総数)*1		最新塗装年の特定・推定	最新塗装年の特定・推定の方法*2	塗り始め年の特定・推定*3		特定できた塗装間隔年*4	推定塗装間隔年*5
			外壁	窓枠等			外壁	窓枠等		
ブルックライン	19	Lynn & William Osborn House	7 (7)	15 (15)	不明	—	不明	不明	—	不明
	20	George & Nancy Peabody House	9 (9)	11 (11)	1985年	居住者の言	1878年	同 左	5～7年	17.2年
	21	Jim & Janet Fitzgibbons House	16 (19)	18 (21)	不明	—	不明	不明	—	不明
	22	Corliss & Ralph Engle House	12 (13)	8 (9)	1990年	居住者の言	1881年	同 左	5、11年	10.3年
	23	Betsy Shure & Gary Gross House	18 (18)	14 (14)	1987年頃	推定方法の式に基づく	1881年	同 左	—	6.25年
	24	Baker House	12 (12)	8 (8)	1990年	居住者の言	1885年頃	同 左	6年	12.5年
	25	Susan Porter & Myron Miller House	19 (20)	19 (19)	1986年	居住者の言	1888年	同 左	—	5.4年
	26	Chobee Hoy House	14 (14)	10 (10)	不明	—	不明	不明	—	不明
	27	Superintendent House, Larg Anderson Park	9 (9)	11 (11)	不明	—	不明	不明	—	不明
	28	Brookline Historical Museum	15 (15)	26 (26)	不明	—	不明	不明	—	不明
	29	Walnut Hills Cemetery Superintendent's Cottage	2 (2)	14 (14)	不明	—	不明	不明	—	不明
			中位値12 (13) 平均値12.1 (12.5)	中位値14 (14) 平均値14 (14.4)					中位値6年 平均値7年	中位値10.3年 平均値10.3年

ニュートン	30	Katherine Straus House	14 (14)	6 (6)	不明	—	不明	不明	—	不明
	31	Mr. & Mrs. Pobst House	10 (11)	16 (16)	1988年	居住者の言	1928年頃以前のペンキ層は消失と推定	1889年	1、6、14年、	6.5年
	32	John & Karen Arthur House	9 (9)	9 (9)	1988年頃	推定方法の式に基づく	1896年	同 左	—	11.5年
	33	Mr. & Mrs. Caterine House	15 (15)	9 (9)	1984年頃	同 上	1872年頃	同 左	—	8年
	34	Mr. & Mrs. John Holz House	15 (20)	7 (7)	1985年頃	同 上	1887年頃	同 左	—	7年
	35	Mr. & Mrs. Gove House	15 (17)	10 (10)	1987年	居住者の言	1887年頃	同 左	6、8、10年、	7年
	36	Mr. & Mrs. Frank Aquilera House	14 (15)	13 (13)	1988年頃	推定方法の式に基づく	1884年	同 左	—	8年
	37	Lavinia Abel House	6 (6)	5 (5)	不明	居住者の言	不明	不明	—	不明
	38	Mr. & Mrs. Robert Smith House	12 (14)	15 (17)	1989年	居住者の言	1892年	同 左	5、6、7年、	11.3年
	39	Don Tellalian House	7 (7)	5 (5)	1988年頃	推定方法の式に基づく	1874年頃	同 左	—	19年
	40	Claire Saulnier, Steven Howard House	10 (10)	10 (10)	1985年頃	同 上	1886年頃	同 左	—	11年
	41	Mr. James Pike House	16 (20)	14 (14)	1987年頃	同 上	1893年頃	同 左	—	6.25年
	42	June & Eugene Sisco House	16 (16)	10 (10)	1986年頃	同 上	1896年	同 左	—	6年
			中位値14 (14) 平均値12.2 (13.4)	中位値10 (10) 平均値9.9 (10.1)					中位値6年 平均値7年	中位値8年 平均値9.2年

*1) ペンキ層の下塗の判断の方法にもとづき、下塗層、中塗層を判断し、それらを除いた上塗層を特定・推定したものである。

*2) ①居住者のヒアリングから塗装年を特定（「居住者の言」）。

②推定方法の式は、最新塗装年＝塗り始め年（創建年と推定）＋推定塗装間隔年×（上塗ペンキ層の総数－1）、（調査年の1991年－推定塗装間隔年）≤最新塗装年＜調査年の1991年。なお、推定塗装間隔年は原則整数とするが、左の式にあてはまらない場合、小数点以下の値を0.5または0.25のいずれかとする。

*3) 基本的には創建当初からペンキが塗装されていたと推定した。

*4) 居住者のヒアリングによる。

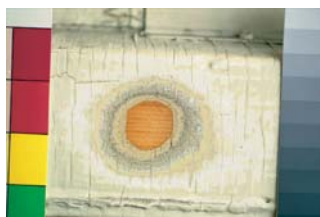
*5) 上記*2) の②の式による。

外壁の時層色環のペンキ層の色票	外壁および窓枠ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定	窓枠の時層色環のペンキ層の色票
-----------------	--------------------------	-----------------

層目	色 票		層目	色 票
古 ↓	1 白色	1892年：創建当初より塗装されていたと推定	1 白色	
	2	1897年頃：	2	
	3	1903年頃：	3	
	4	1908年頃：	4	
	5	1913年頃：	5	
	6	1918年頃：	6	
	7	1924年頃：	7	
	8	1929年頃：	8	
	9	1934年頃：	9 白色	
	10	1939年頃：	10	
	11	1945年頃：	11	
	12 白色 (下塗り)	最新塗装年＝塗り始め年の1892年＋推定塗装間隔年×18(上塗りペンキ層の総数－1)。 (調査年の1991年－推定塗装間隔年) ≤ 最新塗装年 < 調査年の1991年。 なお、推定塗装間隔年は原則整数とするが、上の式にあてはまらない場合、小数点以下の値を0.5または0.25のいずれかとする。	12	
	13	1950年頃：	13	
	14	1955年頃：	14	
	15 白色 (下塗り)		15 白色	
	16	1960年頃：	16	
	17	1966年頃：	17	
	18	1971年頃：	18	
	19	1976年頃：		
	20	1981年頃：		
↓ 新	21	1987年頃：		



外壁の時層色環（21層）



窓枠の時層色環（18層）



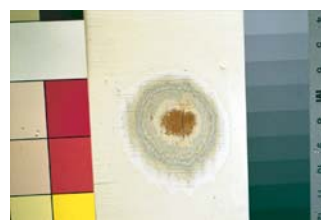
建物外観

図 5－5 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例 1：ケンブリッジ地区で外壁のペンキ層数が最多の 21 層の事例－調査対象 No. 12. Arthur & Geneva Malenfant House (1892 年、Colonial Revival)－

外壁の時層色環のペンキ層の色票		外壁および柱型ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定	柱型の時層色環のペンキ層の色票	
古 ↓	層目	色 票		
	1		1888年：居住者の言より、1888年に改築し、下見板を張り替えた時から塗装されていたと推定。	
	2		1893年：――	
	3		1899年：――	
	4		1904年：――	
	5		1910年：――	
	6		1915年：――	
	7		1921年：――	
	8		1926年：――	
	9		1932年：――	
	10		外壁2～18層目の17の色の年代は、1層目の1888年と19層目（下塗り）、20層目の1986年頃までの98年間の塗装間隔を均等割りして（5.44年）推定。	
	11		1937年：――	
	12		1942年：――	
	13		1948年：――	
	14		1953年：――	
	15		1959年：――	
	16		1964年：――	
	17		1970年：――	
	18		1975年：――	
19		1980年：――		
↓ 新	19	白色（下塗り）		
	20		1986年：居住者の言より、1986年に塗り替え。	
			層目	色 票
			1	白色
			2	
			3	
			4	白色
			5	
			6	白色
			7	
			8	
			9	
			10	白色
			11	
			12	
			13	
			14	
			15	白色
			16	
			17	白色
			18	白色
			19	白色



外壁の時層色環（20層）



柱型の時層色環（19層）



建物外観

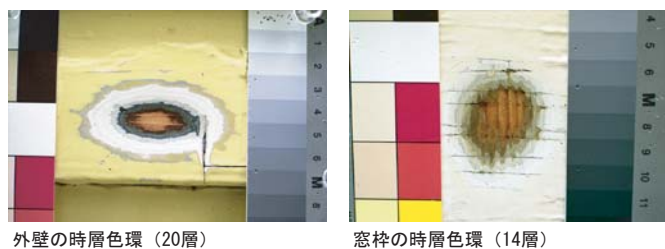
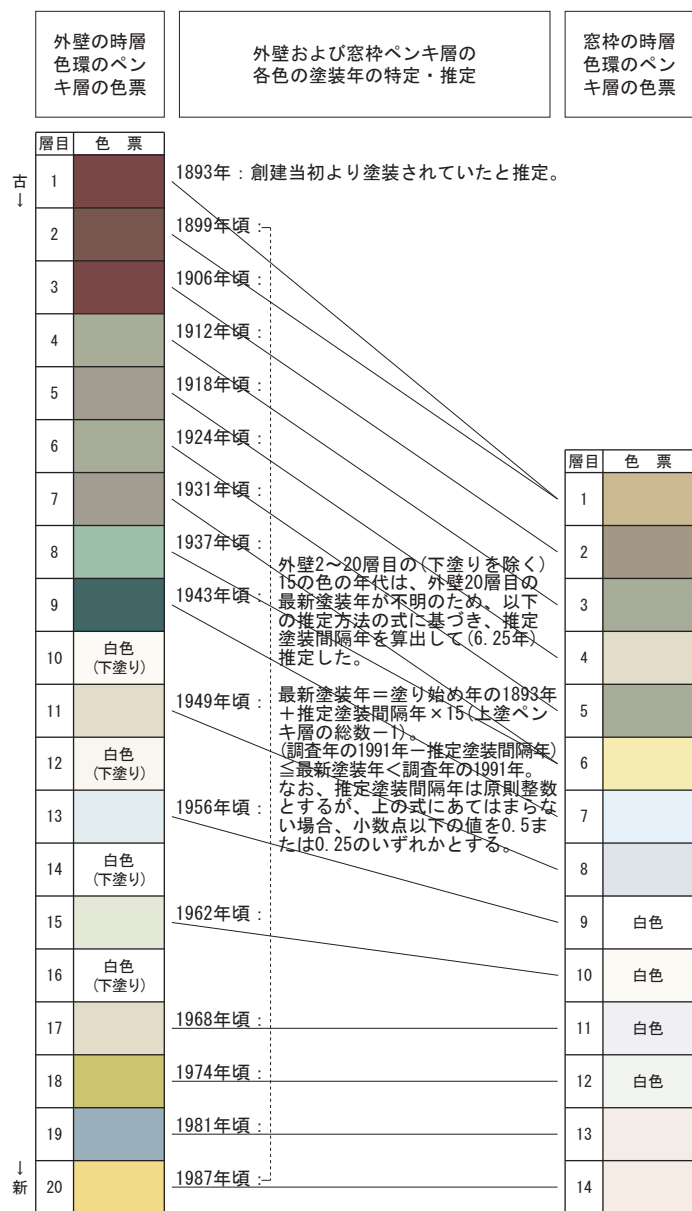
居住者の言より、色の選択理由として、オリジナルの色を選ぶようにしている。

図5－6 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例2
：ブルックライン地区で外壁のペンキ層数が最多の20層の事例－調査対象No.25. Susan Porter & Myron Miller House(1811年、Federal)－

外壁とは異なる色で、しかも白系や白に近い、薄めの灰系や緑系、ベージュ系、クリーム系、ピンク系が使われ、外壁の色とのコントラストを強調し、装飾性を高める配色がおこなわれていた。

図 5-7 は、ニュートン地区で外壁のペンキ層数が最多の 20 層、窓枠のペンキ層数 14 層の代表的事例、No.41 Mr. James Pike House(c.1893 年、Queen Anne 様式) である。現状の配色は外壁が黄系、窓枠が白系である。最新塗装年が不明であったため、塗り始め年を創建年の 1893 年とし、算出式を用いて推定塗装間隔年を 6.25 年とし、各ペンキ層の塗装年を推定した。外壁では 10、12、14、16 層目の白色の下塗りを除く、16 層の上塗り層があり、1940 年代頃をさかいにして、色の傾向が大きく変わった。1940 年代前半頃までは暗くて濃い目の茶系と緑系が使われていた。1920 年代頃までの窓枠の色も暗くて濃い目の茶系と緑系で、外壁とほぼ同じ色が使われていた。1940 年代後半からは、外壁も窓枠も一転して白系へと変わり、それが 4 回連続して使われた。1970 年代頃以降、窓枠は白系と変化がみられないが、外壁はやや濃い目の緑系、青系、そして現状の黄系へとさらに変わってきており、配色は、外壁と窓枠等のコントラストを強調し、装飾性を高める方向にあるといえる。

図 5-8 は、居住者へのヒアリングにより多くのペンキ層の塗装年が特定できた典型事例として、ニュートン地区の No.38 Mr. & Mrs. Robert Smith House(1892 年、Queen Anne 様式) をとりあげたものである。居住者へのヒアリングから、1960 年から 5 ～ 7 年おきに、6 回塗り替えられたことがわかった。1960 年に外壁 7 層目の灰系へ、1966 年に外壁 8 層目の灰みの青系へと、2 回続けて同色系に塗り替えられている。その後、1971 年に外壁 9 層目の緑系へと、それまでとはまったく異なる色へと塗り替えられ、以降 1989 年まで外壁は 4 回連続して同じ緑系としている。その選択理由として、「魅力的であることと、ヴィクトリア期のテイストであること」があげられている。これに対して窓枠では、ベージュ系、クリーム系、灰系、白系とそれぞれ異なる色が使われている。1960 年以前については、外壁 1 層目の白系が創建時の 1892 年に塗装されたと推定し、残る外壁 2 ～ 6 層については、1 層目と 7 層目の 68 年間を均等割りして塗装間隔を 11.33 年とし、各ペンキ層の塗装年を推定した。1910 年代頃までは白系、クリーム系、ピンク系の明るい色であったが、1920、30 年代頃は非常に暗い、黒に近い緑系と青系が使われ、大きく変化してきたことがとらえられた。



外壁の時層色環 (20層)

窓枠の時層色環 (14層)



建物外観

図5-7 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例3
：ニュートン地区で外壁のペンキ層数が最多の20層の事例
－調査対象 No. 41. Mr. James Pike House (c. 1893 年、Queen Anne)－



図 5 - 8 時層色環分析による建物ごとの色彩変容データ票の事例 4
 : 居住者へのヒアリングにより多くのペンキ層の塗装年が
 特定できる事例ー調査対象 No. 38. Mr. & Mrs. Robert
 Smith House (1892 年、Queen Anne) ー

5-3-2 時層色環分析による各時代の町並み色彩

前節までの1)～6)の手順に加えて、7)時代区分を設定した上で、全建物の色彩変容データ票の集計をおこない、各時代における色の種類と数を把握した。

表5-5、5-6は、この1)～7)の手順で作成した、外壁および窓枠・柱型等のペンキ色彩変遷の一覧表である。これは、42棟の建物において、外壁と窓枠・柱型等のすべての上塗りペンキ色彩を対象に、①19世紀後半のヴィクトリア期の時代を考慮して、19世紀と20世紀をさかいにおおむね20年ごとに、1850-1870年代、1880-1890年代、1900-1910年代、1920-1930年代、1940-1950年代、1960-1970年代、1980年代 - 調査年の1991年、の7期に分類し、②7期の各時代の期間内に該当する外壁と窓枠・柱型等の色彩を抽出し、③それを色相によって、外壁では白系、灰系、クリーム系、ベージュ系、肌系、ピンク系、オレンジ系、黄系、緑系、青系、茶系の11種類に、窓枠・柱型等では白系、灰系、クリーム系、ベージュ系、肌系、ピンク系、オレンジ系、黄系、緑系、青系、茶系、黄土系、赤系の13種類に分類し、整理したものである。

これにもとづき、ケンブリッジ、ブルックライン、ニュートンの3地区において、各時代ごとに建物の色彩の数をカウントし、集計したものが表5-7、表5-8である。

これらによると、どの地区においても、また、どの時代においても、一つや二つの色で統一されていたことはなく、さまざまな色が使われていたことがわかる。その中で、時代によって、また、地区によって特徴的な色を見出すことができる。19世紀後期の1880-90年代頃には、外壁では緑系と茶系がそれぞれ、3地区あわせて全体の31%ずつと多くみられる。窓枠・柱型等も同様に、緑系が31%、茶系が22%と多いが、白系も28%を占めている。20世紀に入って、1900-1910年代頃も、外壁では3地区あわせて緑系が17%、茶系が21%と多いが、前の19世紀後期にくらべると減少している。それに代わり増加したのがベージュ系14%と灰系13%で、ケンブリッジ地区ではとくにベージュ系が20%と最も多い。この頃の窓枠・柱型等は、3地区あわせて灰系が24%、白系が18%と多く、以降現在までこの2つの色が概ね半数を占め、ニュートン地区ではとくに白系が多くみられる。次の1920-1930年代頃には、外壁では3地区あわせて灰系が21%、ベージュ系が15%と多くなる。この傾向はケンブリッジ地区に顕著にみられ、灰系が29%、ベージュ系が24%と半数を占めるようになる。1940年代以降は、外壁では3地区あわせて灰系と白系が多くみら

表5-5 3地区における建物ごとの、7期の各時代の期間内で塗装された外壁の色

地区	建物 No.	建築年	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
ケン プ リ ッ ジ	1	1862-63	白×2	ページュ、緑	ピンク、ページュ	灰	ページュ、緑	灰、白	緑
	2	c.1868-73	白、灰	緑、黄、白	灰、肌、 ピンク、緑	ページュ×2、 クリーム	緑、青、灰	青、灰×2、肌	緑
	3	1878	青	灰	茶	クリーム、茶	灰	白	ピンク
	4	1879	灰	緑	ページュ×2	黄	灰、ページュ	灰	白
	5	1881		茶×2、クリーム	白、灰、茶	灰×2、ページュ	茶、クリーム、 青、白	緑、茶×2	茶
	6	c.1883		白、緑×2	灰、緑×2	青×2、クリーム	ページュ、クリーム	茶、青、緑	茶、緑
	7	1884-86		緑×2	緑、灰	白、クリーム	灰、緑	茶×2	灰
	8	1886		緑	灰、茶	灰	クリーム、肌	ページュ	青
	9	1887		白×2	白、肌、 ページュ	ページュ、肌、 緑、ピンク	白×2、黄	灰×2、緑	緑
	10	1887		茶、緑	白、灰×2	灰×2	茶、灰×2	灰×3	灰
	11	1892		ピンク、灰	クリーム×2、ピンク	ページュ×2、 クリーム、灰	灰×4	灰、青×2	灰、白
	12	1892		白、クリーム	ページュ×2、 緑×2	ページュ×3、青	白、ページュ、 青	ページュ、 灰×2、クリーム	ピンク、クリーム
	13	1873	緑	緑、茶	茶、黄	ページュ	灰×2	緑、灰	灰
	14	1883		茶×2、白	白、茶、 ページュ	茶、ページュ、 緑	灰、白、緑	茶、ピンク、緑	灰、緑
	15	1887		茶	ページュ	灰、黄	クリーム、ピンク	クリーム	黄
	16	1888		茶、緑	クリーム、肌	クリーム、ピンク、 灰	ピンク、青	灰×3	灰
	17	1883		緑×2、茶×2	茶×3	灰×3、緑	茶、灰×2、緑	茶×3、青	茶×2
	18	1854	白×2、クリーム	ページュ、ピンク	ページュ	緑、灰	緑、灰	白、クリーム	クリーム
ブル ッ ク ラ イ ン	19	不明	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	20	1878	緑	灰	青	灰	オレンジ	オレンジ×2、ピンク	オレンジ
	21	不明	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	22	1881		茶×2	緑、白	白×2	白×2	白、灰	青、ページュ
	23	1881		緑×2、青	ページュ、茶×3	クリーム、青×2	青、緑×2	白×2、茶	青、茶
	24	1880代		緑、白	緑	灰、白	灰	灰×4	灰×2
	25	1811		白×2、緑	茶、緑、黄	白、ピンク×2、 黄	青、クリーム、 ページュ、黄	ピンク×2、茶	ピンク、黄
	26	不明	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	27	不明	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	28	1700代	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	29	1900代初期	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
ニ ュ ー ト ン	30	1874前	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	31	1889				茶×2	緑、茶、 ページュ	茶×2、緑、白	ピンク
	32	1896		緑	灰、茶	緑	緑×2	緑、灰	ページュ
	33	1871-73	クリーム	ページュ、 白、肌	白×2	白×3	白×2	白×3	白
	34	1886-88		茶×2	茶、緑、青	クリーム、肌、白	白×3	白×3	白
	35	1886-88		茶×2	クリーム、緑、白	クリーム、灰×2	灰、緑、白	白×2	白×2
	36	1884		緑、ページュ	黄、緑、灰	白、茶	茶、ピンク×2	ピンク×2	白×2
	37	1876	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	38	1892		白	クリーム、ピンク	緑、青	ピンク	青、灰、緑×2	緑×2
	39	c.1874	茶	緑	黄	茶	茶	ページュ	灰
	40	c.1886		茶×2	青、灰	茶	緑、白	白×2	白
	41	c.1893		茶×2	茶×2、緑	緑×2、茶	緑、白×2	白×2、緑	青、黄
	42	1896		白	ページュ、 黄、ピンク	緑×2、茶、 ページュ	クリーム×2、灰	灰、白×2	青、灰

この表は、3地区の建物ごとの色彩変容データ票と、表5-4の1、2の各ペンキ層の塗装年の特定・推定にもとづき、①19世紀と20世紀をさかいとして概ね20年ごとの1850-70年代、1880-90年代、1900-10年代、1920-30年代、1940-50年代、1960-70年代、1980年代-1991年、の7期の時代区分を設定し、②各建物の外壁ペンキ層の色を主に色相から白系、灰系、クリーム系、ページュ系、肌系、ピンク系、オレンジ系、黄系、緑系、青系、茶系の11種類に分類し、③7期の各時代の期間内に塗装されたと特定、推定できたすべての色を示したものである。

・色の表示は、白系を白のように、系を省略している。

・同じ時代区分内に、例えば同じ灰系の色を2回塗装しているものについては、灰×2のようにあらわしている。

・(不明)は、ペンキの塗り始め年も最新塗装年も不明のため、すべてのペンキ層の塗装年を推定することが不可能であったものを示す。

表5-6 3地区における建物ごとの、7期の各時代の期間内で塗装された窓枠・柱型等の色

地区	建物 No.	建築年	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
ケンブリッジ	1	1862-63	白、ページュ	茶、白	ページュ×2、 ピンク	灰	ピンク、緑	灰×2	クリーム
	2	c.1868-73	茶×2	茶×3	灰×2、 ピンク、茶	茶、白×2	白×2	白×2、クリーム	ページュ
	3	1878	灰	灰	茶	白	茶	(未塗装)	白
	4	1879	ページュ	茶、緑、 ページュ	黄、灰×2	緑、ピンク、灰	灰×2、白	白	灰
	5	1881		緑×3	緑×2、灰	茶×2、ページュ	灰、ページュ× 2、黄	青、白、茶	茶
	6	c.1883		白、茶、緑×2	緑×3	緑×2、灰、 クリーム	ピンク、灰、茶	灰、白、緑	灰、緑
	7	1884-86		緑	灰	白、黄	灰、緑	茶×2	灰
	8	1886		緑	茶	緑	白、ページュ	(未塗装)	白
	9	1887		(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	白、灰、緑	クリーム
	10	1887		茶、白	灰、白、緑	灰、白	灰×2、白	灰×3	灰
	11	1892		白、緑	白×2、ページュ	ページュ×3、白	白、灰×2、青	灰×3	灰、白
	12	1892		白×2	白×2、灰	白×4	白、クリーム、 ピンク	ページュ、 クリーム、白×2	白×2
	13	1873	緑	クリーム、灰	クリーム、緑、灰	クリーム×2、灰	緑、青、 ページュ×2	緑、茶、 ページュ	茶
	14	1883		茶、緑	灰	白、灰	ページュ、 白、茶	ページュ、緑×2	灰、緑
	15	1887		ページュ	ピンク	灰、白、クリーム	灰、ピンク	クリーム	赤
	16	1888		緑	クリーム	灰、緑	緑	緑×2	緑
	17	1883		緑×2	灰、緑	灰×2	灰、白	白×2	白
	18	1854	白、青、 クリーム、茶	茶、緑	青	白、ページュ	緑、クリーム	白、クリーム	白
ブルックライン	19	不明	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	20	1878	緑	灰	青、灰	灰×2	オレンジ	オレンジ×2、白	オレンジ
	21	不明	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	22	1881		白×2	ピンク	白	白	灰	青、ページュ
	23	1881		白、クリーム	青、灰	青、白	茶、白×2	白、ページュ、 緑	茶、緑
	24	1880代				白	灰	灰×4	灰×2
	25	1811		白×2、緑	白×2、ページュ	白×3、灰	灰×2、クリーム、 ピンク	白×3	白×2
	26	不明	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	27	不明	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	28	1700代	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	29	1900代初期	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
ニユー トン	30	1874前	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	31	1889		黄土、ページュ	ページュ×3	白、緑×2	緑×2、クリーム	ピンク×2、 緑、白	白
	32	1896		白	緑、灰	白	ページュ、白	ページュ、白	ページュ
	33	1871-73	茶	灰	茶	灰、白	白	白×2	白
	34	1886-88		(剥離?)	(剥離?)	(剥離?)	茶×2、白	白×3	白
	35	1886-88		緑	灰、白	灰	灰、白	白×2	白×2
	36	1884		茶	クリーム、 ピンク、茶	茶×2	茶×2、白	白、茶	青、緑
	37	1876	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)
	38	1892		白×2	クリーム×2、灰	クリーム、灰、白	白	ページュ×2、 クリーム×2	灰、白
	39	c.1874	茶	(未塗装)	白	(未塗装)	クリーム	茶	灰
	40	c.1886		緑、茶	白×2	クリーム	クリーム×2	クリーム、白	白
	41	c.1893		茶	茶、緑、白	緑、クリーム	白×3	白×3	白×2
	42	1896		白	緑、肌	ページュ×3	クリーム、灰	白	白

この表は、3地区の建物ごとの色彩変容データ票と、表5-4の1、2の各ペンキ層の塗装年の特定・推定にもとづき、①19世紀と20世紀をさかいとして概ね20年ごとの1850-70年代、1880-90年代、1900-10年代、1920-30年代、1940-50年代、1960-70年代、1980年代-1991年、の7期の時代区分を設定し、②各建物の外壁ペンキ層の色を主に色相から白系、灰系、クリーム系、ページュ系、肌系、ピンク系、オレンジ系、黄系、緑系、青系、茶系の11種類に分類し、③7期の各時代の期間内に塗装されたと特定・推定できたすべての色を示したものである。

- ・色の表示は、白系を白のように、系を省略している。
- ・同じ時代区分内に、例えば同じ灰系の色を2回塗装しているものについては、灰×2のようにあらわしている。
- ・(不明)は、ペンキの塗り始め年も最新塗装年も不明のため、すべてのペンキ層の塗装年を推定することが不可能であったものを示す。
- ・(未塗装)は、区分設定した時代の期間内にペンキの塗り替えはおこなわれず、その前の時代に塗装されたペンキのままであったことを示す。
- ・(剥離?)は、ペンキ層が剥がされた可能性が高く、古いペンキ層を確認することができなかったものを示す。

表５－７ 外壁下見板のペンキ色彩の変遷
－ペンキ層の年代特定・推定手法による

● ケンブリッジ

時代区分 外壁の色	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
白	5(50)	6(16)	4(9)	1(2)	5(11)	3(7)	2(9)
灰	2(20)	2(5)	7(16)	13(29)	16(35)	16(36)	6(26)
クリーム	1(10)	2(5)	3(7)	6(13)	4(9)	3(7)	2(9)
ベージュ	—	2(5)	9(20)	11(24)	4(9)	2(4)	—
肌	—	—	3(7)	1(2)	1(2)	1(2)	—
ピンク	—	2(5)	3(7)	2(4)	2(4)	1(2)	2(9)
黄	—	1(3)	1(2)	2(4)	1(2)	—	1(4)
緑	1(10)	13(34)	6(14)	4(9)	6(13)	5(11)	5(21)
青	1(10)	—	—	3(7)	4(9)	5(11)	1(4)
茶	—	10(26)	8(18)	2(4)	3(7)	9(20)	4(17)
合計	10(100)	38(100)	44(100)	45(100)	46(100)	45(100)	23(100)

● ブルックライン

時代区分 外壁の色	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
白	—	3(30)	1(10)	4(33)	2(18)	3(20)	—
灰	—	—	—	2(17)	1(9)	5(33)	2(22)
クリーム	—	—	—	1(8)	1(9)	—	—
ベージュ	—	—	1(10)	—	1(9)	—	1(11)
肌	—	—	—	—	—	—	—
ピンク	—	—	—	2(17)	—	3(20)	1(11)
オレンジ	—	—	—	—	1(9)	2(13)	1(11)
黄	—	—	1(10)	1(8)	1(9)	—	1(11)
緑	1(100)	4(40)	3(30)	—	2(18)	—	—
青	—	1(10)	—	2(17)	2(18)	—	2(22)
茶	—	2(20)	4(40)	—	—	2(13)	1(11)
合計	1(100)	10(100)	10(100)	12(100)	11(100)	15(100)	9(100)

● ニュートン

時代区分 外壁の色	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
白	—	3(18)	3(13)	5(20)	9(34)	15(52)	7(44)
灰	—	—	3(13)	2(8)	2(8)	3(10)	2(13)
クリーム	1(50)	—	2(8)	2(8)	2(8)	—	—
ベージュ	—	2(12)	1(4)	1(4)	1(4)	1(3)	1(6)
肌	—	1(6)	—	1(4)	—	—	—
ピンク	—	—	2(8)	—	3(12)	2(7)	1(6)
黄	—	—	3(13)	—	—	—	1(6)
緑	—	3(18)	4(17)	6(24)	6(23)	5(17)	2(13)
青	—	—	2(8)	1(4)	—	1(3)	2(13)
茶	1(50)	8(47)	4(17)	7(28)	3(12)	2(7)	—
合計	2(100)	17(100)	24(100)	25(100)	26(100)	29(100)	16(100)

● 3地区合計

時代区分 外壁の色	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
白	5(38)	12(18)	8(10)	10(12)	16(19)	21(24)	9(19)
灰	2(15)	2(3)	10(13)	17(21)	19(23)	24(27)	10(21)
クリーム	2(15)	2(3)	5(6)	9(11)	7(8)	3(3)	2(4)
ベージュ	—	4(6)	11(14)	12(15)	6(7)	3(3)	2(4)
肌	—	1(2)	3(4)	2(2)	1(1)	1(1)	—
ピンク	—	2(3)	5(6)	4(5)	5(6)	6(7)	4(9)
オレンジ	—	—	—	—	1(1)	2(2)	—
黄	—	1(2)	5(6)	3(4)	2(2)	—	3(6)
緑	2(15)	20(31)	13(17)	10(15)	14(17)	10(11)	7(15)
青	1(8)	1(2)	2(3)	6(7)	6(7)	6(7)	5(11)
茶	1(8)	20(31)	16(21)	9(11)	6(7)	13(15)	5(11)
合計	13(100)	65(100)	78(100)	82(100)	83(100)	89(100)	47(100)

数値は各時代の期間内に存在し、ペンキが塗られ、色が確認できる建物において、その色のペンキが塗られた回数を示す。1棟の建物である時代の期間内に2回以上塗られたものも数多くみられるが、そのすべての回数をカウントしている。カッコ内は、時代区分ごとの建物にペンキが塗られた回数の合計値を100とした時の割合%を示す。濃い網かけは最も多いものを、薄い網かけは2番目に多いものを示す。

表 5-8 窓枠・柱型等のペンキ色彩の変遷
ーペンキ層の年代特定・推定手法による

● ケンブリッジ

時代区分 窓枠等の色	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
白	2(18)	6(18)	5(14)	13(31)	9(21)	11(28)	7(32)
灰	1(9)	2(6)	11(30)	10(24)	11(26)	10(25)	6(27)
クリーム	1(9)	1(3)	2(5)	4(10)	2(5)	4(10)	2(9)
ページュ	2(18)	2(6)	3(8)	5(12)	6(14)	3(8)	1(5)
ピンク	—	—	3(8)	1(2)	4(9)	—	—
黄	—	—	1(3)	1(2)	1(2)	—	—
緑	1(9)	14(41)	8(22)	5(12)	5(12)	7(18)	3(14)
青	1(9)	—	1(3)	—	2(5)	1(3)	—
茶	3(27)	9(26)	3(8)	3(7)	3(7)	4(10)	2(9)
赤	—	—	—	—	—	—	1(5)
合計	11(100)	34(100)	37(100)	42(100)	43(100)	40(100)	22(100)

● ブルックライン

時代区分 窓枠等の色	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
白	—	5(63)	2(25)	6(60)	3(30)	5(36)	2(22)
灰	—	1(13)	2(25)	3(30)	3(30)	5(36)	2(22)
クリーム	—	1(13)	—	—	1(10)	—	—
ページュ	—	—	1(13)	—	—	1(7)	1(11)
ピンク	—	—	1(13)	—	1(10)	—	—
オレンジ	—	—	—	—	1(10)	2(14)	1(11)
緑	1(100)	1(13)	—	—	—	1(7)	1(11)
青	—	—	2(25)	1(10)	—	—	1(11)
茶	—	—	—	—	1(10)	—	1(11)
合計	1(100)	8(100)	8(100)	10(100)	10(100)	14(100)	9(100)

● ニュートン

時代区分 窓枠等の色	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
白	—	4(33)	5(23)	4(22)	9(39)	15(58)	10(63)
灰	—	1(8)	3(14)	3(17)	2(9)	—	2(13)
クリーム	—	—	3(14)	3(17)	5(22)	3(12)	—
ページュ	—	1(8)	3(14)	3(17)	1(4)	3(12)	1(6)
肌	—	—	1(5)	—	—	—	—
ピンク	—	—	1(5)	—	—	2(8)	—
黄	—	—	—	—	—	—	1(6)
緑	—	2(17)	3(14)	3(17)	2(9)	1(4)	1(6)
青	—	—	—	—	—	—	1(6)
茶	2(100)	3(25)	3(14)	2(11)	4(17)	2(8)	—
黄土	—	1(8)	—	—	—	—	—
赤	—	—	—	—	—	—	—
合計	2(100)	12(100)	22(100)	18(100)	23(100)	26(100)	16(100)

● 3地区合計

時代区分 窓枠等の色	1850-70 年代	1880-90 年代	1900-10 年代	1920-30 年代	1940-50 年代	1960-70 年代	1980年代- 1991
白	2(14)	15(28)	12(18)	23(33)	21(28)	31(39)	19(40)
灰	1(7)	4(7)	16(24)	16(23)	16(21)	15(19)	10(21)
クリーム	1(7)	2(4)	5(7)	7(10)	8(11)	7(9)	2(4)
ページュ	2(14)	3(6)	7(10)	8(11)	7(9)	7(9)	3(6)
肌	—	—	1(2)	—	—	—	—
ピンク	—	—	5(7)	1(1)	5(7)	2(3)	—
オレンジ	—	—	—	—	1(1)	2(3)	1(2)
黄	—	—	1(1)	1(1)	1(1)	—	1(2)
緑	2(14)	17(31)	11(17)	8(11)	7(9)	9(11)	5(11)
青	1(7)	—	3(4)	1(1)	2(3)	1(1)	2(4)
茶	5(36)	12(22)	6(9)	5(7)	8(11)	6(8)	3(6)
黄土	—	1(2)	—	—	—	—	—
赤	—	—	—	—	—	—	1(2)
合計	14(100)	54(100)	67(100)	70(100)	76(100)	80(100)	47(100)

数値は各時代の期間内に存在し、ペンキが塗られ、色が確認できる建物において、その色のペンキが塗られた回数を示す。1棟の建物である時代の期間内に2回以上塗られたものも数多くみられるが、そのすべての回数をカウントしている。カッコ内は、時代区分ごとの建物にペンキが塗られた回数の合計値を100とした時の割合%を示す。濃い網かけは最も多いものを、薄い網かけは2番目に多いものを示す。

れ、ケンブリッジ地区ではとくに灰系が、ニュートン地区では白系が多い。

5-4 アメリカ・ボストン周辺地区の町並み色彩の時代変遷とその要因・背景

これまでの分析にもとづき、時代の色の共通する傾向から、19世紀後期の1880年代頃から90年代頃まで、20世紀前期の1900年代頃から1930年代頃まで、20世紀中期の1940年代頃から現在までの、3つの時代区分にまとめることができ、それによる町並み色彩の変化とその要因、背景を分析、考察する（表5-9）。

(1) 第1期：19世紀後期の1880年代頃から90年代頃までの多色の中における「緑系」と「茶系」の時代

この時代は、外壁も窓枠・柱型等も様々な色が使われ、多色の町並みの時代であったといえる。その中で比較的多く使われ、特徴的であったのは、外壁では緑系と茶系の濃い目で暗い色（写真5-7、5-8）、窓枠・柱型等では外壁と同系色かまたは白系の色であり、外壁の色と同調した比較的小となしい配色のタイプと、外壁の色とのコントラストを強調し、装飾性を高めるタイプの、対照的な2タイプがあったと考えられる。アメリカでは50年から100年単



写真5-7 外壁の緑系の事例



写真5-8 外壁の茶系の事例

表5-9 アメリカ・ボストン周辺地区の町並み色彩の時代変遷とその要因・背景

【期】	【時代区分】	【町並みの基調をなすペンキ色彩】	【ペンキ色彩の具体的内容】	【色を決める要因・背景】
1	19世紀後期の1880年代頃から1890年代頃まで	多色の中に特徴的な色として、緑系と茶系。	外壁は白系、灰系、クリーム系、ページュ系、肌系、ピンク系、黄系、緑系、青系、茶系の10種類と多様。 窓枠・柱型等も白系、灰系、クリーム系、ページュ系、緑系、茶系、黄土系の7種類と多様。 中でも外壁は暗くて濃いめの色で緑系、灰系が、窓枠・柱型等は外壁と同系色または白系が特徴的。	19世紀後半のヴィクトリアン様式建築のダーク・アンド・リッチの色調の反映。
2	20世紀前期の1900年代頃から1930年代頃まで	多色の中に特徴的な色として、緑系と茶系から、灰系、ページュ系への移行。	外壁は前の1期と同様の10種類と多様。 窓枠・柱型等も前の1期の7種類から黄土系が減ったが肌系、ピンク系、黄系、青系が加わり、10種類と多様。 中でも外壁は1910年代頃までは暗くて濃いめの色で緑系、灰系が、1920年代頃からは灰系とページュ系が特徴的。窓枠・柱型等は灰系と白系が特徴的。	ペンキ材料技術の発展にともなう中間色、淡色の使用。 20世紀の時代の流行色、パステル調の明るい色の採用。 新しい時代への希望や期待を、新しい明るい色で表現。
3	20世紀中期の1940年代頃から現在まで	多色の中に特徴的な色として、灰系と白系。	外壁は前の2期の10種類にオレンジ系が加わり11種類と多様。 窓枠・柱型等も前の2期の10種類から肌系が減ったがオレンジ系が加わり、10種類と多様。 中でも外壁、窓枠・柱型等ともに灰系と白系が特徴的。	下見板張り建物の伝統である白色への回帰。 敷地が広く、庭の緑の豊かな屋敷型の建築タイプからなる町並みに調和する色彩選択。 一般住民が憧憬する組積造の石を色彩で表現。

3) グレゴリー・克蘭シー Gregory K. Clancey (1991 年の調査時はニューイングランド歴史遺産保存協会 Society for the Preservation of New England Antiquities - 通称 SPNEA の職員 Architectural Conservator であった。現在シンガポール国立大学助教授) へのヒアリングによる。



写真 5-9 外壁の灰系の事例



写真 5-10 外壁のベージュ系の事例



写真 5-11 外壁の灰系の事例



写真 5-12 外壁の白系の事例

位で時代による色の流行があり、18 世紀には安価な顔料を要因とする鉄錆のような赤色とくすんだ黄色が、19 世紀前半にはグリーン・リバイバル様式建築の流行にともなう白色が、19 世紀後半にはヴィクトリア様式建築の流行にともない多色による塗り分けとダーク・アンド・リッチとよばれる暗くて濃い目の色調が、20 世紀にはパステル調の明るい色がそれぞれ流行したといわれている³⁾。この 19 世紀後半の時代の、ヴィクトリアン様式建築のダーク・アンド・リッチの色調が反映され、様式建築文化主導型の町並み色彩が形成されていたと考えられる。

(2) 第 2 期：20 世紀前期の 1900 年代頃から 1930 年代頃までの多色の中における「緑系、茶系」から「灰系、ベージュ系」への移行の時代

この時代も前期を継承し、多色の町並みが基本である。多色の中の特徴的な色彩として、20 世紀に入ってからすぐの 1900 年代頃から 1910 年代頃までは、とくに前期の外壁の濃い目で暗い緑系、茶系の色を継承しながらも、ベージュ系などのパステル調の明るい色が増えてきた。1920 年代頃から 1930 年代頃には、灰系とベージュ系が増え（写真 5-9、5-10）、19 世紀後半のダーク・アンド・リッチの色調から徐々に、無彩色系の落ち着いた色やパステル調の明るい色へと変化してきたといえる。窓枠・柱型等は灰系と白系が多く、前期と同様に外壁の色との同調型とコントラスト型の 2 つの配色タイプがみられる。この色彩変化の背景として、一つは、函館や神戸と同様に、ペンキ材料の変化にともない淡い色の定着性が高まったことがあげられる。二つ目として、時代の流行色を取り入れたことが考えられる。三つ目として、前期の 19 世紀後半の暗い色に対して、世紀が代わって新しい時代への希望や期待を、明るい色によって表現しようとしたことが考えられる。

(3) 第 3 期：20 世紀中期の 1940 年代頃から現在までの多色の中における「灰系、白系」の時代

この時代も多色の町並みが継承され、オレンジ色などの新しい色も見られるようになった。その中でも比較的多く使われ、特徴的なのが、外壁も窓枠・柱型等も灰系と白系である（写真 5-11、5-12）。前期で萌芽的にみられた無彩色系の落ち着いた色彩への変化が定着しつつあるといえる。この色彩変化の背景として、一つは、下見板張り建物の起源となる 17 世紀におけるコロニアル様式建築の白の時代に戻ろうという、伝統回帰の意識が働いているのではないかと考えられる。二つ目として、ケンブリッジ、ブルックライン、ニュートンの 3 地区は、いずれも郊外の住宅地で

敷地が広く、緑の豊かな屋敷型の建築タイプからなる町並みであり、これに最も調和する色として灰系と白系の無彩色が選ばれたのではないと思われる。三つ目として、アメリカの一般住民には、石造や煉瓦造の組積造の住宅の方が木造下見板張りの住宅よりも価値が高く、それらへの憧憬という共有のイメージがあり、この石を表現する色として灰系や白系を使っているのではないかと考えられる。すなわち、伝統文化回帰型、周辺の自然環境調和型、石のイメージ表現型などの町並み色彩の形成としてとらえられる。

総じて、地区全体として多色の町並みという基本構造は変わらないが、その中での特徴的な色彩は連続的に、ゆるやかに変化し、19世紀後半のヴィクトリア様式の建築文化がもつ華やかな色彩から、伝統、地域の環境、住民の共有イメージにもとづく、落ち着いた色彩への変化がうかがえる。

5-5 海外他地域の町並み色彩の変遷

既往研究によって町並み色彩の大まかな推移があきらかにされている海外他地域として、一つは、アメリカ・サンフランシスコがあげられる。『The Painted Ladies』⁴⁾と『The Painted Ladies Revisited』⁵⁾によれば、以下の5つの時代におけるサンフランシスコの町並み色彩の変化がとらえられた。

① 1848年、カリフォルニアに金鉱が発見され、翌1849年以降サンフランシスコは都市として急速に発展していく。それに伴い下見板張りペンキ塗りの建物が一挙に、大量に建設される。ゴールドラッシュ当初は、建物の多くがニューイングランド地方から移入されたもので、それらは全体が白色で雨戸が緑色に塗られていた。いわば、ニューイングランド地方文化移入型の町並み色彩が形成されていた。

② その後、サンフランシスコ大地震のあった1906年までに、約50,000棟のヴィクトリア様式の住宅が建てられた。ペンキの色は、当初の白やグレーの色調は塗られなくなり、時々入手できる最もあざやかな色を2色、3色あるいは数色で塗り分けるようになった。ヴィクトリア様式の住宅は装飾性が高く、華やかな造形をもつが、それに呼応して、建築様式文化型の色彩へと変化した。

③ しかし、1906年の歴史的な大地震によって、全体の約四分の三にもよる多数のヴィクトリアン・ハウスが倒壊し、焼失した。この災禍を免れた13,000棟余についても、二度にわたる世界大戦

4) Elizabeth Pomada & Michael Larsen 『The Painted Ladies』, E.P.Dutton, New York, 1978.

5) Elizabeth Pomada & Michael Larsen 『The Painted Ladies Revisited』, E.P.Dutton, New York, 1989.

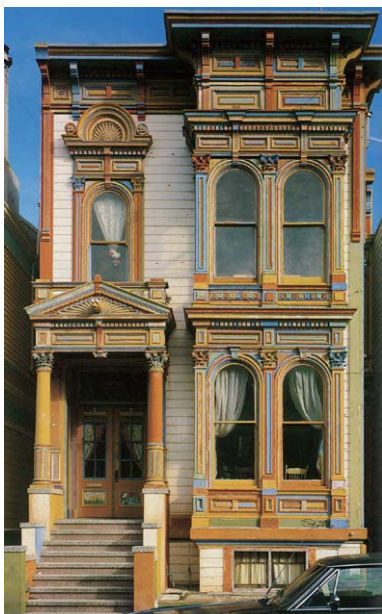


写真 5-13 1967 年、多色に塗り分けられ、サイケデリック・ハウスあるいはヒッピー・ハウスと呼ばれていたヴィクトリアン様式の住宅（1899 年建設、スティック様式）。Elizabeth Pomada & Michael Larsen 『The Painted Ladies』（E. P. Dutton, New York, 1978）より転載。



写真 5-14 1976 年、多色に塗り分けられ、レインボー・ハウスと呼ばれていたヴィクトリアン様式の住宅（1903 年建設、モダン・イタリアナイト様式）。Elizabeth Pomada & Michael Larsen 『The Painted Ladies』（E. P. Dutton, New York, 1978）より転載。

6) 伊藤隆一、小林英嗣、種村諄三、佐藤政昭、石原智也、他『北方圏における環境色彩とアイデンティティー個性あるまちづくりと環境色彩計画』、社団法人 北方圏センター、1985 年 3 月。

（1914～1918 年、1939～1945 年）の戦中、戦後まもなくは、海軍の余剰のペンキが使われ、単調な灰色（バトルシップ・グレー）に塗られた。また、ペンキにかわる他の建築材料が使われるようになり、残存したヴィクトリアン・ハウスの半分はこれらで覆われてしまい、その特質を失ってしまった。特に 1920 年代には安価なスタッコが、1950 年代には耐火性にすぐれ、メンテナンス費用のかからないアスベスト・シングルが幅をきかし、折しもコロンIAL・リヴァイヴァルの流行とあいまって、安っぽい白色が基調色となった。20 世紀前半の約半世紀は、町並み色彩の衰退期であった。

④ 1960 年代になって、サイケデリックやヒッピーなどの社会運動、文化運動のうねりと連動し、ヴィクトリアン再生が始動した。写真 5-13、5-14 のように多色に塗り替えられ、それらはサイケデリック・ハウス、レインボー・ハウスと呼ばれた。再生の主体は建物所有者とペインターたちである。ペインターというのは、塗装職人であるが、住宅にペンキを塗ることを自己表現の一手段としてとらえ、色のデザインをおこなっており、カラー・アーティストと呼ぶべきものであろう。このような多色への塗り替えに対する人々の反応は賛否両論であったが、これを契機として、周辺住民も自分の家のペンキの塗り替えをし、街区全体がリニューアルされた。これはカラリスト・ムーブメントと呼ばれ、1970 年代ころまで続けられた。社会運動型の町並み色彩が形成され、再生期を迎えたといえる。

⑤ 1980 年代ころから、60～70 年代のサイケデリック調にくらべて、周辺調和型の、より落ち着いた色彩へと変化しつつある。写真 5-15 はサンフランシスコの代表的な町並み、アラモスクエア周辺の町並みの 1970 年代の状況であるが、非常にあざやかなオレンジ色に塗られたものが一軒あった。が、写真 5-16 のように、現在ではそれが周囲にとけこむような色に塗り替えられている。

もう一つは、北欧のスウェーデン・ストックホルムとフィンランド・ヘルシンキがあげられる。『北方圏における環境色彩とアイデンティティー個性あるまちづくりと環境色彩計画』⁶⁾によれば、「ストックホルムでは一般に、建築物の外観色彩は、その歴史的背景に基づく様式や趣味の変遷を反映しているが、決定的な要因は、その時代の技術的可能性であり、建物の色は灰色とこれに混合される顔料の種類によって決定されてきた」という。その中で、17 世紀の薄黄色の砂岩を模した表現、18 世紀の終りころから 19 世紀の初めころまでの大理石の白いイミテーション、19 世紀末の



写真5-15 サンフランシスコの代表的な町並み、アラモスクエア周辺のクィーン・アン様式のロウハウス群（1894-95年建設）。1970年代には、右から2軒目の住宅はあざやかなオレンジ色であった。Elizabeth Pomada & Michael Larsen 『The Painted Ladies』（E. P. Dutton, New York, 1978）より転載。



写真5-16 上と同じ町並みだが、右から2軒目の住宅は周囲ととけこむような色彩に塗り替えられている。5軒目の住宅も同様である。1990年9月撮影。

灰色や薄黄色の漆喰で石材を模した効果の利用、1910年代の赤褐色や薄い灰色の漆喰で煉瓦や石材を模した仕上げなど、石造や煉瓦造を表現するものとして色彩を使用していたことに特徴がみられる。また、「ヘルシンキでは、各時代において理想とする都市像が模索され、それを反映したさまざまな色彩が使われてきた」という。17世紀頃のクラシックスタイル、18世紀頃のエンパイアスタイル、19世紀頃のユーゲントスタイルの時代には、ピンクやブルー、グリーン等の薄いパステルカラーが用いられるなど、時代と建築様式と色彩には相互に関係があることがうかがえる。

アメリカのボストン周辺地区とサンフランシスコ、スウェーデン・ストックホルム、フィンランド・ヘルシンキのいずれの地域もそれぞれの歴史や文化が色彩に反映しているため、地域によって特徴的な色彩は異なる。しかし一方では、時代によって色彩が変化



写真5-17 木造でコーナーストーンを模している事例。色も黄色の石材を表現していると考えられる。アメリカ・ニュートン No. 37、1876 年建設、ヴィクトリアン・ゴシック様式。1991 年 9 月撮影。



写真5-18 玄関ポーチの柱をペンキで大理石に模している事例。アメリカ・サンフランシスコにて、1990 年 9 月撮影。

することは共通している。とくに、時代と建築様式と色彩に相互関係がみられることや、色彩によって石造や煉瓦造のイメージを表現することは、日本の函館や神戸にはみられない、欧米の町並み色彩の特徴の一つであると考えられる。色彩による石のイメージ表現は、ボストン周辺地区の第3期、1940年代頃から現在までの多色の中における灰系、白系の時代にもみられたものである。より直接的で明確な石の表現として、写真5-17のように、木造でコーナーストーンを模した事例がみられた。この事例の外壁の黄色は、石材の色を表現していると思われる。また、写真5-18のように、玄関ポーチの柱をペンキで大理石に模している事例もみられた。欧米では現在も石造、煉瓦造、木造下見板張りの町並みがそれぞれひとつの基本型をなし、再生産されており、歴史的、文化的に連続したものとなっている。それを背景として、色彩による石や煉瓦のイメージ表現もまた、人々の意識の中に一つの規範として過去から継承され、現在も生き続けていると考えられる。

5-6 函館、神戸の町並み色彩との比較考察

アメリカ・ボストン周辺地区の町並み色彩は、函館市西部地区、神戸市北野町山本通地区とは異なる特徴をもっていることがとらえられた。戦後の最近にかぎってみても、函館では多色の中のパステル調のピンク系や緑系が、神戸では1960年代以前の多色と1960年代以降のオフホワイト系やライトベージュ系の統一的な色彩が特徴としてあげられていた。しかし、ボストン周辺地区ではこれらとは異なる、多色の中における灰系と白系の色彩が特徴であった。また、町並み色彩形成のタイプの違いもとらえられた。函館の場合は地区の代表的な建物や船舶の色が住民に評価され、受容されて地域に広がるという、コミュニティによる地域環境価値評価型であり、神戸では外来文化主導型とコミュニティ主導型、ボストン周辺地区では伝統文化回帰型、周辺の自然環境調和型、石のイメージ表現型などであった。町並み色彩の形成には地域の歴史、文化や住民の意識が反映しており、それらの違いが地域によって異なる特徴をつくっていることがとらえられた。

一方では共通点として、時代によって町並み色彩が変化することがあげられる。これは、海外の他地域のアメリカ・サンフランシスコ、スウェーデン・ストックホルム、フィンランド・ヘルシンキでも同様にみられたことである。その中でとくに、時代と建築様式と色彩に相互関係がみられることや、色彩によって石造や煉

瓦造のイメージを表現することは、日本の函館や神戸にはない特徴であると考えられる。

また、変化のタイプは異なり、アメリカ・ボストン周辺地区では函館や神戸にくらべて、変化が連続的で、ゆるやかであることがとらえられた。函館も神戸も、戦争や大火、地区の観光地化などの社会変動、環境変化によって、町並み色彩が大きく、急激に変化することがあったが、ボストン周辺地区ではそのようなことがなく、住宅地全体として成熟度が高く、安定した町並みを維持していたことによるものと考えられる。地域の社会的、環境的な状況が町並み色彩の変化に及ぼす影響がうかがえる。

5-7 まとめ

アメリカ・ボストン周辺地区の町並みにおける 19 世紀後半から現在までの色彩変遷を、時層色環等の分析からあきらかにした。その要点として、①いずれの時代においても、一つあるいは二つの色彩で町並みが統一されることはなく、多様な色彩からなる町並みであった、②多様な中に、比較的多く使われ、特徴的な色彩がみとめられ、それは 19 世紀後半のヴィクトリア様式建築のダーク・アンド・リッチの色調の緑系と茶系、20 世紀前半におけるその緑系と茶系から徐々に灰系とベージュ系への変化、20 世紀中期以降の灰系と白系への連続的な、ゆるやかな変化があきらかになった、③これらは、ヴィクトリア様式の建築文化がもつ華やかな色彩から、伝統への回帰、地域の自然環境との調和、石の表現など、住民の共有イメージにもとづく、落ち着いた色彩への変化としてとらえられた。

また、ボストン周辺地区と海外の他地域のアメリカ・サンフランシスコ、スウェーデン・ストックホルム、フィンランド・ヘルシンキ、さらには函館市西部地区、神戸市北野町山本通地区の町並み色彩変遷の比較考察により、その特徴や形成のタイプがそれぞれ異なること、その背景には地域の歴史、文化や住民の意識が反映していること、時代によって町並み色彩が変化することは共通していること、をあきらかにした。

第6章 変化と多様の町並み色彩形成のしくみ

－函館市西部地区のペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりから－

6－1 はじめに

下見板張り洋風建物のペンキ塗装によって形成されている函館市西部地区の町並みは、外壁をブルーグレー、窓枠・柱型等を黄色のあざやかな色と配色をもつ重要文化財・旧函館区公会堂（1910(明治43)年建設）をはじめとして、一般の住宅地などではあまり使われることのないピンク色系や緑色系の色彩を中心に、様々の色で構成されているが、それが混乱を招くことなく、一定の調和をたもち、独自の個性をもつという特徴を有している。

第3章において、この函館市西部地区の明治初期から現在までの1世紀以上にわたる町並みの色彩の変容過程を、建物の維持管理行為であるペンキの塗り替えをつうじて分析した。その結果、個々の建物では5年から10年の周期で異なる色のペンキが塗装され、町並み全体としては20年から30年の周期で色彩が時代とともに変わってきていること、大火や戦争による色の選択の不自由な時代もあったが、そういうことのない平時では建物所有者の好みによる色の自由な選択行為などにより多色の町並みが形成され、さらには多色の中にも住宅地のピンク色や港湾地区の緑色というエリアごとの特徴的な色があること、等をあきらかにした。すなわち、歴史的に形成されてきた西部地区の町並み色彩の特質が、同じ色のペンキを塗り続けるのではなく異なる色を用いる周期的な変化と、地区全体として同系色で統一されているのではなく、異なる様々の色で構成され、それが一定の調和をたもっている多様さにあることをとらえた。これは、その具体的な内容や程度の違いはあるものの、神戸市北野町山本通地区の異人館（第4章）においてもアメリカ・ボストン周辺地区（第5章）においても、同様に見られたものである。

この町並み色彩の変化と多様さは、日本の伝統的な町並みの大多数が建物の木や漆喰といった外壁材で形成され、その統一的な素材の色と、それが変わることなく継承されることで町並みの特質が維持されるというものとは異なるものである。また、現代の町並みにおいて、色彩コントロールの有力な手法の一つとして、同系色による統一や渋い色による統一があげられるが¹⁾、函館市

1) グラフィックデザイナーの福田繁雄氏は、「都市の色を考える場合、単に同系色で統一したり、あるいは渋い色だけで統一したりする傾向があるようだが、僕はそれだけではないのだと思う。」と述べている。（公共の色彩を考える会 編『まちの色彩作法「提言集」』、都市文化社、1994年3月20日、のp170を参照。）

西部地区等の個性的な多様さとその中での調和の事例は、これとは異なる手法の可能性を示唆するものであるといえよう。

6-2 本章の目的と方法

6-2-1 目的

本章は、このように変化と多様さを特質とする函館市西部地区の町並み色彩において、その特質の基底にあるものとしてペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりに着目し、それを生活の視点から見直し²⁾、住民にとっての町並み色彩の意味をとらえること、また住民の暮らしとのかかわりの中で町並み色彩がどのように形成されてきたかを分析し、変化と多様さの中で一定の調和をたもつ町並み色彩形成のしくみをあきらかにすることを目的とする。

2) 嘉田由紀子 著 「生活世界の環境学－琵琶湖からのメッセージ」(社団法人農山漁村文化協会、1995年5月31日)を参考にした。

6-2-2 方法

ペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりを次の2点からとらえる。第一に、時層色環から得られた自分の建物のかつてのペンキ色彩、および周囲の環境のペンキ色彩に対する住民の記憶、思い出の分析をおこない、住民が色彩とどのような営みをしてきたのかをあきらかにする。第二に、ペンキを塗り替える時に、誰がどのような考え方と方法で色彩を選択したのか、色彩選択の意志決定の主体、方法と決定要因を分析し、色彩形成への住民等の関与の仕方や周辺環境の影響等をあきらかにする。これらは、社会学におけるライフヒストリー研究の方法を参考にしている^{3) 4)}。

調査は、函館市西部地区の建物所有者に対して時層色環の写真と、時層色環から得られたペンキ各層の色彩を、色見本を用いて古い方から新しい方へと順番に並べたものを見せて、ヒアリングをおこなった(1990年6月～9月にかけて調査実施、西部地区の弁天町、大町、末広町、弥生町、元町、船見町の6町を対象とした悉皆調査82棟中58棟で有効回答、またそれ以前のこすり出し調査時で得られた6棟の回答も参考にした)。この調査方法は、言葉だけでかつての色の記憶を問う一般的なヒアリング調査とは異なり、時層色環から得られたかつての色を具体的かつ視覚的に提示するという点に特徴がある。ヒアリングの項目は、時層色環から得られた色についての記憶、色の塗り替え時期とその契機、塗り替え回数、色彩選択のポイント、周辺の建物・町並み・船舶の色とそれらとのかかわり、塗装を依頼した業者について、などである。

3) 中野卓・桜井厚 編 「ライフヒストリーの社会学」、株式会社弘文堂、1995年2月15日

4) 間場寿一 編 「地方文化の社会学」(世界思想社、1998年1月)の中の、小林多寿子：第11章 ライフヒストリーのなかの地域、pp244-266、を参照。

6-3 住民の記憶の中にある色彩

各建物からこすり出しによって採集された時層色環を住民に提示し、その色の記憶に関するヒアリングをおこなったことにより、住民にとって自分の建物にかつて塗られていた色彩が提示された結果、それが住民の意識に働きかけ、記憶を呼び起こし、住民は様々な生活の歴史を通してペンキ色彩のことを語り出した。

6-3-1 自分の建物のペンキ色彩に関する住民の記憶

住民の自分の建物についての記憶は、家族の生活史の節目や社会的出来事を手がかりに思い出されるものであろう。函館でのヒアリングでもそうである。それに加えて、その記憶の中に色彩にまつわる具体的なエピソードが語られていることが西部地区の特徴である。色彩のエピソードを含む住民の建物の記憶は、表 6-1 のように、建物自体の変化、建物にまつわる社会的出来事、建物にまつわる暮らしの思い出の 3 つに分類できる。

その具体的内容として第一に、建物の改築や用途の変更のような建物自体の変化とペンキの塗り替えの関係があげられている(10 例)。

「10 年前に前面外壁を改築（サイディング）。その時現在の塗装をした。色については白が流行していたので、それを用いた。柱型の色については屋根の色彩（茶色）とあわせた。」(No.8. 柳栄堂、1907(明治 42) 年建設、弁天町)

「昭和 38 年まで経営していた池田菓子店（奥さんがその娘）を閉店し、1 階を改築。その時に水色っぽい色を塗装した。その 10 年後に外壁を張り替え、同時にアルミサッシをつけた。その際、ベージュのペンキを塗装した。」(No.39. 斎藤家住宅、1918(大正 7) 年建設、大町)

建物の老朽化や用途変更にともない外壁の張り替え等の改築がおこなわれ、それと同時にペンキも塗り替えられ、以前と違う色に変えられたペンキが鮮明に思い起こされている。前者の事例では、外壁にはその時の町並みの流行色である白色を取り入れ、柱型は洋風建物の意匠的特徴を考慮して外壁とは異なる色としながらも、建物全体の調和を考慮して屋根と同じ茶色を用いている。

建物にまつわる社会的な出来事とペンキ色彩の関係についての記憶は 2 例あげられている。

「大正 12 年の大火によって前面外壁のペンキ塗装が、その熱によって膨れあがったために塗り替えたのを覚えている。その頃、周囲の建物もペンキは塗っていたように思う。」(No.46. 中村呉服店、1907(明治 40) 年建設、

表6-1 自分の建物のペンキ色彩に関する住民の記憶—色彩から呼び起こされた記憶の内容(33例)

● 建物自体の変化(10例)

○建物の改築や用途の変更に伴うペンキの塗り替え(10例)

- 「15年ほど前に側面外壁を改修したが、それと同時にペンキも塗り替えた。色はそれまでのものにあわせて濃いクリーム系の色を選んだ。」(22. 三洋無線電機商会、1907(明治40)年建設、大町)
- 「4年前、1階部分にPEACEFUL PLACE(喫茶店)を始め、それと同時に入り口部分の改築等、大規模な模様替えをした。現在の色はその改築時に塗ったもの。それまでは、下見板がむきだしになるほどのいたみようだった。現在の色は、その改築時に塗ったもので、色の選択等については自分の好みをもとにして塗装業者と相談しながら決めた。」(23. PEACEFUL PLACE、1907(明治40)年建設、大町)
- 「10年前に前面外壁を改築(サイディング)。その時現在の塗装をした。色については白が流行していたので、それを用いた。柱型の色については屋根の色彩(茶色)とあわせた。」(8. 柳栄堂、1909(明治42)年建設、弁天町)
- 「外壁の塗装に関しては今までに2回ほどおこなった。2回目はレストラン部分の改築にあわせておこなった。」(52. ペンション古稀庵、1909(明治42)年建設、末広町)
- 「10年前までは左隣りに建物が続いていた。それが売却され、取り壊されたのを機にトタンだった前面外壁を改築し下見板にした。現在のペンキ塗装はその時同時におこなったものである。」(31. 三上家住宅、1912(大正元)年建設、大町)
- 「民宿は昭和62年にはじめた。それと同時に現在の塗装、グリーンをほどこした。」(10. 民宿共真、1914(大正3)年建設、弁天町)
- 「昭和38年まで経営していた池田菓子店(奥さんがその娘)を閉店し、1階を改築。その時に水色っぽい色を塗装した。その10年後に外壁を張り替え、同時にアルミサッシをつけた。その際、ページのペンキを塗装した。」(39. 斎藤家住宅、1918(大正7)年建設、大町)
- 「(5、6年前の)その改築と同時に柱型等に茶を塗装した。色についてはサイディングは新鮮さをイメージする白、ペンキはそれにあうように塗装業者に依頼した。」(18. 星野家住宅、1928(昭和3)年建設、弁天町)
- 「昭和49年にした改築にあわせて塗り替えたのがある。」(43. 田中家住宅、1934(昭和7)年建設、大町)
- 「呉服店からクリーニング店にかわったとき(昭和44年)前面の道路に面する部分のみ塗装をなおした。」(59. エンパイアクリーニング、1946(昭和21)年建設、末広町)

● 建物にまつわる社会的出来事(2例)

○大火によるペンキ塗装の傷みとその補修(1例)

- 「大正12年の大火によって前面外壁のペンキ塗装が、その熱によって膨れあがったために塗り替えたのを覚えている。その頃、周囲の建物もペンキは塗っていたように思う。」(46. 中村呉服店、1907(明治40)年建設、末広町)

○戦争時のペンキの不足とその代替物(1例)

- 「戦時中から戦後20年代までは屋根、外壁にイカの油を塗っていた。」(57. 深谷米穀店、1917(大正6)年建設、末広町)

● 建物にまつわる暮らしの思い出(21例)

○入居時の思い出とその時の色(12例)

- 「昭和20年に入居したが、それ以前は小間物店として使われていたようだ。入居当時はうすい灰だった。」(4. 中山商店、1907(明治40)年建設、弁天町)
- 「昭和37年から事務所として使用を始めたがその当時は緑であった。」(47. 平和石油事務所、1907(明治40)年建設、末広町)
- 「入居したのは30年くらい前(1960年頃)で、そのころは長屋だった。入居当時はアマニ油等を塗っていた。」(77. 菅原家住宅、1907(明治40)年建設、弥生町)

- 「外壁の塗装に関しては今までに2回ほどおこなった。1回目はこの建物の使用を始めたとき。」(52. ペンション古稀庵、1909(明治42)年建設、末広町)

- 「大洋漁業から譲り受けた時(昭和40年頃)は水色だった。」(33. 加藤家住宅、1913(大正2)年建設、大町)

- 「祖父が小学生の頃に建てられ、入居した。その時はうすい黄色で、当時家主だったコマイ氏が、近隣の久保田家住宅、林家住宅等所有する建物をまとめて塗っていた。」(34. 清田商店、1913(大正2)年建設、大町)

- 「昭和45年頃買取り、それまで茶だったのをピンクに塗り替えた。」(35. 久保田家所有建物、1914(大正3)年建設、大町)

- 「15年くらい前に入居。それ以前は所帯アパートとして使われていた。そのころは現在の色彩に近い色だった。入居時にピンクを塗装した。」(36. 函館神工通信工業所、1914(大正3)年建設、大町)

- 「昭和20年頃入居。それまではSaさんが菓子店を営んでいた。その当時は茶色だった。」(39. 斎藤家住宅、1918(大正7)年建設、大町)

- 「入居(昭和60年)と同時に市の補助を受けて外壁の張り替えをおこなった。その時の塗装が現在のもの。」(62. 日和館、1921(大正10)年建設、元町)

- 「入居(昭和59年)と同時に現在の塗装にした。」(74. 山内家住宅、1922(大正11)年建設、船見町)

- 「昭和33年に入居。それまでは太陽石油が漁業関連会社の寮だった。入居当時はうす茶だった。」(44. 藤田家住宅、1947(昭和22)年建設、大町)

○家族の生活史と色(6例)

- 「昭和20年代の末ごろ(子供の自分・1953-4年頃)は肌色のような色彩、特にピンクの外壁に窓枠等を白に塗り分けた外装が多かったように思う。」(52. ペンション古稀庵、1909(明治42)年建設、末広町)

- 「(遺愛幼稚園に)私が通っていた頃(大正14年から昭和2年頃(1925-1927年頃))は、茶色っぽかったように思う。」(61. 遺愛幼稚園、1913(大正2)年建設、元町)

- 「新栄医院のころ、病院という性格上よくペンキを塗り替えていたようだ。特にその色彩の変遷に関しては相馬株式会社の影響を受けている。それは新栄の息子が相馬から嫁をもらったためで、近所でも「相馬の色をまねている。」とうわさされていた。」(14. 伴田商店所有建物、1916(大正5)年頃建設、弁天町)

- 「25年前(奥さんが嫁入り)から一昨年の外壁改築までは、ずっとピンクだった。」(15. 千代盛商会、1918(大正7)年建設、弁天町)

- 「お嫁にきた当時(35年前・1955年)は、周囲の建物と同様にペンキは塗っていなかった。」(63. 金子家住宅、1921(大正10)年建設、元町)

- 「昭和36、7年に奥さんがお嫁にきたのをきっかけに、それまでのいたんでいた塗装を塗り替えた。その時は白っぽい色として、水色を選び、自分で塗装した。」(43. 田中家住宅、1934(昭和7)年建設、大町)

○ペンキ色彩に対する評判(2例)

- 「当時(昭和46年)は木の地のままの民家が一般的だったので、ビニル(ペイント)によって光を反射する水色は近所でもかなり評判となり、次々と真似られたようだ。」(79. 高田木材店、1917(大正6)年建設、弥生町)

- 「昭和40年頃、以前に住んでいた所の向かいにあった塗装店に頼みグリーンを塗装。色の選択などについては主人がおこなったが、田舎臭い雰囲気がして奥さんは嫌だった。しかし主人の勤めていたドックの同僚には評判がよかった。同時期、周囲でグリーンを使っているような建物はなかった。」(44. 藤田家住宅、1947(昭和22)年建設、大町)

○塗り替え時の予期せぬ出来事による予定外の色への変更(1例)

- 「現在の塗装は6、7年前におこなった。その際はグレーの外壁に紺の塗り分けを予定していたのだが、塗装屋がペンキ缶1つ忘れたためにその色がつくれず、グリーン系の色彩になった。」(14. 伴田商店所有建物、1916(大正5)年頃建設、弁天町)

- 5) 函館市教育委員会 編『函館市西部地区の町並 元町・末広町地区伝統的建造物群調査報告』（函館市、1983年3月）によれば、1878(明治11)年焼失戸数954戸、1879(明治12)年焼失戸数2,245戸、1896(明治29)年焼失戸数2,280戸、1907(明治40)年焼失戸数12,390戸、1921(大正10)年、1934(昭和9)年焼失戸数22,667戸、があげられている。

末広町)

「戦時中から戦後20年代までは屋根、外壁にイカの油を塗っていた。」

(No.57. 深谷米穀店、1917(大正6)年建設、末広町)

西部地区は1878(明治11)年から1934(昭和9)年までに幾度となく大火のあったところであるが⁵⁾、その大火によってペンキ塗装が傷んだため補修をおこなった自分の建物へのつらい記憶と共に、周辺のペンキ塗装に関する記憶も語られている。また戦中、戦後の時代に、イカの油が塗装されていたことがあげられている。イカ漁は当時も今も函館の主産業であるが、そのイカの油が戦中、戦後のペンキが不足していた時代に代替物として塗装されていたことは函館ならではのエピソードであり、この建物だけでなく、多くの建物で使用されていた可能性がある。

建物にまつわる暮らしの思い出とペンキ色彩の記憶は21例と多い。そのうちの一つは、入居時の思い出(12例)である。

「祖父が小学生の頃に建てられ、入居した。その時はうすい黄色で、当時家主だったコマイ氏が、近隣の久保田家住宅、林家住宅等、所有する建物をまとめて塗っていた。」(No.34. 清田商店、1913(大正2)年建設、大町)

それまで生活を営んでいた建物から現在の建物へ移り住むことによって、その時の状況が建物の家主等とともに色彩でも印象づけられている。この事例では自分の建物だけでなく、近隣の数軒の建物をも含むペンキ色彩の思い出が、半世紀以上も前のエピソードとして祖父から孫へ語り継がれている。二つ目は、家族の生活史に関するもの(6例)で、奥さんの嫁入りの時(4例)や自分が子どもの頃の色の記憶(2例)である。

「昭和36、7年に奥さんがお嫁にきたのをきっかけに、それまでのいたんでいた塗装を塗り替え、白っぽい色として水色を選び、自分で塗装した。」(No.43. 田中家住宅、1932(昭和7)年建設、大町)

この建物の時層色環分析による色彩変容データ票(以下、「時層色環データ票」)によれば、それまでは暗緑色であったが、パステル調の水色に塗り替えられている。濃い目の暗い色から淡く、明るい色への変化は、結婚という家族の重要なライフステージをむかえる喜びや希望が反映されているように思われる。

「遺愛幼稚園に私が通っていた頃(大正14年から昭和2年頃(1925-1927年頃))は、茶色っぽかったように思う。」(No.61. 遺愛幼稚園、1913(大正2)年建設、元町)

遺愛幼稚園はミッション系の私立幼稚園で、歴史も古く、現在伝統的建造物に指定され、地区を代表するランドマーク的存在であるが、子供心にその色が鮮烈で、記憶に深く刻み込まれたことを示している。三つ目は、わが家のペンキの色が当時としては珍しく、職場の同僚や近所の人々の評判になったこと(2例)があ

げられている。

「昭和40年頃、以前に住んでいた所の向かいにあった塗装店に頼みグリーンを塗装。色の選択などについては主人がおこなったが、田舎臭い雰囲気がして奥さんは嫌だった。しかし主人の勤めていたドックの同僚には評判がよかった。同時期、周囲でグリーンを使っているような建物はなかった。」
(No.44. 藤田家住宅、1947(昭和22)年建設、大町)

この住民にとって当時、家のまわりに緑色は少なく、自慢の一つであり、またそれを誇りに思い、深く印象づけられた色であったことがうかがえる。四つ目は、ささやかなエピソードではあるが、塗り替え時の予期せぬ出来事により、やむをえず予定外の色へ変更した思い出(1例)があげられている。

「現在の塗装は6、7年前におこなった。その際はグレーの外壁に紺の塗り分けを予定していたのだが、塗装屋がペンキ缶1つ忘れたためにその色がつかず、グリーン系の色彩になった。」(No.14. 伴田商店所有建物、1916(大正5)年頃建設、弁天町)

緑系の色はピンク色と並ぶ地区の特徴的な色の一つであり、予定外の色ではあるが、町並みに調和するという判断があったのではないかと思われる。

6-3-2 周囲の環境のペンキ色彩に関する住民の記憶

住民のペンキ色彩に関する記憶、思い出は、周囲の環境についてもあげられており、ペンキ色彩への関心が自分の建物だけにとどまらず、周辺へと広がりを見せていることがわかる(表6-2)。その第一は、港町特有の環境にかかわるもので、船舶のペンキ塗装とそれの建物への影響に関する記憶である(5例)。

「戦後は緑の建物はよくあったが、建物用のペンキを使っていたのは金のある所で、一般の民家などでは船舶用の緑のペンキを転用していたところもあった。」(No.82. 大正湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)

これは、船舶用のペンキを建物に使用していた記憶(2例)の一例であるが、これ以外にも船舶のデッキによく使われていた緑色が建物にも影響していたこと(2例)、船舶塗装業者が建物の塗装もおこなっていたこと(1例)など、船舶のペンキ塗装がいろいろなかたちで建物に影響を与えていたという記憶があげられている(写真6-1)。

第二に、地区に関する社会的な出来事との関係(11例)があげられている。一つは大火とペンキ塗装の関係である。

「大火が頻繁にあった頃、焼けてしまう時は焼けるのだからとペンキの塗装はされていなかった。」(No.82. 大正湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)

前述のとおり、西部地区では戦前までに多くの大火があったが、当時ペンキが高価で一般化していなかったことに加えて、大火が



写真6-1 船舶に使われている緑色の事例

表 6-2 周囲の環境のペンキ色彩に関する住民の記憶
—色彩から呼び起こされた記憶の内容(16例)—

● 港町特有の環境(5例)

○船舶の塗装の建物への影響(5例)

- ・「漁家では船のあまったペンキを塗っていたかもしれない。(船底塗料／赤錆色→屋根) 戦前は木造船用ペンキと建物用ペンキは同じ油性塗料であった。現在はデッキに緑を用いることが多い。」(55. 北村船具店倉庫、1910(明治43)年建設、末広町)
- ・「30年ほど前(1960年頃)は漁業が盛んだった。その当時独航船に緑を塗っていたので、もしかしたらそれを転用したかもしれない。独航船は毎年塗装しなおしていたようだ。」(33. 加藤家住宅、1913(大正2)年建設、大町)
- ・「北洋漁業が不振になると、船の塗装は難しい文字の部分を除いて船員がおこなうようになった。そのため、建築塗装をするようになった船舶塗装業者もあった。」(35. 久保田家所有建物、1914(大正3)年建設、大町)
- ・「戦後は緑の建物はよくあったが、建物用のペンキを使っていたのは金のある所で、一般の民家などでは船舶用の緑のペンキを転用していたところもあった。」(82. 大正湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)
- ・「昭和42年、大洋漁業などの漁業会社は会社の色として船舶をすべてグリーンに塗った。これらの影響もあったのではないか。」(44. 藤田家住宅、1947(昭和22)年建設、大町)

● 地区に関する社会的出来事(11例)

○1934(昭和9)年までの多発する大火のペンキ塗装への影響(3例)

- ・「昭和9年の大火の頃は白木の建物が多かった。」(4. 中山商店、1907(明治40)年建設、弁天町)
- ・「戦後になってからペンキ塗装は一般的になった。大火前には塗装はなかった。昭和7、8年頃、十字街周辺は、木の地の建物ばかりであった。」(36. 函館神工通信工業所、1914(大正3)年建設、大町)
- ・「大火が頻繁にあった頃、焼けてしまう時は焼けるのだからとペンキの塗装はされていなかった。」(82. 大正湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)

○戦争中の色による偽装、迷彩(8例)

- ・「戦時中、弥生小学校にはまだらに黒を塗っていたが、民家に塗装はしていなかった。」(4. 中山商店、1907(明治40)年建設、弁天町)
- ・「戦時中は白壁の土蔵は黒く塗り、民家は灰色に塗っていた。」(55. 北村船具店倉庫、1910(明治43)年建設、末広町)
- ・「戦時中は重要な建物のみ偽装をし、グレーが多かったが、黒や茶、緑でまだら模様になっているものもあった。」(35. 久保田家所有住宅、1914(大正3)年建設、大町)
- ・「戦時中は学校に黒の縞模様を入れたのを覚えている。」(36. 函館神工通信工業所、1914(大正3)年建設、大町)
- ・「相馬が戦時中に茶を塗っていた記憶がある。」(14. 伴田商店所有建物、1916(大正5)年頃建設、弁天町)
- ・「(一般の民家は)戦時中も迷彩などはしていなかった。」(17. 奥谷量店、1927(昭和2)年建設、弁天町)
- ・「弥生小学校は縦に黒と灰のすじを入れ、迷彩塗装を戦時中におこなっていた。」(19. 小野家住宅、1930(昭和5)年建設、弁天町)
- ・「戦時中、船舶の色はグレーが多く、軍用船にはもちろんのこと、漁船にも迷彩を施していた。」(60. 興和商事車庫、1952(昭和27)年建設、末広町)

住民にペンキ塗装への消極的な姿勢をもたらし、未塗装の建物があつたこと(3例)があげられている。また第二次世界大戦中に、ペンキ色彩による偽装、迷彩が施されていたこと⁶⁾があげられている(8例)。

6) 1937年に公布された防空法にもとづき、重要な建物や公共的な建物等は偽装、迷彩が義務づけられていた。

「戦時中は重要な建物のみ偽装をし、グレーが多かったが、黒や茶、緑

でまだら模様になっているものもあった。」(No.43. 久保田家所有住宅、1914(大正3)年建設、大町)

「弥生小学校は縦に黒と灰のすじを入れ、迷彩塗装を戦時中におこなっていた。」(No.19. 小野家住宅、1930(昭和5)年建設、弁天町)

グレーなどの具体的な迷彩色から、とくに現在地区の景観形成指定建築物の弥生小学校(1938(昭和13)年建設、弥生町)における縞模様という迷彩の仕方まで、戦時中の生々しい体験が色彩の記憶を通じて語られている。

6-3-3 戦後の特徴的なピンク色と緑色に関する住民の記憶

第3章であきらかにしたように、戦後の多色の町並みの中で特徴的な色彩として、淡く、明るく、柔らかなパステル調のピンク色と緑色があるが、これらの色についての記憶も多くあげられている。

ピンク色については(表6-3)、住民の自分の建物のピンク色に関する記憶が14例あげられており、そのうち1960年代(5例)と1970年代(4例)のピンク色の記憶を多くひろうことができる。

「昭和35年頃、アメリカン・スタイルを意識して下見板部分をピンクと柱等を白く塗った。」(No.72. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)
「昭和45年頃買取り、それまで茶だったのをピンクに塗り替えた。」(No.35. 久保田家所有建物、1914(大正3)年建設、大町)

前者はアメリカ文化へのあこがれと柱等の白色との塗り分け、後者は建物の買取りを契機に以前の茶色ペンキの塗り替えのエピソードとして、20年から30年前のピンク色が鮮明に記憶されている。

「ピンクについては旧函館区公会堂と遺愛幼稚園の色彩をまねた。」(No.67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)

「20年くらい前(1970年頃)から近所の大平洋裁学校(現函館文化服装学院)や旧函館区公会堂など、見る限りピンクの建物が多かったので、それをまねた。」(No.63. 金子家住宅、1921(大正10)年建設、元町)

旧函館区公会堂、遺愛幼稚園といった地区のランドマーク的な建物がある時期ピンク色に塗られ、それが函館文化服装学院⁷⁾などの周囲の建物にまねられていたことがあげられている(3例)。

「(20年ほど前)その時周辺にピンクの建物が多くあり、自身もピンクがよい色だと思ったのでそれを塗装することにした。」(No.68. 佐藤理容院、1921(大正10)年建設、元町・大三坂沿い)

「ピンクを塗った当時、周囲にはペンキを塗っていない建物がほとんどで、函館文化服装学院がピンクになってから次々とまねられていった。金子家住宅等。」(No.67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町・大三坂沿い)

このピンク色が、地区の代表的な坂の一つである大三坂周辺の

7) 函館文化服装学院は、函館市教育委員会編『函館市西部地区の町並 弁天町・弥生町地区伝統的建造物群調査報告』(函館市、1984年3月)の歴史的建造物リストに掲載された85件のうちの一つである。なお、筆者が時層色環の調査をおこなった直後の1988年5月に取り壊され、現存していない。

表 6-3 ピンク色に関する住民の記憶ーピンク色の記憶の内容 (21 例)

● 自分の建物のピンク色の記憶 (14例)

○戦後すぐのピンク色の記憶 (2例)

- ・「昭和20年頃はピンクであった。」 (55. 北村船具店倉庫、1910(明治43)年建設、末広町)
- ・「昭和22、3年ごろから、大三坂周辺はピンクの建物が多かった。」 (15. 千代盛商会、1918(大正7)年建設、弁天町)

○1950年代のピンク色の記憶 (2例)

- ・「昭和20年代の末ごろ (子供の自分・1953-4年頃) は肌色のような色彩、特にピンクの外壁に窓枠等を白に塗り分けた外装が多かったように思う。」 (52. ペンション古稀庵、1909(明治42)年建設、末広町)
- ・「現在のピンクの塗装は昭和32年から。」 (82. 大正湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)

○1960年代のピンク色の記憶 (5例)

- ・「昭和40年頃にごく薄いピンクを塗装した。外壁の色彩については、娘がいるのでピンク等かわいらしい色を選択してきた。」 (77. 菅原家住宅、1907(明治40)年建設、弥生町)
- ・「昭和37、8年頃、今のピンクを塗装した。」 (5. 山崎商店、1908(明治41)年建設、弁天町)
- ・「25年前 (奥さんが嫁入り) から一昨年の外壁改築までは、ずっとピンクだった。」 (51. 千代盛商会、1918(大正7)年建設、弁天町)
- ・「昭和35年頃、アメリカン・スタイルを意識して下見板部分をピンクと柱等を白く塗った。」 (67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)
- ・「(29年前の) 入居当時から現在のようなピンクだった。最近では20年ほど前に同じくピンクを塗ったきりである。」 (68. 佐藤理容院、1921(大正10)年建設、元町)

○1970年代のピンク色の記憶 (4例)

- ・「10年前はピンクだった。」 (10. 民宿共真、1914(大正3)年建設、弁天町)
- ・「昭和45年頃買取り、それまで茶だったのをピンクに塗り替えた。」 (35. 久保田家所有建物、1914(大正3)年建設、大町)
- ・「15年くらい前に入居。入居時にピンクを塗装した。」 (36. 函館神工通信工業所、1914(大正3)年建設、大町)
- ・「20年くらい前 (1970年頃) から近所の大平洋裁学校 (現函館文化服装学院) や旧函館区公会堂など、見る限りピンクの建物が多かったので、それをまねた。」 (63. 金子家住宅、1921(大正10)年建設、元町)

○1980年代のピンク色の記憶 (1例)

- ・「(入居した昭和59年) その時のペンキはピンクだったと思う。」 (74. 山内家住宅、1922(大正11)年建設、船見町)

● 地区の代表的建物である旧函館区公会堂や遺愛幼稚園のピンク色とその周囲の建物への波及 (3例)

- ・「旧函館区公会堂はピンクだったのを覚えている。」 (10. 民宿共真、1914(大正3)年建設、弁天町)
- ・「20年くらい前 (1970年頃) から近所の大平洋裁学校 (現函館文化服装学院) や旧函館区公会堂など、見る限りピンクの建物が多かったので、それをまねた。」 (63. 金子家住宅、1921(大正10)年建設、元町)
- ・「ピンクについては旧函館区公会堂と遺愛幼稚園の色彩をまねた。」 (67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)

● 大三坂周辺のピンク色の連鎖的な流行 (4例)

- ・「昭和22、3年ごろから、大三坂周辺はピンクの建物が多かった。」 (15. 千代盛商会、1918(大正7)年建設、弁天町)
- ・「ピンクを塗った当時、周囲にはペンキを塗っていない建物がほとんどで、函館文化服装学院がピンクになってから次々とまねられていった。金子家住宅等。」 (67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)
- ・「(20年ほど前) その時周辺にピンクの建物が多くあり、自身もピンクがよい色だと思ったのでそれを塗装することにした。」 (68. 佐藤理容院、1921(大正10)年建設、元町)
- ・「教会わきのワタナベ宅はピンクの色を塗っていたように思う。」 (72. 新緑湯、1931(昭和6)年建設、元町)

多くの建物で用いられるようになった様子もあげられている（4例）。

遺愛幼稚園は、函館市東部地区にある遺愛女学校（現遺愛学院）の附属幼稚園の建物である。この遺愛女学校の本館（1908（明治41）年建設）の時層色環データ票によれば、外壁の色彩は創建当初が濃緑色で、その後茶色他のさまざまな色彩が使われていたが、戦後の1953（昭和28）年頃にピンク色のペンキが塗装され、以降現在まで同じ色が塗り続けられている（第2章図2-2参照、写真6-2）。遺愛幼稚園の時層色環データ票によれば、1956（昭和31）年頃に本館と同様のピンク色に塗装され、以降現在まで塗り続けられている（写真6-3）。旧函館区公会堂は1958（昭和33）年頃に外壁がそれまでの黄土色からピンク色に塗り替えられ、1982（昭和57）年に創建時のブルーグレーに復原されるまで同じピンク色であった⁸⁾（写真6-4）。つまり、ピンク色の出現は、戦後の1950年代初頭に東部地区の遺愛女学校本館にピンク色のペンキが塗装されたことを始まりとすると考えられる。その理由として、戦後の明るいイメージを求める風潮と、ペンキ材料の合成樹脂への変化により淡い中間色を固定できるようになったことがあげられる⁹⁾。このピンク色を女学校のシンボルカラーとして西部地区・元町の附属幼稚園が採用し、その直後の1950年代末頃に旧函館区公会堂が、その採用理由は不明であるが、ピンク色に塗られた。1960年頃に函館文化服装学院の建物がアメリカ文化へのあこがれと、旧函館区公会堂と遺愛幼稚園の色彩をまねてピンク色に塗られ、1960年代から1970年代にかけて、函館文化服装学院が立地する大三坂沿いの数棟に連鎖的にまねられ、広がったと考えられる（図6-1）。このように、ピンク色のペンキ色彩の出現と広がり方には、戦後の時代精神とペンキ材料の技術革新により使用が可能となり、女学校のシンボルカラーとして採用され、それがあるエリア内の近隣の多くの建物で好まれ、模倣されるという一連のプロセスを読み取ることができる。こういうペンキ色彩の町並みへの広がり方と地区的な流行を「隣接波及」¹⁰⁾と呼ぶことにする。

もう一つの緑色については（表6-4）、住民の自分の建物の緑色に関する記憶が13例、そのうち1950年代（4例）と1960年代（4例）の緑色の記憶を多くひろうことができる。

「戦後になってから、3、4回塗り替えた。7、8年に1度の割合で塗り替えているが、1回目にうすい緑を塗り、以来その色彩をつづけてきた。」（No.17. 奥谷畳店、1927（昭和2）年建設、弁天町）

「昭和40年頃、以前に住んでいた所の向かいにあった塗装店に頼みグリーンを塗装。」（No.44. 藤田家住宅、1947（昭和22）年建設、大町）



写真6-2 遺愛女学校本館（1908（明治41）年）のピンク色—戦後の1953（昭和28）年頃からピンク色に塗装されたと推定される



写真6-3 遺愛幼稚園（1913大正2）年のピンク色—戦後の1956（昭和31）年頃からピンク色に塗装されたと推定される



写真6-4 旧函館区公会堂（1910（明治43）年）のピンク色—戦後の1958（昭和33）年頃からピンク色に塗装されたと推定される。この写真は1978年7月撮影のもの

8) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財 旧函館区公会堂保存修理工事報告書』（函館市、1983年3月）の「第五節 細部の調査と修理」の「12 塗装」（pp259-260）に詳述されている。

9) 児島修二 著「建築塗装の手引き」（学芸出版社、1988年）を参照。

10) 前掲書4）を参照。



●はピンク色の記憶を語った住民の建物を、×は緑色の記憶を語った住民の建物を示す。なお、太線で囲まれた区域が調査対象の歴史的景観地域、細線で囲まれた区域は元町末広町伝統的建造物群保存地区、破線は町界を示す。

図 6 - 1 特徴的な色彩のピンク色と緑色の記憶とそれらの色の増加

7、8 年の定期的な塗装間隔で緑色を塗り続けてきたことや、塗装を依頼した前住宅の近所の塗装店とのエピソードとして、30 年から 40 年前の緑色の記憶が語られている。

「30 ～ 40 年前は相馬株式会社の色をまねて、グリーンを塗っていた。」

(No.15. 千代盛商会、1918(大正 7) 年建設、弁天町)

この緑色についてもピンク色と同様に、現在伝統的建造物指定の相馬株式会社（1913(大正 2) 年建設）という地区のランドマーク的な建物が緑色に塗られ、それが周囲の建物にまねられていたことがあげられている（3 例、写真 6-5）。また、6 - 3 - 2 で述べたように、船舶に緑色のペンキが塗装され、その緑色が建物に影響を及ぼしていたこともあげられている（3 例）。



写真 6 - 5 相馬株式会社（1914(大正 3) 年）の緑色

相馬株式会社の建物所有者へのヒアリングによれば、昭和 30 年代から 5 年ごとに同じ緑色で塗り替えているという。緑色を選んだ理由は不明であるが、時層色環データ票によれば 1958（昭和 33）年頃から以降ずっと緑色であり、ヒアリングと合致している。図 6-1 のように、この相馬株式会社や船舶の塗装の影響をうけて、それらに近い港周辺の弁天町、大町、末広町あたりで、1950 年代から 1960 年代にかけて、緑色もピンク色と同様に隣接波及があったと考えられる。

表 6-4 緑色に関する住民の記憶－緑色の記憶の内容 (19 例)

● 自分の建物の緑色の記憶 (13例)

○昭和初期 (1926-1939年) の緑色の記憶 (1例)

- ・「昭和13年頃、緑系の色だったように思う。」 (55. 北村船具店倉庫、1910 (明治43) 年建設、末広町)

○1950年代の緑色の記憶 (4例)

- ・「30～40年前は相馬株式会社の色をまねて、グリーンを塗っていた。」 (15. 千代盛商会、1918 (大正7) 年建設、弁天町)
- ・「昭和29年頃にトルコ調をイメージして白っぽい薄グリーンを塗装。」 (67. 函館文化服装学院、1921 (大正10) 年建設、元町)
- ・「戦後になってから、3、4回塗り替えた。7、8年に1度の割合で塗り替えているが、1回目にうすい緑を塗り、以来その色彩をつづけてきた。」 (17. 奥谷量店、1927 (昭和2) 年建設、弁天町)
- ・「昭和32年以前は深いグリーンだった。」 (82. 大正湯、1928 (昭和3) 年建設、弥生町)

○1960年代の緑色の記憶 (4例)

- ・「昭和37年当時は緑であった。」 (47. 平和石油事務所、1907 (明治40) 年建設、末広町)
- ・「戦後まで木の地が出ていた。ペンキはそれからグリーン系の色を2回ほど塗った。」 (5. 山崎商店、1908 (明治41) 年建設、弁天町)
- ・「20年ほど前からグリーンだった。」 (80. 桐田家住宅、1921 (大正10) 年建設、弥生町)
- ・「昭和40年頃、以前に住んでいた所の向かいにあった塗装店に頼みグリーンを塗装。」 (26. 藤田家住宅、1947 (昭和22) 年建設、大町)

○1970年代の緑色の記憶 (1例)

- ・「昭和50年頃、グリーンを塗装した。」 (4. 中山商店、1907 (明治40) 年建設、弁天町)

○1980年代の緑色の記憶 (3例)

- ・「民宿は昭和62年にはじめた。それと同時に現在のグリーンをほどこした。」 (10. 民宿共真、1914 (大正3) 年建設、弁天町)
- ・「現在の塗装は6、7年前におこなった。その際はグレーの外壁に紺の塗り分けを予定していたのだが、塗装屋がペンキ缶1つ忘れたためにその色がつくれず、グリーン系の色彩になった。」 (14. 伴田商店所有建物、1916 (大正5) 年頃建設、弁天町)
- ・「入居した昭和60年当時、外壁のペンキ塗装はぼろぼろに剥離していたが、くすんだ緑だった。」 (62. 日和館、1921 (大正10) 年建設、元町)

● 地区の代表的建物である相馬株式会社の緑色とその周囲の建物への波及 (3例)

- ・「相馬株式会社は緑だったが、その浜側にあった民宿室屋も緑だった。」 (10. 民宿共真、1914 (大正3) 年建設、弁天町)
- ・「(創建された1916 (大正5) 年から1965 (昭和40) 年頃まで新栄医院として使われていたが) 色彩の変遷に関しては相馬株式会社の影響を受けている。それは新栄医院の息子が相馬から嫁をもらったためで、近所でも「相馬の色をまねている。」とうわさされていた。」 (14. 伴田商店所有建物、1916 (大正5) 年頃建設、弁天町)
- ・「30～40年前は相馬株式会社の色をまねて、グリーンを塗っていた。」 (15. 千代盛商会、1918 (大正7) 年建設、弁天町)

● 船舶の緑色とその建物への影響 (3例)

- ・「30年ほど前 (1960年頃) は漁業が盛んだった。その当時独航船に緑を塗っていたので、もしかしたらそれを転用したかもしれない。」 (33. 加藤家住宅、1913 (大正2) 年建設、大町)
- ・「戦後は緑の建物はよくあったが、建物用のペンキを使っていたのは金のある所で、一般の民家などでは船舶用の緑のペンキを転用していたところもあった。」 (82. 大正湯、1928 (昭和3) 年建設、弥生町)
- ・「昭和42年、Ta漁業などの漁業会社は会社の色として船舶をすべてグリーンに塗った。これらの影響もあったのではないか。」 (44. 藤田家住宅、1947 (昭和22) 年建設、大町)

6-3-4 住民の記憶の中にあるペンキ色彩の特徴

ペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりは、住民の中に鮮明な記憶として残されていた。ペンキ色彩の記憶は、様々な、具体的な生活のエピソードとして思い出され、語られた（図 6-2）。その多くは建物の改築、住み替え・入居、結婚などの生活の節目となる出来事や、大火や戦争といった社会的出来事などと結びついたもので、ペンキ色彩が住民の暮らしの中で重要な意味をもっていたことがうかがえる。住民の記憶から、洋風建物の特徴や時代の流行色、町並み、港の場所性とかかわりで色彩を選択し、建物を塗装する事例があげられていた。とくに、地区の特徴的な町並み色彩であるピンク色の記憶からは、戦後の時代精神とペンキ材料の技術革新により、ランドマーク的な建物のシンボルカラーとして用いられ、その色があるエリア内において近隣の建物で好まれ、連鎖的に模倣される、隣接波及というしくみによるペンキ色彩の町並みへの広がり方と地区的な流行がとらえられた。緑色の記憶からも同様の隣接波及がうかがえた。このようなペンキ色彩と住民の暮らしにかかわる鮮明な記憶は、住民による町並み色彩形成の基盤になっていると考えられる。

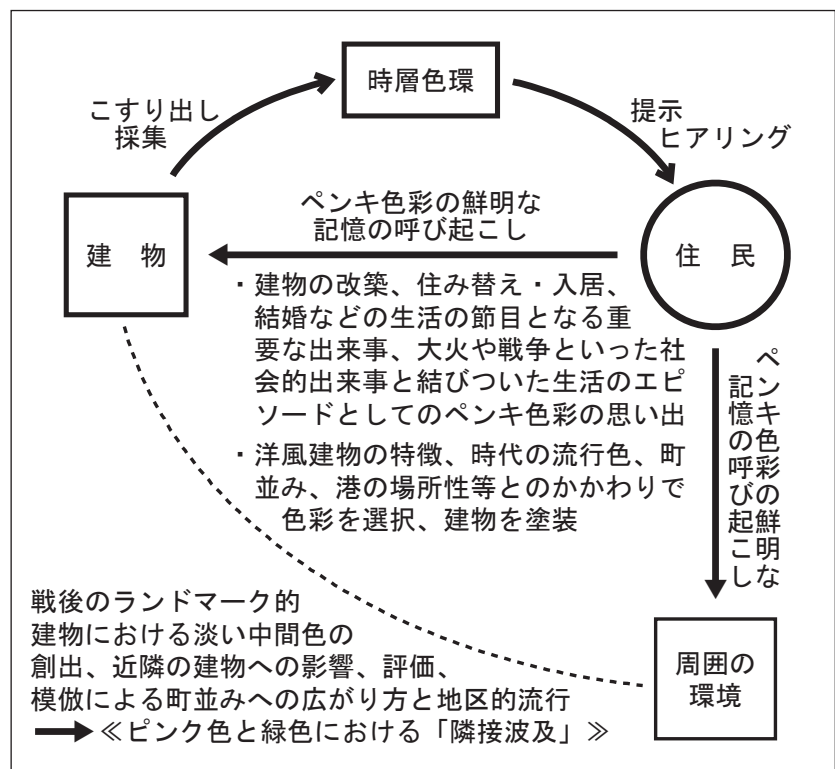


図 6-2 住民の記憶の中にあるペンキ色彩の特徴

6-4 色彩選択における意志決定の主体と方法

ペンキの色を選択するにあたり、誰がどのように決めているのか、意志決定の主体と方法には、住民、塗装業者、近隣住民の3者の関係から4つのタイプをとらえることができる(表 6-5)。住民が単独で決めている「住民単独」(11 例)が最も多く、住民から依頼されて塗装業者が決めている「塗装業者主体」(9 例)、住民と塗装業者が相談しながら決めている「住民と塗装業者の対話」(5 例)がつづき、近隣の住民同士が相談しながら決めている「住民同士の相談」は1 例と少ない。

「主人が昔大工で、またドックで塗装や運搬の仕事をしていたために、塗装はすべて自分でおこなっていた。」(No.77. 菅原家住宅、1907(明治 40)年建設、弥生町)

住民単独ではその多くが家の主人である(9 例)。中には港湾地域の性格を反映して船舶関係の塗装経験者、塗料店経営者や大工の経験者、写真を趣味にしている人といった、塗装や色彩に対して専門的知識をもつ人もいる。

「色の選択等はすべて塗装業者に任せた。」(No.81. 岩崎家住宅店舗、1924(大正 13)年頃建設、弥生町)

「現在の塗装は、自転車に乗って巡ってきた塗装業者に依頼した。」(No.28. 長谷川理容院、1909(明治 42)年建設、大町)

塗装業者主体では、住民がペンキ色彩の専門家として塗装業者を全面的に信頼し、いっさいをまかせている。中には自転車などで地区を巡回してきた塗装業者に依頼する例もみられた(3 例)。塗装業者の地区の巡回は営業が主目的だと思われるが、ペンキが剥げ落ちたり傷んだりしている建物を見つけ、その所有者に対してペンキの補修を助言することをおこなっていたものと推測される。いわば、塗装業者は町並みの観察者、管理者(タウンウォッチャー)としての役割を担っていたのではないかと考えられる。

「色の選択等については、自分の好みをもとにして塗装業者と相談しながら決めた。」(No.23. 喫茶店 PEACEFUL PLACE、1907(明治 40)年建設、大町)

「ピンクの塗装は塗装業者に『あたらしさを表現するものはないか』と相談したところ、あげられたものだった。」(No.82. 大正湯、1928(昭和 3)年建設、弥生町)

住民と塗装業者の対話では、住民が自分の好み、イメージ、要望を塗装業者に伝え、塗装業者と相談しながら色を決めている。ここでの塗装業者はペンキ色彩の相談役、アドバイザーとしての役割を果たしている。

「現在の塗装は5 年ほど前のもので、色の選択については向かいの柳川宅と相談して同時におこなった。(これまでも同様のことを何度かおこなっ

表 6－5 色彩選択における意志決定の主体と方法 (26 例)

● 住民単独(11例)

- ・「色の選択については自分の店でペンキ塗料を扱っているので自分の好みで選び、また自分で塗装もした。」(20. 山崎商店、1907(明治40)年建設、大町)
- ・「主人が昔大工で、またドックで塗装や運搬の仕事をしていたために、塗装はすべて自分でおこなっていた。」(77. 菅原家住宅、1907(明治40)年建設、弥生町)
- ・「自分で店にある船舶用塗料を塗っている。」(25. 村中船具店、1909(明治42)年建設、大町)
- ・「自分の好きな色を選んで塗装してきた。」(32. 向井家住宅、1913(大正2)年建設、大町)
- ・「ペンキの色の選択は自分でおこなっている。」(34. 清田商店、1913(大正2)年建設、大町)
- ・「色の選択はすべて自分の感覚でおこなっている。」(35. 久保田家所有建物、1914(大正3)年建設、大町)
- ・「現在の塗装は4、5年前のもので、父が塗装した。」(38. 照井家住宅、1915(大正4)年建設、大町)
- ・「色の選択については主人が指定した。趣味が写真だったことも関係し、色彩についてはかなり厳しく選んだという。」(79. 高田木材店、1917(大正6)年建設、弥生町)
- ・「色の選択はすべて自分でおこなった。」(67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)
- ・「色彩の選択については、自分の好みで決めている。」(19. 小野家住宅、1930(昭和5)年建設、弁天町)
- ・「色の選択などについては主人がおこなった」(44. 藤田家住宅、1947(昭和22)年建設、大町)

● 塗装業者主体(9例)

- ・「塗装はペンキの専門職人に依頼し、色彩についてもすべて任せている。」(5. 山崎商店、1908(明治41)年建設、弁天町)
- ・「ペンキ塗装は専門の業者に依頼している。」(8. 柳栄堂、1909(明治42)年建設、弁天町)
- ・「現在の塗装は、自転車に乗って巡ってきた塗装業者に依頼した。」(28. 長谷川理容院、1909(明治42)年建設、大町)
- ・「5年前に屋根の塗装を巡回してきた塗装業者にまかせた。」(33. 加藤家住宅、1913(大正2)年建設、大町、)
- ・「塗装するペンキの色の選択については、業者のアプローチに従っている。」(36. 函館神工通信工業所、1914(大正3)年建設、大町)
- ・「塗装に関しては、塗装専門の業者に依頼している。」(63. 金子家住宅、1921(大正10)年建設、元町)
- ・「色についてはすべて塗装業者に任せた。」(74. 山内家住宅、1922(大正11)年建設、船見町)
- ・「色の選択等はすべて塗装業者に任せた。」(81. 岩崎家住宅店舗、1924(大正13)年頃建設、弥生町)
- ・「現在の塗装は巡回してきた塗装業者に依頼した。」(59. エンパイアクリーニング、1946(昭和21)年建設、末広町)

● 住民と塗装業者の対話(5例)

- ・「色の選択等については、自分の好みをもとにして塗装業者と相談しながら決めた。」(23. PEACEFUL PLACE、1907(明治40)年建設、大町)
- ・「塗装業者についてはこちらから依頼したものと、巡回してきたものだったりさまざまだが、色の選択などについてはすべて業者任せである。周囲の色彩に合わせることを要望し、流行色を取り入れるようにしている。」(46. 中村呉服店、1907(明治40)年建設、末広町)
- ・「塗り分けについては塗装業者にバランスを考えてもらった。」(15. 千代盛商会、1918(大正7)年建設、弁天町)
- ・「色については新鮮さをイメージする白、ペンキはそれにあうように塗装業者に依頼した。」(18. 星野家住宅、1928(昭和3)年建設、弁天町)
- ・「ピンクの塗装は塗装業者に「あたらしさを表現するものはないか」と相談したところ、あげられたものだった。」(82. 大正湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)

● 住民同士の相談(1例)

- ・「現在の塗装は5年ほど前のもので、色の選択については向かいの柳川宅と相談して同時におこなった。(これまでも同様のことを何度かおこなっている。)」(3. 浜岡家住宅、1907(明治40)年建設、弁天町)

ている)」(No.3. 浜岡家住宅、1907(明治 40) 年建設、弁天町)

住民同士の相談では、色について近隣と相談し、塗装も同時におこなうなど、一連のペンキ塗り替えを共同作業としておこなっている例がみられた。

以上を関係図として示したのが図 6-3 である。色彩選択における意志決定においては、住民と塗装業者の対話や住民と近隣の相談のように、他者との相談システムが成立しているケースがみられた。また、塗装業者の関与が比較的多くみられ、その役割が大きかったと考えられる。しかし、「最近ではペンキ塗装の塗り替えよりも、外壁のはりかえを勧めに来る業者がある」(Ta 家住宅、1932(昭和 7) 年建設、大町) ように、ペンキ塗装にかかわるかつての塗装業者との関係は変質しつつあるといえる。

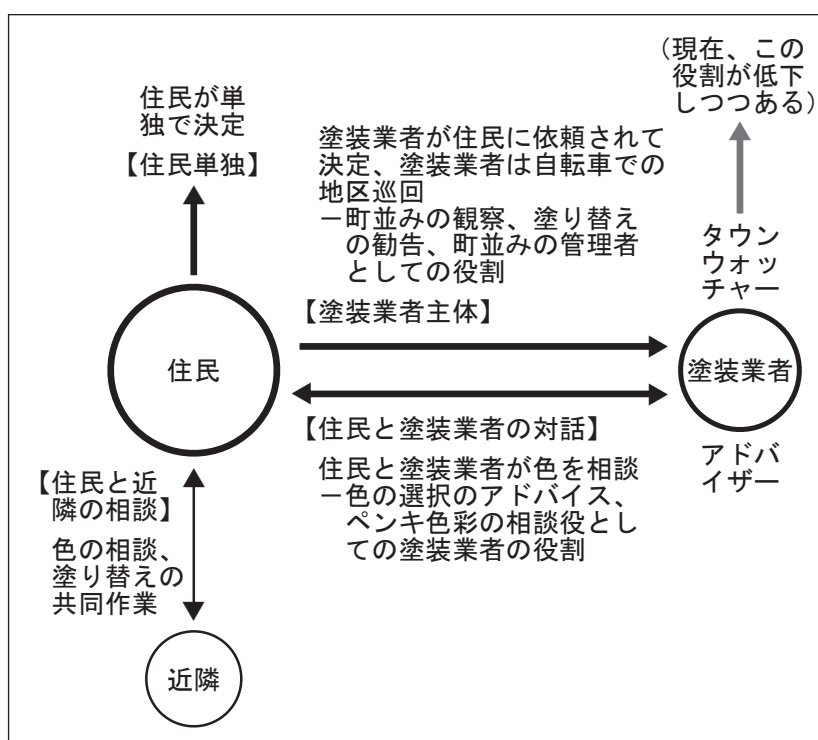


図 6-3 色彩選択における意志決定の主体と方法

6-5 色彩選択の決定要因

どのような考え方や理由で個々の建物のペンキの色が決められたのかは、町並み色彩形成にとって重要である。住民の色彩選択の決定要因には様々なものがあるが、建物や周囲の環境との関係への対応によって、関係への考慮が全くみられないものと、何がしかの考慮がみられるものの大きく2つのタイプがある。前者は

西部地区の町並み色彩とは無関係に、住民個人の思いつき、その時の気分といった恣意的要素で色を選択している「個人恣意型」、後者は自分の建物との関係を考慮した「建物価値型」と地区の周辺環境との関係を考慮した「町並み型」にさらに分けられる（表6-6）。

「色の選択などについては、これといったポイントもなく、その時の気分で選んでいたのではないか。」（No.10. 民宿共真、1914(大正3)年建設、弁天町）

個人恣意型は、住民の独善に陥る可能性があるが、このタイプは2例と少ない。

建物価値型は、自分の建物へのこだわりや愛着を色彩で表現したものといえ、21例と最も多い。このタイプでは、その表現の仕方によって以下の5つがみられた。

「色はそれまでのものにあわせて濃いクリーム系の色を選んだ。その他、5年ほど前に塗り替え現在にいたっている。その時にも前回と同様、それまでと似かよった色を塗装することを希望した。」（No.37. 三洋無線電機商会、1907(明治40)年建設、大町）

一つは、下見板張りペンキ塗装の洋風建物の現状の維持・保全や過去の色の再現をはかるなど、建物の時間的連続性を考慮したものがあげられる（7例）。

「柱型の白は建物を大きく見せる効果を狙ったものである。」（No.67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町）

「窓などの塗り分けは外壁と同系色で それより濃い目のものを用いるようにしている。」（No.25. 村中船具店、1909(明治42)年建設、大町）

二つ目は、柱型や窓枠など建物がもつ意匠的な性格を背景に、色の心理効果の適用をはかったり、窓などの塗り分けを外壁と同系色で濃い目の色を用いてメリハリをつけるなど、建物に対する色彩効果の具体的なねらいをもって色を選択しているものである（4例）。

「色については屋根の色との調和を考えながら。」（No.57. 深谷米穀店、1917(大正6)年建設、末広町）

三つ目は、屋根の色との調和、建物全体の調和を考慮したものである（2例）。

「理容院としてモダンなイメージを表現するものを選んだ。」（No.28. 長谷川理容院、1909(明治42)年建設、大町）

「外壁の色彩については、娘がいるのでピンク等かわいらしい色を選択してきた。」（No.77. 菅原家住宅、1907(明治40)年建設、弥生町）

四つ目は、建物の用途や家族、とくに子どもにふさわしいイメージを表現する色を選択したものである（6例）。

「明るい黄色から段々暗くして下の色のムラや汚れが消えるようにした。」（No.34. 清田商店、1913(大正2)年建設、大町）

表 6－6 色彩選択の決定要因 (36 例)

● 個人恣意型－住民個人の恣意により色を選択 (2例)	・「ピンクだった理由は商店という性格上、汚れが目立たないような色を選んだのである。」 (15. 千代盛商会、1918(大正7)年建設、弁天町)
○個人の思いつき、気分で選択 (2例)	・「ブルーは初めてだ。商店のイメージで、夏を基調にして選んだ。」 (62. 日和館、1921(大正10)年建設、元町)
・「色の選択については自分の店でペンキ塗料を扱っているので自分の好みで選び、また自分で塗装しました。」 (20. 山崎商店、1907(明治40)年建設、大町)	・「昭和29年頃にトルコ調をイメージして白っぽい薄グリーンを塗装。昭和35年頃、アメリカン・スタイルを意識して下見板部分をピンク、柱等を白く塗った。」 (67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)
・「色の選択などについては、これといったポイントもなく、その時の気分で選んでいたのではないか。」 (10. 民権共真、1914(大正3)年建設、弁天町)	○色ムラや汚れの手直し (2例)
● 建物価値型－自分の建物との関係を考慮して色を選択 (21例)	・「それまでの塗装が白だったのが汚れていたために、それよりも濃い色で」 (28. 長谷川理容院、1909(明治42)年建設、大町)
○建物の時間的連続性を考慮 (7例)	・「明るい黄色から段々暗くして下の色のムラや汚れが消えるようにした。」 (34. 清田商店、1913(大正2)年建設、大町)
・「色はそれまでのものにあって濃いクリーム系の色を選んだ。その他、5年ほど前に塗り替え現在にいたっている。その時にも前回と同様、それまでと似かよった色を塗装することを希望した。」 (22. 三洋無線電機商会、1907(明治40)年建設、大町)	● 町並み型－周囲の環境との関係を考慮して色を選択 (13例)
・「現在の色は10年くらい前にそれまでの塗装がはがれてきたので、その色にあわせて塗装したもの。」 (33. 加藤家住宅、1913(大正2)年建設、大町)	○周囲の建物との関係を考慮 (4例)
・「昨年(昭和63年)に塗ったのは、相馬さん(相馬株式会社常任監査役)が身近な人との話と自らの記憶から、かつての色を再現したとのこと。」 (37. 相馬株式会社、1914(大正3)年建設、大町)	・「周囲の色彩に合わせることを要望し、流行色を取り入れるようにしている。」 (46. 中村呉服店、1907(明治40)年建設、末広町)
・「色についてはそれまでと似たような色系のものをを用いるようにしている。」 (57. 深谷米穀店、1917(大正6)年建設、末広町)	・「色については周囲の他の建物との調和を考えながら」 (57. 深谷米穀店、1917(大正6)年建設、末広町)
・「色の選択については前の色彩を基準にしてなるべく同系色を使うようにしている。」 (15. 千代盛商会、1918(大正7)年建設、弁天町)	・「向かいの色彩を参考にして決めた。」 (39. 斎藤家住宅、1918(大正7)年建設、大町)
・「現在のサイディングの色については過去に塗られていた色(グリーン)だったから。」 (15. 千代盛商会、1918(大正7)年建設、弁天町)	・「現在の色彩は7、8年前に塗装したもので隣の家と色をあわせて選んだ。」 (59. エンパイアクリーニング、1946(昭和21)年建設、末広町)
・「色はそれまでの色彩を保つことを考えた。」 (42. 外城商店、1930(昭和5)年建設、大町)	○港の場所のイメージを表現 (2例)
○建物意匠の色彩効果を考慮 (4例)	・みなとをイメージする明るい色彩としてその色を選んだ。」 (47. 平和石油事務所、1907(明治40)年建設、末広町)
・「窓などの塗り分けは外壁と同系色でそれより濃い目のものをを用いるようにしている。」 (25. 村中船具店、1909(明治42)年建設、大町)	・「貸しポート店を経営していたために海からみて目立つようにした。」 (43. 田中家住宅、1932(昭和7)年建設、大町)
・「柱型の白は建物を大きく見せる効果を狙ったものである。」 (67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)	○地区全体の流行色を採用 (3例)
・「色についてはサイディングは新鮮さをイメージする白」 (18. 星野家住宅、1914(昭和3)年建設、弁天町)	・「色については白が流行していたので、それを用いた」 (8. 柳栄堂、1909(明治42)年建設、弁天町)
・「ピンクの塗装は塗装業者に「あたらしさを表現するものはないか」と相談したところ、あげられたものだった。」 (82. 大正湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)	・「そのときの流行色を取り入れるようにしている。」 (25. 村中船具店、1909(明治42)年建設、大町)
○建物の外壁と屋根の調和を考慮 (2例)	・「その時周辺にピンクの建物が多くあり、自身もピンクがよい色だと思ったのでそれを塗装することにした。」 (68. 佐藤理容院、1921(大正10)年建設、元町)
・「柱型の色については屋根の色彩とあわせた。」 (8. 柳栄堂、1909(明治42)年建設、弁天町)	○地区の代表的建物の色を参考、採用 (4例)
・「色については屋根の色との調和を考えながら」 (57. 深谷米穀店、1917(大正6)年建設、末広町)	・「(創建された1916(大正5)年から1965(昭和40)年頃まで新栄医院として使われていたが)色彩の変遷に関しては相馬株式会社の影響を受けている。それは新栄医院の息子が相馬から嫁をもらったためで、近所でも「相馬の色をまねている。」とうわさされていた。」 (14. 伴田商店所有建物、1916(大正5)年頃建設、弁天町)
○建物の用途や家族のイメージを表現 (6例)	・「30～40年前は相馬株式会社の色をまねて、グリーンを塗っていた。」 (15. 千代盛商会、1918(大正7)年建設、弁天町)
・「外壁の色彩については、娘がいるのでピンク等かわいらしい色を選択してきた。」 (77. 菅原家住宅、1907(明治40)年建設、弥生町)	・「20年くらい前から近所の大平洋裁学校(現函館文化服装学院)や旧函館区公会堂など、見る限りピンクの建物が多かったのを、それをまねた。」 (63. 金子家住宅、1921(大正10)年建設、元町)
・「理容院としてモダンなイメージを表現するものを選んだ。」 (28. 長谷川理容院、1909(明治42)年建設、大町)	・「ピンクについては旧函館区公会堂と遺愛幼稚園の色彩をまねた。」 (67. 函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)
・「店のイメージをモチーフに。」 (34. 清田商店、1913(大正2)年建設、大町)	

五つ目は、現状の建物の問題として色ムラや汚れがあり、それを解決するためにペンキの色相、明暗、濃さを考慮したものである（2例）。

町並み型は、周囲の環境に対する関心と理解にもとづき、その環境との適切な関係を築くことをめざしたものといえ、13例みられた。このタイプでは、対象とする環境のちがいににより以下の4つがみられた。

「現在の色彩は7,8年前に塗装したもので隣の家と色をあわせて選んだ。」
(No.59. エンパイアクリーニング、1946(昭和21)年建設、末広町)

一つは、隣家と同じ色を選んだり、周囲の建物の色を参考にして色を選んだものである（4例）。

「みなとをイメージする明るい色彩としてその色を選んだ。」(No.47. 平和石油事務所、1907(明治40)年建設、末広町)

二つ目は、建物が港に面するところに立地しており、その場所のイメージを色で表現しようとしたものである（2例）。

「そのときの流行色を取り入れるようにしている。」(No.25. 村中船具店、1909(明治42)年建設、大町)

三つ目と四つ目は、時代によって地区の流行色があり、それを採用したものと（3例）、6-3-3で述べたように、旧函館区公会堂や相馬株式会社などの西部地区のランドマーク的な建物のピンク色や緑色を参考にし、それを取り入れたもの（4例）である。

この色彩選択における決定要因と、6-4の意志決定の主体と方法の関係を示したのが表6-7である。色彩選択の決定要因からみると、個人恣意型は2例しかなく、多くは建物価値型、町並み型(両方合わせて34例の71%)で占められている。建物価値型とは、函館市西部地区の町並みの中で、洋風建物の柱型や窓枠等の意匠的特徴、外壁と屋根の関係、歴史的町並みとしての時間的連続性、建物の用途のモダンイメージなど、建物の特質との関係を考慮し

表6-7 色彩選択における決定要因と意志決定の主体・方法

色彩選択の決定要因 タイプ	個人 恣意 型	建物 価値 型	町並み 型	不明	合計
意志決定の主体・方法					
住民単独	1	6	2	6	15
塗装業者主体	0	4	3	4	11
住民と塗装業者との対話	0	5	2	1	8
住民同士の相談	0	0	0	1	1
不明	1	6	6	0	13
合計	2	21	13	12	48

数値は該当数を示す。なお、住民単独は11例、塗装業者主体は9例、住民と塗装業者との対話は5例であるが、それぞれ色彩選択の決定要因は複数のタイプに該当する例があるため、合計数が増えている。

て色彩を決定したタイプである。町並み型とは、隣家や周囲の建物の色彩を参考にして色を選び調和をはかったもの、港周辺に立地するものが港のイメージにつながる色彩を選んだもの、地区のランドマーク的な建物の色彩を取り入れたり、地区で流行していた色彩を取り入れたものなど、近隣や地区への関心のなかで、環境や町並みとの関係性から色彩選択したタイプである。この建物価値型、町並み型が多くを占めることに、西部地区の町並み色彩の特徴が継承されてきた大きな要因があるといえる。

次に意志決定の主体、方法をみると、専門家である塗装業者が関与しているケース（塗装業者主体と、住民と塗装業者との対話の両方合わせて 19 例の 40%）が最も多い。この場合、色彩選択の決定要因は建物価値型と町並み型しかなく、町並み色彩形成における塗装業者の関与の重要性が浮かびあがる。塗装業者は、営業を兼ねてであろうが、自転車で地区を巡回してタウンウォッチャーや色彩アドバイザーとして西部地区の暮らしのなかに定着していた時代のあったことがヒアリングからうかがえる。また住民が他に相談せず単独で決定したケースも多いタイプ（15 例の 31%）となっているが、この場合でも色彩選択の決定要因には建物価値型をあげたものが多い。住民が、西部地区の町並みのなかでの建物の意匠的特徴などに対する理解と関心をもち、それを手がかりに色彩選択していることがうかがえる。また 1 例のみであるが、住民同士の相談で色彩選択した事例もあり、近隣コミュニティとの関係性もみられる。

6-6 町並み色彩形成のしくみ

函館市西部地区において、変化と多様の中で一定の調和をたもつ町並み色彩の特質の基底にあるものとして、ペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりに着目し、分析してきた。建物や周囲の環境のペンキ色彩に対する住民の記憶の分析から、住民は数多くの思い出を語り、ペンキ色彩を鮮明に記憶していることがわかった。その記憶は様々な、具体的な生活のエピソードと結びつけられていた。生活の節目となる重要な出来事にペンキ色彩がかかわっていたことなど、住民にとって町並み色彩が暮らしの中で意味をもち、重要な役割を担っていたことがうかがえる。地区の特徴的な町並み色彩であるピンク色と緑色の記憶から、ランドマーク的な建물에塗装されたそれらの色が、その周辺や近隣の住民に評価され、あるエリア内で連鎖的に模倣されて広がり、流行するという、隣

接波及の現象がとらえられた。これは、住民の暮らしとのかかわりの中で町並み色彩が形成されてきた一つの具体例である。また、ペンキを塗り替える時の色彩選択の意志決定の主体、方法と決定要因の分析から、住民と塗装業者、近隣住民との間の対話、相談という、地域コミュニティにおける色彩選択の支援的なくみをもっていることがわかった。さらに、洋風建物の柱型や窓枠等の意匠的特徴、外壁と屋根の関係などを考慮したり、隣家や周囲の建物の色彩を参考にしたり、港のイメージを考慮したり、地区のランドマーク的な建物の色彩や地区で流行していた色彩を参考にするなど、住民の色彩選択決定要因には、建物との関係を考慮した建物価値型と周囲の環境との関係を考慮した町並み型のタイプが多くを占めていた。このようなペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりの分析から見出された、住民のペンキ色彩への鮮明な記憶、生活のエピソードと結びついたペンキ色彩の思い出、隣接波及にみられるような近隣の建物や環境の影響、評価、塗装業者や近隣住民の支援、建物価値型と町並み型の色彩選択のあり方などが、建物のペンキの塗り替え時に、相互に関係をもちながら作用し、それが地区の町並み色彩形成のしくみとして働いていたのではないかと考えられる。そこに町並み色彩が変化と多様の中で一定の調和をたもっている理由があるといえる。

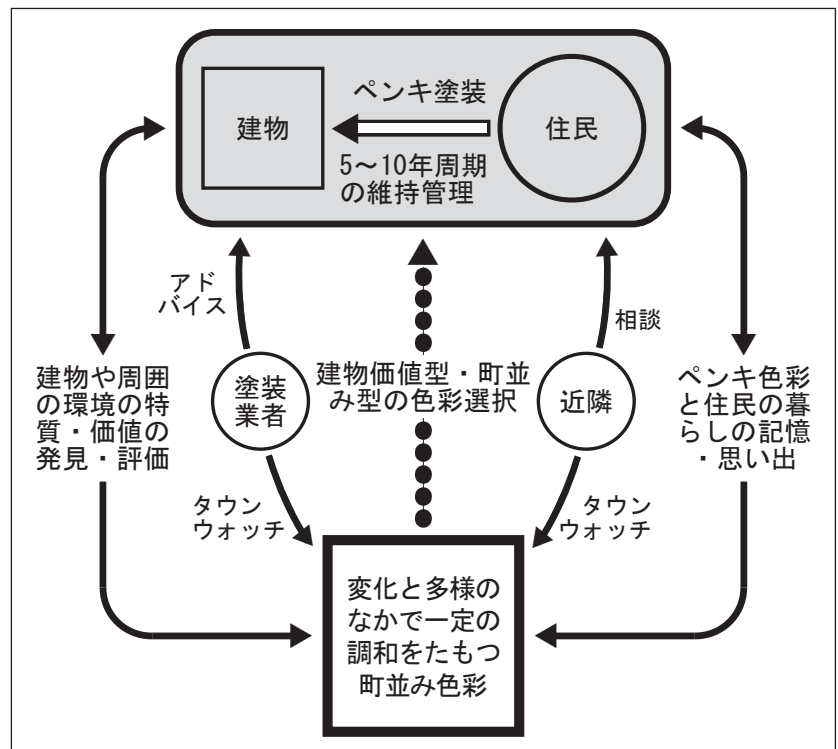


図 6 - 4 函館市西部地区における町並み色彩形成のしくみのモデル

この函館市西部地区における町並み色彩形成のしくみをモデル化すると（図 6-4）、①住民は建物の維持管理のために 5 年から 10 年の周期でペンキ塗装をおこなう、②その際の色彩選択の決定要因は様々であるが、住民の多くが建物価値型や町並み型といった、建物や周囲の環境との関係の中で色を決定している、③その背景には、ペンキ塗装が単なる建物の保護ということだけでなく、住民の暮らしの場面と関係づけられ、生活レベルで様々な意味を持ち、それが住民の思い出として記憶に残されているため、④ペンキ塗装という周期的な行為の時に塗装業者や近隣を媒介にして、住民が建物の意匠的特徴や周囲の環境と対面し、その特質に気づき、価値を再評価し、⑤これらを通じて色彩選択と外壁等のペンキ塗り替えをおこない、⑥その結果が周辺で評価されたり、地区の町並み色彩に影響を及ぼしたりして、⑦地区全体としての町並み色彩の特質が形成され、それがまた次の色彩選択に生かされる、という循環する関係性の構造として描くことができる。

6-7 まとめ

函館市西部地区は、下見板張り洋風建物のペンキ塗装の町並みが形成され、時代の移り変わりの中で、その町並み色彩が変化し多様さをもちながら、一定の調和をたもっているところにその特質がある。この独特の町並み色彩が歴史的に形成されてきたしくみは、住民による建物へのペンキ塗装を通じて、住民と色彩選択のあり方、塗装業者や近隣の支援体制、建物や周囲の環境の特質・価値とその理解・評価、ペンキ塗装と住民の暮らしの結びつき、その思い出・記憶などが相互に関係づけられた構造にあることをあきらかにした。この建物維持管理のための住民によるペンキ塗装の生活行為を中心とした、関係性の構造をどのように継承していくかが西部地区の町並み色彩計画の課題である。

近年、下見板張り洋風建物の減少など物理的環境の変化や、住民と塗装業者との関係の変質などにより、ペンキ塗装の生活行為そのものが減少傾向にあるが、一方では、この 10 年ほど市民ボランティアによるペンキ塗りワークショップがおこなわれるなど、町並み色彩形成のしくみを補強、発展させ、生活環境色彩を維持する動きもみられ、今後の動向が注目される。

第7章 函館市西部地区における町並み色彩形成のしくみの継承と展開

7-1 はじめに

函館市西部地区の町並み色彩の特徴は、近年の環境変貌にともない失われる傾向にある。この特徴をたもつには、前章でとらえられた構造的な町並み色彩形成のしくみを維持することが必要である。本章は、時層色環調査の1988、89年以降、町並み色彩形成のしくみがどのように継承、展開されているのかをあきらかにすることを目的としている。

第3章で指摘したように、1990年代以降、函館市西部地区の時層色環調査対象82棟のうち、約半分の建物で取り壊し、改築、建替新築がおこなわれ、それらの建物では下見板張り洋風の形式を失い、ペンキ色彩の町並み特性が失われる傾向にある。また、塗装業者のタウンウォッチャーとしての役割が変質するなど、近年、地区全体として町並み色彩形成のしくみが弱体化しつつあるといえる。

このような状況の中で、市民が中心となり、老朽化する下見板張り建物にペンキを塗るボランティア活動が1990年からおこなわれている。1993年に公益信託函館色彩まちづくり基金（函館からトラスト）が設定され、市民まちづくり活動への資金助成のシステムができてからは、以降毎年2～3件の建物のペンキ塗装がおこなわれている。また一方、行政により、1988年4月1日の函館市西部地区歴史的景観条例の施行にともない、伝統的建造物群保存地区内の伝統的建造物や、歴史的景観地域内の景観形成指定建築物などに対して色彩コントロールがおこなわれている。こういう1990年頃からの市民、行政による新たな町並み色彩形成の活動実態をあきらかにし、従来の町並み色彩形成のしくみの中の何が継承されているのか、またそれとは異なる、新しい展開を遂げているものは何かについてあきらかにする。

研究の方法は、市民によるペンキ塗りボランティア活動については、①公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動の最終報告書12点（1995～2006年）、②活動主体のペンキ塗りボランティア隊が作成した、ペンキ塗り活動パネル・A3版・14点（1990～2005年のあゆみと展望、1990年、1993年、1994～2005年）¹⁾、③函館からトラスト事務局発行のニュースレター23点（第1号・1992年～第23号・2005年）を収集し、分析した。行政に

1) 函館からトラストのホームページ (<http://www.h-nisshou.com/kara/>) にも掲載されている。

よる色彩コントロールについては、①函館市都市建設部都市デザイン課、函館市教育委員会生涯学習部文化財課編『函館らしい都市景観の形成をめざして～函館市都市景観条例のあらまし～』、平成 13 年、②「函館市の都市景観行政」平成 17 年 4 月、函館市都市建設部都市デザイン課（函館市のホームページ <http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/toshiken/design/ord/record.pdf> より）の収集と、③担当部局（都市建設部都市デザイン課、教育委員会生涯学習部文化財課）の担当者へのヒアリングにもとづき分析した。

7-2 市民によるペンキ塗りボランティア活動

7-2-1 活動の概要

ペンキが剥げ落ちたりするなど、老朽化が著しく、塗り替え時期にきている下見板張り建物に対して、市民が中心となりボランティアで、屋根を除く外壁下見板、柱型、窓枠等にペンキ塗装をおこなう活動は、1990 年の No.1. 加藤家住宅（1913（大正 2）年建設、大町）をはじめとする。以降、2005 年の No.27.MOSSTREES（1907（明治 40）年建設、大町、写真 7-1）と No.28. 奥谷畳店（1927（昭和 2）年建設、弁天町）まで、西部地区の元町 10 件、弥生町 8 件、大町 6 件、弁天町 2 件、その他 2 件の計 28 件に対して、ペンキ塗りボランティア活動がおこなわれてきた（表 7-1）。そのうち 20 件は歴史的景観地域内に位置し、さらに 13 件は 1988、89 年に時層色環調査をおこなった建物である。伝統的建造物群保存地区（以下、「伝建地区」）内の伝統的建造物も 1 件含まれているが、27 件は伝建地区外である。これらの建物は、伝建地区周辺の基坂の港近くと二十間坂周辺、さらには弥生町に 6～7 件まとまって分布している（図 7-1）。1994 年までは 1 件だけのペンキ塗り活動であったが、1995 年からは 2～3 件の複数の建物を塗装するようになった。活動の主体は、1990 年、1993 年の当初は地元の市民団体である元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会が中心であった。1994 年から 2 年間は、ペンキ塗り替え支援・札幌勝手連と称して、札幌の北海道大学の大学院生、学生らが中心であった。その後は、北海道大学の大学院生、学生らと地元の函館工業高校、函館高専、北海道教育大学函館校の生徒・学生らとが共同体制を組んで活動がおこなわれている。この他に、地元函館の一般市民や道外の大学生の参加もみられる。

参加者の数と属性をみると（表 7-2）、1990 年、1993 年はいずれも 11 人であり、地元の市民団体と札幌の大学生などで構成され



写真 7-1 市民ボランティアによる 2005 年の MOSSTREES（1907（明治 40）年建設、大町）のペンキ塗り替え直後の様子。地元の大学生ほか、延べ 98 人/2 日の参加をみた。（2005 年 7 月撮影）

表7-1 市民によるペンキ塗りボランティア活動の概要（1990～2005年）

No.	活動年	ペンキ塗り建物名称	建築年	所在地	活動主体	他の参加者
1	1990年	加藤家住宅	1913(大正2)年	大町8-21	元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会	—
2	1993年	小森商店	1901(明治34)年	弁天町23-14	元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会	北海道大学大学院生・学生
3	1994年	渋田家住宅	1909(明治42)年	弥生町8-16	ペンキ塗り替え支援・札幌勝手連(北海道大学大学院生・学生・教員)	元町倶楽部
4	1995年	PEACEFUL PLACE+旧三洋無線電機商会	1907(明治40)年	大町9-14	ペンキ塗り替え支援・札幌勝手連(北海道大学大学院生・学生・教員)	函館工業高校生徒・教員、元町倶楽部
5	"	長谷川理容院	1909(明治42)年	大町9-6	"	"
6	"	三浦理美容院車庫	1907(明治40)年	大町9-3	"	"
7	1996年	MGMステーション・他	1907(明治40)年	元町2-3	ペンキ塗り替え勝手連(北海道大学大学院生・学生・教員+函館工業高校生徒・教員)	元町倶楽部
8	"	窪田家住宅・他	1937(昭和12)年	元町24-18	"	"
9	1997年	函館どっく(株)社宅	1944(昭和19)年	弥生町6-17	ペンキ塗りボランティア隊(北海道大学大学院生・学生・教員+函館工業高校生徒・教員)	元町倶楽部
10	"	旧おぐら理容院	1907(明治40)年	弥生町6-15	"	"
11	"	たこやきみっちゃん・他	1907(明治40)年	弥生町6-14	"	"
12	1998年	函館どっく(株)社宅-1	1924(大正13)年	弥生町7-10	ペンキ塗りボランティア隊(北海道大学大学院生・学生・教員+函館工業高校生徒・教員)	元町倶楽部、一般市民
13	"	函館どっく(株)社宅-2	1924(大正13)年	弥生町7-9	"	"
14	"	函館どっく(株)社宅-3	1924(大正13)年	弥生町7-8	"	"
15	1999年	小笠原家住宅	1934(昭和9)年	元町23-4	ペンキ塗りボランティア隊(北海道大学大学院生・学生・教員+函館工業高校生徒・教員)	函館高専生徒・教員、元町倶楽部、一般市民
16	"	川又家・橋田家住宅	1934(昭和9)年	元町23-3	"	"
17	2000年	手塚家住宅	1935(昭和10)年	元町29-15	ペンキ塗りボランティア隊(北海道大学大学院生・学生・教員+函館高専生徒・教員)	元町倶楽部、一般市民
18	"	小池田家所有建物	1934(昭和9)年	元町28-14	"	"
19	2001年	瀬戸家住宅	1950(昭和25)年頃	青柳町15-15	ペンキ塗りボランティア隊(北海道大学大学院生・学生・教員+函館高専生徒・教員+函館工業高校生徒・教員)	北海道教育大学函館校学生、元町倶楽部、一般市民
20	"	NPO法人ファミリーサポーターさわやか事務所	1934(昭和9)年	栄町9-6	"	"
21	2002年	加藤家住宅	1913(大正2)年 —No.1.1990年塗り替え—	大町8-21	ペンキ塗りボランティア隊(北海道大学大学院生・学生・教員+函館高専生徒・教員)	元町倶楽部、一般市民、立命館大学大学院生・学生
22	"	高田木材店・他	1917(大正6)年	弥生町8-14	"	"
23	2003年	及能(株)所有建物	不詳	元町24-17	ペンキ塗りボランティア隊(北海道大学大学院生・学生・教員+北海道教育大学函館校学生+函館高専生徒+函館工業高校生徒)	元町倶楽部、一般市民、札幌市民、慶応大学学生、早稲田大学大学院生
24	"	平沢家所有建物	1937(昭和12)年 —No.8.1996年塗り替え—	元町24-18	"	"
25	2004年	大野家所有建物	1921(大正10)年	元町31-27	ペンキ塗りボランティア隊(北海道大学大学院生・学生・教員+北海道教育大学函館校学生・教員+函館工業高校生徒)	元町倶楽部、一般市民、札幌市民、北海道教育大学旭川校学生、東京大学大学院生、新潟大学教員
26	"	今井家住宅	1921(大正10)年	元町14-17	"	"
27	2005年	MOSSTREES	1907(明治40)年 —No.4.1995年塗り替え—	大町9-15	ペンキ塗りボランティア隊(北海道大学大学院生・学生・教員+北海道教育大学函館校学生・教員+函館高専生徒+函館工業高校生徒)	元町倶楽部、一般市民、札幌市民
28	"	奥谷畳店	1927(昭和2)年	弁天町7-6	"	"

・網かけの建物は、1988、89年に、時層色環調査をおこなった建物を示す。



赤丸・白抜き数字と青丸・白抜き数字 (No. 1～28) が市民によるペンキ塗り建物を示す。このうち赤丸・白抜き数字の建物は1988、89年に時層色環調査をおこなっている。ただし、No. 19、20の2棟はこの地図の範囲外にある。太線で囲まれた区域が歴史的景観地域、細線で囲まれた区域は元町末広町伝統的建造物群保存地区、破線は町界を示す。なお、黒丸・白抜き数字は時層色環調査対象建物82棟 (No. 1～82) を示す。

図7-1 市民によるペンキ塗りボランティア活動の対象建物28棟の分布

ていた。この時期は、活動の初動期に位置づけられる。1994年以降、公益信託函館色彩まちづくり基金（函館からトラスト）から助成金を得て活動がおこなわれようになり、同時にまた、参加者の数も増え、地元の小学生や高校生が参加するなど、その構成も広がりを見せはじめた。この1994年から1997年までは展開期の第Ⅰステージとして位置づけられる。1998年には参加者が44人と当初の4倍に増え、そのうち地元の高校生が7割余を占め、活動資金も増額されるなど、活動がより一層展開した。翌1999年

表 7-2 市民によるペンキ塗りボランティア活動の参加者の属性・人数、資金、展開状況

活動年	参 加 者 の 属 性								合計・人 (%)	活動資金	活動の 展開状況
	函 館						札幌 大学生他	道外			
	市民 団体	大学生 他	高専 生他	高校 生他	小学生	一般 市民					
1990年	7(64)	—	—	—	—	—	4(36)	—	11(100)	不明	初動期
1993年	4(36)	—	—	—	—	—	7(64)	—	11(100)	不明	
1994年	4(20)	—	—	—	5(25)	—	11(55)	—	20(100)	公益信託函館色彩まち づくり基金より14万円	展開期Ⅰ
1995年	5(22)	—	—	5(22)	—	—	12(52)	1(4)	23(100)	同上より16万円	
1996年	2(6)	—	—	21(58)	—	—	13(36)	—	36(100)	同上より20万円	
1997年	1(3)	—	—	16(48)	—	—	16(48)	—	33(100)	同上より20万円	
1998年	1(2)	—	—	32(73)	—	—	11(25)	—	44(100)	同上より30万円	展開期Ⅱ
1999年	1(3)	—	5(13)	14(35)	2(5)	7(18)	10(25)	1(3)	40(100)	同上より35万円	
2000年	2(7)	1(4)	2(7)	—	2(7)	6(22)	14(52)	—	27(100)	同上より30万円	
2001年	2(5)	5(14)	11(30)	6(16)	—	4(11)	9(24)	—	37(100)	同上より30万円	
	4(6)	7(11)	16(25)	14(22)	—	6(9)	18(28)	—	65(100)		
2002年	3(10)	—	7(23)	—	—	5(17)	11(37)	4(13)	30(100)	同上より25万円	
	5(10)	—	9(19)	—	—	8(17)	22(46)	4(8)	48(100)		
2003年	—	8(15)	4(8)	7(13)	13(25)	3(6)	15(29)	2(4)	52(100)	同上より30万円	
	—	10(14)	4(6)	11(16)	13(19)	6(9)	22(32)	3(4)	69(100)		
2004年	2(5)	14(32)	—	3(7)	—	2(5)	20(45)	3(7)	44(100)	同上より30万円	
	3(5)	17(26)	—	3(5)	—	2(3)	35(54)	5(8)	65(100)		
2005年	2(3)	31(48)	5(8)	10(16)	—	2(3)	13(20)	1(2)	64(100)	同上より40万円	
	2(2)	38(39)	10(10)	19(19)	—	2(2)	25(26)	2(2)	98(100)		
合計・人	36(8)	59(13)	34(7)	114(24)	22(5)	29(6)	166(35)	12(3)	472(100)		

・数値は活動に参加した人の数を示す。(活動がおこなわれた2日間の延べ人数ではない)

・カッコ内の数値は、活動年ごとの合計・人を100とした割合(%)を示す。

・2001年から2005年までの下段の数値は、活動がおこなわれた2日間の延べ人数を示す。

したがって、同一人物が2日間活動をおこなった場合、2とカウントしている。

・1990年から2000年までは、活動がおこなわれた2日間の延べ人数のデータがない。

・網かけは、各活動年において最も参加者数の多いものを示す。

には地元の高専生や一般市民が、2000年からは地元の大学生らが参加するようになるなど、2004年までは展開期の第Ⅱステージとして位置づけられる。2005年からは参加者がさらに64人と増え、2日間の延べ人数では98人にのぼり、また参加者の構成が地元の人たちが約8割を占めて活動の中心を担うようになり、展開期の第Ⅲステージを迎えつつあるといえる。

しかし一方では、ペンキ塗り建物28件のうち、とくに弥生町と大町で取り壊し・建替が8件、下見板からサイディングへの張り替えが2件みられ、建物の老朽化とその再生の課題も浮き彫りになっている。

7-2-2 活動の目的と内容

市民によるペンキ塗りボランティア活動は、初動期の1990年では「街の色彩探求の活動をさらに多くの人に広げる機会をつくる」ことを目的とする「街の色彩・ワークショップ 函館'90」というイベントの一環としておこなわれ、下見板のペンキ色彩のこすりだしを体験する“時層色環”こすりだしツアー、町家ぬり絵コンクール、町並みシンポジウムとともに、4つのプログラムの中

のひとつの事業として位置づけられている²⁾(表7-3)。また1993年では、公益信託函館色彩まちづくり基金設定を市民に知らせることを目的とする記念イベント「函館からムーブメントウィーク」の一環として、シンポジウム、歴史的建造物のリニューアル提案と町並みウォッチングとともにペンキ塗り活動がおこなわれている³⁾。このように初動期におけるペンキ塗りボランティア活動は、街の色彩探求や公益信託函館色彩まちづくり基金設定といった、町並み色彩にかかわる包括的な活動をより広く展開することを目的とするイベントの一つの事業として位置づけられていた。

函館からトラストから助成金を得て、単独の事業としておこな

2) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩文化の研究―下見板のペンキ色彩の復元的考察を通して―』(トヨタ財団助成研究報告書、C-020、1991年12月)のpp169-175を参照。

3) 函館からトラスト・ニュースレター「から」(函館からトラスト事務局発行)第2号(全4頁、1993年6月)および第3号(全4頁、1993年7月)を参照。

表7-3 市民によるペンキ塗りボランティア活動の目的と内容

活動年	ペンキ塗り建物名称	活動の目的	活動の内容
1990年	加藤家住宅	街の色彩探求の活動をさらに多くの人に広げる機会をつくる	「街の色彩・ワークショップ 函館'90」の一環として町家ペンキ塗り替え実験をおこなう一他に、「時層色環」こすりだしツアー、町家ぬり絵コンクール、町並みシンポジウム
1993年	小森商店	公益信託函館色彩まちづくり基金設定を市民に知らせる	公益信託函館色彩まちづくり基金設定記念イベントの、「函館からムーブメントウィーク」の一環として町屋ペンキ塗り替えをおこなう一他に、シンポジウム、歴史的建造物のリニューアル提案と町並みウォッチング
1994年	浜田家住宅	まちなみに働きかける、市民や観光客に歴史的建築物をアピールする	3軒連続して建ち並ぶ洋風木造下見板建築のうちの1軒を塗り替える一軒は最近塗り替えられ、もう1軒は来年に市の補助金をもらって改修予定
1995年	PEACEFUL PLACE+旧三洋無線電機商会、他2棟	函館市西部地区の町並みの基調をなす歴史的な下見板建築のペンキ塗り替えを、地域住民、市民、賛同者らの手で自主的に起こすことにより、ささやかではあるが歴史的景観の改善をはかる。 一個々の小さな化粧直しにすぎないが、それを住民らが自らの手で起こすことにより、地域景観が容易に改善できる	①数軒の建物がつらなるようにペンキ塗り替えをおこない、町並みが実際目に見えて変わるような、効果的な事業を ②伝統的建造物などの指定物件以外で、行政からの援助が期待できないものを対象に ③地元の学生との協働を
1996年	MGMステーション・他、他1棟	老朽化が進むまちなみを元気づける	2軒の町家のペンキ塗り替えをおこなう
1997年	函館どっく(株)社宅、他2棟	老朽化が進む町並みを元気づける	連続する3軒のペンキ塗りをおこない、町並みとしての改善が目に見えるかたちであられる「3軒効果」をねらう
1998年	函館どっく(株)社宅-1、他2棟	老朽化が進む町並みを元気づける、「3軒効果」の試みをより確かなものとしていく	連続する3軒のペンキ塗りをおこない、町並みとしての改善が目に見えるかたちであられる「3軒効果」をねらう
1999年	小笠原家住宅、他1棟	老朽化が進む町並みを元気づける、「3軒効果」の試みをより確かなものとしていく	連続する建物のペンキ塗りをおこない、町並みとしての改善が目に見えるかたちであられる「3軒効果」をねらう
2000年	手塚家住宅、他1棟	老朽化が進む町並みを元気づける、「3軒効果」の試みをより確かなものとしていく	連続する建物のペンキ塗りをおこない、町並みとしての改善が目に見えるかたちであられる「3軒効果」をねらう
2001年	瀬戸家住宅、他1棟	老朽化が進む町並みを元気づける	2軒の町家のペンキ塗り替えをおこなう
2002年	加藤家住宅、他1棟	老朽化が進む町並みを元気づける、市民とのより一層の交流をはかる	2軒の町家のペンキ塗り替えをおこなう一見下見板張り建物が数軒連続しているところがなくなってきた
2003年	及能(株)所有建物、他1棟	老朽化が進む町並みの再生をはかる、市民とのさらなる交流をはかる	「3軒効果」を発揮させるため隣接する物件のペンキ塗りをおこなう、活動の歩みを記録に残す、他の市民まちづくり活動とのコラボレーションをおこなう
2004年	大野家所有建物、他1棟	老朽化が進む町並みを元気づける	伝統的建造物、町家各1軒のペンキ塗り替えをおこなう
2005年	MOSSTREES、他1棟	老朽化が進む町並みを元気づける	2軒の店舗の塗り替えをおこなう

- 4)、5) ペンキ塗り替え支援・札幌勝手連（代表：江國智洋）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：歴史的な下見板建築のペンキ塗り替え』（全5頁、1995年2月）を参照。

- 6) ペンキ塗り替え支援・札幌勝手連（代表：前田芳伸）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：歴史的な下見板建築のペンキ塗り替え』（全30頁、1996年1月）を参照。
7) ペンキ塗りボランティア隊（代表：松本渉）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：下見板張り町家ペンキ塗りワークショップ「3軒効果」の町並みづくり』（全29頁、平成10（1998）年1月）を参照。
8)、9) ペンキ塗り替え支援・札幌勝手連（代表：前田芳伸）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：歴史的な下見板建築のペンキ塗り替え』（全30頁、1996年1月）を参照。

- 10) 函館からトラスト・ニュースレター「から」（函館からトラスト事務局発行）第20号（全8頁、2002年12月）を参照。

われるようになった1994年では、「まちなみに働きかける」、「市民や観光客に歴史的建築物をアピールする」ことが目的に掲げられている⁴⁾。その具体的な内容として、「ある1つの通りの下見板建築群がまちにきれいな色彩を放つ」ように、最近改修が施されてきれいに塗装された建物と、次年度には函館市の補助を得て改修、ペンキ塗装の予定のある隣の建物が並ぶ通りの、もう1軒隣の建物を活動対象とし、ペンキ塗装をおこなうことにより、「3軒である効果が期待できる」としている⁵⁾。初動期にくらべて目的と方法が明確化、具体化され、1軒の建物のペンキ塗装が、隣り合う他の2軒との相乗効果を生み出すことにより、町並みの改善効果を高めることが考えられている。

これは以降も継承され、翌1995年では、「函館市西部地区の町並みの基調をなす歴史的な下見板建築のペンキ塗り替えを、地域住民、市民、賛同者らの手で自主的におこなうことにより、ささやかではあるが歴史的景観の改善をはかること」を目的に、「数軒の建物がつらなるようにペンキ塗り替えをおこない、町並みが実際目に見えて変わるような、効果的な事業を」おこなう、としている⁶⁾。1997年からは、「3軒効果」の町並みづくりをテーマに掲げ、連続する3軒のペンキ塗りをおこない、町並みとしての改善が目に見えるかたちであられる「3軒効果」をねらう、としている⁷⁾。

また、「伝統的建造物などの指定物件以外で、行政からの援助が期待できないものを対象に」するとし⁸⁾、町並み保全における市行政との補完的な役割が意識されていることがよみとれる。そして、「個々の小さな化粧直しにすぎないが、それを住民らが自らの手でおこなうことにより、地域景観が容易に改善できる」としている⁹⁾。この背景には、1990年のNo.1. 加藤家住宅の市民によるペンキ塗りボランティア活動が、建物所有者の住み続けたい思いにはたらきかけ、バブル期の建物売却、マンション建設の話を断念させ、さらに、市民による活動後に、所有者によって屋根のペンキが塗り替えられたことがあげられる¹⁰⁾（写真7-2）。その色彩は、塗り替え前は赤茶系であったが、市民による活動で用いられた1階下屋庇のこげ茶色に統一されている。同様の事例は、1994年のNo.3. 渡田家住宅における市民によるペンキ塗りボランティア活動にもみられる。活動後に建物所有者によって屋根と1階下屋庇のトタンの葺き替えがおこなわれ、その色は活動で用いられた柱型等の茶系に統一されている（写真7-3）。

このように市民によるペンキ塗りボランティア活動が建物所有



ペンキ塗り替え前の加藤家住宅ー外壁・軒飾りパネル：アイボリー、柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り：灰、1階外壁木部・下屋庇・1階外壁塗部：白、であった。(1989年7月撮影)



市民によるペンキ塗りボランティア活動直後の加藤家住宅ー外壁・軒飾りパネル：アイボリー、柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り：暗緑、1階外壁木部・下屋庇：こげ茶、1階外壁塗部：白に塗り替えられた。(1990年8月撮影)



ペンキ塗りの後に、建物所有者が屋根のペンキを塗り替えた。それまでは赤茶系の色であったが、1階下屋庇のこげ茶と同じ色にした。(1999年8月撮影)

写真7ー2 市民によるペンキ塗りボランティア活動（1990年）後に、建物所有者が自主的にメンテナンスをおこなった事例1
ー No. 1. 加藤家住宅



ペンキ塗り替え前の洪田家住宅ー外壁：青灰、柱型・窓枠：濃緑であったが、ペンキはほとんど剥げ落ちていた。(1989年7月撮影)



市民によるペンキ塗りボランティア活動直後の洪田家住宅ー外壁：黄、柱型・軒蛇腹：こげ茶、窓枠：白に塗り替えられた。(1994年8月撮影)



ペンキ塗りの後に、建物所有者が屋根と1階下屋庇を葺き替え、柱型等と同じ茶系の色でペンキ塗装をおこなった。(1999年8月撮影)

写真7ー3 市民によるペンキ塗りボランティア活動（1994年）後に、建物所有者が自主的にメンテナンスをおこなった事例2
ー No. 3. 洪田家住宅

者にはたらきかけて、建物の消失を未然に防ぐと同時に、所有者の自主的なメンテナンスや調和ある色彩選択を引き起こし、連鎖的な町並み改善へと展開しているのである。1996年からの「老朽化が進む町並みを元気づける」という活動目的には、古い建物がきれいに塗り替えられ、物理的、視覚的に町並みが良くなることに加えて、そのことが所有者の建物や町並みに対する愛着心を鼓舞し、所有者自らが町並み改善に取り組むことを期待しているように思われる。

7-2-3 ペンキ塗り対象建物の選定プロセス

市民によるペンキ塗りボランティア活動において、その対象建物の選定プロセスに特徴がある（表 7-4）。一つは、活動主体が西部地区の現地を巡回する、タウンウォッチングをおこなってペンキ塗り対象建物を選んでいることである。1994年以降、12回中7回でこの方法がとられている。とくに1995年には、1988、89年のこすり出し調査対象建物82棟が位置する通り、街区を中心に、下見板張りの建物で壁が汚れていたり、ペンキがはげ落ちたりして、塗り替えの時期にきているものの分布調査を実施している。その結果、54棟が候補にあげられ、まとめて建ち並ぶ数軒が選ばれ、そのうち建物所有者の承諾が得られた3軒に決定する、という方法がとられている。その後は、3軒以上の下見板張り町家が建ち並んでいるところを、弥生町や元町といった範囲をより限定してタウンウォッチングしている時もある。この方法は、前章であきらかにした、塗装業者が地区を巡回して、ペンキが剥げ落ちたり傷んだりしている建物を見つけ、その所有者に対してペンキの補修を助言することをおこなっていたことと類似している。かつての塗装業者と同様に、ペンキ塗りボランティア活動の主体が、町並みの観察者、管理者（タウンウォッチャー）としての役割を担っているといえる。

もう一つの特徴は、ペンキ塗り対象建物の募集ちらしを作成し、新聞などのマスコミを通じて、広く市民に公募をおこなっていることである。この方法は2000年に初めて採用され、以降毎年継続しておこなわれている。その契機となったのは、前年の1999年の活動において、「ペンキを塗る物件の数が減ってきているということも確かである。対象建築物を探しても、下見板張りの建物が少なくなり、現存している建物でも老朽化が進み、近日解体予定のものが多くあった」ことである¹¹⁾。塗り替え物件の確保が課題となり、それに応える新たな試みとして公募がおこなわれた

11) ペンキ塗りボランティア隊（代表：耶雲恵）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：下見板張り町家ペンキ塗りワークショップ』（全22頁、2000年1月）を参照。

表 7-4 ペンキ塗り対象建物の選定プロセス

活動年	ペンキ塗り建物名称	対象建物の選定プロセス
1990年	加藤家住宅	1989年こすり出し調査時の建物所有者へのヒアリングにおいて、マンション業者による不動産買取の話に迷っている所有者を元気づけるため
1993年	小森商店	公益信託函館色彩まちづくり基金設定記念イベントにふさわしい建物として、現存する最も古い木造下見板張り町家を選ぶ
1994年	浜田家住宅	タウンウォッチングー1988、89年のこすり出し調査対象建物をベースとして、3軒並んでいる通りを選ぶ
1995年	PEACEFUL PLACE+旧三洋無線電機商会、他2棟	タウンウォッチングー1988、89年のこすり出し調査対象建物が位置する通り、街区を中心に、下見板張りの建物で壁が汚れていたり、ペンキがはげ落ちたりして、塗り替えの時期にきているものの分布調査を実施。54棟を候補にあげ、まとめて並ぶ数軒を選び、そのうち建物所有者の承諾が得られた3軒に決定
1996年	MGMステーション・他、他1棟	地区住民で市民団体の代表者（MGMの太田氏）と相談し、塗り替え後の影響、効果の大きさを考慮し、観光客の多い元町を対象エリアとし、ハリストス正教会の近くにある建物を選ぶ
1997年	函館どつく(株)社宅、他2棟	3軒以上の下見板張り町家が建ち並んでいるところとして、弥生町周辺をタウンウォッチングして選ぶ
1998年	函館どつく(株)社宅-1、他2棟	3軒以上の下見板張り町家が建ち並んでいるところとして、弥生町周辺をタウンウォッチングして選ぶ
1999年	小笠原家住宅、他1棟	3軒以上の下見板張り町家が建ち並んでいるところとして、弥生町および元町周辺をタウンウォッチングして選ぶ
2000年	手塚家住宅、他1棟	ちらしを作成し、新聞などのマスコミを通じて公募。応募8軒の中から西部地区に立地、下見板張りの家屋、同じ街路沿いで建ち並ぶもの、を優先して2軒を選ぶ
2001年	瀬戸家住宅、他1棟	公募による1軒と函館からトラスト事務局の助言・指導による1軒の計2軒を選ぶ
2002年	加藤家住宅、他1棟	公募をしたが0軒。タウンウォッチング等により、西部地区にある下見板張りの家屋を選定基準に6軒を候補とし、建物所有者との交渉の結果、2軒を選ぶ
2003年	及能(株)所有建物、他1棟	公募をしたが0軒。空家再生活動との連携を図るべく、空家活用先の事例1軒を選び、それに隣接するもう1軒を選ぶ
2004年	大野家所有建物、他1棟	公募をしたが0軒。タウンウォッチングにより、西部地区にある下見板張りの家屋を選定基準に8軒を候補とし、建物所有者との交渉の結果、2軒を選ぶ
2005年	MOSSTREES、他1棟	公募による3軒の中から2軒を選ぶ

のである。その結果、「良好な物件の確保が出来たと同時にペンキ塗りの対象になりうる家に住んでいる人たちの注目を集めることが出来る」¹²⁾ など、町並み色彩形成への住民の関心を高め、自主的なかわりを促す一つの方法として注目される。ただし一方では、公募をしても、市民からの応募が1軒もないことが2002年から2004年の3年間続くなど、市民への広報上の課題も浮き彫りになった。

7-2-4 塗り替える色の決定プロセス

12) ペンキ塗りボランティア隊（代表：山下義行）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：3軒効果町並改善 part4ー町家ペンキ塗りワークショップー』（全19頁、2001年2月）を参照。

ペンキ塗り対象建物の選定後に、いくつかの段階的なプロセスを経て、塗り替える色の検討、決定がおこなわれている。まず最初に、色彩検討の参考にするために、ペンキこすり出し調査、時層色環の採集がおこなわれ、オリジナルの色や歴史的な色が分析されている。次に、どのような色に塗り替えたらいいかを検討するために、コンピューター・グラフィックによるシミュレーションがおこなわれている（以下、「CG シミュレーション」）。このCG シミュレーションをおこなうにあたり、目標となる方針が掲げられ、それにもとづく数案のシミュレーション・モデルが作成されている。この色彩検討の具体的内容をみると（表 7-5 の 1、2）、建物との関係を考慮して色を検討している「建物価値型」と、地区の周辺環境との関係を考慮して色を検討している「町並み型」の、大きく 2 つのタイプがある。

建物価値型では、①外壁の基調色と柱型・窓枠等の強調色を異なる色で塗り分けてメリハリをつけ、建物意匠の色彩効果を考慮したもの（23 例）、②現状の色を継承し、建物の時間的連続性を考慮したもの（9 例）、③創建時の色を採用し、オリジナルの色を復原したもの（6 例）、④過去に使われてきた歴史的な色を採用し、建物の時間的連続性を考慮したもの（3 例）、⑤和風の様式との調和をはかるよう、建築様式を考慮したもの（1 例）、⑥屋根の色との調和を考慮したもの（1 例）、の 6 つがみられた。

町並み型では、①戦後、地区全体に流行し、現在も特徴的な色である緑系、ピンク系との調和を考慮したもの、またはその色を採用したもの（10 例）、②軒を接して建ち並ぶ 2、3 軒の建物を同時に塗る場合には、「歩きながら眺めると色が徐々に変化していくように」、あるいは、「色彩によるリズム感が生まれるように」など、連続する建物の物語性、関係性を考慮したもの（6 例）、③隣家の色や周囲の建物の色を参考にしたり、それらとの対比効果を高めたりするなど、周囲の建物との関係を考慮したもの（5 例）、④元気の出る、新しい色を創造したもの（5 例）、⑤小森商店、旧函館区公会堂、ハリストス正教会や近隣の伝統的建造物などの、地区の代表的な建物の色を参考にし、それを採用したもの（3 例）、⑥近くに港や海があり、その場所のイメージを表現しようとしたものの、あるいはその関係を考慮したもの（3 例）、⑦かつてのシンボリック建物であった旧函館文化服装学院の色を採用し、消失した代表的建物の記憶を継承しようとしたもの（1 例）、⑧昭和の初めの頃の濃い色や戦後流行った色など、地区の歴史的な色を参考にし、それを採用したもの（1 例）、⑨函館山の緑に映える色を採用する

表7-5の1 塗り替える色の決定プロセスにおける色彩検討の具体的内容とそのタイプその1

活動年	No.	建物名称	色彩検討の具体的内容 ーCG色彩シミュレーションの方針・内容	色彩検討のタイプ
1990年	1	加藤家住宅	不明（6つのモデル案を作成）	不明
1993年	2	小森商店	不明	不明
1994年	3	洪田家住宅	①創建時(1909年)の色を採用 ②現状の色を継承 ③外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ④現状の地区の代表的な建物（小森商店、旧函館区公会堂）の色を参考 ⑤地区の歴史的な色（昭和の初めの頃の濃い色、戦後流行った色）を参考 （6つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・オリジナルの色を復原 ・建物の時間的連続性を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・地区の代表的建物の色を参考、採用 ・地区の歴史的な色を参考、採用
1995年	4	PEACEFUL PLACE+旧三 洋無線電機商 会	①現状の色を継承 ②外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ③創建時(1907年)の色を採用 ④港の水辺をイメージし、かつ元気の出る、新しい色を採用 （6つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・建物の時間的連続性を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ・オリジナルの色を復原 ●町並み型 ・港の場所のイメージを表現
〃	5	長谷川理容院	①現状の色を継承 ②創建時(1909年)の色を採用 ③元気の出る、新しい色を採用 （4つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・建物の時間的連続性を考慮 ・オリジナルの色を復原 ●町並み型 ・新しい色を創造
〃	6	三浦理美容院 車庫	①現状の色を継承 ②外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け （4つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・建物の時間的連続性を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮
1996年	7	MGMステー ション・他	①創建時(1907年)の色を採用 ②外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ③すぐ近くの地区の代表的な建物（ハリストス正教会）の色を参考 ④新しい色を採用 （4つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・オリジナルの色を復原 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・地区の代表的建物の色を参考、採用 ・新しい色を創造
〃	8	窪田家住宅 ・他	①外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ②新しい色を採用 （3つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・新しい色を創造
1997年	9	函館どっく(株) 社宅	①外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ②3軒それぞれの色に物語性が必要、歩きながら眺めると色が徐々に変化していくように ③周辺の建物の外壁に調和するよう同色系を採用 （1つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・連続する3軒の物語性、関係性を考慮 ・周囲の建物との関係を考慮
〃	10	旧おぐら 理容院	①、②は同上 ③外壁のピンク系の色は西部地区の特徴的な色の一つであり、これを基本とする （1つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・連続する3軒の物語性、関係性を考慮 ・地区全体の流行色を採用
〃	11	たこやきみっ ちゃん・他	同上 （1つのモデル案を作成）	同上
1998年	12	函館どっく(株) 社宅-1	①外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ②切妻屋根が3軒並んで美しい町並みを形成していることを生かし、ペンキの色彩によって建物1軒1軒が個性を持ち、町並みとしては色彩によるリズム感が生まれるように ③外壁に異なる原色を用い、3軒の柱型・窓枠等を1色に統一 ④最も海側に位置し、外壁は函館港の海の色に調和する色を （1つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・連続する3軒の物語性、関係性を考慮 ・周囲の建物との関係を考慮 ・港の海の色との関係を考慮
〃	13	函館どっく(株) 社宅-2	①、②、③は同上 ④3軒の中央に位置し、外壁は両隣に対して負けない個性を示す色を （1つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・連続する3軒の物語性、関係性を考慮 ・周囲の建物との関係を考慮
〃	14	函館どっく(株) 社宅-3	①、②、③は同上 ④最も山側に位置し、外壁は函館山の緑に映える色を （1つのモデル案を作成）	●建物価値型 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・連続する3軒の物語性、関係性を考慮 ・周囲の建物との関係を考慮 ・函館山の緑との関係を考慮

表 7-5 の 2 塗り替える色の決定プロセスにおける色彩検討の具体的内容とそのタイプその 2

活動年	No.	建物名称	色彩検討の具体的内容 ーCG色彩シミュレーションの方針・内容	色彩検討のタイプ
1999年	15	小笠原家住宅	①外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ②西部地区の特徴的な色である緑系、ピンク系と調和のとれた色 ③連続する2軒のバランスのとれた色 (3つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・地区全体の流行色との調和 ・連続する2軒の物語性、関係性を考慮
"	16	川又家・橋田家住宅	同上 (3つのモデル案を作成)	同上
2000年	17	手塚家住宅	①現状の色を継承 ②外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ③西部地区の特徴的な色である緑系、ピンク系と調和のとれた色 (2つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・建物の時間的連続性を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・地区全体の流行色との調和
"	18	小池田家所有建物	同上 (2つのモデル案を作成)	同上
2001年	19	瀬戸家住宅	①現状の色を継承 ②外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ③西部地区の特徴的な色である緑系、ピンク系と調和のとれた色 (3つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・建物の時間的連続性を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・地区全体の流行色との調和
"	20	NPO法人ファミリーサポーターさわやか事務所	同上 (3つのモデル案を作成)	同上
2002年	21	加藤家住宅	①歴史的に(過去3回)使われてきた色を採用 ②外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ③近くの港・海のイメージを表現するもの (2つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・建物の時間的連続性を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・港の場所のイメージを表現
"	22	高田木材店・他	①現状の色を継承 ②外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ③西部地区の特徴的な色である緑系と調和のとれた色 (2つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・建物の時間的連続性を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・地区全体の流行色との調和
2003年	23	及能(株)所有建物	①建物自体の建築様式(和風)との調和 ②外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ③周囲の環境との調和 (2つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・建築様式を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・周囲の建物との関係を考慮
"	24	平沢家所有建物	①隣接する建物との対比効果を高める ②新しい色を採用 (2つのモデル案を作成)	●町並み型 ・周囲の建物との関係を考慮 ・新しい色を創造
2004年	25	大野家所有建物	①創建時(1921年)の色を採用 ②同じ大三坂の町並みのかつてのシンボリック建物(旧函館文化服装学院)の色を参考 ③現状の地区の代表的な建物(同じ大三坂沿いの伝統的建造物)の色を参考 (5つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・オリジナルの色を復原 ●町並み型 ・消失した代表的建物の記憶を継承 ・地区の代表的建物の色を参考、採用
"	26	今井家住宅	①外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ②屋根の色との調和 ③隣家の色を参考 ④庭の樹木の緑に映える色 (5つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ・建物の外壁と屋根の調和を考慮 ●町並み型 ・周囲の建物との関係を考慮 ・樹木の緑との対比効果
2005年	27	MOSSTREES	①歴史的に使われてきた色を採用 ②外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ③建物所有者が希望する、西部地区の特徴的な色である緑系の色 (5つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・建物の時間的連続性を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●町並み型 ・地区全体の流行色を採用
"	28	奥谷量店	①創建時(1927年)の色を採用 ②歴史的に使われてきた色を採用 ③現状の色を継承 ④外壁と柱型・窓枠等のメリハリのある塗り分け ⑤建物所有者が希望する、他の建物の色 (6つのモデル案を作成)	●建物価値型 ・オリジナルの色を復原 ・建物の時間的連続性を考慮 ・建物意匠の色彩効果を考慮 ●個人恣意型 ・個人の思いつき、気分で選択

など、函館山の緑との関係を考慮したもの（1例）、の9つがみられた。

これらの色彩検討のタイプを、前の第6章であきらかにした住民の色彩選択の決定要因のタイプ¹³⁾とくらべてみると、多くの点で共通性がみられる。建物価値型では①の建物意匠の色彩効果を考慮、②と④の建物の時間的連続性を考慮、⑥屋根の色との調和を考慮、の4つが、町並み型では①地区全体の流行色を採用、②周囲の建物との関係を考慮、⑤地区の代表的建物の色を参考、採用、⑥港の場所のイメージを表現、の4つが共通している。町並み色彩形成のしくみにみられた、これらの住民の色彩選択決定要因が、市民によるペンキ塗りボランティア活動の、塗り替える色の決定プロセスにおける色彩検討の段階で継承されているといえる。

13) 本論文第6章の表6-6（138頁）を参照。

一方、住民の色彩選択決定要因のタイプにはみられなかったものとして、建物価値型の③オリジナルの色を復原、⑤建築様式を考慮、と、町並み型の③連続する2軒または3軒の建物の物語性、関係性を考慮、④新しい色を創造、⑦消失した代表的建物の記憶を継承、⑧地区の歴史的な色を参考、採用、⑨函館山の緑との関係を考慮、があげられる。オリジナルの色の復原は、旧函館区公会堂やハリストス正教会といった重要文化財で実際におこなわれているが、こういう指定文化財以外ではまずみられない。ペンキ層のこすり出し調査とそれに基づく時層色環の分析という、簡便な調査、分析手法が開発されてはじめて可能となったもので、函館独特のものである。町並み型の5つを含むこれらは、前章の住民の色彩選択決定要因の範囲をこえて、地区の空間、時間や歴史との関係を広げるもので、町並み色彩形成のしくみにおいて、新たな展開が生成されているといえる。

なお、住民の色彩選択決定要因のタイプの一つである建物の用途や家族のイメージを表現したものは、色彩検討のタイプにはみられない。このタイプは住民の生活と密接に結びついたものである。これを住民からどのように引き出し、色彩検討に取り込むかは、市民によるペンキ塗りボランティア活動の課題の一つである。

以上のような色彩検討をおこなった結果、最終的に決定された塗り替える色を示したのが表7-6の1、2である。これによると、塗り替える色の決定案は、第一に、1997年のNo.11. たこやきみっちゃん・他のように（写真7-4、7-5）、連続する3軒の物語性、関係性を考慮し（町並み型）、西部地区の特徴的な色であるピンク系を採用し、地区全体の流行色との調和をはかり（町並み型）、2

表7-6の1 塗り替える色の決定案と塗り替え前後の色の具体的内容—その1

活動年	No.	建物名称	塗り替える色の決定案	塗り替え後の色	塗り替え前の色
1990年	1	加藤家住宅	外壁は現状の色を継承、塗り分けの色は地区の特徴的な緑系を、1階部分は和風様式に調和する色を採用	外壁・軒飾りパネル：アイボリー 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り：暗緑 1階外壁木部・下屋庇：こげ茶 1階外壁塗部：白	外壁・軒飾りパネル：アイボリー 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り：灰 1階外壁木部・下屋庇・1階外壁塗部：白
1993年	2	小森商店	創建時(1901年)の色を採用し、同系の2色に塗り分け	外壁：明るい黄緑 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り・軒飾りパネル・下屋庇：暗い黄緑	外壁等：ピンクー色 下屋庇：青
1994年	3	洪田家住宅	地区の歴史的な色(昭和の初めの頃の濃い色)を参考にし、3色に塗り分け	外壁：黄 柱型・軒蛇腹・下屋庇：こげ茶 窓枠：白	外壁：青灰 柱型・窓枠：濃緑
1995年	4	PEACEFUL PLACE+旧三洋無線電機商会	6つのモデル案はすべて所有者に拒否された。所有者が希望した、地区の特徴的な緑系の色を採用し、同系の2色に塗り分け	外壁・窓枠・軒飾りパネル：薄緑 柱型・ポーチの枠・軒蛇腹・軒持送り：濃緑	外壁・窓枠・柱型：薄水色 ポーチの枠・軒蛇腹・軒持送り・軒飾りパネル：赤茶色
〃	5	長谷川理容院	元気の出る、新しい色を採用し、2色に塗り分け	外壁・小庇：臙脂 柱型・窓枠・軒蛇腹：白	外壁：薄緑 柱型・窓枠・軒蛇腹：ピンク 小庇：赤
〃	6	三浦理美容院車庫	現状の色を継承し、3色に塗り分け	外壁・軒飾りパネル：白 柱型・窓枠・軒蛇腹：臙脂 軒持送り：暗緑	外壁：白とピンク
1996年	7	MGMステーション・他	すぐ近くの地区の代表的な建物(ハリストス正教会)の色を参考にし、4色に塗り分け	外壁：薄緑 柱型・窓枠：濃緑 外壁塗部：白 下屋庇：赤	外壁・柱型：暗青灰 玄関枠・格子窓：クリーム 窓枠：こげ茶 下屋庇：赤
〃	8	窪田家住宅・他	新しい色を採用し、3色に塗り分け	外壁：クリーム 柱型・窓枠・下屋庇：濃緑 下屋庇の小口：赤	外壁等：防腐剤あるいは未塗装
1997年	9	函館どっく(株)社宅	連続する3軒の物語性、関係性を考慮し、周辺の建物の外壁に調和するよう同系色を採用し、2色に塗り分け	外壁：クリーム 柱型・窓枠・下屋庇：うす茶	外壁・柱型等：防腐剤あるいは未塗装 下屋庇：青
〃	10	旧おぐら理容院	連続する3軒の物語性、関係性を考慮し、地区の特徴的な色であるピンク系を採用し、2色に塗り分け	外壁：薄ピンク 柱型・窓枠・軒蛇腹：こげ茶	外壁：ピンク 柱型・窓枠・軒蛇腹：茶 下屋庇：緑
〃	11	たこやきみっちゃん・他	連続する3軒の物語性、関係性を考慮し、地区の特徴的な色であるピンク系を採用し、2色に塗り分け	外壁：濃ピンク 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り・軒飾りパネル・菌形飾り：白	ピンクー色
1998年	12	函館どっく(株)社宅-1	連続する3軒の物語性、関係性を考慮し、港の海の色に調和する色を採用し、2色に塗り分け。塗り分けの色は3軒統一	外壁：灰みの青 柱型・窓枠等：白	外壁等：防腐剤あるいは未塗装
〃	13	函館どっく(株)社宅-2	連続する3軒の物語性、関係性を考慮し、両隣に負けない個性を示す色を採用し、2色に塗り分け。塗り分けの色は3軒統一	外壁：赤茶 柱型・窓枠等：白	外壁等：防腐剤あるいは未塗装
〃	14	函館どっく(株)社宅-3	連続する3軒の物語性、関係性を考慮し、函館山の緑に映える色を採用し、2色に塗り分け。塗り分けの色は3軒統一	外壁：黄 柱型・窓枠等：白	外壁等：防腐剤あるいは未塗装
1999年	15	小笠原家住宅	地区の特徴的な色である緑系を採用し、同系の3色に塗り分け	外壁：薄緑 柱型・窓枠：濃緑 胴蛇腹・小庇：暗緑	外壁・胴蛇腹：クリーム 柱型・窓枠：茶 小庇：青
〃	16	川又家・橋田家住宅	隣家の緑系とのバランスを考慮し、3色に塗り分け	外壁：黄 柱型・窓枠：茶 胴蛇腹・小庇：濃茶	外壁・胴蛇腹：クリーム 柱型・窓枠：茶 小庇：青
2000年	17	手塚家住宅	地区の特徴的な色でもある現状の色を継承し、3色に塗り分け	外壁：薄緑 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・下屋庇：濃緑 軒持送り・軒飾りパネル等：白	外壁・窓枠・軒蛇腹・軒持送り・軒飾りパネル：薄緑 柱型・胴蛇腹・下屋庇：緑
〃	18	小池田家所有建物	現状の色を継承し、3色に塗り分け	外壁：クリーム 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・下屋庇：茶 軒持送り・軒飾りパネル：白	外壁・軒蛇腹・軒持送り・軒飾りパネル：クリーム 柱型・窓枠・胴蛇腹・下屋庇：茶

表 7-6 の 2 塗り替える色の決定案と塗り替え前後の色の具体的内容—その 2

活動年	No.	建物名称	塗り替える色の決定案	塗り替え後の色	塗り替え前の色
2001年	19	瀬戸家住宅	現状の色を継承し、3色に塗り分け	外壁：黄 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・小庇：こげ茶 軒下の壁：白	外壁：黄 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹：茶 軒下の壁：白 小庇：赤
〃	20	NPO法人ファミリーサポーターさわやか事務所	地区の特徴的な色でもある現状の色を継承し、4色に塗り分け	外壁：ピンク 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・小庇：茶 軒下の壁：白 玄関庇の肘木：赤	外壁・軒下の壁：ピンク 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹：茶 小庇：赤
2002年	21	加藤家住宅	歴史的に（過去3回）使われてきた色を採用し、3色に塗り分け	外壁・軒飾りパネル・1階外壁木部・1階外壁塗部：濃いめの青 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り：白 下屋庇：きわめて濃い青	外壁・軒飾りパネル：アイボリー 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り：暗緑 1階外壁木部・下屋庇：こげ茶 1階外壁塗部：白
〃	22	高田木材店・他	地区の特徴的な色でもある現状の色を参考に、より濃いめの色で、3色に塗り分け	外壁・軒飾りパネル：薄緑 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り：白 下屋庇：濃緑	外壁・窓枠・軒持送り・軒飾りパネル：薄緑 柱型・胴蛇腹・軒蛇腹：茶 下屋庇：青
2003年	23	及能(株)所有建物	和風の建築様式との調和を考慮し、同じ和風の伝統的建造物の色を採用し、2色に塗り分け	外壁・屋根・小庇：黒 正面外壁上部塗壁：白	外壁：防腐剤あるいは未塗装、正面外壁上部塗壁：白、屋根・小庇：赤
〃	24	平沢家所有建物	隣家との対比効果を高め、新しい色を採用し、3色に塗り分け	外壁：肌色 柱型・窓枠：茶 下屋庇：黒	外壁：クリーム 柱型・窓枠・下屋庇：濃緑 下屋庇の小口：赤
2004年	25	大野家所有建物	大三坂の町並みのシンボルの建物であった旧函館文化服装学院の色を採用し、記憶の継承をはかり、3色に塗り分け	外壁・軒飾りパネル：ピンク 柱型・窓枠・軒蛇腹・軒持送り：白 下屋庇：赤	外壁・柱型・窓枠・軒蛇腹・軒持送り・軒飾りパネル：ピンク 下屋庇：赤
〃	26	今井家住宅	外壁は隣家の色を採用し、屋根の濃緑に調和する色で、3色に塗り分け	外壁・窓枠・破風の木部軸組み：白 破風の壁：薄緑 下屋庇：濃緑	外壁：黒い防腐剤あるいは未塗装 窓枠・破風の壁：白 下屋庇：濃緑
2005年	27	MOSSTREES	歴史的に使われてきた色を採用し、3色に塗り分け	外壁：濃いめのモスグリーン 柱型・窓枠・軒蛇腹・軒持送り・軒飾りパネル：薄緑	外壁・窓枠・軒飾りパネル：薄緑 柱型・ポーチの枠・軒蛇腹・軒持送り：濃緑
〃	28	奥谷量店	地区の特徴的な色でもある創建時(1927年)の色を採用し、3色に塗り分け	外壁・軒飾りパネル：ピンク 柱型・窓枠・胴蛇腹・軒蛇腹・軒持送り：白 下屋庇：赤	外壁・柱型・窓枠・軒蛇腹・軒持送り・軒飾りパネル：薄緑 胴蛇腹：クリーム 下屋庇：赤



写真 7-4 ペンキ塗り替え前の No. 11. たこやきみっちゃん・他一外壁、柱型、窓枠等ピンク色であり、老朽化していた。(1997 年 8 月撮影)



写真 7-5 ペンキ塗り替え後の No. 11. たこやきみっちゃん・他一連続する 3 軒の物語性、関係性を考慮し（町並み型）、西部地区の特徴的な色であるピンク系を採用し、地区全体の流行色との調和をはかり（町並み型）、2 色に塗り分けて建物意匠の色彩効果を考慮する（建物価値型）、3 つの色彩検討・決定タイプが重合されている事例。歯形飾り、持送りも塗り分けて、装飾性を強調している。(1999 年 8 月撮影)



写真 7-6 ペンキ塗り替え前の No. 15. 小笠原家住宅（左手前）と No. 16. 川又家・橋田家住宅（右手奥）－ 2 件とも外壁・胴蛇腹はクリーム系の色、柱型・窓枠を茶色、小庇を青色に塗り分けていたが、とくに外壁はややくすんだ色で老朽化していた。（1999 年 7 月撮影）



写真 7-7 3 色以上で塗り分けた事例
－ No. 15. 小笠原家住宅（左手前）は地区の特徴的な緑系の色を採用し、外壁を薄緑、柱型・窓枠を濃緑、胴蛇腹・小庇を暗緑の同系の 3 色に、No. 16. 川又家・橋田家住宅（右手奥）は隣家の緑系とのバランスを考慮し、外壁を黄、柱型・窓枠を茶、胴蛇腹・小庇を濃茶の 3 色に塗り分けて、装飾性を強調している。（2000 年 6 月撮影）

色に塗り分けて建物意匠の色彩効果を考慮する（建物価値型）など、必ず複数の色彩検討・決定タイプが重合されているところに特徴がある。6 つの色彩シミュレーション・モデル案がすべて建物所有者に拒否された 1995 年の No.4.PEACEFUL PLACE + 旧三洋無線電機商会においても、その代替案として、地区の特徴的な緑系の色を採用し、地区全体の流行色との調和をはかり（町並み型）、同系の 2 色に塗り分けて建物意匠の色彩効果を考慮（建物価値型）している。第二に、複数の色彩検討・決定タイプのうち、一つは外壁と柱型・窓枠等とのメリハリのある塗り分けをおこない、建物意匠の色彩効果を考慮する建物価値型であり、これは 28 件すべての建物でとりいれられている。とくに 3 色以上で塗り分けているのが 18 件にのぼる（写真 7-6、7-7）。こういう装飾性を強調する塗り分けは、1970 年代頃からの地区の特徴であり、1990 年代頃からはさらに装飾性、華やかさを強調するような展開がみられたが¹⁴⁾、3 色以上の塗り分けはこういう地区の町並み色彩形成の動向をより展開したものであるといえる。先の No.11. たこやきみっちゃん・他の例では（写真 7-4、7-5）、建築意匠の要素である歯形飾りや持送りも塗り分けることにより、2 色ではあるが装飾性をより強調している。第三に、複数の色彩検討・決定タイプのもう一つをみると、多様なタイプがみられることである。建物価値型では、現状の色を継承し、建物の時間的連続性を考慮したものが 7 例、創建時の色を採用し、オリジナルの色を復原したものが 2 例、過去に使われてきた歴史的な色を採用し、建物の時間的連続性を考慮したものが 2 例、和風の建築様式との調和を考慮したものが

14) 本論文第 3 章の表 3-8 (53 頁) を参照。

1例、屋根の色との調和を考慮したものが1例ある。また、町並み型では、地区の特徴的な色である緑系、ピンク系の色を採用したものが8例、連続する2、3軒の建物の物語性、関係性を考慮したものが6例、隣家の色や周囲の建物の色を参考にするなど、周囲の建物との関係を考慮したものが4例、元気の出る、新しい色を創造したものが3例、地区の代表的な建物の色を参考にし、それを採用したものが2例、地区の歴史的な色を参考にし、それを採用したものが1例、消失した代表的建物の記憶を継承しようとしたものが1例、港の海の色との調和を考慮したものが1例、函館山の緑との関係を考慮したものが1例ある。このような色彩検討・決定タイプの多様さは、結果的に、地区の町並み色彩の特徴である多様性を継承しているといえる。

数案のシミュレーション・モデル案の中から、誰がどのように決めているのか。塗り替える色の決定プロセスにおける、意志決定の主体と方法には、建物所有者である住民（以下、「住民」、ペンキ塗り活動の主体である市民ボランティア団体（以下、「活動団体」）がかかわっているのは当然として、活動団体に助成をおこなっている函館色彩まちづくり基金の運営事務局の函館からトラストや、まちづくり活動をおこなっている地元の市民団体である元町倶楽部、MGM（元町グランドワークムーブメント）のメンバーなどの他の市民団体（以下、「他の市民団体」）もかかわっているのが特徴的である（表7-7）。この住民、活動団体、他の市民団体の3者の関係から6つのタイプをとらえることができる。

1998年までは活動団体がシミュレーション・モデル案を比較検討し、決定したり、住民の建物所有者が活動団体に色の選択、決定を一任している「活動団体主体」が多い（7例）。モデル案を住民に提示し、希望の色を選んでもらう、ただしその際には活動団体が推奨する案を伝え、参考としてもらう「住民主体＋活動団体支援」と、他の市民団体の代表者をつうじてモデル案を住民に提示し、希望の色を選んでもらう「住民と他の市民団体との対話＋活動団体支援」がそれぞれ2例みられる。住民の希望の色で決定している「住民単独」が1例あるが、これはモデル案を住民に提示し、希望の色を選んでもらったが、住民がすべてのモデル案を拒否したというプロセスを経たうえでのことである。また、住民の希望の色は地区に特徴的な緑系であり、恣意的なものではなく、周辺環境との関係を考慮したものであった。

1999年から2002年までは、モデル案を住民と他の市民団体のメンバーに提示し、検討を依頼する「住民と他の市民団体との対

表 7-7 塗り替える色の選択における意志決定の主体と方法

活動年	No.	建物名称	シミュレーション・モデル案の検討・決定方法	色彩選択における意志決定の主体と方法のタイプ
1990年	1	加藤家住宅	不明	不明
1993年	2	小森商店	不明	不明
1994年	3	洪田家住宅	活動団体のペンキ塗り替え支援・札幌勝手連がモデル案を比較検討し、決定。建物所有者は活動団体に一任	活動団体主体
1995年	4	PEACEFUL PLACE +旧三洋無線電機商 会	モデル案を建物所有者に提示し、希望の色を選んでもらう。活動団体のペンキ塗り替え支援・札幌勝手連が推奨する案を伝え、参考としてもらう。しかし、建物所有者はすべてのモデル案を拒否し、自身の希望の色に決定	住民単独
〃	5	長谷川理容院	モデル案を建物所有者に提示し、希望の色を選んでもらう。活動団体のペンキ塗り替え支援・札幌勝手連が推奨する案を伝え、参考としてもらう	住民主体+活動団体支援
〃	6	三浦理美容院車庫	同上	同上
1996年	7	MGMステーショ ン・他	他の市民団体・MGMの代表者をつうじて、モデル案を建物所有者に提示し、希望の色を選んでもらう	住民と他の市民団体との対話+活動団体支援
〃	8	窪田家住宅・他	同上	同上
1997年	9	函館どっく(株)社宅	建物所有者が活動団体のペンキ塗りボランティア隊に色の選択、決定を一任	活動団体主体
〃	10	旧おぐら理容院	同上	同上
〃	11	たこやきみっちゃん・他	同上	同上
1998年	12	函館どっく(株)社宅-1	建物所有者が活動団体のペンキ塗りボランティア隊に色の選択、決定を一任	活動団体主体
〃	13	函館どっく(株)社宅-2	同上	同上
〃	14	函館どっく(株)社宅-3	同上	同上
1999年	15	小笠原家住宅	モデル案を建物所有者と他の市民団体・元町倶楽部のメンバーに提示し、検討を依頼	住民と他の市民団体との対話+活動団体支援
〃	16	川又家・橋田家住宅	同上	同上
2000年	17	手塚家住宅	モデル案を建物所有者と他の市民団体・元町倶楽部のメンバーに提示し、検討を依頼	住民と他の市民団体との対話+活動団体支援
〃	18	小池田家所有建物	同上	同上
2001年	19	瀬戸家住宅	モデル案を建物所有者と他の市民団体・元町倶楽部のメンバーに提示し、検討を依頼	住民と他の市民団体との対話+活動団体支援
〃	20	NPO法人ファミリー サポーターさわやか 事務所	同上	同上
2002年	21	加藤家住宅	モデル案を建物所有者と他の市民団体・元町倶楽部のメンバーに提示し、検討を依頼	住民と他の市民団体との対話+活動団体支援
〃	22	高田木材店・他	同上	同上
2003年	23	及能(株)所有建物	モデル案を活動団体のペンキ塗りボランティア隊、他の市民団体・函館からトラスト事務局および元町倶楽部のメンバーで検討。建物所有者は活動団体に一任	活動団体と他の市民団体との3者間の対話
〃	24	平沢家所有建物	同上	同上
2004年	25	大野家所有建物	モデル案を建物所有者、活動団体のペンキ塗りボランティア隊、他の市民団体・函館からトラスト事務局および元町倶楽部のメンバーで検討	住民と活動団体、他の市民団体との4者間の対話
〃	26	今井家住宅	同上	同上
2005年	27	MOSSTREES	モデル案を建物所有者、活動団体のペンキ塗りボランティア隊、他の市民団体・函館からトラスト事務局および元町倶楽部のメンバーで検討	住民と活動団体、他の市民団体との4者間の対話
〃	28	奥谷畳店	同上	同上

話＋活動団体支援」のタイプが続いた（8例）。2003年は住民が活動団体に色の選択、決定を一任し、モデル案を活動団体と他の2つの市民団体で検討している「活動団体と他の市民団体との3者間の対話」のタイプ（2例）であった。2004年以降はモデル案を住民、活動団体、他の2つの市民団体のメンバーで検討する「住民と活動団体、他の市民団体との4者間の対話」のタイプ（4例）であった。

前章の町並み色彩形成のしくみにおいて、色彩選択の意志決定では、住民と塗装業者の対話や住民と近隣の相談といった、他者との相談システムのあることと、塗装業者の関与とその役割の大きさが特徴としてあげられている¹⁵⁾。この市民によるペンキ塗りボランティア活動では、活動団体の支援、住民と地元の他の市民団体との対話、活動団体と他の市民団体との3者間の対話、住民と活動団体、他の市民団体との4者間の対話がみられ、住民の対話の相手が活動団体や他の市民団体へと変化しながら、他者との相談システムは継承されている。また、対話が2者間だけでなく、3者間、4者間へと変化しているのは、新たな展開として位置づけられる。その中で、かつての塗装業者の役割を継承するようなかたちで、活動団体と他の市民団体の関与がみられ、とくに住民と活動団体をつなぐ媒介としての他の市民団体の役割の大きさがうかがえる。

15) 本論文第6章の表6－5（135頁）を参照。

7－3 行政による町並み色彩コントロール

函館市は、函館らしい都市景観の形成をめざして、1988年4月1日に函館市西部地区歴史的景観条例を施行した。これにともない、同年9月に、函館らしい景観を形づくっている地域を「歴史的景観地域」に指定し、景観形成基本計画を策定し、景観形成基準を設定している。この歴史的景観地域内の色彩にかかわる基準は、「周囲の景観と調和のとれたもの」としている。さらに同年12月には、歴史的景観地域内で、伝統的建造物が集中している地区については、文化財保護法に基づき、伝統的建造物群保存地区（以下、「伝建地区」）に指定し、保存計画を策定し、保存整備の基準を設定している。伝統的建造物として77件（石塀、煉瓦塀、門柱なども含まれている）が指定され、そのうち下見板張りペンキ塗り建物は27件ある。この伝建地区内の色彩にかかわる基準は、①伝統的建造物の修理をする場合の「修理基準」では、「伝統的建造物については、主としてその外観を維持するため原則として

現状維持または復原修理」とし、②一般の建物を伝統的建造物風にする場合、「伝統的建築様式に準ずる色彩」とし、③一般の建物の建築行為の場合、「歴史的風致を著しく損なわないもの」と3段階に分かれている。このように、伝建地区内の伝統的建造物および伝統的建造物風にする一般の建物の色彩は現状維持または復原修理と明確であるが、それ以外の一般の建物や歴史的景観地域内では、歴史的風致を著しく損なわないもの、または、周囲の景観と調和のとれたもの、というように曖昧であり、実際の運用に委ねられているのが現状である。これは函館市にかぎらず、神戸市でも他都市でも共通してみられるものである。

函館市ではさらに翌1989年3月に、伝建地区を除く歴史的景観地域内において、都市景観の形成上重要な価値があると認められる建築物等を、景観形成指定建築物等に指定している。これは全49件が指定され、そのうち下見板張りペンキ塗り建物は12件である。同年4月には、景観形成指定建築物等の保全に関する補



写真7-8 伝統的建造物で外壁をピンク、柱型・窓枠等をこげ茶の現状の色をそのまま継承した事例ー芋坂家所有建物(1921(大正10)年建設、元町)。1999年に補助事業を実施。上の写真は1989年6月、下の写真は2001年11月撮影。



写真7-9 伝統的建造物でクリーム系の外壁と青灰系の柱型・窓枠等から、時層色環の分析に基づき、薄緑系とオフホワイト系の創建時の色を採用し、復原した事例ー深谷米穀店(1917(大正6)年建設、末広町)。1990年に補助事業を実施。上の写真は1989年7月、下の写真は2001年11月撮影。



写真7-10 景観形成指定建造物で外壁をピンク、柱型・窓枠等を白の現状の色をそのまま継承した事例—大正湯（1928（昭和3）年建設、弥生町）。1989、1991、1992、1999、2000年に補助事業を実施。左の写真は1988年5月、右の写真は2001年11月撮影。



写真7-11 景観形成指定建造物でピンク系の外壁とクリーム系の柱型・窓枠等から、時層色環の分析に基づき、薄緑系と黄緑系の創建時の色を採用し、復原した事例—小森家住宅店舗（1901（明治34）年建設、弁天町）。1993、2001年に補助事業を実施。左の写真は1988年5月、右の写真は2001年11月撮影。



写真7-12 景観形成指定建造物で薄緑系の外壁と濃緑系の柱型・窓枠等から、時層色環の分析に基づき、1930年代後半頃と推定されるベージュ系と灰系の歴史的な色を採用した事例—伴田商店所有住宅（1916（大正5）年頃建設、弁天町）。1991、1996、2000年に補助事業を実施。左の写真は1989年8月、右の写真は2001年11月撮影。

16) 伝統的建造物は全 77 件、下見板張りペンキ塗りの伝統的建造物は 27 件であるが、1 件の建物で数回補助金を得ているケースがあるため、このような数字になっている。景観形成指定建築物等も同様。

助金交付要綱の制定と、伝建地区の保存に関する補助金交付要綱の制定がおこなわれた。この外観修理に対する補助金交付事業がスタートした 1989 年度から 2004 年度までの 16 年間で、下見板張りペンキ塗りの伝統的建造物 42 件¹⁶⁾（全 100 件）、景観形成指定建築物 31 件（全 74 件）の修理がおこなわれている。

行政による建物保全修理への補助事業は、他都市でもおこなわれているが、函館市では塗り替えるペンキの色を決める際に、ペンキ層のこすり出し調査、時層色環の分析をおこない、その結果を参考にしているところに独自性がある。伝統的建造物では、現状維持または復原修理の基準にもとづき、現状の色をそのまま継承するか、あるいは創建時の色を採用するか、いずれかを選択している（写真 7-8、7-9）。景観形成指定建築物では、伝統的建造物と同様の現状の色か創建時の色、これに加えて、創建時以降現在までに使われていた歴史的な色の中からも選択できるようにし（写真 7-10、7-11、7-12）、伝統的建造物よりも選択肢を広げている。

一般に、町並みにおける建物の色彩選択の根拠をどこに求めるかは難しい問題であり、前述のように、歴史的風致を著しく損なわないもの、とか、周囲の景観と調和のとれたもの、というように曖昧になりがちである。函館市の場合、伝統的建造物と景観形成指定建築物については、その根拠が時層色環に求められており、そこに大きな特徴がある。

7-4 町並み色彩形成のしくみの継承と展開

以上より、市民によるペンキ塗りボランティア活動や行政による町並み色彩コントロールが、前章であきらかにした函館市西部地区における従来の町並み色彩形成のしくみに対して、何を継承し、どのような新しい展開を遂げているのかについて分析する（図 7-2）。

第一に、従来の町並み色彩形成のしくみでは、塗装業者がペンキの剥げ落ちたり傷んだりしている建物を見つけ、その所有者に対してペンキの補修を助言する、町並みの観察者、管理者（タウンウォッチャー）としての役割を担っていた。市民によるペンキ塗りボランティア活動の主体が、現地を巡回し、タウンウォッチングをおこなってペンキ塗り対象建物を選んでいるのは、かつての塗装業者と同様の働きであり、タウンウォッチャーとしての役割を継承するものであるといえる。

第二に、従来ペンキを塗り替える時には、住民と塗装業者、近

隣住民との間の対話、相談という、地域コミュニティにおける色彩選択の支援的なしくみがあった。市民によるペンキ塗りボランティア活動では、住民と活動団体、他の市民団体との間の対話、相談へと変化しながら、色彩選択の支援的なしくみは継承されていた。また、対話が2者間だけでなく、3者間、4者間へと増えているのは、色彩選択にあたり広く知恵を集める新たな展開として位置づけられる。また、行政による色彩コントロールにおいても、住民と行政との間の対話、相談がおこなわれている。その時の色彩選択の手法として、ペンキ層のこすり出し調査、時層色環の分析を用いているのは、従来にはない、新しい、函館独自の展開である。これは市民によるペンキ塗りボランティア活動にもみられた。

第三に、従来のしくみにおける住民の色彩選択決定要因には、

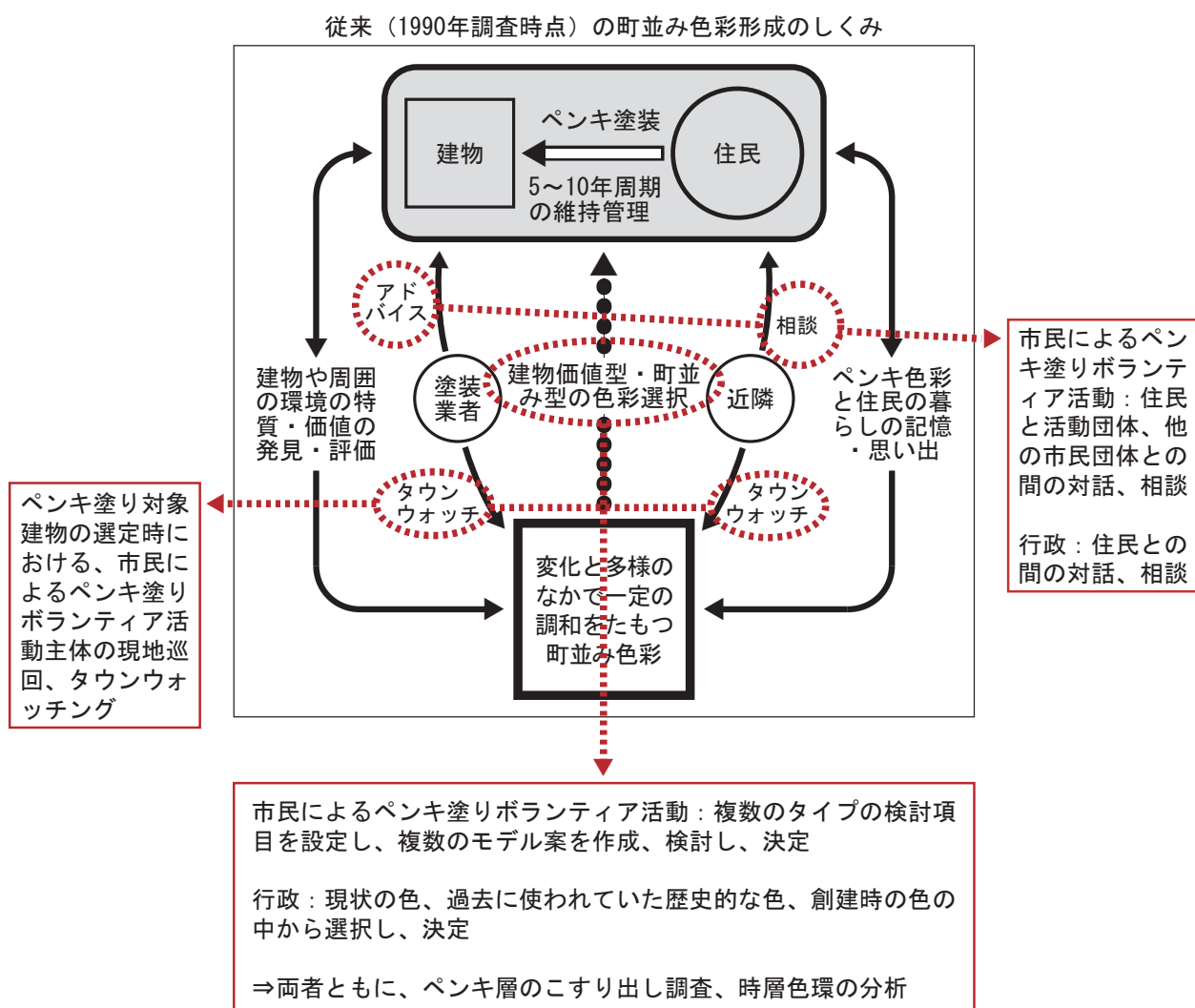


図 7-2 函館市西部地区における町並み色彩形成のしくみの継承

建物との関係を考慮した建物価値型と周囲の環境との関係を考慮した町並み型のタイプが多くを占めていた。市民によるペンキ塗りボランティア活動においては、塗り替える色の決定プロセスにおける色彩検討の段階でこれらのタイプが考慮され、複数のタイプを採用して決定するという新たな展開がはかられていた。また、行政においても、現状の色、過去に使われていた歴史的な色、創建時の色の中から選択するのは、建物との関係を考慮した建物価値型の決定要因を継承するものであるといえる。

さらに、市民によるペンキ塗りボランティア活動における活動資金の支援システムや、CG 色彩シミュレーションによる色の検討システムも従来にはない、新しい展開である。また、このような活動が、建物所有者にはたらきかけて、建物の消失を未然に防ぐと同時に、所有者の自主的なメンテナンスや調和ある色彩選択を引き起こし、連鎖的な町並み改善へと発展している例もみられた。

しかし一方では、市民によるペンキ塗り建物がその後、取り壊し・建替や下見板からサイディングへの張り替えがおこなわれるなど、伝統的建造物や景観形成指定建築物以外の下見板張り建物の老朽化とその再生という課題も浮き彫りになっている。

7-5 まとめ

函館市西部地区において、時層色環調査の 1988、89 年以降現在まで、新しく展開されてきた市民によるペンキ塗りボランティア活動と、行政による町並み色彩コントロールの実態を把握した。そこから、従来の町並み色彩形成のしくみにおける塗装業者や近隣によるタウンウォッチ、塗り替える色の相談・アドバイスの役割がボランティア活動団体、他の市民団体や行政へと引き継がれていることや、建物や周囲の環境との関係を考慮した建物価値型、町並み型の色彩選択のあり方が継承されていることをあきらかにした。また、色彩の相談、選択のあり方には、従来のものをより発展させた、新たな展開もとらえられた。さらに、市民によるボランティア活動をささえる資金の支援システム、CG 色彩シミュレーションによる色の検討システム、色彩選択の根拠の一つとしての時層色環の調査分析システムなど、町並み色彩形成のしくみにかかわる、新しくとりいれられたシステムもとらえられた。このような市民レベル、行政レベルの活動展開は、従来の町並み色彩形成のしくみを継承、補強、発展させ、特色ある町並み色彩を

維持する働きをもつものと考えられる。しかし一方、伝統的建造物等の指定建築物以外の下見板張り建物では、老朽化にともなう建替などにより、下見板張りペンキ塗りの特徴が失われており、それらの保全、再生が課題となっている。

第8章 町並み色彩計画のあり方

8-1 はじめに

本章は、前章までにあきらかにされた町並み色彩の変容と形成に関する知見を整理し、その要点をあきらかにした上で、従来の町並み色彩計画の考え方と方法について検討を加え、それとは異なる新しい町並み色彩計画のあり方を論述することを目的としている。

これまで、時層色環の分析という新しい研究の方法にもとづき、函館市西部地区、神戸市北野町山本通地区、アメリカ・ボストン周辺地区の3つの地域の町並み色彩の変容と特徴をあきらかにし、その色彩形成のしくみについて函館市西部地区を典型事例として詳細に分析し、その構造をとらえ、いくつかの新しい知見を得た。これらの新しい知見は、従来の町並み色彩計画論に対してどのように位置づけられるのであろうか。

8-2 「生活環境色彩」としての町並み色彩

8-2-1 町並み色彩の変容と特徴、色彩形成のしくみの要点

3地域の町並み色彩の変容と特徴、色彩形成のしくみの要点として、以下の4つにまとめることができる。

(1) 地域コミュニティ単位の固有の町並み色彩の形成

一地域の歴史、文化の表現としての町並み色彩

3地域の町並みを構成している木造下見板張りペンキ塗り建物は、アメリカ・ボストン周辺地区の建築様式を一つの原型として、函館市西部地区も神戸市北野町山本通地区もその影響を受けているというつながりがある。しかし、町並み色彩は、地域をこえた建築様式の歴史的なつながりの反映はほとんどみられず、3地域ごとに独自の変化がみられ、それぞれに特徴の異なる、固有の町並み色彩が形成されていた。すなわち、町並み色彩には明確な地域性がみられるのである。

町並み色彩の形成にかかわる各建物のペンキ色彩の選択、決定には複数の要因が作用している場合が多い。時代におけるペンキの供給、価格、生産、技術のあり方や建築様式の影響もその一つである。これらに加えて、地域における大火や戦争の歴史的な出来事、公共性の高い代表的な建物や船舶の色、在留外国人の色彩

文化、戦争による外国人の国外退去や建物の取り壊しなどの急激な環境変貌にたいする地域コミュニティの対応など、町並み色彩には各地域に刻まれたさまざまな歴史や文化が反映している。そのことが地域固有の町並み色彩の形成をもたらしている。町並み色彩は地域の歴史、文化を表現するものにほかならないのである。

(2) 現象的にも実体的にも変化する町並み色彩

－地域住民の社会的な生活意識を視覚的に表現する媒体としての町並み色彩

3 地域に共通して、現状とはまったく異なる町並み色彩が過去には形成され、地域の特徴的な町並み色彩が時代によって変化していることがとらえられた。これは色として視覚的にとらえられた町並みが現象的に変化しているだけにとどまらない。町並み色彩変化の現象の背景にある要因や意味などの、いわば町並み色彩の実体的な内容もまた変化し、多様であった。それは個々人の色彩に対する趣味や好みの変化などの個人的な意識の変化の反映もあるが、多くは地域住民の建物、町並みや地域コミュニティへの思いの歴史など、生活環境とのつながりのなかで社会化された地域住民の生活意識の反映であった。この色彩の変化の大きさにくらべると、町並みの形態、すなわち建物群の高さやボリューム、意匠についてはほとんど変化がみられないか、変化があっても一部の改修などと小さい。現象的にも実体的にも大きく変化する町並み色彩は、地域住民の社会的な生活意識を直接的に、視覚的に表現する主要な媒体となっているといえる。

(3) 色彩と地域住民の生活との濃密なかかわり

－生活の物語としての町並み色彩

地域住民の町並み色彩にたいする記憶は鮮明で、様々な思い出が語られた。それらは建物の改築や用途変更、住み替え・入居、結婚などの生活の節目となる出来事と結びついたペンキの塗り替えといった個人的な思い出もあれば、船舶の色とそれの建物への影響や地区の代表的な建物の色の周囲の建物への波及といった色彩の地域とのかかわりや、大火や戦争といった社会的出来事などと結びついた色彩など、町並み色彩にまつわる様々な思い出が地域住民の生活の物語として語られていた。地域住民にとって町並み色彩は、生活の営みの中で濃密なかかわりと意味をもち、重要な役割を担っていたといえる。

(4) 多様な主体による協議と生活環境価値評価型の色彩選

択、決定の原理

町並み色彩の形成にかかわる各建物のペンキ色彩の選択、決定

の原理として、第一に、主体はあくまでも建物を所有する地域住民であるが、塗装業者や近隣住民との間の対話、相談、さらに近年では市民によるペンキ塗りボランティア活動団体、他の市民団体、行政などとの対話、相談という、地域コミュニティにおける支援的なしくみをもち、これらの多様な主体による協議がおこなわれていることがあげられる。第二に、その協議の内容として、建物の意匠的特徴や港のイメージを考慮したり、隣家や周囲の建物の色彩や地区のランドマーク的な建物の色彩を参考にするなど、建物や周囲の環境の特質と価値を理解、評価し、それらとの関係を考慮して色彩選択、決定がおこなわれていることがあげられる。すなわち、生活環境価値評価型の色彩選択、決定がみられるのである。

8-2-2 「生活環境色彩」としての町並み色彩

町並み色彩は、地域の歴史、文化が表現され、地域コミュニティ単位の固有性をもち、地域住民の社会的な生活意識が視覚的に表現され、現象的にも実体的にも変化し、生活の物語として地域住民の生活との濃密なかかわりをもつ、複合的、重層的なものであることがとらえられた。このような町並み色彩のありようを、「生活環境色彩」と定義づける。

生活環境色彩の概念は、個性的で魅力ある、すぐれた町並み色彩とは何か、という現代の町並み色彩をめぐる根本的な課題に対して、それは町並みを構成する建物群の色彩の調和という物的環境の意匠のあり方にとどまるものではなく、地域の歴史、文化や地域住民の生活とその意識などと深くかかわっていることを具体的に、実証的に示すものである。また、すぐれた町並み色彩をどのようにすれば形成できるのか、というもう一つの課題に対して、物的環境の意匠的側面の整備にとどまるものではなく、生活環境色彩としての性格を形成、維持し、それを基盤とする、多様な主体による協議と生活環境価値評価型の色彩選択、決定という、町並み色彩形成のしくみの必要性を示している。

8-3 従来の町並み色彩計画の考え方と方法

従来の町並み色彩計画の考え方と方法はどのようなものであるのか。その基本的な計画原理として「自然環境色彩」と「近代科学色彩」の2つと、計画の方法として目標を定める基本となる事前調査のあり方とルールの2つに着目して検討を加える。

8-3-1 「自然環境色彩」と「近代科学色彩」の2つの計画

原理

(1) 自然環境色彩

地域の自然の材料からつくりだされた建築の素材そのものの色や、地域の植物、土、空、海、山などの自然環境そのものの中に見出される色、これを「自然環境色彩」と定義し、町並み色彩計画において、この自然環境色彩に価値を見出し、基本原理とし、それを根拠にしようとするものである。

前者の地域の自然の材料からつくりだされた建築の素材そのものの色は、現在、わが国の重要文化財である重要伝統的建造物群保存地区の町並みに代表的にみられる色である。具体的には、京都の祇園新橋、飛騨高山、妻籠宿などの町並みで代表的にみられる、建物の外壁の木の色や土の色（写真 8-1、8-2）、あるいは今井町や川越の町並みにみられる建物の外壁の漆喰の色（写真 8-3）、さらには屋根の瓦の色などである。江戸時代までは、青と丹の色



写真 8-1 建物の外壁の木の色からなる町並みの典型事例ー京都市祇園新橋重要伝統的建造物群保存地区の町並み（2000 年 3 月撮影）



写真 8-2 敷地を囲む塀の土の色からなる町並みの典型事例ー萩市平安古重要伝統的建造物群保存地区の町並み（1987 年 10 月撮影）



写真 8-3 建物 1 階の木の色と 2 階の漆喰の白色からなる町並みの典型事例ー橿原市今井町重要伝統的建造物群保存地区の町並み（1985 年 11 月撮影）



写真 8-4 格子の青の色と柱等の丹の色、外壁の漆喰の白色からなる神社仏閣の典型事例ー厳島神社（1990 年 10 月撮影）

で彩られた神社仏閣（写真 8-4）を除いて、住宅などの一般の建物は、すべてこういう地域の自然の素材でつくられており、町並みの色彩が問題になることはなかった。しかし、明治時代以降、化学工業的な建築材料や塗料の色彩が発展し、多様化したことによって、状況は大きく変わり、様々の材料や色彩からなる町並みが形成され、色彩が問題視されるようになったのである。このような地域の自然の素材で現代においても町並みがつくられるなら、調和のとれた色彩が形成されることは確かであるが、コスト、制度、技術などの面で一般性はきわめて低く、重要文化財という限定された範囲の町並みでおこなわれているのが実状である。一方、現代の町並みにおいてさまざまな建築材料や色彩が混在する中で、まとまりのある色彩形成をはかる一つの方法として、建築家などの専門家からコンクリートや煉瓦などを推奨する意見が出されることがある。これはコンクリートや煉瓦の色が建築の素材色であり、現代的な自然環境色彩としてとらえられているからだと考えられる。しかし、これも一般性は低い。

もう一つの地域の植物、土、空、海、山などの自然環境そのものの中に見出される色を、町並み色彩計画の基本原理にしようとするのは比較的最近のことである。その具体的な事例は札幌にみられ、1972（昭和 47）年から、札幌の自然の色の中に地域の色を求めることを目的に、札幌に生息する植物などの色 4,000 色を採集している。その中から 144 色を分類し、1987（昭和 62）年に「札幌自然色」としてまとめ、さらにガイドブックを作成し、市民に対して広報をおこなっている（図 8-1）¹⁾。これをベースに、2004 年 6 月、札幌市は、「誰もが綺麗であると思える色彩」²⁾を 70 色選び、カラーチャートにし（図 8-2）、大規模建築物等の色彩景観ガイドラインとして作成した。これは、高さ 31 m または延べ面積 10,000 m²をこえる大規模建築物等について、建築確認申請提出日の 30 日前までに届出を義務づけ、このガイドラインにもとづき、色彩についての協議をおこなうというものである。対象が大規模建築物等に限定されたものであるが、町並み色彩に関する行政の施策としては、従来にはない具体的なものになっている。同時にまた、これは広く市民に札幌の街を色彩から考えるきっかけにすることをねらいとするもので、70 色すべてに札幌らしいオリジナルの色名をつけ、カラーチャートの「色」と色名の「言葉」の両面から相乗効果的に市民の関心をひきつける工夫がされている。今後、このガイドラインのねらいとするところがいかに市民に定着するのか、その展開が注目される。が、一方では、ひとたびこ

- 1) 札幌市文化都市市民文化課・景観色検討委員会 編『札幌自然色ガイド 四季彩 Sapporo Eco-Color』、札幌市、1994 年。なお、自然色を採集したのは北海道教育大学デザイン研究室で、「札幌自然色」の本を監修したのは故熊谷直勝氏（当時北海道教育大学教授）である。
- 2) 札幌市市民まちづくり局都市計画部地域計画課都市景観担当 編『札幌の景観色 70 色 大規模建築物等色彩景観ガイドライン概要版』。



図 8-1 札幌の自然色の 1 例 (札幌市文化都市市民文化課・景観色検討委員会 編『札幌自然色ガイド四季彩 Sapporo Eco-Color』(札幌市、1994 年)の pp4-5 より転載)



図 8-2 札幌の景観色 70 色のカラーチャート (札幌市市民まちづくり局都市計画部地域計画課都市景観担当 編『札幌の景観色 70 色 大規模建築物等色彩景観ガイドライン概要版』より転載)

のようなガイドラインが制度化されると、それが絶対的な基準になり、それにもとづく規制が目的化されがちであり、広く市民に札幌の街を色彩から考えるきっかけにするという本来の目的を見失ってしまう恐れもないとはいえない。

このような建築の素材色や地域の自然の中の色である「自然環境色彩」のもつ意味は、人々の身のまわりにある材料でつくられたり、人々の身近な環境から発見されたりし、人々の生活に密着し、長い間慣れ親しまれてきたものであり、そこに色彩計画の拠りどころを求めようとしているところにあるといえる。

(2) 近代科学色彩

色彩の科学、それもとくに 20 世紀以降の近代の色彩科学の理論から導かれる色を「近代科学色彩」と定義し、町並み色彩計画において、この近代科学色彩を基本原理とし、根拠にしようとするものである。

色彩の科学には、原論としての色彩論があり、古くはアリストテレス、18 世紀のニュートン、19 世紀のゲーテの色彩論があるが、町並み色彩計画に大きな影響を与えたのは、20 世紀以降の表色系の考案と色彩調和論であろう。現在、色票による表色系としてマンセル表色系が最も広く普及しているが、この表色系の記号や数値によって誰もが共通する色を特定できるようになった。記号や数値による表現は抽象的、概念的でわかりにくいという欠点をもつが、同時に色票によって示すことにより、誰もがその色の具体的なイメージを認識できるようになった。また、色彩調和は、ムーンとスペンサーやオストワルトをはじめ、さまざまな人が論じており、各人各様の理論がある³⁾。このうち、ムーンとスペンサーの色彩調和論はもっとも有名なものの一つであるが、「理論にやや無理があり、デザインにうまく適用できない」⁴⁾とする批判や、「日本で行われた実験的研究によって、ムーンとスペンサーの色彩調和論は、ほぼ全面的に否定されることになってしまった」⁵⁾という否定的な意見もみられる。また、このような色彩調和論全体について、「配色調和論のほとんどが、平面における同質の色と色との組み合わせを扱っているため、環境色彩が扱う様々な形態や素材を持ったものの配色には、これまでの色彩調和論で解決できない部分も多い」⁶⁾といった批判的な意見もある。

色彩調和論への様々な批判がある中で、具体的な配色調和の標準的なあり方として、同じ色相内での色の組合せの「同一色相配色」、隣接する色相からの色の組合せの「類似色相配色」、反対色相の組合せの「対比色相配色」の、色相だけの組合せからなる 3

3) 社団法人日本建築学会 編・発行『建築の色彩設計法』（丸善、2005 年 4 月 25 日）には著名な色彩調和理論として、シュプルール、ルード、オストワルト、ドア、ジャッド、ビレン、ムーンとスペンサー、イッテンの 8 名の理論が紹介されている。

4) 乾正雄『建築の色彩設計』、鹿島出版会、1976 年 8 月 5 日）。

5) 福田邦夫『色彩調和論』、朝倉書店、1996 年 2 月 15 日）。

6) 吉田慎悟『まちの色をつくるー環境色彩デザインの手法』、建築資料研究社、1998 年 10 月 10 日）。

つがあげられている⁷⁾。また、色相に加えて、明度と彩度の組合せからなる明暗、濃淡、強弱の色調を意味するトーンを用いて、グレー系やブラウン系といった類似の色彩で揃える配色の「類似色調和」、一つの色相または類似の色相を使いトーンに変化を持たせる配色の「色相調和」、一つのトーンまたは類似のトーンで色相を変化させる配色の「トーン調和」を色彩調和の型としてとりあげる意見もみられる⁸⁾。

このように、色彩調和論には様々な問題や意見があるが、どういう色彩の組合せが調和であり、不調和であるかを論じることは、従来の町並み色彩計画の基本となっている。

なお、近代科学色彩にもとづくわが国の色彩計画の歴史を振り返ると、1950年代から60年代初頭まで、アメリカから導入された色彩調節（カラーコンデショニング）に拠りどころを求める時代があったが、これは心理学や生理学にかたより、計画対象も建築物の内部にとどまり、町並みに影響を及ぼすまでにはいかなかったといえる。

8-3-2 計画の方法

従来の町並み色彩計画の方法として定型的なものはないが、町並みにかかわる建築外観色彩の設計に関する標準的な一連のプロセスとして、設計条件の把握、事前調査、コンセプトの立案、色彩設計、評価、プレゼンテーション、色彩の決定、工事監理があげられる⁹⁾。この中で、コンセプトの立案の基礎となる、色彩計画の前提としての事前調査のあり方は重要である。標準的な事前調査には、①現地と敷地周辺の立地条件の調査、②景観条例、景観形成計画などによる景観の規制、誘導の有無とその内容に関する調査、③用途が似ている建築の色彩を参考にするための類似建築の調査、④対象となる建築周辺の環境色彩の調査、といった4点があげられている。このうち、敷地周辺の調査では歴史・文化的特性の把握が具体的な検討内容としてあげられているが、一般的なものとどまっている。全体として、現状の調査にもとづく現状の特性の把握が主であり、色彩と地域の歴史、文化や住民の生活、意識とのかかわりといった生活環境色彩の調査、把握はおこなわれていない。したがって、コンセプトの立案もまた現状にもとづくものとどまり、生活環境色彩にまで踏み込んで検討されてはいないと考えられる。

また、町並み色彩形成のルールとして、現在自治体がおこなっているものは、一つは、景観形成基準を定めて指導する規制的手

7) 社団法人日本建築学会 編・発行『建築の色彩設計法』、丸善、2005年4月25日。

8) 吉田慎悟『まちの色をつくるー環境色彩デザインの手法』（建築資料研究社、1998年10月10日）および『景観法を活用するための環境色彩計画』（丸善、2005年9月25日）、小林重順 著、（株）日本カラーデザイン研究所 編『カラーリストー色彩心理ハンドブック』（講談社、1997年3月3日）。

9) 社団法人日本建築学会 編・発行『建築の色彩設計法』、丸善、2005年4月25日。

10) 吉田慎悟『景観法を活用するための環境色彩計画』、丸善、2005年9月25日。

法である。基準の内容は、周囲の景観と調和のとれたもの、というような定性的なものが多く、また指導対象は大規模建築物等の届出建築物に限られるところが多い。もう一つは、ガイドラインを提示する誘導的手法である。先述の札幌市における大規模建築物等の色彩景観ガイドラインのように、地域の自然の中から抽出された色を推薦する色彩として紹介したり、地域の景観を阻害する、排除すべき色彩を示す場合もある¹⁰⁾。こういう基準やガイドラインもまた、現状の色彩の測定調査結果にもとづき、先述した色彩調和の考え方を根拠とするものがほとんどで、地域の具体的な生活環境色彩を配慮したものは今のところみられない。

8-4 町並み色彩計画のあり方と生活環境色彩の意義

以上の分析から、これからの町並み色彩計画のあり方として、次のようなものを提案する。

町並み色彩を従来の自然環境色彩、近代科学色彩の2軸の關係に、本研究の成果として得られた生活環境色彩を加え、枠組みを広げた3軸の關係からなるものとしてとらえる(図8-3)。この町並み色彩は、地域の自然環境にもとづく色彩や、時層色環などにもとづく色彩の歴史、文化や現状が分析され、空間的、時間的に将来のあるべき姿が総合的に考察され、時代に、そして地域の環境にふさわしい町並み色彩とは何かが検討され、決定されるものである。

対象とするエリアは、都道府県単位、市町村単位といった広域の行政単位ではなく、より狭域の地域コミュニティを単位とする。そこでは、現状の把握だけでなく、その地域の歴史、文化や住民の生活、意識がどのように町並み色彩に反映しているのかをとらえることが必要である。生活環境色彩としての町並み色彩は不変的、固定的、永続的なものではなく、地域住民の生活の変化や時代の変化など、状況に対応しながら変化するものである、という点に一つの原理がある。したがって、町並み色彩計画も固定的なものではなく、変化を許容するものが求められるであろう。

町並み色彩計画の方法としては、自治体が基準を設けて指導する規制的手法とガイドラインを提示する誘導的手法の従来の2つの手法に加え、地域固有の生活環境色彩を基盤として、住民が地域にふさわしい町並み色彩を主体的、社会的に評価し、判断できるしくみをつくり、それをとおして住民の自由な自己表現が発露するようなシステムを考える。函館でいえば、地域住民とかつて

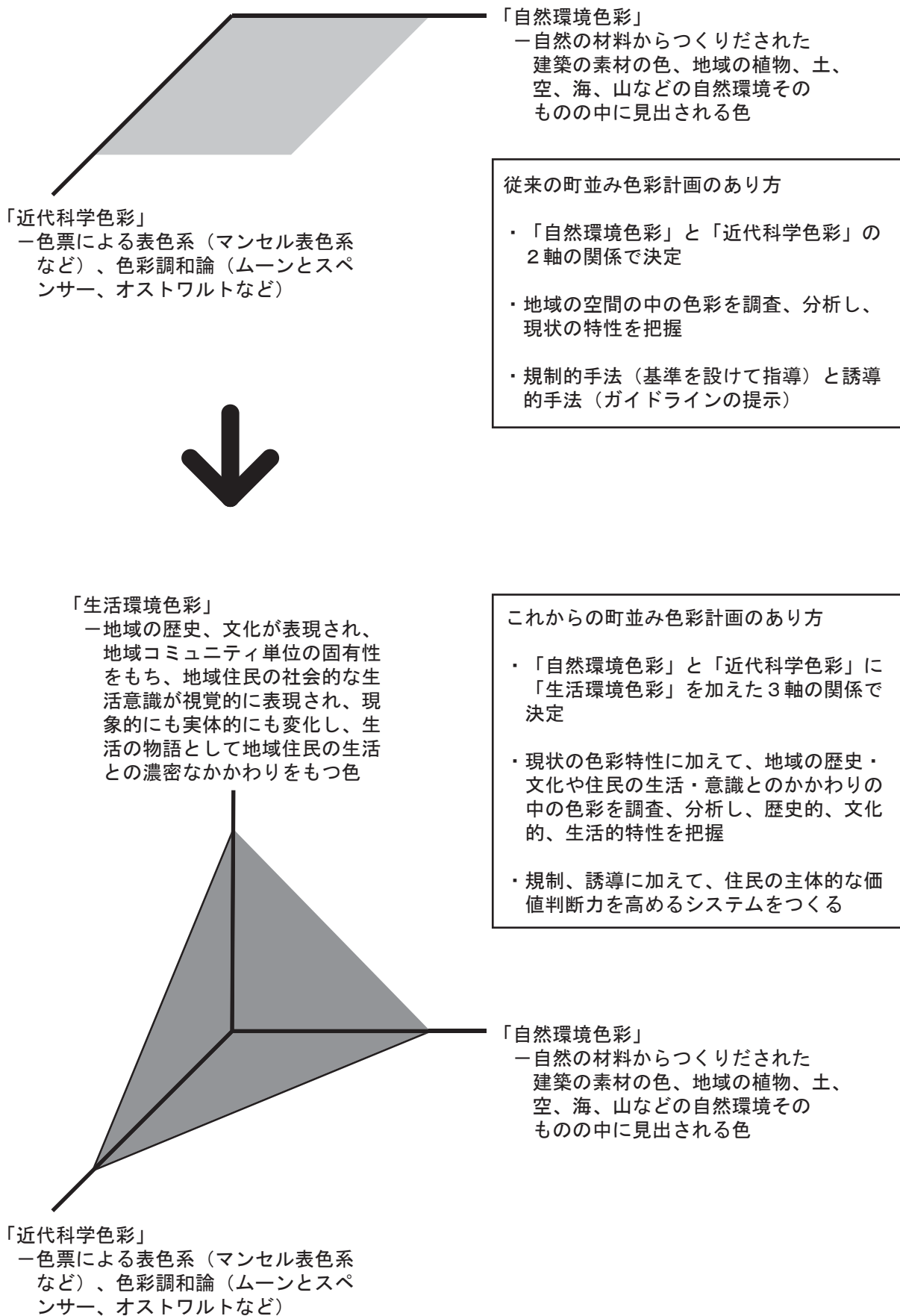


図 8－3 町並み色彩計画のあり方

の塗装業者、近隣住民との対話、相談および近年の市民によるペンキ塗りボランティア活動団体、他の市民団体、行政などとの対話、相談という、地域コミュニティにおける多様な主体による協議と、建物や周囲の環境の特質・価値の理解・評価とそれにもとづく色彩選択、決定のシステムがこれに相当する。

町並み色彩計画において、従来の自然環境色彩と近代科学色彩に生活環境色彩が加えられたことの意義は、生活環境色彩が地域の歴史、文化や地域住民の生活とその意識にかかわっているために、住民が町並み色彩を身近な、親しみ深い生活風景としてとらえることができることにある。したがって、地域住民が町並み色彩への関心を高めやすく、また生活環境色彩をとらえて住民が地域の価値を再発見することもありえる。そこに町並み色彩の問題が地域住民にとって自分自身の問題としてとらえられる契機があるといえる。町並み色彩を形成し、維持するのはあくまでも地域の住民一人一人であり、彼らが色彩の問題をいかにして自分自身の問題としてとらえることができるのかは、計画におけるもっとも重要な課題にほかならず、生活環境色彩はこの課題にこたえる有効な概念である。さらに、地域住民の町並み色彩に対する認識は、往々にして現状の限定されたものにとらわれがちであるが、現状とはまったく異なるものが過去には形成され、時代によって変化してきた生活環境色彩は、このような住民の認識を改めさせ、これからの町並み色彩のあり方について住民のイメージを広げ、豊富化する上で大きな役割を果たすものと考ええる。もう一つは、生活環境色彩が、個人の生活や意識の表現であると同時に、地域の歴史や文化の表現でもあるという性格をあわせもっているために、個々の建物のペンキ色彩の選択、決定行為を個人の利己的、独善的な表現に陥らせることなく、町並み全体にとってプラスになるように方向づける構造を内包していることがあげられる。

8-5 まとめ

前章までにあきらかにされた成果の要点として、町並み色彩は、地域の歴史、文化が表現され、地域コミュニティ単位の固有性をもち、地域住民の社会的な生活意識が視覚的に表現され、現象的にも実体的にも変化し、生活の物語として地域住民の生活との濃密なかかわりをもつ、複合的、重層的なものであるととらえ、このような町並み色彩のありようを「生活環境色彩」と定義づけた。

そして、従来の町並み色彩計画では「自然環境色彩」と「近代

代科学色彩」の2つの原理からなっていたことを論じ、これからの計画のあり方として、新たに生活環境色彩を加えた3つの原理で構成し、枠組みを広げることを提示した。また、町並み色彩計画の方法として、従来の規制的手法と誘導的手法に加えて、地域固有の生活環境色彩を基盤として、住民が地域にふさわしい町並み色彩を主体的、社会的に評価し、色彩の選択、決定をおこなうことのできるしくみをつくることの重要性を示した。生活環境色彩は、住民にとって町並み色彩を身近な日常の生活風景としてとらえられ、住民個々の建物のペンキ色彩の選択、決定行為を町並み全体にとってプラスになるように方向づける可能性をもっていることを論じた。

第9章 結論

9-1 要約

町並みの色彩の基調をなす個々の建物外部の色は、日本もヨーロッパも、100年から200年ほど前までは、外壁の白木、焼き板、土、漆喰、石、レンガや屋根の瓦といった地域の自然素材に規定されていた。この時代には、色彩の選択の余地はなく、おそらく町並み色彩というものが人々に意識されることはほとんどなかったのではないかと考えられる。それが現在のように、建物色彩が材料から解放され、自由に選択できるようになり、多様な色が使われるようになってはじめて、町並み色彩が人々に意識され、その秩序や調和が問題になってきたといえよう。このように、町並み色彩をめぐる状況が、建築の素材色に規定されていた時代から、自由な塗装色の時代へと大きく変わった中で、個性的で魅力ある、すぐれた町並み色彩とは何か、また、そのような町並み色彩をどのようにすれば形成できるのか、が現代的かつ根本的な課題となっているといえよう。この課題に対して、塗装色の時代になって以降現在までに、地域や人々の間で色彩が生活文化としてどのように培われてきたのかを掘り起こし、解き明かすことがなによりもまず求められているのではないだろうか。

第1章は、上記の問題意識、課題の提示にもとづき、研究の目的、方法、動機について論述するとともに、主題に関する既往研究について概括し、本研究の位置づけをおこなっている。本研究の目的は、地域において人々が日常生活の中で建物の塗装色とどのようにかかわりあってきたのかをとらえ、町並みにおける人々と色彩との歴史的、文化的、生活的な関係をあきらかにし、その中からこれからの町並み色彩のあり方を見出そうとすることにある。具体的には、塗装色の代表例であるペンキが、建物の維持管理上必要な数年単位の塗り替えという、住民の周期的な生活行為が直接的に町並みの形成、維持にむすびつく、生活景の一つの典型タイプであることに着目し、日本において洋風の下見板張り建築様式とともにペンキが導入された明治期から現在までのこの100年余の間に、地域においてペンキが人々の日常生活の中でどのように取り扱われ、町並みの色彩として形成され、変容してきたのかをあきらかにする。そして、その変容過程の中で、町並みの形成、

維持にかかわる色彩選択、決定の原理を抽出し、特徴ある色彩形成のしくみをとらえようとするものである。研究対象となるペンキ色彩が町並みを特徴づけている地域として、一般庶民の住宅群による町並みの函館市西部地区（1988-89年に悉皆調査実施、82棟）と、主として外国人の住宅群による町並みの神戸市北野町山本通地区（1994年に悉皆調査実施、19棟）を選んだ。いずれも開港場であったところで、現在は重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、日本の代表的な下見板張り建物のペンキ色彩からなる町並みである。さらに日本の洋風下見板張りペンキ塗建物の主要なルーツ・原型として考えられる、アメリカ・ボストン市周辺地区（1991年に典型事例調査実施、42棟）の建物・町並みも比較対象に加えた。

第2章は、町並み色彩の変容を実証的に分析する方法として、「時層色環」という新しい概念を示し、その時層色環の調査、分析の手法について具体的に論述している。建物の外壁下見板、窓枠等に残るペンキ層の発掘調査として、表面のペンキ塗膜を紙やすりで円環状にこすり、木地が出るまで削る「こすり出し」という簡便な手法を用いた。その結果、同心円状の模様をしたペンキの色のレイヤーが得られた。そこにはペンキ色彩にまつわる人々の生活や地域の歴史が蓄積されており、その分析によってペンキ色彩と時代、地域の環境やコミュニティ、人々の生活との関係をさぐることができる。これを、樹木の年輪や考古学の地層のように、各層が示すそれぞれの時代、環境、個人の様相を意味するものであると仮説的に定義づけ、その形態と意味を考慮して、「時層色環」という新しい概念で示した。この時層色環の調査フローを、①下見板張り洋風建物のペンキ層の発掘・採集部位の検討、②各部位からのこすり出しによるペンキ層の発掘作業、③時層色環の発見・採集・記録、④時層色環の各ペンキ層の色票化と調査票の作成、⑤調査票の提示による建物所有者へのヒアリング調査、の5点に整理し、明示した。次に、建物ごとのペンキ層の各色の塗装年を特定、推定する手法を開発した。その基本的な考え方は、最も新しいペンキ層の塗装年である「最新塗装年」と、最も古い第1層のペンキ層の塗装年である「塗り始め年」をおさえ、その間の層については、ペンキの塗り替えは一定の周期性をもつものであるから、塗装間隔を均等割りして塗装年を求める、というものである。その具体的な手順は、①前提の整理－分析のベースとしての外壁のペンキ層、外壁ペンキ層の下塗りの判断、戦時中のペンキ

事情、一般の住宅における塗装状況一、②最新塗装年の特定・推定、③何年おきに塗り替えているのか、塗装間隔年の特定、④塗り始め年の特定・推定、⑤各ペンキ層の年代推定、である。こうして、建物ごとに、いつ、どのような色が塗られていたのかが把握できるようになったが、最後に、時代区分を設定し、建物所有者へのヒアリングや関連文献資料によって補完しながら、時代ごとに対象建物すべての色の種類と数を把握し、町並み色彩の変遷を分析するものである。

第3章は、一般住宅地区の函館市西部地区における明治初期から現在までの1世紀以上にわたるペンキ色彩からみた町並みの変容をあきらかにしている。木造下見板張り洋風建物のペンキこすり出しの悉皆調査をおこない、82棟を対象とする時層色環分析にもとづき、さらに時層色環ではとらえられない時代の色については文献、横浜写真、追跡調査の分析を加えた。その結果、現状の町並みは淡く、明るいピンク系や緑系の色彩を中心に様々の色で構成されているが、かつてはこれとは異なる町並み色彩が形成されていたことがとらえられた。具体的には、①同じ色のペンキを塗り続ける建物は非常に少なく、ほとんどが異なる色で塗り替えており、したがってその集積としての町並み色彩も変化している、②色彩変化の実態として、個々の建物ではおおむね5年から10年ごと、平均7年前後でペンキの塗り替えがおこなわれているが、町並み全体としては20年から30年の周期をもつ7回の変化が確認できた、③明治初期から中期、明治末期の白色や、戦中の暗色といった単色の時代は、ペンキの材料の限定、大火、戦争などの社会要因が影響し、色の選択の不自由さのあったことが共通する要因としてとらえられた、④一方、明治中期から後期、大正期から昭和初期、戦後の1950年代以降はいずれも多色の時代で、その背景には、ペンキの価格・供給状況・技術発展、海外からの新しい価値観の移入、建物所有者の好みによる色の自由な選択行為など、さまざまな要因があげられた、⑤特に戦後は、多色の中にも薄緑色とピンク色という特徴的な色が認められた。それらは船舶のペンキ色彩や地区の公共性の高い代表的な建物の色などの、日常生活で馴染み深い色で、それが住民に好まれ、地域に伝播し、広がっていったと考えられ、コミュニティによる地域環境価値評価型の町並み色彩が形成されていた。このように歴史的に形成されてきた西部地区の町並み色彩の特質は、同じ色のペンキを塗り続けるのではなく異なる色を用いる周期的な「変化」と、地区全

体として同系色で統一されるのではなく、異なる様々の色で構成され、それが一定の調和をたもっている「多様」さにあることがとらえられた。この町並み色彩の変化と多様さの背景、要因は、ペンキの価格・供給状況・技術発展を含む、複合的なものであるが、その中には地域の歴史や地域コミュニティにおける住民の社会化された意識の反映もみられた。

第4章は、外国人住宅地区の神戸市北野町山本通地区における洋風建築物のペンキ色彩からみた町並みの変容をあきらかにしている。下見板張りペンキ塗りの異人館を対象とするペンキこすり出しの悉皆調査をおこない、19棟を対象とする時層色環分析を主とし、異人館の色彩を描写した写実的な絵画や随筆等の文献分析を補完的に用いた。その結果、明治中期から現在までの町並み色彩変容の要点として、①神戸・異人館の町並みの特徴的色彩とされる外壁のオフホワイト系、ライトベージュ系と窓枠等の緑系、茶系は、戦後の1960年代頃からのものであり、それ以前と1980年代以降からは違う色が使われており、町並み色彩が2回変化したことがあきらかになった、②1960年代以前の明治中期から1950年代頃までは、外壁でも窓枠等でも多様な色が、それも濃い目の色が使われていた。これは、様々な外国人の色彩文化が反映されたもので、外来文化主導型の町並み色彩形成としてとらえられた。その中でも外壁の緑系、灰系の色が特徴的であった、③戦後の1960年代頃から1970年代頃までの、外壁のオフホワイト系、ライトベージュ系と窓枠等の緑系、茶系は、戦争や地区の町並みの激変に対するコミュニティ主導型の町並み色彩の変容としてとらえられた、④1980年代頃からは外壁のオフホワイト系への単色化、窓枠等の緑系とオフホワイト系の増加傾向がみられるようになったが、その要因として、地区の観光地化の進展にともなう建物所有者の入れ替わりと異人館の商業利用や、行政による指導等がとらえられた。

第5章は、日本の洋風下見板張りペンキ塗り建物の主要なルーツ・原型として考えられる、アメリカ・ボストン市周辺地区を対象に、ペンキ色彩からみた町並みの変容をあきらかにし、函館、神戸との比較分析をおこない、共通点と相違点をとらえようとしている。木造下見板張り建物の典型事例42棟を対象にペンキこすり出し調査、時層色環分析をおこなった。その結果、①いずれの時代においても、一つあるいは二つの色彩で町並みが統一され

ることはなく、多様な色彩からなる町並みであった、②多様な中に、比較的多く使われ、特徴的な色彩がみとめられ、それは19世紀後半のヴィクトリア様式建築のダーク・アンド・リッチの色調の緑系と茶系、20世紀前半におけるその緑系と茶系から徐々に灰系とベージュ系への変化、20世紀中期以降の灰系と白系への連続的な、ゆるやかな変化があきらかになった、③これらは、ヴィクトリア様式の建築文化主導型の華やかな色彩から、伝統回帰型、地域の周辺自然環境調和型、石のイメージ表現型など、住民の共有イメージにもとづく、落ち着いた色彩への変化としてとらえられた。

また、ボストン周辺地区と海外の他地域のアメリカ・サンフランシスコ、スウェーデン・ストックホルム、フィンランド・ヘルシンキ、さらには函館市西部地区、神戸市北野町山本通地区の町並み色彩変遷の比較考察により、その特徴や形成のタイプがそれぞれ異なること、その背景には地域の歴史、文化や住民の意識が反映していること、時代によって町並み色彩が変化することは共通していること、をあきらかにした。

第6章は、函館市西部地区の町並み色彩の特質の基底にあるものとして、ペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりに着目し、それを生活の視点から見直し、住民にとっての町並み色彩の意味をとらえること、また住民の暮らしとのかかわりの中で町並み色彩がどのように形成されてきたかを分析し、変化と多様さの中で一定の調和をたもつ町並み色彩形成のしくみをあきらかにしている。そこでは、ペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりを、①ペンキ色彩に対する住民の記憶、思い出の分析と、②色彩選択の意志決定の主体、方法と決定要因の分析から、色彩形成への住民等の関与の仕方や周辺環境の影響等をあきらかにした。調査は、函館市西部地区の建物所有者に対して時層色環の写真と、時層色環から得られたペンキ各層の色彩を、色見本を用いて古い方から新しい方へと順番に並べたものを見せて、ヒアリングをおこなうという方法を用いた。これは、言葉だけでかつての色の記憶を問う一般的なヒアリング調査とは異なり、時層色環から得られたかつての色を具体的かつ視覚的に提示するという点に特徴がある。その結果、函館市西部地区では、①住民は建物の維持管理のために5年から10年の周期でペンキ塗装をおこなう、②その際の色彩選択の決定要因は様々であるが、住民の多くが建物や周囲の環境との関係の中で色を決定している、③その背景には、ペンキ塗装が単なる建

物の保護ということだけでなく、住民の暮らしの場面と関係づけられ、生活レベルで様々な意味をもち、それが住民の思い出として記憶に残されているため、④ペンキ塗装という周期的な行為の時に塗装業者や近隣を媒介にして、住民が建物の意匠的特徴や周囲の環境と対面し、その特質に気づき、価値を再評価し、⑤これらを通じて色彩選択と外壁等のペンキ塗り替えをおこない、⑥その結果が周辺で評価されたり、地区の町並み色彩に影響を及ぼしたりして、⑦地区全体としての町並み色彩の特質が形成され、それがまた次の色彩選択に生かされる、という町並み色彩形成における循環する関係性の構造がとらえられた。

第7章は、前章でとらえられた函館市西部地区における町並み色彩形成のしくみが、時層色環調査の1988～1990年以降、どのように継承、展開されているのかをあきらかにしている。市民レベルでは、1990年から建物にペンキを塗るボランティア活動が展開されているが、その活動において、従来の町並み色彩形成のしくみにみられた塗装業者や近隣によるタウンウォッチ、塗り替える色の相談・アドバイスの役割がボランティア活動団体、他の市民団体へと引き継がれていることや、建物や周囲の環境との関係を考慮した建物価値型、町並み型の色彩選択のあり方が継承されていることをあきらかにした。また、色彩の相談、選択のあり方には、従来のものをより発展させた、新たな展開もとらえられた。さらに、市民によるボランティア活動をささえる資金の支援システム、CG色彩シミュレーションによる色の検討システムなど、町並み色彩形成のしくみにかかわる、新しくとりいれられたシステムもとらえられた。一方、行政レベルでは、1988年4月1日の函館市西部地区歴史的景観条例の施行にともない、伝統的建造物群保存地区内の伝統的建造物と、歴史的景観形成地域内の景観形成指定建築物を指定し、それらの外観修理に対して補助金を交付している。行政レベルでの建物保全修理への補助事業は、神戸市でも他都市でもおこなわれているが、函館市では塗り替えるペンキの色を決める際に、こすり出し調査をおこない、伝統的建造物では創建当初の色または現状の色、景観形成指定建築物では創建当初から現在までに使われていた歴史的な色と現状の色の中から選択していること、すなわち色彩選択の根拠を時層色環に求めているところに特徴がある。近年、下見板張り洋風建物の減少など物理的環境の変化や、住民と塗装業者との関係の変質などにより、ペンキ塗装の生活行為そのものが減少傾向にあるが、このような

市民レベル、行政レベルの実践活動は、町並み色彩形成のしくみを継承し、発展させるものとして位置づけられる。

第8章は、町並み色彩計画のあり方について論述している。前章までの成果から、町並み色彩は、地域の歴史、文化が表現され、地域コミュニティ単位の固有性をもち、地域住民の社会的な生活意識が視覚的に表現され、現象的にも実体的にも変化し、生活の物語として地域住民の生活との濃密なかかわりをもつ、複合的、重層的なものであるととらえ、このような町並み色彩のありようを「生活環境色彩」と定義づけた。そして、従来の町並み色彩計画では、地域の自然の材料からつくりだされた建築の素材そのものの色や、地域の植物、土、空、海、山などの自然環境そのものの中に見出される色の「自然環境色彩」と、色彩の科学、それもとくに20世紀以降の近代の色彩科学の理論から導かれる色で、表色系の考案と色彩調和論を特徴とする「近代代科学色彩」の2つの原理から成り立っていたことを論じ、これからの計画のあり方として、新たに「生活環境色彩」を加えた3つの原理で構成し、枠組みを広げることを提示した。そうすることで、地域住民が日常生活とのかかわりの中で色彩をより身近なものとしてとらえ、町並みへの関心を高める効果が期待でき、これら3軸の関係から町並み色彩計画のあり方を考える必要性を論じた。また、町並み色彩計画の方法として、従来の規制的手法と誘導的手法に加えて、地域固有の生活環境色彩を基盤として、住民が地域にふさわしい町並み色彩を主体的、社会的に評価し、色彩の選択、決定をおこなうことのできるしくみをつくることの重要性を示した。

9-2 結論

以上より、本研究の結論として、以下の6点にまとめることができる。

- (1) 町並み色彩変容研究の方法論として、時層色環の調査・分析手法を新たに開発した。
- (2) その手法を用いて、函館市西部地区、神戸市北野町山本通地区、アメリカ・ボストン周辺地区の3地区における町並み色彩の歴史の変遷の事実を解明した。町並み色彩は、それぞれの地域によって異なる固有性をもっていると同時に、不変的なものではなく、時代によって変化するものであることがとらえられた。
- (3) 町並み色彩の形成、変容には地域の歴史、文化や住民の生活、

意識が反映されていることを実証的、具体的にあきらかにした。
とくに、住民の生活とのかかわりから、それぞれの色彩がもつ
意味や物語をとらえた。

- (4) 特徴ある町並み色彩を形成し、維持するしくみとして、住民らの多様な主体による協議と、地域の環境の特質やコミュニティとの関係の中で価値評価がおこなわれる色彩選択、決定のシステムをあきらかにした。
- (5) このような町並み色彩のあり方を生活環境色彩という新たな概念で示し、それを取り込んだ町並み色彩計画論を展開した。
- (6) すぐれた町並み色彩とは、町並みを構成する建物群の色彩の調和という物的環境の意匠のあり方にとどまるものではなく、地域の歴史、文化や地域住民の生活とその意識などのあらわれ、すなわち生活環境色彩がいかに関与しているのかということと深くかかわっている。したがって、すぐれた町並み色彩の形成には、建物群の色彩の調和という物的環境の意匠的側面の整備にとどまるものではなく、「生活環境色彩」を地域の中に発見し、それを育成していくことが重要である。

参考文献

第1章

- 1) 関西ペイント株式会社 社史編纂委員会 編『明日を彩る 関西ペイント六十年のあゆみ』、関西ペイント株式会社、1979年5月17日。
- 2) 日本ペイント株式会社 社史編纂室 編『日本ペイント百年史』、日本ペイント株式会社、1982年12月1日。
- 3) 社団法人日本建築学会 編・発行『建築の色彩設計法』、丸善、2005年4月25日。
- 4) 公共の色彩を考える会 編『まちの色彩作法「提言集」』、都市文化社、1994年3月20日。
- 5) 稲村耕雄『色彩論』、岩波書店、1955年3月20日。
- 6) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財旧函館区公会堂保存修理工事報告書』、函館市、1983年3月。
- 7) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財豊平館 保存修理工事報告書』、札幌市、1986年7月。
- 8) 日本建築学会 編『日本近代建築総覧』、技報堂出版株式会社、1980年3月30日。
- 9) 函館市教育委員会 編『函館市西部地区の町並 元町・末広町地区伝統的建造物群調査報告』、函館市、1983年。
- 10) 神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課 編集・発行『異人館のある町並み 北野・山本 神戸市北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区・20周年記念』、2000年3月。
- 11) 藤森照信『日本の近代建築（上）一幕末・明治篇一異』、岩波書店、1993年10月20日。
- 12) 金子隆芳『色彩の科学』、岩波書店、1988年10月20日。
- 13) 金子隆芳『色彩の心理学』、岩波書店、1990年8月20日。
- 14) 千々岩英彰『色彩学』、福村出版、1983年9月20日。
- 15) 千々岩英彰『色を心で視る』、福村出版、1984年10月1日。
- 16) 武井邦彦『色彩の再発見』、時事通信社、1975年11月20日。
- 17) 武井邦彦『色彩と人間』、時事通信社、1991年1月1日。
- 18) 小町谷朝生『色彩のアルケオロジー』、勁草書房、1987年9月30日。
- 19) 小町谷朝生『色彩と感性のポリフォニー』、勁草書房、1991年4月20日。
- 20) 福田邦夫『色彩調和論』、朝倉書店、1996年2月15日。
- 21) 乾正雄『建築の色彩設計』、鹿島出版会、1976年8月5日。
- 22) 稲垣卓造「景観整備を目的とした都市の色彩評価に関する実験的研究」、日本建築学会計画系論文集第451号、pp29-39、1993年9月。
- 23) 稲垣卓造「都市の構図と構成要素がその色彩評価に与える影響」、日本建築学会計画系論文集第451号、pp9-19、1993年9月。
- 24) 稲垣卓造「実地における都市の色彩評価に関する研究」、日本建築学会計画系論文集第467号、pp31-37、1995年1月。
- 25) 稲垣卓造「建築の外部色彩の評価が前景となる建築の色彩から受ける影

- 響」、日本建築学会計画系論文集第 531 号、pp9-15、2000 年 5 月。
- 26) 木多道宏、奥俊信、舟橋国男、紙野桂人「都市景観における色彩の評価構造に関する研究」、日本建築学会計画系論文集第 502 号、pp147-154、1997 年 12 月。
- 27) 木多道宏、奥俊信、舟橋国男、紙野桂人「建物壁面の色彩配列および修景操作と心理効果との関係 都市景観における色彩の評価構造に関する研究 その 2」、日本建築学会計画系論文集第 516 号、pp177-184、1999 年 2 月。
- 28) 木多道宏、奥俊信、舟橋国男、鈴木毅、小浦久子「街路景観における色彩の心理効果 連続する建物群の基調色および単一建物の強調色の変化と「まとまり」評価等との関係」、日本建築学会計画系論文集第 522 号、pp239-246、1999 年 8 月。
- 29) 尾崎真理、金敬仁、小林正美「風土に基づいた都市色彩計画に関する研究—東京都江東区を事例として—」、日本建築学会計画系論文集第 511 号、pp147-152、1998 年 9 月。
- 30) 亀谷義浩、奥俊信、舟橋国男、木多道宏「都市景観における色彩の様相に関する研究—大阪都心部の商業・業務地区をケーススタディとして—」、日本建築学会計画系論文集第 523 号、pp195-202、1999 年 9 月。
- 31) 亀谷義浩、奥俊信、舟橋国男、木多道宏「都市景観における色彩現象の多様性に関する研究—OBP 地区におけるオフィスビルをケーススタディとして—」、日本建築学会計画系論文集第 525 号、pp183-190、1999 年 11 月。
- 32) 亀谷義浩、奥俊信、舟橋国男、小浦久子、木多道宏「建築外装材における色彩の様相—都市景観における色彩の様相に関する研究 その 2—」、日本建築学会計画系論文集第 533 号、pp97-104、2000 年 7 月。
- 33) 中山和美、山本早里、楨究、佐藤仁人、乾正雄「街並の色彩構成に関する研究 日欧新旧九つの事例による街並色彩の現況」、日本建築学会計画系論文集第 543 号、pp17-24、2001 年 5 月。
- 34) カラープランニングセンター 編『環境色彩デザイナー—調査から設計まで』、美術出版社、1984 年 2 月 20 日。
- 35) 吉田慎吾・藤井経三郎『都市と色彩 魅力ある環境づくりをめざして』、洋泉社、1994 年 2 月 1 日。
- 36) 吉田慎吾『まちの色をつくる—環境色彩デザインの手法』、建築資料研究社、1998 年 10 月 10 日。
- 37) 吉田慎吾『景観法を活用するための環境色彩計画』、丸善、2005 年 9 月 25 日。
- 38) 伊藤隆一、小林英嗣、種村諄三、佐藤政昭、石原智也、他『北方圏における環境色彩とアイデンティティー個性あるまちづくりと環境色彩計画』、社団法人 北方圏センター、1985 年 3 月。
- 39) 西山徳明、三村浩史「伝統的建造物群保存地区選定後の集落景観の変容と維持に関する研究—白川村荻町合掌集落を事例として—」、日本建築学会計画系論文集第 474 号、pp151-160、1995 年 8 月。
- 40) 佐野雄二、岡崎篤行、高見沢邦郎「伝統的様式を継承した新たな町並み景観の形成過程と計画的課題—岐阜県古川町の歴史的市街地を対象として—」、日本建築学会計画系論文集第 531 号、pp179-185、2000 年 5 月。
- 41) 内海佐和子、林良彦、友田博通、福川裕一、篠崎正彦、増田千次郎「史

跡保存地区における町家のファサードの変化ーヴェトナム・ホイアンの町並み保存に関する研究 その2ー」、日本建築学会計画系論文集第542号、pp129-135、2001年4月。

- 42) Elizabeth Pomada and Michael Larsen 『PAINTED LADIES』, E.P.Dutton, NEW YORK, 1978 年。
- 43) Elizabeth Pomada and Michael Larsen 『THE PAINTED LADIES REVISITED』, E.P.Dutton, NEW YORK, 1989 年。

第2章

- 1) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財旧函館区公会堂 保存修理工事報告書』、函館市、1983年3月。
- 2) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂 保存修理工事報告書』、宗教法人 函館ハリストス正教会、1989年1月。
- 3) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財小林家住宅 保存修理工事報告書』、重要文化財小林家住宅修理委員会、1989年9月。
- 4) 日本ペイント株式会社 社史編纂室 編『日本ペイント百年史』、日本ペイント株式会社、1982年12月1日。
- 5) 圓山貞吉 著 「函館市制實施記念寫真帖」、1922年。
- 6) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩文化の研究ー下見板のペンキ色彩の復元的考察を通してー』（トヨタ財団助成研究報告書、C-020、1991年12月。
- 7) Morgan Philips 「Some Notes on Paint Research and Reproduction」, APT, Vol. VII, No.4, 1975年。
- 8) 『RIKSANTIKVARENS INFORMASJON OM KULTURMINNER』, Riksantikvaren(ノルウェー・オスロ市) 発行, 1994年9月。
- 9) Trond Indabl 『DAMSGARD』, the West Norway Museum, 1994年。
- 10) 森下満、柳田良造、眞嶋二郎、野口孝博「函館市西部地区のペンキ色彩からみた町並みの変容ー下見板張り洋風建物ペンキ層の「時層色環」分析を中心としてー」、日本建築学会計画系論文集第579号、pp81-88、2004年5月。
- 11) 松下重雄、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明、山本真也「函館市における洋風木造建築のペンキ色彩の復元的考察」、日本建築学会北海道支部研究報告集、No.62、pp105-108、1989年3月。
- 12) 森下満、足達富士夫、柳田良造、石塚雅明、松下重雄「函館市の町並み色彩の復元的考察ー洋風木造建築のペンキ色彩・その1」、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、F分冊、pp5-6、1989年10月。
- 13) 松下重雄、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ー洋風木造建築のペンキ色彩・その2」、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、F分冊、pp7-8、1989年10月。
- 14) 森下満、山田孝子、足達富士夫、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ーその3.「時層色環」の分析」、日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）、F分冊、pp5-6、1990年10月。

第3章

- 1) 越野武『北海道における初期洋風建築の研究』、北海道大学図書刊行会、1993年2月25日。
- 2) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編 『重要文化財 旧函館区公会堂 保存修理工事報告書』、函館市、1983年3月。
- 3) 圓山貞吉『函館市制實施記念寫真帖』、1922年12月15日。
- 4) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩文化の研究ー下見板のペンキ色彩の復元的考察を通してー』（トヨタ財団助成研究報告書、C-020、1991年12月。
- 5) 日本ペイント株式会社 社史編纂室 編 『日本ペイント百年史』、日本ペイント株式会社、1982年12月1日。
- 6) 関西ペイント株式会社 社史編纂委員会 編『明日を彩る 関西ペイント六十年のあゆみ』、関西ペイント株式会社、1979年5月17日。
- 7) 落合治彦 所蔵『改訂防護団員必携（津軽要塞指令部監修）』、函館市防空本部発行、1938年。
- 8) 児島修二『建築塗装の手引き』、学芸出版社、1988年。
- 9) 森下満、柳田良造、眞嶋二郎、野口孝博「函館市西部地区のペンキ色彩からみた町並みの変容ー下見板張り洋風建物ペンキ層の「時層色環」分析を中心としてー」、日本建築学会計画系論文集第579号、pp81-88、2004年5月。
- 10) 松下重雄、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明、山本真也「函館市における洋風木造建築のペンキ色彩の復元的考察」、日本建築学会北海道支部研究報告集、No.62、pp105-108、1989年3月。
- 11) 森下満、足達富士夫、柳田良造、石塚雅明、松下重雄「函館市の町並み色彩の復元的考察ー洋風木造建築のペンキ色彩・その1」、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、F分冊、pp5-6、1989年10月。
- 12) 松下重雄、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ー洋風木造建築のペンキ色彩・その2」、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、F分冊、pp7-8、1989年10月。
- 13) 森下満、山田孝子、足達富士夫、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ーその3.「時層色環」の分析」、日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）、F分冊、pp5-6、1990年10月。
- 14) 巽裕樹、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ーその4.町並み色彩の変遷と色彩形成のしくみ」、日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）、F分冊、pp13-14、1991年9月。
- 15) 松下重雄『昭和63年度北海道大学工学部建築工学科住居地計画学講座修士論文「函館における洋風木造建築のペンキ色彩の復元的考察」』、1989年2月。
- 16) 本間俊弘『平成元年度北海道大学工学部建築工学科住居地計画学講座卒業論文「函館市西部地区の街並み色彩の復元的考察ー洋風木造建築のペンキ色彩の分析をつうじて」』、1989年11月。
- 17) 巽裕樹『平成2年度北海道大学工学部建築工学科住居地計画学講座卒業

論文「函館・西部地区の町並み色彩の変遷と色彩形成のしくみに関する考察」、1990年11月。

- 18) 函館建築研究会／函館の歴史的風土を守る会 編、角幸博 監修『函館の建築探訪』、北海道新聞社、1997年9月25日。

第4章

- 1) 神戸市教育委員会 編『異人館復興－神戸市伝統的建造物修復記録』、住まいの図書館出版局、1998年1月20日。
- 2) 神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課 編集・発行『異人館のある町並み 北野・山本 神戸市北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区・20周年記念』、2000年3月。
- 3) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財小林家住宅保存修理工事報告書』、重要文化財小林家住宅修理委員会、1989年9月。
- 4) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩文化の研究－下見板のペンキ色彩の復元的考察を通して－』、トヨタ財団助成研究報告書、C-020、1991年12月。
- 5) 神戸市都市計画局・神戸市教育委員会 発行『北野・山本地区景観ガイドライン 神戸らしい都市景観をめざして』、1989年度。
- 6) 奈良国立文化財研究所・神戸市教育委員会 編『異人館のあるまち 神戸 北野・山本地区伝統的建造物群調査報告』、神戸市、1982年4月。
- 7) 日本建築学会 編『日本近代建築総覧』、技報堂出版、1980年3月30日。
- 8) 小松益喜『小松益喜画集 神戸の異人館』、神戸新聞出版センター、1976年11月6日。
- 9) 小松益喜『小松益喜素描集 戦前・後の神戸異人館』、神戸新聞出版センター、1979年12月20日。
- 10) 中村敏子 編『近岡善次郎描く 懐かしき 明治の西洋館』、東日本旅客鉄道株式会社、1990年2月20日。
- 11) 堀辰雄「旅の絵」(河野仁昭 編『ふるさと文学館 第34巻【兵庫】』、pp35-47所収、株式会社ぎょうせい、1994年4月)。
- 12) 神戸市都市計画局・神戸市教育委員会発行『北野・山本地区景観ガイドライン 神戸らしい都市景観をめざして』(1989年度)のp26を参照。
- 13) カラープランニングセンター編『環境色彩デザイナー調査から設計まで』、美術出版社、1984年2月20日。
- 14) 日本ペイント株式会社 社史編纂室 編『日本ペイント百年史』、日本ペイント株式会社、1982年12月1日。
- 15) 関西ペイント株式会社 社史編纂委員会 編『明日を彩る 関西ペイント六十年のあゆみ』、関西ペイント株式会社、1979年5月17日。
- 16) 森下満、柳田良造、野口孝博「神戸・異人館のペンキ色彩からみた町並みの変容」、日本建築学会計画系論文集第598号、pp109-115、2005年12月。
- 17) 前田芳伸、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明「神戸の洋風木造建築のペンキ色彩の変遷－函館との比較考察－」、日本建築学会北海道支部研究報告集、No.68、pp465-468、1995年3月。
- 18) 柳田良造、足達富士夫、森下満、異裕樹、石塚雅明「函館市の町並み色

彩の復元的考察—その 5. アメリカ、神戸との比較」、日本建築学会大会
学術講演梗概集（東北）、F 分冊、pp15-16、1991 年 9 月。

- 19) 前田芳伸、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明「町並みのペンキ
色彩の復元的考察（1）神戸・異人館のペンキ色彩の変遷とその背景」、
日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）、F 分冊、pp91-92、1995 年 8 月。
- 20) 森下満、足達富士夫、前田芳伸、柳田良造、石塚雅明「町並みのペンキ
色彩の復元的考察（2）函館と神戸の色彩変遷の比較考察」、日本建築学
会大会学術講演梗概集（北海道）、F 分冊、pp93-94、1995 年 8 月。
- 21) 前田芳伸『平成 6 年度北海道大学工学部建築工学科住居地計画学講座卒
業論文「神戸・異人館における色彩の変遷とその背景函」』、1994 年 11 月。

第 5 章

- 1) 藤森照信『日本の近代建築（上）—幕末・明治篇—』、岩波書店、1993 年
10 月 20 日。
- 2) Elizabeth Pomada and Michael Larsen『PAINTED LADIES』, E.P.Dutton,
NEW YORK, 1978 年。
- 3) Elizabeth Pomada and Michael Larsen『THE PAINTED LADIES
REVISITED』, E.P.Dutton, NEW YORK, 1989 年。
- 4) 伊藤隆一、小林英嗣、種村諄三、佐藤政昭、石原智也、他『北方圏にお
ける環境色彩とアイデンティティー個性あるまちづくりと環境色彩計
画』、社団法人 北方圏センター、1985 年 3 月。
- 5) 柳田良造、足達富士夫、森下満、巽裕樹、石塚雅明「函館市の町並み色
彩の復元的考察—その 5. アメリカ、神戸との比較」、日本建築学会大会
学術講演梗概集（東北）、F 分冊、pp15-16、1991 年 9 月。
- 6) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩
文化の研究—下見板のペンキ色彩の復元的考察を通して—』（トヨタ財
団助成研究報告書、C-020、1991 年 12 月。
- 7) Roger W. Moss『CENTURY OF COLOR - Exterior Decoration for American
Buildings, 1820-1920』, The American Life Foundation, New York, 1981 年。
- 8) ROGER W. MOSS AND GAIL CASKEY WINKLER『VICTORIAN
EXTERIOR DECORATION』, HENRY HOLT AND COMPANY, NEW YORK,
1987 年。
- 9) ROGER W. MOSS, EDITOR『Paint in America - THE COLORS OF
HISTORIC BUILDINGS』, THE PRESERVATION PRESS, WASHINGTON,
D.C., 1994 年。
- 10) Virginia and Lee McAlester『A Field Guide to American Houses』, Alfred A.
Knopf, New York, 1984 年。
- 11) Carole Rifkind『A Field Guide to American Architecture』, Plume, New York,
1980 年。

第6章

- 1) 公共の色彩を考える会 編『まちの色彩作法「提言集」』、都市文化社、1994年3月20日。
- 2) 嘉田由紀子『生活世界の環境学－琵琶湖からのメッセージ』、社団法人農山漁村文化協会、1995年5月31日。
- 3) 中野卓・桜井厚 編『ライフヒストリーの社会学』、株式会社弘文堂、1995年2月15日。
- 4) 間場寿一 編『地方文化の社会学』、世界思想社、1998年1月。
- 5) 函館市教育委員会 編『函館市西部地区の町並 元町・末広町地区伝統的建造物群調査報告』、函館市、1983年3月。
- 6) 函館市教育委員会 編『函館市西部地区の町並 弁天町・弥生町地区伝統的建造物群調査報告』、函館市、1984年3月。
- 7) 財団法人文化財建造物保存技術協会 編『重要文化財 旧函館区公会堂保存修理工事報告書』、函館市、1983年3月。
- 8) 児島修二『建築塗装の手引き』、学芸出版社、1988年。
- 9) 巽裕樹『平成2年度北海道大学工学部建築工学科住居地計画学講座卒業論文「函館・西部地区のまちなみ色彩の変遷と色彩形成のしくみに関する研究」』、1990年12月。
- 10) 森下満、柳田良造、野口孝博「変化と多様の町並み色彩形成のしくみ－函館市西部地区のペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりから－」、日本建築学会計画系論文集第592号、pp139-145、2005年6月。

第7章

- 1) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会 編『港町・函館における色彩文化の研究－下見板のペンキ色彩の復元的考察を通して－』、トヨタ財団助成研究報告書、C-020、1991年12月。
- 2) 函館からトラスト・ニュースレター「から 第2号」、函館からトラスト事務局発行、全4頁、1993年6月。
- 3) 函館からトラスト・ニュースレター「から 第3号」、函館からトラスト事務局発行、全4頁、1993年7月。
- 4) ペンキ塗り替え支援・札幌勝手連（代表：江國智洋）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：歴史的な下見板建築のペンキ塗り替え』、全5頁、1995年2月。
- 5) ペンキ塗り替え支援・札幌勝手連（代表：前田芳伸）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：歴史的な下見板建築のペンキ塗り替え』、全30頁、1996年1月。
- 6) ペンキ塗りボランティア隊（代表：松本渉）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：下見板張り町家ペンキ塗りワークショップ「3軒効果」の町並みづくり－』、全29頁、1998年1月。
- 7) 函館からトラスト・ニュースレター「から 第20号」、函館からトラスト事務局発行、全8頁、2002年12月。
- 8) ペンキ塗りボランティア隊（代表：耶雲恵）『公益信託函館色彩まちづく

り基金助成活動 最終報告書：下見板張り町家ペンキ塗りワークショップ』、全 22 頁、2000 年 1 月。

- 9) ペンキ塗りボランティア隊（代表：山下義行）『公益信託函館色彩まちづくり基金助成活動 最終報告書：3 軒効果町並改善 part4 ー町家ペンキ塗りワークショップー』、全 19 頁、2001 年 2 月。
- 10) まちづくり公益信託研究会 編『まちづくり公益信託研究』、トラスト 60 叢書、1994 年 7 月。

第 8 章

- 1) 札幌市文化都市市民文化課・景観色検討委員会 編『札幌自然色ガイド 四季彩 Sapporo Eco-Color』、札幌市、1994 年。
- 2) 札幌市市民まちづくり局都市計画部地域計画課都市景観担当 編『札幌の景観色 70 色 大規模建築物等色彩景観ガイドライン概要版』。
- 3) 社団法人日本建築学会 編・発行『建築の色彩設計法』、丸善、2005 年 4 月 25 日。
- 4) 乾正雄『建築の色彩設計』、鹿島出版会、1976 年 8 月 5 日。
- 5) 福田邦夫『色彩調和論』、朝倉書店、1996 年 2 月 15 日。
- 6) 吉田慎悟『まちの色をつくるー環境色彩デザインの手法』、建築資料研究社、1998 年 10 月 10 日。
- 7) 吉田慎悟『景観法を活用するための環境色彩計画』、丸善、2005 年 9 月 25 日。
- 8) 小林重順 著、(株)日本カラーデザイン研究所 編『カラーリストー色彩心理ハンドブック』、講談社、1997 年 3 月 3 日。
- 9) 森下満、足達富士夫、巽裕樹、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ーその 6. 町並み色彩の計画の考え方と方法」、日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）、F 分冊、pp17-18、1991 年 9 月。
- 10) 嘉田由紀子『生活世界の環境学ー琵琶湖からのメッセージ』、社団法人農山漁村文化協会、1995 年 5 月 31 日。
- 11) 吉田慎吾・藤井経三郎『都市と色彩 魅力ある環境づくりをめざして』、洋泉社、1994 年 2 月 1 日。
- 12) 乾正雄『街並の年齢ー中世の町は美しい』、論創社、2004 年 1 月 25 日。
- 13) 社団法人日本建築学会 編『景観法と景観まちづくり』、学芸出版社、2005 年 5 月 10 日。
- 14) 社団法人日本建築学会 編『まちづくりのシナリオ・メイキングー「生活景」からの地域環境づくりー』、2000 年度日本建築学会大会（東北）都市計画部門・農村計画部門研究協議会資料、2000 年 9 月。
- 15) 社団法人日本建築学会 編『景観管理とまちづくりのデザイナーー生活景からの研究展望と政策提言ー』、2003 年度日本建築学会大会（東海）都市計画部門パネルディスカッション資料、2003 年 9 月。

既発表学術論文および論著

[学術論文]

- 1) 森下満、柳田良造、眞嶋二郎、野口孝博「函館市西部地区のペンキ色彩からみた町並みの変容ー下見板張り洋風建物ペンキ層の「時層色環」分析を中心としてー」、日本建築学会計画系論文集第 579 号、pp81-88、2004 年 5 月。
- 2) 森下満、柳田良造、野口孝博「変化と多様の町並み色彩形成のしくみー函館市西部地区のペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりからー」、日本建築学会計画系論文集第 592 号、pp139-145、2005 年 6 月。
- 3) 森下満、柳田良造、野口孝博「神戸・異人館のペンキ色彩からみた町並みの変容」、日本建築学会計画系論文集第 598 号、pp109-115、2005 年 12 月。

[その他の学術論文]

- 1) 松下重雄、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明、山本真也「函館市における洋風木造建築のペンキ色彩の復元的考察」、日本建築学会北海道支部研究報告集、No.62、pp105-108、1989 年 3 月。
- 2) 森下満、足達富士夫、柳田良造、石塚雅明、松下重雄「函館市の町並み色彩の復元的考察ー洋風木造建築のペンキ色彩・その 1」、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、F 分冊、pp5-6、1989 年 10 月。
- 3) 松下重雄、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ー洋風木造建築のペンキ色彩・その 2」、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、F 分冊、pp7-8、1989 年 10 月。
- 4) 森下満、山田孝子、足達富士夫、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ーその 3.「時層色環」の分析」、日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）、F 分冊、pp5-6、1990 年 10 月。
- 5) 巽裕樹、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ーその 4. 町並み色彩の変遷と色彩形成のしくみ」、日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）、F 分冊、pp13-14、1991 年 9 月。
- 6) 柳田良造、足達富士夫、森下満、巽裕樹、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ーその 5. アメリカ、神戸との比較」、日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）、F 分冊、pp15-16、1991 年 9 月。
- 7) 森下満、足達富士夫、巽裕樹、柳田良造、石塚雅明「函館市の町並み色彩の復元的考察ーその 6. 町並み色彩の計画の考え方と方法」、日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）、F 分冊、pp17-18、1991 年 9 月。
- 8) 前田芳伸、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明「神戸の洋風木造建築のペンキ色彩の変遷ー函館との比較考察ー」、日本建築学会北海道支部研究報告集、No.68、pp465-468、1995 年 3 月。
- 9) 前田芳伸、足達富士夫、森下満、柳田良造、石塚雅明「町並みのペンキ色彩の復元的考察（1）神戸・異人館のペンキ色彩の変遷とその背景」、日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）、F 分冊、pp91-92、1995 年 8 月。
- 10) 森下満、足達富士夫、前田芳伸、柳田良造、石塚雅明「町並みのペンキ色彩の復元的考察（2）函館と神戸の色彩変遷の比較考察」、日本建築学

会大会学術講演梗概集（北海道）、F 分冊、pp93-94、1995 年 8 月。

- 11) Mitsuru Morishita and Fujio Adachi: "A survey of a color transition of the historical quarter in the city of Hakodate and a promotion of people's activities for community development", ICOMOS(International Council on Monuments and Sites) 11th General Assembly and International Symposium, The Heritage and Social Changes • Symposium Papers, pp578-582, 1996.10.

[著書]

- 1) (共著)『建築の彩時記－港町・函館こすり出し－』(INAX BOOKLET Vol.10 No.2)、株式会社 INAX、1990 年 11 月。
- 2) (共著) 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会（代表：村岡武司、共同研究者：森下満ほか 23 名）編著『港町・函館における色彩文化の研究－下見板のペンキ色彩の復元的考察を通して－』、トヨタ財団助成研究報告書・C-020、1991 年 12 月。
- 3) (共著) まちづくり公益信託研究会（代表：篠塚昭次、共同研究者：鎌野邦樹、鈴木庸夫、山岡義典、岩田恒男、佐谷和江、森下満、柳田良造、卯月盛夫、浅海義治、稲垣幸直、西村幸夫）編著『まちづくり公益信託研究』、トラス 60 叢書、1994 年 7 月。
- 4) (共著) 都市環境デザイン会議 編著『日本の都市環境デザイン 1－北海道・東北・関東編』、(株)建築資料研究社、2003 年 11 月。

[その他]

- 1) 森下満「函館の色彩文化とまちづくり」、『公共建築』（社団法人公共建築協会編）、第 36 巻、第 140 号、pp50-51、1994 年 4 月。
- 2) 森下満「函館の洋館外壁のこすり出し」、『建築雑誌』（日本建築学会編）、第 111 集、第 1384 号、p34、1996 年 2 月。
- 3) 森下満「町並み色彩の比較－函館、神戸、アメリカ」、日本家政学会色彩・意匠学部会 招請講演、北海道七飯町・大沼、1996 年 8 月。
- 4) Mitsuru Morishita (oral presentation): "A survey of a color transition of the historical quarter in the city of Hakodate and a promotion of people's activities for community development", ICOMOS(International Council on Monuments and Sites) International Symposium, The Heritage and Social Changes, 1996.10.
- 5) 森下満、柳田良造「函館・町家の色彩移り変わり」、『季刊大林』（株式会社大林組広報室）、No.46、pp49-55、1999 年 4 月。
- 6) 柳田良造、矢島建、山崎正弘、森下満、三ツ江匡弘、武山泰典、辻井順、酒本宏「北海道の風土が育む都市のかたち・1 函館－復興と再生の街」、『造景 no.30』（(株)建築資料研究社）、pp83-98、2000 年 12 月。
- 7) 森下満「ペンキ塗りボランティア活動による町並み改善－函館の市民の手によるまちづくり」、『季刊「ユースフルプレス」創刊号』（独立行政法人都市再生機構）、pp14-15、2004 年 8 月。

あとがき

本論文は2006年9月、北海道大学に提出した学位請求論文を若干修正したものです。

本論文の審査の労を引き受けていただいた主査・角幸博教授、副査の野口孝博、越澤明、西村幸夫（東京大学大学院工学系研究科）各教授、さらに緑川光正教授を長とする学位授与審議委員会の諸先生方に、心よりお礼申し上げます。

当初、主査を務めていただいた野口教授には、厳しくも暖かいご指導を賜り、本当にお世話になりました。その後、思いがけずご病気入院され加療中のところ、2007年1月27日、帰らぬ旅に立たれ、完成した本書をお目にかけられなかったことが悔やまれ、残念でなりません。

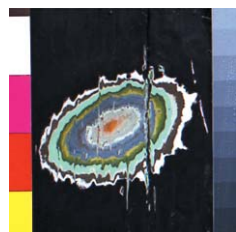
野口教授に代わり、主査を務めていただいた角教授には、いろいろとお手数をおかけしました。東京大学の西村教授にはご多忙の中、2007年1月16日の公開説明会および学位授与審議委員会に東京から日帰りでお越しいただき、ありがとうございます。主査、副査の先生方には、的確かつ貴重なご助言、ご意見を与えていただき、重ねて感謝の意を表したいと思います。

また、研究内容に関し貴重なご助言をいただいた眞嶋二郎名誉教授、さらに、学位請求にかかわる諸々の手続きを円滑に進めていただいた山城ひろこ事務官にお礼申し上げます。

この研究のスタートは、ちょうど20年前の1987年にさかのぼります。大学の同期生で畏友である柳田良造、石塚雅明の両氏（当時、柳田石塚建築計画事務所主宰）と共に、1970年代後半から取り組んできた小樽運河の保存再生問題に区切りがついた年です。一段落して、さてこれからどのようなおもしろいことをしようか、という話になりました。ちょうどその頃、函館市西部地区の歴史的景観形成の基本計画づくりにかかわっていたこともあり、石塚氏がペンキの色がおもしろいのではないかとアイデアを出し、柳田氏がそれに賛同したのが始まりだったと思います。

早速、地元のまちづくり市民グループ・元町倶楽部に話をもちかけ、財団法人トヨタ財団の“身近な環境をみつめよう”第5回研究コンクールに応募し、助成金を得ることができ、翌1988年から本格的に研究調査がスタートしたのでした。6月初旬に、現地でこすり出しをおこない、色とりどりの美しい時層色環を初め

て目にした時、本当に感動を覚えるとともに、この研究への希望が溢れてきたことが思い出されます。



1988年6月4日に採取した、記念すべき、函館市西部地区・旧大町郵便局（1911(明治44)年）の柱型の時層色環

ところで、この時層色環（じそうしきかん）というコンセプトのネーミングは実に絶妙であったと自画自賛するものですが、その誕生のいきさつは、私が形からみて「色環」はぜひ使いたいとし、石塚氏の昭和51年度修士論文『歴史的都市環境論序説 都市の「時層構成」と保存論』から「時層」を引き出し、両者を合体させ、柳田氏が「時層色環」でいこうと決断し、私も石塚氏もそれに賛成したものであったと記憶しています。

このように、柳田、石塚両氏とは、本研究の最初の企画段階から忌憚のない意見をたたかわせ、アイデアを出し合い、研究の方向性を確かなものにする上で、なくてはならない存在でした。心より感謝申し上げます。

とくに柳田氏（現在ブラハアソシエイツ代表取締役）については、日本建築学会計画系論文集のいわゆる黄表紙論文3編をはじめ、本研究にかかわる学術論文、著書、その他の論著の共同研究者として常に共に歩んできた、いわば同志にほかなりません。ことにこの3年間、本論文をまとめあげるまで、一貫して貴重なご助言と励ましをいただきました。重ねてお礼申し上げます。

函館の後、1991年のアメリカ・ボストン周辺地区、1994年の神戸市北野町山本通地区へとフィールドを広げていきましたが、それぞれの地域で大勢の方々のご協力をいただきました。函館では元町倶楽部の代表・村岡武司氏をはじめ、そのメンバーなど23名の方々。

アメリカではケンブリッジ市歴史委員会 Cambridge Historical Commission のスーザン・メイコック Ms. Susan Maycock(Survey Director)、ブルックライン市保存委員会 Brookline Preservation Commission のカーラ・ベンカ Ms. Carla Benka(Director)、ニュートン市歴史委員会 Newton Historical Commission のジョン・アーサー

Mr. John Arthur(Member) の3氏と、とくに現地調査全体の企画、コーディネートをおこなっていただいたグレゴリー・克蘭シー氏 Mr. Gregory Clancey (当時ニューイングランド歴史遺産保存協会 SPNEA(Society for the Preservation of New England Antiquities) の Architectural Conservator、現在シンガポール国立大学助教授)。

神戸では現地調査の受け皿となっていた当時の神戸市教育委員会社会教育部文化財課の佐藤定義氏をはじめ、小林郁雄氏(まちづくり株式会社コープラン) ほか神戸市民有志の方々。

調査協力にご快諾いただいた各地域の建物所有者・使用者の方々。各地域の現地調査の主力となり、さまざまな援助をいただいた当時の北大の研究室の学生・大学院生、松下重雄、本間俊弘、巽裕樹、前田芳伸の各氏。

これらの方々のご協力なしには、本研究を推進し、遂行することはできませんでした。心よりお礼申し上げます。

この研究を始めるまで、正直なところ、色彩に対する私の関心はそれほど高くはありませんでした。町並み色彩のあり方に対しても、地味で目立たなければよい、といった一般的な認識の程度だったと思います。

それが自分でこすり出しをして、時層色環を浮かび上がらせた時の驚きと発見の喜び、大勢の仲間と共に研究的にも実践的にも楽しく継続して展開できたこと、さらに私自身の町並み色彩に対する認識が改めさせられ、価値観が変わったことなどは、研究者冥利につきますものです。

函館の元町倶楽部の仲間と西部地区のフィールドとは現在もつきあいが続けられています。2006年からは地元商店街を対象に、数年かけて通りに面するすべての建物のペンキを塗り替える、というプロジェクトが進められています。5、6年後にはどのような町並みがあらわれてくるのか、いまから楽しみにしています。

さて、研究の今後の展開として、外国人居留地であった長崎市東山手・南山手地区の洋風建築物を対象に、こすり出し、時層色環の分析をおこなうことを考えています。そうすれば、ペンキ色彩からなる日本の3大町並み地区—函館、神戸、長崎を網羅することができます。幸い定年まであと9年あるので、その間にこれはぜひ私自身で手がけられたらと願っています。

もう一つは、下見板張りだけではなく、モルタル塗りや漆喰塗りの上にペンキが塗装された町並みは世界各国に存在します。そ

れを軒並み調査し、本研究の方法論を用いて分析することによって、町並み色彩の国際比較研究へと発展させ、ユニークな色彩文化論を展開できるのではないか。これは、次世代の若い方々に委ねたいと思います。

最後に、この研究に対し、常に暖かい励ましをいただいた故足達富士夫名誉教授に心より謝意を表します。私がアメリカでの調査のために英文のアブストラクトを作成し、足達先生に目を通していただいた時に、時層色環の訳語として **temporal color ring** がよいのではないかとご指摘を受けました。**temporal** は、私にとっては「仮設的な」というイメージが強かったのですが、足達先生は「時の」という意味があることを教えてくださり、その深い、哲学的な意味合いに納得させられたことを覚えています。これは英文題目としてそのまま使わせていただいています。

足達先生は 1995 年 3 月に北海道大学をご定年退官されましたが、本来であればこの論文はその時までには完成させるべきものでした。先生からいただいた翌 1996 年 6 月 26 日付けの長文のお手紙は、私の学位論文への取り組みに対する本当の厳しさと優しさに満ちた激励文で、今でも私の宝物として大事に持っています。先生は 2002 年 6 月 24 日にご逝去されましたが、それにも間に合わなかったことは二重に悔いが残りましたし、自分のふがいなさを身にしみて感じていました。それもようやく、この本書をもち、10 年あまりのしかかっていた重荷をおろすことができました。この解放感は、何にもまさる喜びです。

博士（工学）の学位は、2007 年 3 月 23 日付けで授与されました。故足達富士夫先生と故野口孝博先生のお二人の師に、学位記とともに本書をささげ、あとがきとします。

2007 年 3 月
森下 満

「時層色環」分析を中心とした町並み色彩の変容と形成に関する研究
Study on Transition and Formation of Townscape Color by Analyzing ‘Temporal Color Ring’

著者・発行者

北海道大学大学院工学研究科建築都市空間デザイン専攻
空間計画講座建築計画学研究室

森下 満

〒060-8628 札幌市北区北13条西8丁目

Tel: 011-706-7135 / Fax: 011-706-6252

E-mail: morichan@eng.hokudai.ac.jp

発行

2007年3月27日

